令和元年～４年度　文部科学省研究開発学校指定（延長　第２年次）

未来社会を創造する主体を育成するカリキュラム・マネジメントⅡ

－３つの学びで創るカリキュラム・デザイン－

研究全体構想

学習指導要領

実践事例

国立大学法人　福岡教育大学附属福岡小学校

目　次

ごあいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

本校研究のあゆみ　・・・・・・・・・・・・・・・・4

全体研究構想　・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

学習指導要領

　総則　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　人間科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
　社会科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　言葉科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　数学科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
　科学科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　芸術科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　健康科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

評価の考え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・98

学年年間指導計画

　第１学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
　第２学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
　第３学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
　第４学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
　第５学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
　第６学年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114

実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116

特別支援教育研究構想・実践事例　・・・・・・ 140

おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 158

令和２年度研究同人　・・・・・・・・・・・・・ 159

ご　あ　い　さ　つ

学　長　　飯　田　慎　司

国立大学法人福岡教育大学附属福岡小学校の令和２年度教育研究発表会の開催にあたり，ひとことごあいさつを申し上げます。

附属学校は，地元教育委員会と大学との緊密な連携のもと，地域の教育課題を解決し，新しい教育を推進するモデル校であり且つ先導的・実験的な取り組みを行う「国の拠点校」として位置付けております。そこで，本学において附属学校園と連携を強化して教育研究の開発を行い，その成果を地域の諸学校に還元し，地域教育界の発展に貢献することをめざしています。

さて，本年度全面実施の新学習指導要領では，これまで以上に資質・能力重視の教育のあり方が求められます。そのような中，本校では本年度から令和４年度までの４年間の文部科学省研究開発学校の延長指定を受け，未来社会を創造する資質・能力の育成をめざして，新たなカリキュラム・マネジメントの在り方を研究しています。本年度教育研究発表会は，「未来社会を創造する主体を育成するカリキュラム・マネジメントⅡ　～３つの学びで創るカリキュラム・デザイン～　」のもと，延長２年次としてこれからの研究の方向性について発表し，ご参会の皆様からご示唆いただくものであります。本教育研究発表会が地域の学校のみならず，我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いいたします。

最後になりましたが，ご多用の中，ご講演等を快くお引き受けくださいました，上智大学　教授　奈須正裕様，國學院大學教授　田村学様，国立教育政策研究所総括研究官　福本徹様，に深く感謝申し上げます。また，学習協議会におきまして，指導助言者としてご協力いただきました諸先生方にも，心より御礼申し上げます。

今後とも，附属学校園の教育研究活動を介して，各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えています。関係する皆様方に一層のご指導・ご助言をお願い申し上げまして，ごあいさつといたします。

はじめに

校長　坂本憲明

中央教育審議会初等中等教育分科会（令和２年10月７日）において，『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して　～　全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現　～　』が取りまとめられました。ここではGIGAスクール構想に基づき「児童生徒の実態に応じて，学びに向かう力等の一層の育成を図りつつ，学習内容の確実な定着を図る観点や，その理解を深め，広げる学習を充実させる観点から，カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに，教師が，学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ，健康診断情報等をICTの活用により蓄積・分析・利活用しつつ，児童生徒の興味・関心 や悩みなどを丁寧に見取り，個々の状況を踏まえて指導することや，児童生徒が自らの 学習の状況を把握し，主体的に学習を最適化すること」を求めています。一方で，「学校における働き方改革を着実に推進していくことにより，教師が子供たちに対して真に必要な教育活動を効果的に行うことができるようになる環境に大きく寄与することが期待される。」としています 。

今後，さらに学校が新たな学びを取り入れつつ，子供たちの思いや願いを実現するカリキュラム・マネジメントを実現することが望まれているといえます。私たちはその一つの応えとして，子供の文脈を中心とした３つの学びによってカリキュラムを創造しつつ，内容をスリム化する研究を行いました。そうすることによって授業時数を削減し，教師の働き方改革，子供の負担軽減につなげていきたいと考えています。そのためには，教師が目の前の子供たちに合うカリキュラム・デザインを行える必要があります。それを学校という組織として，大学や社会と連携しながら構築していく。本校のカリキュラム・マネジメントがそのような社会の求めへの一つの応答となることを祈念しています。

文部科学省研究開発学校指定，延長第２年次である本年度は，テーマ学習，リレーション学習，フォーカス学習の３つの学びで創るカリキュラム・デザインについて，実際の子供たちが学ぶ姿を論拠にカリキュラムを提案いたします。

今回の教育研究発表会を開催するにあたり，多くの方々のご指導・ご支援を賜りましたことに深く感謝申し上げます。今後ともご助言やお力添えを賜りますようよろしくお願いいたします。

MEMO

本　校　研　究　の　あ　ゆ　み　Ⅰ　（昭和23年度～63年度）

年度	研究主題等
昭和	
23	○学習効果判定の理論と実際
	学習効果判定の理論と実際（永田書店から出版）
24	○カリキュラムの構成と実際
25	（発表会なし）
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察
38	○考える力をのばす学習指導法の考察
39	○考える力をのばす学習指導法の考察
40	○考える力をのばす学習指導法の考察
41	○考える力をのばす学習指導法の考察
	「授業における思考訓練」（明治図書から出版）
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察
	「思考をのばす学習過程の評価」（明治図書から出版）
43	（発表会なし）
44	○現代化をめざす指導法の究明
	教材の現代的価値と児童の実態と反応に基づく指導内容の検討
45	○現代化をめざす指導法の究明
	基本的内容にせまらせる学習の開発
46	○現代化をめざす指導法の究明
	ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ
47	○現代化をめざす指導法の究明
	学習の連帯化をはかる指導のしくみ
48	○現代化をめざす指導法の究明
	連帯性を育てる学習指導のしくみ
49	○現代化をめざす指導法の究明
	連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ
	「学習を連帯化する指導法」（明治図書から出版）
50	○現代化をめざす指導法の究明
	学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明
	操作を通した学習の構造化
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明
	操作を通した学習指導法の展開
	「できるまで育てる」（秀巧社から出版）
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営
	交流でよりよい操作を身につける学習指導
	「自由活動の時間」（秀巧社から出版）
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明
	教材の価値にせまらせる操作学習の評価
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導
	見直し活動を生かした操作学習の深化
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導
	自己を見直し，考えを深める指導のしくみ
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導
	自ら見直し活動に取り組み，自己を深める指導のしくみ
	「学ぶ喜びを生み出す授業」（北大路書房から出版）
	文部省研究開発学校指定Ⅰ（昭和58年度～61年度）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導
	個が生きる課題づくり
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討
	学習実態の多様性に即応する学習指導
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法
	子どもの個性が生きる指導
61	**○自己実現の喜びを生みだす学習指導法**
	「学習の個性化をめざす指導法の開発」（明治図書から出版）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法
	学習の個別化をめざす学習過程
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法
	「学習の個性化」をめざす授業の改造
	「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」（明治図書から出版）

本　校　研　究　の　あ　ゆ　み　Ⅱ（平成元年度～令和２年度）

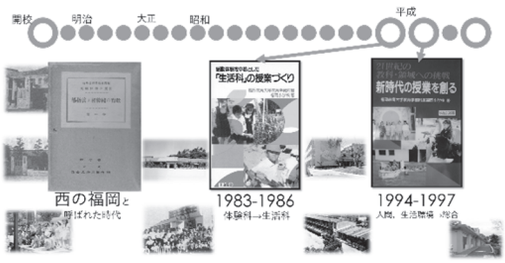
年度	研究主題等
平成元年	○個が生きる授業の創造 自己理解の学習過程
2	○個が生きる授業の創造 考えを確かにする活動構成
3	○個が生きる授業の創造 考えを深める自己吟味活動を通して 「個が生きる授業づくり」（北大路書房から出版）
4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 思い・願いをもって問いつづける活動づくり
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開
文部省研究開発学校指定Ⅱ（平成6年度～8年度）	
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 自分のよさを実感する表現活動の展開
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 新しい教育課程における教科領域の学習の具体化
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成 「新時代の授業を創る」（明治図書から出版）
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 活動や体験を基盤にした学習の総合化 「学習創造」（算数・人間・障害児教育）出版
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 子供と創る教科・総合的学習の展開 「学習創造」（理科・図画工作・音楽）出版
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開 「学習創造」（国語・体育）出版
13	○豊かな人間の育成をめざす教育過程の創造 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 「新世紀の学力づくり」（明治図書から出版）
14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開
15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開 「評価で変えるカリキュラムづくり」（明治図書から出版）
16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想
17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開
18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 協働を中核とした学習の展開
19	○学びを強め確かにする学習の創造 学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり
20	○豊かな学びを育む学習の創造 子どもの「問い」を深化・拡充させる授業づくり
21	○豊かな学びを育む学習の創造 知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり
22	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 活用の質を高める学び方を活かした指導法の開発
23	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 学び方の連続・発展を重視した授業づくり
24	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームを活かした学習過程の工夫
25	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームの活動が活性化する学習の工夫
26	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームの活動を活かす重点単元の設定と評価の工夫
文部科学省研究開発学校指定Ⅲ（平成27年度～30年度）	
27	○未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ 未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想
28	○未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ 未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開
29	○未来社会を創造する主体としての子供を育成する教育課程の編成 子供の学ぶ欲求と現代的課題をつなぐ新領域の開発
30	○未来社会を創造する主体を育成する教育課程の編成 子供の文脈を重視した探求の学び
文部科学省研究開発学校指定Ⅲ　延長（令和元年～4年度）	
元年	○未来社会を創造する主体を育成するカリキュラムマネジメントⅠ 子供の文脈を中心とした7教科における3つの学びの究明
2年	○未来社会を創造する主体を育成するカリキュラムマネジメントⅡ 3つの学びで創るカリキュラム・デザイン

文部科学省研究開発学校指定（令和元年～４年度）　延長第２年次　令和２年度　全体研究構想

未来社会を創造する主体を育成するカリキュラム・マネジメントII
～　３つの学びで創るカリキュラム・デザイン　～

○　はじめに

本校は令和２年度で 145 年を迎える伝統校である。師範学校として始まった本校は，校訓「深固」にあるように，人間としての基礎・基本を固めることを大切にしてきた[1]。その中で，本校の研究内容は明治期から国内外の教育へと影響を与えてきた。また，近年は文部科学省より，研究開発学校指定を受けてきた。



【図１　本校研究のあゆみ】

１　生活科の創立に寄与した「体験科」

初めは 1983 年～1986 年に低学年生活科の一つの在り方として体験科の開発を行った。この研究では子供の主体性を見取るために，学校の隣にある西公園で子供がいかにして対象からの気付きを得て，自ら学びを創り出そうとするかという研究の象徴的なエピソードがある。このように子供が自ら学びをつくっていくために教師がどのように学習内容を構造化していくか実証的に研究してきた[2]。

２　総合に先駆けた「領域『人間』」「生活環境科」

それから 10 年後，総合学習の機運が高まり，再び開発指定を受ける。総合的な学習の時間の先駆けとなる，領域「人間」，生活環境科などの研究開発を進めた。その中で，福祉や国際，環境などの現代的課題や子供の興味・関心を大切にした学びを見いだした。また人間としての学びを見つめ，人間存在の原理を基にカリキュラムを構成している。この考えは後の本校研究の基盤となるものであった[3]。

３　研究開発４年間

2015 年度からは未来社会を創造する主体を求めて，全教科等を見直す研究を進めた。子供の資質・能力を育成するときに現行教科の枠組みに対する限界を感じていたからである。そこでカリキュラムを７領域で編成し，内容を減らし，ダイナミックな探究が行えるようにした。ここでは，資質・能力を育成することが現行学力の維持・向上も望めることが明らかにした[4]。そこで「less is more」を実現させ，子供も教師も疲弊するカリキュラム・オーバーロードを克服するという志をもち，令和元年から４年間の研究開発を進めるに至った[5]。

Ⅰ　序論

１　目指す子供像

本年７月に九州豪雨が起こる。熊本県や県南部（大牟田市）に甚大な被害が出た。本校の６年生児童が中心となった募金活動に触発された５年生児童は，自分たちも何かできることをしたいと考え，災害ボランティアの方と出会う。その中で，金銭面での支援の他に実際に小学生であっても災害ボランティアを行った本校の卒業生の話を聞いた５年生は，休日に２日間の災害ボランティアへと旅だった。この様子は地域のメディアに取り上げられることになった。しかしながら，これだけでは足りないことに気付いた子供たちは，教科の枠組みを超える探究を行っていた。社会科では社会的な見方・考え方を基に「行政と市民との協力がもっとできるようにしたい」と考え，福岡市を中心に考えられている防災アプリ「ツナガル＋」の改良を自分たちが行った経験を基に自助・共助・公助の視点で提案した。科学科では科学的な見方・考え方を基に「天気の知識や流水の働きの知識をもっと広く伝えたい」という課題意識を基に近年の気象情報を基にした線上降水帯や大雨災害を調べた。また，土砂災害がなぜ起こるのか，流水実験のシミュレーションを基に実験したことを伝えていた。さらに言葉の学習ではたった数ヶ月でも忘れられてしまわないように経験をより多くの人に伝えようと，意見文を新聞に投稿する学習も行われた。以上のテーマ学習「わたしたちにできること」の最後に人間科の学習で振り返った子供の感想から本校の目指す子供像を明らかにしていきたい。

> ７月に九州豪雨があった。大変なことが起こったと思ったし，学校も休みになったけれど，正直に言うと自分のところは無事でよかったと思ってしまった。でも，被災地のことを６年生が伝えて募金活動をしている様子を見て，自分たちも何かできればと思った。そこで人間の学習で，被災地に行ってまずボランティアをしようと思って行った。でも，まだよく分からないことが多くて正直に言ってできることが見つからなかった。それで学校に帰って他の学習でも考えることにした。
>
> 科学では流水実験や天気の学習を通して，自然の猛威の怖さをもっと多くの人に伝える必要があることが実験や観察から分かった。社会の学習で自然災害に対する行政や関係機関の動きや情報の学習を通して，つながるプラスがさらに市民の自助につながり，共助を強くするようにみんなで意見を出し合った。このようなことを言葉の学習では説明文を読み，新聞投稿をしてもっと多くの人に提案できると思った。でもやはり子供のぼくたちにはできることが限られていると思った。知識は大人にもかなわない。力も技術も。でも被災者のＢさんは「あなたたちだからことできたことがあった。」と教えてもらった。もう一度人間の学習で考えてみると，それはわたしたちが大人以上に思いをもっているということだった。
>
> 「何とかしたい」という思いをもっていること自体が大切だった。そして，ぼくはこの「思い」を少しでも「かたち」にしていきたい。これが，わたしたちにできることだ。
>
> ※　下線は齋藤による。以下同様

【資料１　Ａ児の感想】[6]

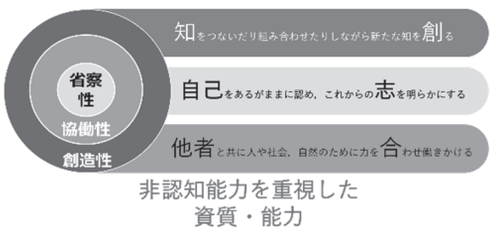
A児の発言は本校で目指す，「自己の学びを多角的に見つめたり，仲間や他者と協働的に実践したりすることを通して，自らの意思で社会を切り拓き，新たな価値を創り出そうとする未来社会を創造する主体」としての姿を具体化したものである。各教科の見方・考え方を基に仲間や他者と力を合わせ，子供ながらによりよい社会を創り出そうと実践しているからである。このような学習をするためには，教えるプロとしての教師の教材研究と，子供の文脈を想定し，単元を構想しつつ，実際の子供の意志に寄り添いながら，複数名の教師が協働的に指導と支援を行う必要がある。しかしながら，この学習は真正で豊かなものであるが，教科書会社の算出した授業時数を 10 数時間減らせている。内容や活動をスリム化しつつも私たちがいかにして未来社会を創造する主体を育成する子供の文脈を中心とする豊かな学びを創出したのか説明していきたい。

２　カリキュラム・オーバーロードの克服

現行教育課程は資質・能力重視の教育課程である。本来は，資質・能力育成によって内容を軽減できるはずだが，踏み込めず，むしろ授業時数が増えてしまった。特に，子供にとってもこの１年のカリキュラムの実施には大きな負担があったといわれている。また，それ以上に取り上げられているのが教師の負担である。ブラックな学校。いわゆる教師の多忙感である。毎年，5000 人以上の教職員が病に倒れ，休養を余儀なくされている。このことは国を挙げ解決すべき問題だろう。しかしながら，これが少人数学級で解決できるかというと疑問が残る。１学級ごとの負担は減っても，本来必要であるはずの教材研究や学習評価，自己の教職としての研修時間等が確保されなければ時間は捻出できない。真面目な教師ほど，放課後に仕事を抱え，パンクしてしまうのである[7]。この具体的な解決策は，カリキュラム・オーバーロードの克服しかない[8]。資質・能力を育成するための最低限の内容にスリム化し，活動もスリム化する。少ない中でも豊かな学びを創出する。そのためには十把一絡げに内容や活動をスリム化するのではなく，資質・能力と教科の見方・考え方を基にした知の構造を明確にする必要がある。すなわち，カリキュラムに必要な筋肉を増やし，余分についた脂肪だけを取り除く作業が必要である。そのため資質・能力と教科枠組みが合致したシンプルかつ機能的なカリキュラム構造が必要である。

３　資質・能力

本校は現行と同様に３つの資質・能力を育成する。しかしながら本校学習指導要領総則編に示すとおり，非認知能力を重視した省察性，協働性，創造性の３つで考えている。中心となるのが省察性であり，自らがよりよい学び手となるための資質・能力である。協働性は仲間や多様な他者と力を合わせることができる資質・能力である。創造性は人や自然，社会のために新たな知を創る資質・能力である。特に省察性と協働性は現行学習指導要領の「学びに向かう力・人間性等」とのつながりが強く，創造性は知を一体的に捉えるものとして，「思考力・判断力・表現力等」と「知識及び技能」と類別しないことに特徴がある。さらに，OECD Education2030 の Learning framework2030 の社会を変革する力で定義された「自律的に責任をもつ力」は省察性，「対立やジレンマを乗り越える力」は協働性，「新たな知を創造する力」は創造性とつながっていると考えている。

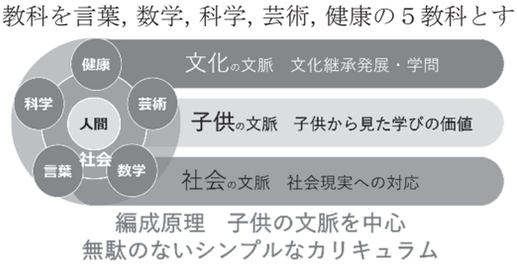


【図２　本校の３つの資質・能力の構造】

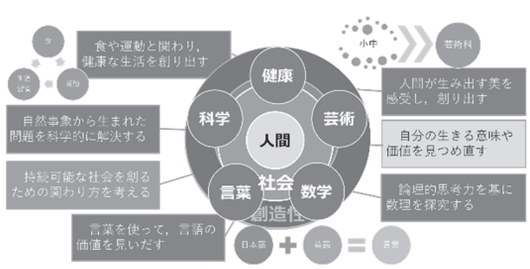
そこで次の教科枠組みでカリキュラムを設計する。

４　子供の文脈を中心とした７教科の設定

一般的な教育課程編成の原理は，佐藤や安彦，奈須が示すように，子供の欲求，社会現実への対応，文化継承・発展の３つからなると言われる[9]。内容重視のカリキュラムであれば，当然，重視される順序は文化継承・発展からである。しかしながら，資質・能力を本当に重視するのであれば，学び手である子供が重要である。そこで子供の文脈を中心とする。子供たちの資質・能力は，教えられるものではなく，子供が自ら学び自分の中にあるものを顕在化していくものだからである。そこで本校の７教科の現行学習指導要領の枠組みではなく，子供，社会，文化の文脈の順序でカリキュラムを構成する。子供の文脈を担う教科として人間科，社会と文化の文脈を担う社会科，文化の文脈を担う教科を言葉，数学，科学，芸術，健康の５教科とする。



【図３　７教科のカリキュラムの構造】



【図４　７教科の構造の概要】

さらに，主に人間科は省察性，社会科が協働性，その他５教科が創造性と７教科は資質・能力の構造とも対応するようにしている。

以上のカリキュラム設計を基にして本年度の研究を次節から明らかにする。

Ⅱ　本論

本年度は昨年度に規定した３つの資質･能力と子供の文脈を中心とした７教科の枠組みの中でテーマ，リレーション，フォーカスの３つの学びでカリキュラムを創っていくことを研究の中心としていきたい。

１　本年度の研究の目的

省察性，協働性，創造性の３資質・能力を育む，子供の文脈を中心とした７教科において，テーマ，リレーション，フォーカスの３つの学びでスリム化したカリキュラム･デザインを行うことで，未来社会を創造する主体を育成する。

２　本年度の研究の仮説

次のようにテーマ，リレーション，フォーカスの３つの学びによってカリキュラム・デザインを行えば，未来社会を創造する主体を育成することができるであろう。

(1)　７教科における内容のスリム化
(2)　３つの学びの豊かさと活動水準のスリム化の両立
(3)　カリキュラム・デザインを支える仕組み

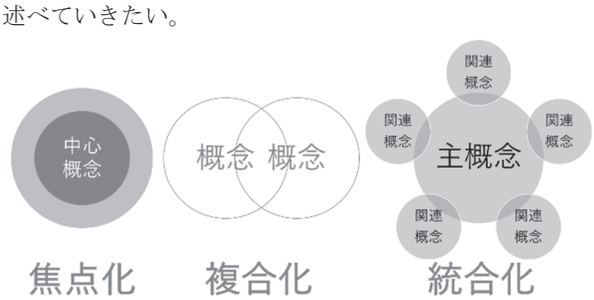
まず，内容のスリム化をいかにしていくのかを明らかにし，それを基に計上した授業時数の軽減効果を算出する。次に，昨年度仮説設定したテーマ学習，リレーション学習，フォーカス学習をいかにして位置付けていくのか具体的に示していく。さらに，このカリキュラム・デザインを支える仕組みについて述べていきたい。

３　研究の仮説を実証する方法

以上の研究の仮説の効果を具体的な子供の学びの姿，全国学力・学習状況調査の昨年度からの推移，児童質問紙調査，保護者質問紙調査，教師の自己評価などを基に検証していきたい。

３　内容のスリム化

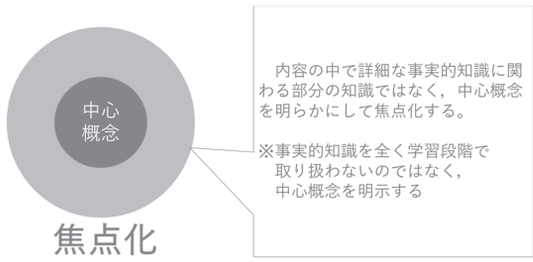
内容のスリム化の方法は，「焦点化」「複合化」「統合化」の３つである。その具体的な方法及び理念について詳しく述べていきたい。



【図５　内容のスリム化の３つの方法】

(1)　焦点化

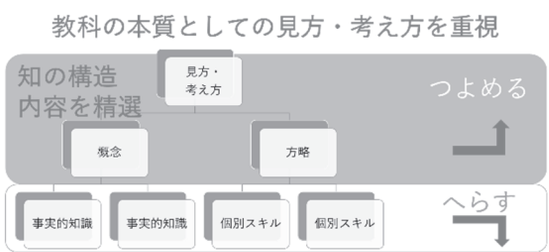
焦点化とは，知識やスキルの中にある，中心概念やそれにいたるための方略は何か考える中で，内容をスリム化していくことである。



【図６　焦点化のイメージ】

ア　教科の見方・考え方（概念，方略）

まず，内容のスリム化を考える上で無くしてはならないものは教科の知の構造を明らかにするということである。石井（2015）はエリクソンや西岡の論を基に，教科の本質としての教科の見方・考え方を次のように整理している。内容知としての概念はその下に事実的知識があり，方法知としての方略はその下に個別的知識がある。これらの知の構造を教科によって明らかにしつつ，不必要となる事実的知識や個別スキルはできるだけ軽減する[10]。そうすることで単元において重要な概念は何か？そこに迫らせるための方略は何か？ということが明らかになる。そこで，本校版学習指導要領においては，それぞれの内容を概念と方略で整理して述べている。そうすることが中心概念を明らかにし，内容のスリム化の出発点になるものと考えている。



【図７　知の構造（教科の本質としての見方・考え方）】

イ　実用的な学びではない内容の軽減

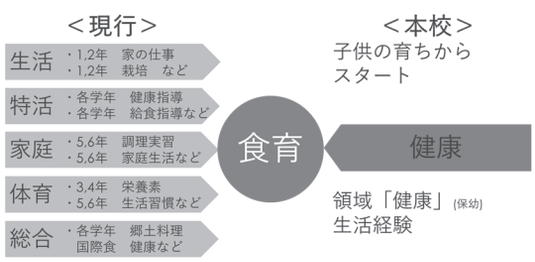
次に，子供の現実的な生活やこれからの学びに生きる可能性が低い実用的な学びでないものを軽減していく。奈須（2020）もそろばんや漢文など，学制が始まった明治期に実用的であったものがそうではなくなっているのにも関わらず，見直されていない内容が学習指導要領に多く残っていると指摘している[11]。他にも例えば言葉科では，GIGA スクール構想で配備された一人一台の PC 端末を利用すれば，特に高学年において重要となる推敲という学びをする上で利点がある。そうすると高学年の手書きの作文は不必要になる。また，高等教育からは芸術としての位置付けが強くなる毛筆についても４年生以上で実施する必要はなく，芸術やチャレンジの選択的な活動に入れた方が有用であると考えている。さらに数学科では「時計の読み方」は日常指導の中で学ばせることができるため削除している。むしろ，先述したそろばんや時計は，４年生以降の２進法，５進法，12 進法，60 進法などの中で統合的に数学の知識として取り扱った方が有用である。さらに現行家庭科の住環境や被服なども現在はその多くは低学年社会科や家庭教育の中で取り扱われるべきものと考え，削減している。

【図８　真正な学びかどうかで削減】

このように学校で担うべきところとそうでないところを考えていくことが焦点化の２つ目の方法である。

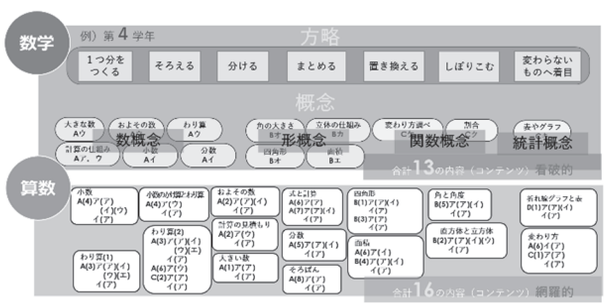
ウ　重複の軽減

さらに「食」に関わる内容は現行教育課程においては社会科，生活科，家庭科，体育科，特別活動，総合的な学習の時間などで取り扱われる。それぞれが教科によって違うと考えているが，これは大人の論理であり，子供はその違いを意識していない。本校では幼稚園教育課程の健康科とのつながりをもたせた健康科において系統的に学ばせることで焦点化することができると考えている。この他にも「人体の仕組み」「消費生活」「インタビュー」などの事項についても多くの重なりがあるものは統合していくことで知識やスキルの焦点化を図っている。



【図９　教科内容の重なりを無くす】

以上のような「焦点化」の３つを踏まえ，特に教科の見方・考え方や概念，方略を明らかにしていくと，年間指導計画上に位置付ける内容も次のようにスリム化することができる。

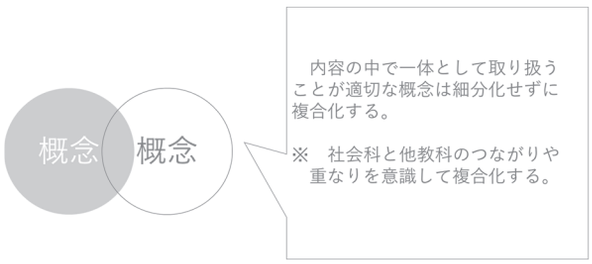


【図 10　内容のスリム化による数学科の年間指導計画】

数学科で概念は，「数，量，形，関数，統計」の５つにまとめられると考えている。方略は「１つ分をつくる，そろえる，分ける，まとめる，置き換える，しぼりこむ，変わらないものへの着目」の７つである。そうすることで，第４学年では，年間指導計画上，16 のまとまりから，13 にまとめられるのではないかと考えている。このように「焦点化」においては，知識やスキルを教科の本質としての見方・考え方や概念，方略から見たときに削減しても問題のないものを思い切ってスリム化している。

(2) 複合化

複合化も内容のスリム化の有効な方法の一つである。これらは教科内で行うものと教科間で行われるものがある。



【図 10　複合化のイメージ】

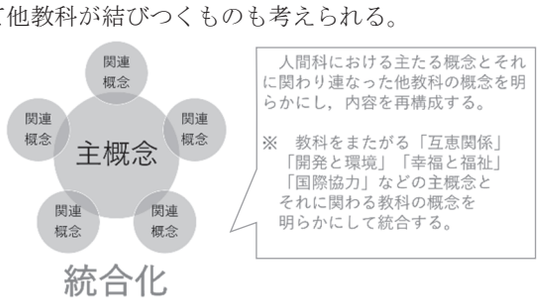
教科内では，本校に位置付けられた言葉科においては「話す・聞く」の内容において日本語と英語は複合している。また，芸術科においても総合芸術の内容では造形と音楽の概念の複合化が図られている。さらに健康科では食と運動の概念を複合化するものも内容として位置付けることができる。

教科間では「光と音」などは科学科と芸術科の概念が複合化され，各教科独自の内容と重なる内容を考えている。社会科と数学科のデータ・統計の活用，社会科と言葉科の調査，表現なども複合化することができる。

【図 11　教科間での複合化（社会と数学）】

(3) 統合化

特に，人間科の内容を主概念（価値）として関連概念として他教科が結びつくものも考えられる。



【図 12　統合化のイメージ】

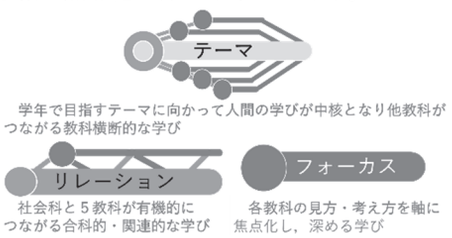
例えば，先述した５年生の主概念は「互助・互恵関係」であり，社会科の「情報の活用」「災害時の予防と対処」，科学科「流れる水の働き」「夏と秋の天気」などは関連概念として結び付き，方略としての「新聞の読み方と，相手に応じた意見を書く」という言葉科の内容も統合化できると考えられる。

【図 13　教科等を横断する統合化】

以上の内容のスリム化を図ることで，子供たちが学ぶべきことは明確化し，質の高い内容を子供たちに提供できる。

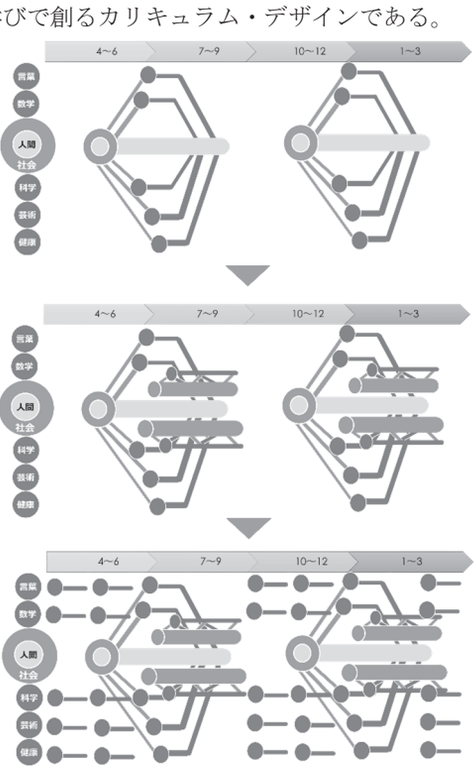
4　３つの学びで創るカリキュラム・デザイン

授業時数を削減しつつ豊かな学びを創るために次の３つがある。１つは，テーマ学習である。子供の文脈を最も具現化する探究的なプロジェクトとして教科横断的に進める学びである。２つは，リレーション学習である。レリバンスや STEAM を重視した探究として有機的につながる学びである。３つはフォーカス学習である。教科の見方・考え方を軸に焦点化し深める学びである。



【図 14　３つの学びについて】

以上の３つの学びは①テーマ学習，②リレーション学習，③フォーカス学習という順序で年間指導計画に位置付けていく。これらを子供の学びの意志と対応させながら，教師と子供の相互作用の中で柔軟につくっていくことが，３つの学びで創るカリキュラム・デザインである。



【図 15　３つの学びで創るイメージ】

このカリキュラム・デザインは次のように進めていく。

【表１　カリキュラム・デザインの基本的な手順】

1	教師は子供と共に学級目標と学年目標を設定し，目指すべき人間像を明らかにする。
2	子供たちと教師は学年で目指す人間像とみんなの願いを基に人間科の学習でテーマを決める。
3	子供たちはテーマに関わる他教科の学びがどのように位置付くのか考え，学習計画をつくる。
4	教師は教科部会で教科内容との整合性を考え，テーマ学習として位置付けられるか検討する。
5	教師と子供はテーマ学習を進めるための外的リソースと打ち合わせ，学習計画を修正する。
6	教師は学年会でリレーション学習として位置付けられないか検討する。
7	子供たちが学ぶ上で教科の本質から外れてないか教科部会で検討する。
8	子供の問いを基に教師と子供で問いを解決するための学習計画をつくる。
9	必要に応じて修正しながら，それぞれの教科が絡み合うように学習が進められるようにする。
10	テーマ学習でもリレーション学習でもなく，教科独自の学びとして位置付けることが最適なものをフォーカス学習として位置付ける。
11	学習指導要領にある教科の見方・考え方に迫る概念と方略を明らかにして計画する。
12	テーマ学習とリレーション学習で計画していたが，位置付けられなかったものもフォーカス学習として設定する。
13	それぞれの教科の視点で子供たちの学びについての検証を教科部会で見つめる。
14	子供たちと共に年間指導計画を見通し，人間科のマイタイムノートにそれぞれの教科がどのように自分の中で位置付いているのか見つめる。

以上のような手順で３つの学びでカリキュラム・デザインを創る。特に低学年期では，それぞれの教科がどのような学習をすることなのかが未分化である。そのため，テーマ学習やリレーション学習において，教師の見取りとしての教科の枠組みを考える。子供たちにとっては教科の学習ではなく「遊びづくりの学習」「ものづくりの学習」などと捉えており，教科の見方・考え方を基に学びのよさを自覚化させるためには教師の促しが必要である。

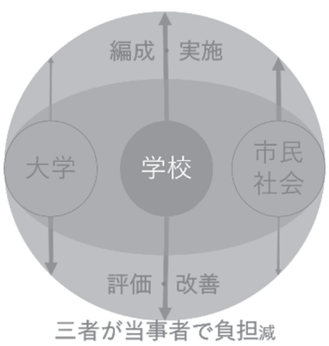
中・高学年になるに従って，テーマやリレーションの課題をどのような教科の学習で解決していくのか整理しながら学習計画をつくることができる。特に高学年においては，学習計画づくりを子供が主体となって話し合って進めることも可能である。

このようなカリキュラムを合理的かつ効果的に創っていくためにもそれを支える組織的な仕組みづくりが必要なことは言うまでもない。

５　カリキュラム・デザインを支えるもの

(1) 外的リソース（三者一体）

まずは，カリキュラムそのものが子供にとって適切なものにしていけるのか市民社会との連携は欠かせない。特にテーマ学習やリレーション学習では，子供たちにとって挑戦感のである学校を越せる価値のある真正な課題をもたせる。そこで，市民社会と話し合いながら子供と共に実現していくことができる夢のあるカリキュラムの計画・実施を進めていく。さらに，この独自のカリキュラムがアカデミズムの視点から見てどうなのか，検証していくためにも大学との連携を進め，評価と改善を進めていく必要もある。ここでは学校だけが主体者となるのではなく，市民社会も大学もカリキュラムを創る上での一定の責任を担ってもらうことで学校ばかりが負担をもつ体制にならないようにしていくことが肝要である。



【図 16　学校，大学，市民社会で創るイメージ】

(2) 内的リソース（学級担任・教科担当制，４チーム）

次に，小学校において一般的である学級担任制ではなく，学級担任と教科担当制を併用していく。教師が専属の教科について十分に教材研究を進めたり単元を計画したり見直したりすることができる時間を保障する空きコマをもつことができるようにする。そうすることで勤務時間内に有意義な学習を構想したり評価したりすることができる。

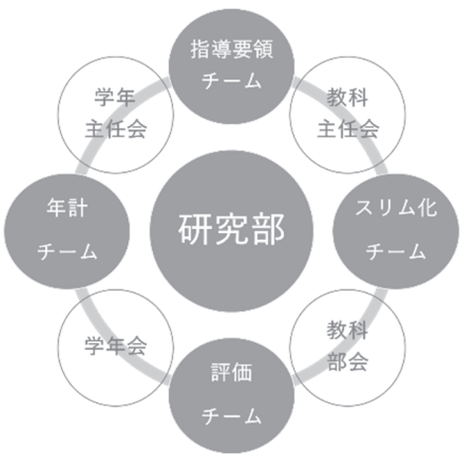
５の２　担任の教科担当

	月	火	水	木	金
1	５の１	２の１		２の１	２の１
2			５の１	５の２	
3		５の１		５の２	５の２
4	５の２			５の２	５の１
5	５の２	５の１	２の１	Ｃｈ	５の２
6			５の２	Ｃｈ	

・教材研究　・単元計画
・計画修正　・学習評価

【図 17　教科担当制をすることで生まれる空きコマ】

職員一人当たり，10〜15 コマ程度の空きコマ等を使って，週１回行われるのが４チーム会議である。会議の中では，次の４チームによって構成される。教科部会で創られた学習指導要領や教科年間指導計画を審議する，指導要領チーム。普段の学年会で企画された，テーマ学習やリレーション学習に関わる学年年間指導計画をつくる，年計チーム，さらに教科部会で出たスリム化案を基に内容のスリム化を図る，スリム化チーム。子供の学びを具体的に評価する，評価チームである。これらのチームの長は研究部が務め，全体の調整を研究部が担い，４チームの働きによって，学年主任会，教科主任会，学年会，教科部会などが子供の文脈を中心としたカリキュラムづくりのために機能している。



【図 18　４チームによる組織の機能化】

このように各チームはピラミッド型の組織ではなく，立体的に機能しており，それぞれが自治的に進めることに特徴がある。管理職や教務主任は各チームや学年や教科が出した決定を尊重している。カリキュラムの最前線としての学習を行っている教師の判断を基に速断即決でカリキュラムが形づくられていく。このように一人一人の教師がカリキュラム創りの一役を担い，責任をもってマネジメントに関わらせることが重要であると考えている。すなわち，一人一人の教師が決められたカリキュラムの消費者ではなく，カリキュラム創りの主体者となることが重要である。

以上のカリキュラム・デザインによってどのような子供が育ちつつあるのか，学習の実際を簡単に紹介しながら，本年度の研究の成果と課題をまとめていく。

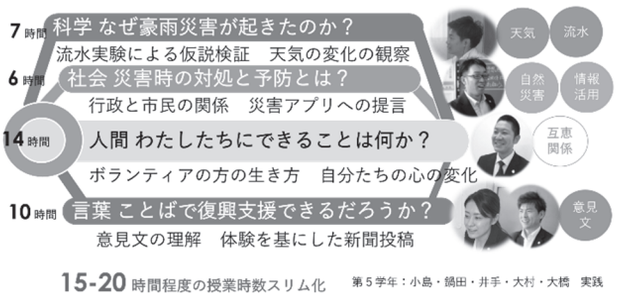
Ⅲ　結論

1　研究の評価（１，２年次）

(1) 指導の実際の概要

ア　テーマ学習

冒頭に説明した第５学年「わたしたちにできること」の学習では，５名の教師が関わり，学習が展開された。



【図 19　テーマ学習の展開図】

７月に起こった九州豪雨の被害を夏休み前から課題としていた子供たちは人間科の学習で「現地がどうなっているのか知りたい」「何かできることをしたい」という声を上げた。夏休みが明けても被災地が気になっている子供たちに，九州豪雨の被災地の実態を知る災害ボランティアバスをしている方をお呼びしてお話を聴くこととなった。被災地はまだまだ人が住める状況にないことや高齢の方が助けてほしいけれど，声が上げられない状況にあることを知る。子供たちは「できることはないか」と尋ねるとゲストティーチャーは，「一緒にボランティアをしませんか」という提案をした。しばらく考えた子供たちだったが，「実は君たちの先輩も災害ボランティアに来たことがある」という話を受け，子供たちは俄然やる気になって，災害ボランティアに出かけることになった。

【資料２　家屋に残った泥を必死で取る子供の様子】

子供たちはこの災害が自分たちの前に起こっている現在進行形の問題であると気付いた。それとともに，強い体験をすることで，問題意識が生まれた。学校に帰ると，次のような課題に整理された。「なぜ自然災害は起こるのか」「災害時の市民や行政の働きはどのようなものだったのか」「このことを多くの人に言葉で伝える支援はできないか」などである。このような教科等を横断する課題を科学科，社会科，言葉科などの教科でも学習していこうと学習計画を子供と教師で創ることになった。

科学科では，流れる水の働きの強さを実験によって体感することとなり，普段使っている水のもつ力が土砂災害も引き起こすということをまざまざと見せつけられていた。

また夏と秋の天気における気圧配置や台風の発生などの探究から大雨災害の危険性を感じた子供たちは，自分たちが被災地に行った経験と調べたことを基に伝えようとしていた。

【写真２　流水実験の様子】

社会科では，自然災害の対応においても自助，共助，公助が重要であるという社会的な見方・考え方によって，それを生かして，福岡市が進める防災アプリ「つながる+」について調べることとなった。その中で情報活用をする際の新聞やテレビ，ラジオなどの多様なメディアがあることの必要性や近年，利用が伸びつつあるスマートフォンに対応した地域密着アプリの重要性が高まっていることを理解していた。その中で「利用率や利用者の自助を高めるための工夫をパブリック・コメントとして提案したい」という子供たちの意識も生まれ，自分たちが考えるアプリ改善案を話し合う中で「災害時の予防と対処」や「情報の利活用」などの概念を基に社会に挑戦する様子が見られた。

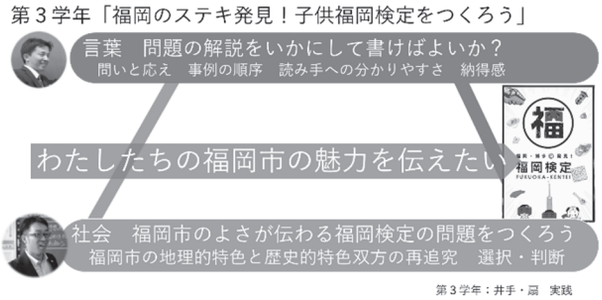
【写真３　アプリを考える様子】

言葉科では，これらの学びを包括して，経験と学びを結び付け，大牟田の被災者に目が向くような意見文を書こうと新聞社各社の特徴を比較して読みつつ，意見文にまとめ投書を推敲する学習が行われた。

この中においても子供たちは常に被災地の人々のことを頭に浮かべ，自らの思いや願いを実現する学習を進めていた。冒頭のＡ児の感想はこれらの学習を振り返った記述である。このように教科を超える学びの中で，それぞれの教科の本質に行き着くことで，自らを振り返り志を確かにする省察性。学年の仲間やボランティアや被災地の方々という多様な他者と力を合わせる協働性。そして学んだ知識を基に自分たちにできることを実践するという新たな知を創る創造性が発揮されているものと考えられる。

イ　リレーション学習

３年生リレーション学習「福岡のステキ発見！子供福岡検定をつくろう！」は２名の教師が関わって進められた。



【図 20　リレーション学習の展開図】

まず，子供たちは福岡検定を市役所の方から紹介された。すると子供たちは，「自分たちが知っていること以外にも知らないことがあった」や「おもしろいことがたくさんある」と未知の福岡市の魅力を知ることになった。しかし，小学生には解説が分かりにくく「解いてもよくわからない（納得感が得られない）」と嘆いた子供たちに，実は市役所の方々も「子供たちに興味をもってほしいが分かりにくい」という意見があることに悩んでいることを伝えた。子供たちは市役所の方から「子供版を考えてほしい」と頼まれ，「子供福岡検定をつくってみたい」と考え，学習がスタートした。社会科では地理的特色と歴史的特色を再追究し，それらを統合的に調べるようにした。

また，問題はできても解説の書き方をどうしたらよいのか迷っていた子供たちは「言葉の学習で書き方を学んで解説文を書けばよい」と考え，子供にでもわかる福岡市の地理的特色や歴史的特色を踏まえた説明として，問題と対になるように考える「問いと応え」や「事例の順序」「読み手への分かりやすさ」などの書き方の視点を基に記述し，見直す姿が見られた。

5-10 時間程度の授業時数スリム化　第３学年：井手・扇　実践

【資料３　B 児の取材メモと解説文】

B 児は，友達との関わりの中で，観察した事実を丁寧に調べられているよさはあるものの，「文の中には事実を示すだけでなく，考えを付け加えればよい」ことを理解して解説文を修正している。

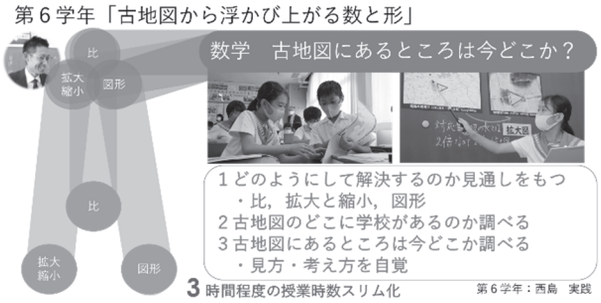
このようにしてできたものを再び市役所の方々にお渡しして，子供福岡検定の問題に生かしてもらえるようにした。以上のように，言葉科の学習で学ぶべき方略と社会科の身近な地域の地理的・歴史的な概念を複合させたリレーション学習が進められた。その中で，市役所や福岡市の人々に取材し，関わり，地域への愛情を深める協働性。そして，自分の調べた事実と考えを分かりやすく相手に伝える創造性の発揮が見られることとなった。

ウ　フォーカス学習

本校において，フォーカス学習は日常的に進められている。特に単元で理解するべき概念や身に付けさせる方略を意識し，子供の学びの実態に即して，知識やスキルを焦点化して進めている。

ここでは第６学年数学科の実践事例を紹介する。この学習においては次のように数学科の授業者が学習の展開を構想して進めるようにした。

第６学年「古地図から浮かび上がる数と形」



3 時間程度の授業時数スリム化　第６学年：西島　実践

【図 21　フォーカスの展開図】

この学習においては，「比，拡大と縮小，図形」などの概念を合わせて課題解決に向けて焦点化する方法を取っている。

ここでは，歴史学習で江戸時代について調べている子供たちに教師はその頃の地図を提示し「これが 200 年前の地図で実は学校がこれからできる場所もある」と伝えると，「どこに学校があったのか見つけたい」「この古地図にあるところが今はどうなっているのか調べたい」という意識になっていった。ここでは子供たちの思いや願いから探究するのだが，そこで迫らせたい数学的な見方・考え方や概念を整理することで，授業時数をスリム化しながら豊かな学びが展開された。

どのようにして調べるとよいかと考えさせる際には，教師はわざと古地図を今の地図の２倍にすることで比の考え方に向かわせるようにした。また，共通して存在する福岡城跡やお堀の跡である大濠公園の位置を結んだ三角形に目を向けさせることで，図形や拡大と縮小にも着眼して，学習を進めるに至った。

例えば，今の学校がどこにあるのか追究する場面では次のように進められた。まず教師は事象提示を行い，子供たちがそこから問いや見通しをもたせた。そして話し合った際にある児童は次のような発言をしている。

> **ここの三角形とここの三角形が形は同じだから，対応する辺の長さの比が１：２ということから，拡大図を作図し，学校の場所は特定することができるよね。**

資料４　C 児の発言内容

C 児の発言からは，江戸の古地図が現在の２倍にあるということを説明し，三角形の１点を基準に，辺の長さの比や角の大きさに着目して説明することができている。また別の児童は，次のように発言している。

> **江戸の古地図が現在の２倍にあるから，三角形の１点を基準に，辺の長さの比や角の大きさに着目して説明することができるね。同じようにして考えると，自分の家や他の場所についても特定することができるね。**

資料５　D 児の発言内容

D 児の発言からは，辺の長さの比を捉えて，作図をするという数学的要素の視点で発言したり，これからの学習への願いをもった発言をしたりすることができている。

このように活動水準で授業時数をスリム化しても子供たちは探究することができる。

以上のような学習が展開されたカリキュラム・デザインについて全体的な傾向などを児童の自己評価と保護者評価から見ていきたい。

(2) 児童自己評価，保護者評価

まず，児童自己評価を見ていきたい。期待値である 4.00 は，13 項目中 10 項目が上回り，資質・能力の高まりを子供自身が感じていたようであった。しかしながら，本年度は休校の影響からか全体的に数値が高まっておらず，子供が学びの中で自分の高まりを自覚しきれていない部分が多く見られた。

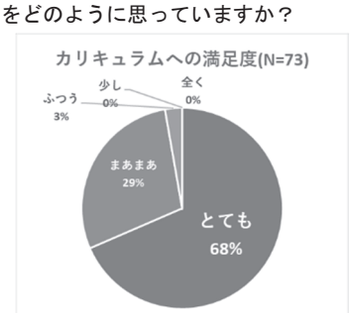
【資料６　児童質問紙調査の結果（全児童）】

特にわずかではあるが期待値に迫れなかった，「自分の言動を思い返す（省察性）3.93」や「より正しい考えを求める（創造性）3.96」の向上を子供たちが感じられるようにする必要がある。そのために，マイタイムノートへの１週間の学びの振り返りやこれからの目標設定を記述する時間を大切にするとともに，各教科の学びを振り返る時間をより一層重視する必要がある。前期において，進度は内容と学びのスリム化が図れたものの，落ち着いて学びを見つめる時間が不十分であったことから，今後の学習に意識付けなければならないと感じている。さらに，創造性においては，じっくり考えたり熟考したりする問いやそれを確保する時間が足りなかったところもあったため，今後の課題としていく必要がある。

また，本校のカリキュラムを６年間経験した第６学年児童に選択・記述併用のアンケートを行うと次のような結果が出た。

令和２年度　福岡教育大学附属福岡小学校　第６学年児童アンケート（無記名可）
※実施時期：令和２年 12 月３日
※対　　象：第６学年児童（回答総数 73 名）
※分析方法：児童記述内容
※調査項目：４項目（５段階選択・記述式）
5とてもよい　4まあまあよい　3ふつう　2少しよい　1全くよくない

１　学校のカリキュラムをどのように思っていますか？

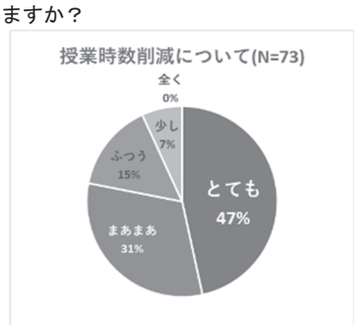


・学習では，最近の出来事などから考えることがいいと思います。また，自分たちのしたい学習を学ぶことができるからです。たんれんは，少しの時間で，復習したり水曜日の人間のたんれんでは，テーマを考えて話し合うことができるから楽しいです。
・チャレンジでは，自分から自ら考えてしたいことに挑戦できるということができるからカリキュラムはいい。
・たんれんは楽しいし，たんれんで覚えていたことが受験勉強や習い事に役に立ったことがあるから。チャレンジはクラブのように決まったことをするのではなく，自分達がしたいことをチャレンジできるから。
・たんれんやチャレンジで学んだことは決して無駄ではない。
・チャレンジのおかげでいろいろとできるようになった。
・自分がやりたいことを学べるのがとても楽しいからです

２　７教科の中で思い出深く，ためになったと思う学習を書いてみましょう。

・５年生のときの社会科の，環境か経済どちらを優先するべきか
・個人的にこれからしたい学習としては，マスメディアがみんなに与えている影響についてです。
・５年生　伝統継承と異文化理解などの学習
　６年生　テーマ学習
・私は，人間が１番ためになったかなと思います。人間の学習では良いことと良くないことを学ぶ基礎から始まり，この意見についてどう思うかなどの意見交換をし，自分の意見がはっきりと言えるようになったからです。

３　他の公立学校に比べると，かなり授業時数を減らしていますが，どう感じていますか？



＜肯定的な意見＞
・短時間でより深い学習ができるから長時間グダグダ続くよりも集中力が上がるからです。
・基礎を復習できて良い。
・短時間であっても，集中的にたくさんのことを学ぶことができるから。
・早く学校から帰り，家で自分がしたいことに専念できる。
・短時間授業をして，残りの時間を自分のために使うほうが効率がよく，ストレスにならないから
・他の公立小は 7 時間とか授業をやっているので，それだけ時間が短いということは授業の質がとても高い。

＜否定的な意見＞
・公立校よりも授業数を減らすことによって，他にもっと探求できる時間が増えるところは良いなと思うけれど，学習のスピードが早くて塾に行っていることが前提になってしまっているのは少し短所だと思います。
・教科書の内容も全て終わっていないところもあるから

４　学校全体として，授業時数を減らしたのに，５年生までの学力をみる，全国学力・学習状況調査の結果，特に活用力（応用力）の学力が伸びているのはどうしてだと思いますか？

＜複数回答可　回答の多かった順＞
・答えのない課題を解決するために創造的に学ぶから（89%）
・仲間と協力し難しい課題を解決しているから（76%）
・自分の学びを振り返る時間があるから（61%）
・家庭での学習が充実しているから（54%）
・教科担当の先生が大切なポイントを押さえている（51%）
・塾や習い事を頑張っているから（49%）

【資料７　児童質問紙調査の結果（第６学年児童）】

ここからは，子供たちが肯定的に本校でのカリキュラムや学びを捉えていることが分かる。また，授業時数の削減についての否定的な意見もあるが概ね満足しているようである。さらに，学力の高まりの要因について，子供たちの中では学校での資質・能力の発揮や教科担当の学習の在り方を考えている部分が多かった。このことからも本校のカリキュラムは６ヵ年にわたる児童に対しての充足感を与えていることが明らかになった。

次に，保護者による評価を見てみたい。

以上のようなスリム化したカリキュラムについて，子供たちの様子をつぶさに見ている，保護者がどのように思っているのか，自由記述式のアンケートを行った。

その結果は以下の通りである。

令和元年～２年度　福岡教育大学附属福岡小学校　研究開発
保護者アンケート（無記名可）
※実施時期：令和２年１月 24 日，11 月 14 日
※対　　象：全保護者（回答総数 355 名）
※分析方法：保護者記述内容
※調査項目：２項目（記述式）
１　本校の教員に対してコメントがございましたらご記入ください。
２　本校のカリキュラムに対しての全体的なコメントがございましたらご記入ください。
＜教員や授業について＞
・先生の意識が高く子供も高められている感じが素晴らしい。
・資料作りに力をいれられており授業に取り組みやすい。丁寧な指導，子供に自信がついたと思います。
・発言力，思考力などが鍛えられていると感じています。
・子供達と一緒に作り上げていく授業に活気を感じています
・先生方にはやる気を引き出してくださって感謝しています。
・アクティブ・ラーニングを見据えた楽しみのある授業。
・すらすらマイタイムノートを書けるようになり，それが習い事の日記の速さに繋がっている。
・大変素晴らしい教育をしてくださりありがとうございます。
・体験参加型の授業が多く素晴らしい。
・福岡小でしか学べないことが多く，子どもは学校が楽しくて仕方がないようです。
・国際問題や環境問題を授業に取り入れて頂いているのがすごく良いです。
・子どもが受け身の授業がほとんどなく，よく考えられていると毎回感心しています。
・時代の先端の学習で驚くばかりです。
・新しい取組で子供の自尊感情が上がっていると思います。
・子供の思考力，発想力を伸ばしてくれる事が有難いです。
＜カリキュラムに対して＞
・体験をたくさん行えることに，親子でワクワクできる。
・考えさせる，経験，体験して学ぶことが多く，塾や家庭では学べないことが多く，感謝しています。
・どのカリキュラムも子供達の興味，関心を持つように創意工夫されていると思います。
・独創的な部分を伸ばしていただきありがたいです。
・他校では体験出来ない時間を過ごせていいとおもいます。
・色々な取り組みがあることで，子どもの可能性を広げる機会がありとてもありがたく思います。
・チャレンジはとても意欲的に参加できているようです
・応用的な部分が多く，基礎的な学習が省略され過ぎている気がします。
・自分たちで考える力を育てる為に考えられたカリキュラムでとても良いと思います。
・行事や親の協力割合のスリム化によって心の余裕ができた。
・子供が主体となるよさがあると思う。
・他の学校にはないカリキュラムが組まれていて，とても魅力的だと思います。
・押し付ける教育ではなく興味を引く内容の授業をやってくれていると思う。

【資料８　保護者質問紙調査の記述内容】

以上のように，好意的な意見が多くある一方で基礎的な学習や反復的な学習が十分かどうか懸念をもつ保護者も一定数いる。

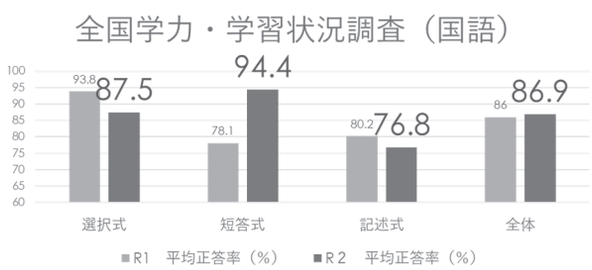
(3) 全国学力・学習状況調査

研究開発学校前後として，2014 年から 2018 年の調査結果から本校においては子供の文脈を中心とした探究を進めつつ，授業時数を大幅に削減しても学力が向上していることは周知の通りである（資料４）。

【資料９　全国学力学習状況調査の推移（2014～2018）】

そこで，延長となった 2019 年度から全国学力・学習状況調査の調査方法が変わったことから，その推移を測定する上で，全国学力・学習状況調査の形式別の得点率から検証していきたい。

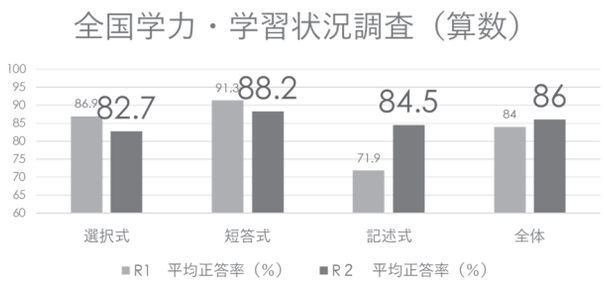
まず，国語科は次のような結果が出ている。



【資料 10　全国学力・学習状況調査　国語（2019, 2020）】

本年度は，選択式でのつまずきは見られたものの特に短答式が好調であり，全体の平均得点率は 0.9 ポイント向上していることが分かる。３か月の休校措置を経験した本年度の６年生にとってはハンデが大きな調査となったところだが，着実に力を付けていることが分かる。

次に，数学科は次のような結果が出ている。



【資料 11　全国学力・学習状況調査　算数（2019, 2020）】

こちらは選択式と短答式で若干の減少が見られたが，記述式は，前年度を大きく上回っていることが分かる。ここからも休校措置を跳ね返す資質・能力の向上が学力の向上から裏付けられるのではないかと考えられる。

以上のことから，見出される成果と課題はそれぞれ３点である。

(4) 成果と課題

ア　成果

○　資質・能力と学力の維持・向上の相関関係

先述した通り，内容のスリム化と活動水準のスリム化による授業時数の削減の影響を受けることなく，「less　is

more」を目指す本校のカリキュラム及び，子供の文脈を重視した探究による看破する学習は，網羅する学習と比べ，効率的に資質・能力育成に寄与するので，現行の学力も向上する。

○　内容水準のスリム化と活動水準のスリム化の整理

カリキュラムは多層である。その中で，内容そのものを見つめなおして必要でないものや軽減できるものについて石井論を基にスリム化していった。その結果計算される授業時数の削減は 432 時間。そして活動水準で無駄のあるところを大いにスリム化することで 511 時間の授業時数の削減を実現することができた。またテーマ学習やリレーション学習等の探究においても複数の教科を横断したり，関連したりすることで無駄なく進められたと言える。ここでも教科の本質とは何か問い続ける成果が出たのではないかと考えられる。

○　コロナ禍で逆に強まった児童と保護者の理解

私たちのカリキュラム・デザインを支えるものとしてマネジメント・ループがある。ここでは PDCA サイクルではなく，子供が今求めているところを起点にカリキュラムを創るべきだという考え方がある。学校休校時においてもカリキュラムはあくまでも仮留めして進めているので，教師は思い切って，オンライン学習やオンデマンド学習を進めていた。このように子供が求めることに柔軟に対応していく組織としての姿勢を子供たちも感じており，それを保護者が感じ，支援してくれている。

イ　課題

●　組織開発と人材育成

まずは，成果の３点目とつながるが，このような組織体制に赴任したばかりの教員は馴染めないこともある。さらに授業を考えても単元を考えたことがない者。単元は考えても新しく創ったことがない者。単元は考えてもカリキュラム全体を俯瞰したことがない者。教科の本質や教科の内容構造を理解していない者など，その実践力には大きな差がある。公立学校の担任教諭と比べると平均 10 時間程度の空きコマをつくり，内的・外的リソースを整えた組織開発を行っても，その中でどのように人材を育てていくのか考えていくことは持続可能な研究開発にとって，大きな課題である。

●　内容の３つのスリム化と３つの学びの関係

次に，焦点化，複合化，統合化の３つのスリム化の方法とテーマ，リレーション，フォーカスの関係である。現在のところ，統合化とテーマ学習，複合化とリレーション学習，焦点化とテーマ学習という関係性は見えてきている。しかしながら，教科の概念または方略を統合したフォーカス学習としての実践や，科学科と芸術科の STEAM 教育を踏まえたリレーション学習等も出てきており，それらの関係性を今後精査していく必要がある。

●　質の高い学びに着眼にしたカリキュラム創り

さらに，カリキュラム全体という大きな視点から学習を創ってきたが，これらをどのように教師が見て，どのような枠組み見取り，いかにして子供の学びに返していくのかというミクロな視点での研究は十分に進められなかったと考えている。そこで，もう一度，学習の目標・評価というところから今のカリキュラムをもう一度見つめる必要があるのではないかと考えている。そうすることでさらに一時間の授業と教育課程全体のつながりのある実効性あるカリキュラムにつながるものと考えている。

今後は，一人一人の子供の学びの様相を基に学習のための評価，学習としての評価をさらに重視し，自律的な個の学び，協働の学びを考えていくこと。全体的な学習の傾向からカリキュラムを組みなおす，評価を軸にした研究も求められると考える。

２　今後の方向性（３，４年次）

(1) 学習評価の充実を図る３年次

以上のことから，令和３年度からは評価の三角形（認知，観察，解釈）を基にしたカリキュラム創りがヒントになるのではないかと考えている。具体的には，「カリキュラム」「インタラクション」「アセスメント」という今までのカリキュラム創りの方向から，「アセスメント」を基点とする逆の方向性からカリキュラムの検証を進めていくということである 。このことが，２つの意味で今後の研究を進める上での鍵になるのではないかと考える。

１つは子供の今をより詳細に見つめることが子供の文脈を中心とした学びを実現させるということである。何が自分の強みで逆に何が課題なのかを学習が終わった時点で子供が評定として知るだけでなく，今後の学びに生かしていくこと，そして教師は，個々の学びに必要な内容や時間をより反映させた学習だけでなく，カリキュラムの修正に生かせるのではないかと考えられる。

２つはカリキュラム・オーバーロードの克服にもつながるものであると考える。より子供にとって有用な学習であるものに時間をかけ，逆にそうでないものをさらに軽減させていくことができる。これについては学習のログを蓄積していく必要があるが，どこまでをデータ化することができるのか ICT やクラウドの利活用と並行して進めていく必要があるだろう。

すなわち，「アセスメントから学び」を，「学びからカリキュラムを」ということである。

(2) ８年間の研究をまとめ，発信する４年次

そして，研究最終年度である，令和４年度は，あらゆる方向で成果の見られた部分と課題のある部分を基に全国に発信しつつ，次の学習指導要領に向けた資料の提供を行っていきたい。その際，授業レベルの実践的な検証をいかにして学術的なところまで分析できるのか，本校の研究開発学校の運営指導委員と，本学の共同研究者と共に研究をまとめていく。

○　おわりに

未来社会を創造する主体を育てるために子供の文脈を中心とした７教科の枠組みでカリキュラムをつくり，カリキュラム・オーバーロードを克服する。これは国家的な課題と言えるのではないだろうか。このような大きな課題を解決する研究を本校に任せていただいていることは，本学の諸先生方や先輩方の培ってきた研究の功績が大きかったからである。とても光栄なことである。

さらに，私たちの意志に賛同してくださる上智大学教授　奈須正裕様，國學院大學教授　田村学様，京都大学大学院准教授　石井英真様，上越教育大学准教授　河野麻沙美様，国立教育研究所総括研究官　福本徹様をはじめとした運営指導委員，共同研究者，研究協力者，授業に関わってくださる多くの市民の皆様に感謝しなければならない。

今，延長２年次（通算６年次）を終えようとしている。昨年は研究発表会前日に中止が決定したにも関わらず，多くの教育関係者の皆様が 200 名以上来校された。わざわざ遠方まで駆けつけていただいたにもかかわらず，紀要のみしか渡せず，申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

しかしながら，ご来校されたどの方々も

「来年楽しみにしています。」

と温かい労いのお言葉をくださった。

人を遠ざけてしまう感染症だが，多くの人々の気持ちに寄り添った研究を進めていきたいという気持ちを強くした瞬間であった。

本校職員もご来校いただいた皆様のお気持ちに応えられるように努力してきたが，コロナウィルスに翻弄され続けた１年間であった。しかし，その中で休校期間中に ICT やクラウドを活用したオンライン学習も取り入れたブレンディッド・ラーニングの可能性。令和の時代の新たな学びも考えることができた。そして，新たな教育研究発表会という形を実現させようとしている。ピンチをチャンスにすることができた一年であったように思う。

変化の激しい未来社会を子供たちが主体となって創造していく。このような姿を今後も求めて生きながら，教育の理想を求めていきたい。

そして，これからも新たな時代の新しい教育の在り方を今後も子供たちの姿から明らかにしていく。

（研究部○齋藤　淳　永田裕二　中村　剛　井手　司
藤　康宏　石橋大輔　西島大祐）

＜註＞

[1] 校訓「深固」とは，「努力精進を求めて，基礎や根本をしっかり固めれば，やがて成就する」という意味である。福岡県初代県知事の有栖川宮熾仁親王が，当時本校を視察された際，福岡県の教育の中心として，本校への大きな期待を込めてご真筆のうえ寄贈された。

[2] 詳しくは，福岡教育大学附属福岡小学校（1991）『個が生きる授業の創造』北大路書房. pp. 12-25 を参照されたい.

[3] 詳しくは，福岡教育大学附属福岡小学校（1997）『21 世紀の教科・領域への挑戦―新時代の授業を創る―』明治図書. pp. 8-38 を参照されたい.

[4] 平成 30 年度研究開発フォーラムにおいて，齋藤が学術情報センターにて報告した。詳細は福岡教育大学附属福岡小学校（2019）『平成 30 年度研究開発実施報告書（第４年次）』pp. 91-100 を参照されたい.

[5] カリキュラム・オーバーロードの問題点については，OECD ではかなり前から指摘されており，白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来～エージェンシー，資質・能力とカリキュラム～』. ミネルヴァ書房においても指摘されている.

[6] A 児のこの感想を基にした意見文は，言葉科の学習で新聞に投稿し，読売新聞 2020 年 12 月 22 日 12 面「投書欄『ボランティアってヒーロー』」として掲載されている。

[7] 文部科学省の調査によると 2019 年度に休職した公立小中高・特別支援学校などの教職員が 5478 人，2018 年度に退職した公立学校教員が 817 人とともに過去最多だったとしている，朝日新聞 2020 年 12 月 22 日 17：00 配信「教職員，心の病による休職過去最多　働き方改革が急務に」（伊藤和行，鎌田悠）.

[8] 鈴木（2020）は，OECD では現在，カリキュラム・オーバーロード（過剰）が大事な問題と捉えられており，適切な授業時数と豊かな内容を学ぶためのイノベーションや工夫が求められているとし，リアルな社会現実と教科の学習を横断するカリキュラム・デザインが重要で，カリキュラム・マネジメントの本質としている。鈴木寛（2020）「VUCA の時代に新しい“学びのコンパス”を」『新教育ライブラリープレミアム　“学習する組織”をつくる』ぎょうせい. pp. 11-13.

[9] 教育課程編成の原理において，柴田（2000）は，発達を踏まえ，陶冶と訓育があると述べている。佐藤（2019）は，①「子供中心主義」の系譜，②「社会効率主義」の系譜，③「社会改造主義」の系譜，④「生活適応主義」の系譜の４つとしている。安彦（2019）は，①学問的要請，②社会的要請，③心理的要請に加え，④人間的要請があるとした。さらに，奈須（2019）は教育課程の原理は①文化の継承・発展，②社会現実への対応，③子供の求めとし，現在は教科課程と生活課程の２つから成るとしている。
柴田義松（2000）『教育課程－カリキュラム入門－』有斐閣コンパクト pp. 119-190.
佐藤学（2019）「カリキュラム編成の基本問題」，日本カリキュラム学会『現代カリキュラム研究の動向と展望』. 教育出版株式会社. pp. 18-25.
安彦忠彦（2019）「カリキュラムとは何か」同上. pp. 2-9.
奈須正裕（2019）「教育課程編成の基本原理」奈須正裕・坂野慎二『【新訂版】教育課程編成論』玉川大学出版部.

[10] 石井（2015）は，事実的知識以上に概念的知識への注目を促す工夫が新学習指導要領の方向性にあるが，学びを深める必然性や時間的余裕が生み出しにくい状況があるとし，各教科の本質的な内容（概念，方略，見方・考え方）を中心に，知識の類型を念頭に置きつつ目標・内容を整理することは，深く学ぶべき内容を精選する出発点になるとしている。石井英真（2015）『日本標準ブックレット No. 14 今求められる学力と学びとは－コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影－』. 日本標準. pp. 32-47.

[11] 奈須（2020）『次代を創る知恵とワザ』. ぎょうせい. pp. 216-222 を参照.

令和元年度～４年度　文部科学省研究開発学校指定　延長　第２年次

学習指導要領

総則編

第１章　総説

１　研究開発の経緯と基本方針

(1) 現代社会の要請から

令和２年度（2020），完全実施の学習指導要領（2017）の前文には「豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手」となることが求められるとし，それらを教育課程によって具体化するとしている[1]。この方針は，OECD(2018)が示している「well-being」の考えと相通ずる世界共通の理念である[2]。これは，子供たちに「人間がいかにすべての人類の幸福のために，生きていくのか」といういわば全世界の教育目標といっても過言ではない。このような背景から現行学習指導要領においても，社会に開かれた教育課程として，コンテンツ・ベース（内容重視）からコンピテンシー・ベース（資質・能力重視）へと変革されている[3]。この方向性に本校研究も賛同している。

しかしながら，現行学習指導要領には２つの課題があると考えている。１つは，まだまだ知識の量を重視したコンテンツ・ベースに陥っているという課題である。新教育課程においては，資質･能力が重視されているにも関わらず，教科等そのものや内容の多くが見直されることなく，維持されたままの状態である。これでは，いまだに教科等の固定化した内容に依存していると言わざるを得ない。真のコンピテンシー・ベースを求めるカリキュラムのためには，子供たちが生きる現実の文脈に沿った学びが必要であり，それは教養の縦割りと呼ばれる学問に依拠した現行の教科等の枠では実現されにくい。教科等を横断する学び，もしくは教科等の範囲を超える学びに対応しやすい枠組みで単純化したカリキュラムの構築が必要である[4]。２つは，カリキュラム・オーバーロードである。子供たちの学びや社会の変化に合った新たな教育課程をつくる必要があるが，社会の変化に伴い内容過多（カリキュラム・オーバーロード）の状況は世界的に問題とされている。実際，今回の改訂で内容精選に踏み切れなかった結果，授業時数は膨れ上がってしまっている。そこで，教科を再編し，子供たちの資質･能力の育成に寄与しやすい状況づくりを担保し，現実の生活や社会という子供が生きていく上で，不必要と思わる内容は大胆にスリム化していく。そうすることで，子供と教師の負担を軽減し，教師の自主性を担保する形でカリキュラム･マネジメントの構築を進めることができる。このことは，学校教育の潜在価値を引き上げるとともに新しい学校の姿としての子供の文脈を中心にしたカリキュラムの在り方を提案することになると考えている。

(2) 学制とともに歩んだ本校の歩みから

明治８年に創立した本校は全国に先駆け，子供が主体となる自学教育を目指した岡や立石を始め[5]，時代で求められた個が生きる授業[6]や新時代に求められる人間教育[7]を追究し続けてきた。そして，これまでに３度の文部科学省研究開発指定を受け，我が国の教育課程研究の一役を担ってきた[8]。その中で見いだした「人間存在の原理」を受け継ぎ[9]，教材単元と経験単元との調和を図った教育課程づくりを行い[10]，豊かな人間の育成を目指してきた[11]。

このような背景から，平成 27 年～30 年度には，３度目の研究開発指定を受け，４年間の研究を行った。そこでは，「未来社会を創造する主体を育成する教育課程の編成」と題し，創造性，協働性，向上性の３つの資質・能力を育成する７教科と「たんれん」「チャレンジ」からなる教育課程編成を行った。ここから成果を３点，課題を３点見いだすことができた[12]。

(3) ３度目の研究開発の成果と課題（2015～2018 年）

ア　実施の成果

○　全国学力･学習状況調査結果から，内容をスリム化した上でも研究開発指定前後の国語･算数Ａ･Ｂ双方の維持･向上が図られ，児童質問紙調査においても地域や社会への関心や貢献が高まった[13]。

○　本校の質問紙調査からは，「振り返り」や「成功や失敗について考える」などのメタ認知に関わる数値の向上が見られた。

○　子供の主体性を大切にし，内容のスリム化と時数の削減（477 時間）した本校の教育課程に対して保護者の満足度が高まるとともに，教職員の充実度も高まった。

イ　実施上の問題点と今後の課題

●　子供の文脈を中心にした内容精選の措置は分かるが，その理念が何か分かりにくいものであった。

●　本校の教科で行われる学びが年間指導計画のどこに位置付くか具体的な姿が見えにくい点があった。

●　教科を基盤にした研究でなかったため，現行教科との内容（コンテンツ）の対応関係や時数削減がどう行われるか明らかになっていなかった。

以上のことから，次のように研究を進めていきたい。

2　研究開発の要点

(1) 研究の目的

未来社会を創造する主体を育成するカリキュラムの構築のために，子供の文脈から編成した人間，社会，言葉，数学，科学，芸術，健康の７教科にテーマ，リレーション，フォーカスの３つの学びを究明すること

(2) 目指す子供像

＜目指す子供像＞

自己の学びを多角的に見つめたり，仲間や他者と協働的に実践したりすることを通して，自らの意思で社会を切り拓き，新たな価値を創り出そうとする未来社会を創造する主体

(3) 研究仮説

以下のように子供の文脈を中心とした７教科における３つの学びによって「省察性」「協働性」「創造性」の３つの資質・能力を発揮させることができるであろう。

○　カリキュラム・デザイン
○　マネジメント・ループ
○　マネジメント・システム

(4) 子供の文脈を中心としたカリキュラム・デザイン

ア　７教科の教育課程の編成原理

子供からみた学びの価値「子供の文脈」から，人間，社会，言葉，数学，科学，芸術，健康の７教科を創設する。

イ　７教科の３つの理念

「①統合化[14]」「②複合化[15]」「③焦点化」の３つの理念から，①概念と概念のつながりから内容を構造化すること[16]，②内容の関連を図り，それらを合わせること，③必要な知識を絞ることから内容の措置を検討し，子供たちにふさわしい教育内容を選び出すことである。その際に，新学習指導要領の内容対照を示すことで，新教育課程にある重なりや削減できる内容をあぶり出し，具体的な内容精選を示し，これを年間指導計画だけでなく，学習の姿まで具体化する。

ウ　３つの学び

３つの学びとはテーマ学習，リレーション学習，フォーカス学習である。テーマ学習とは，①の再構築された内容を「人間科」を中心に他教科と総合的・横断的に学びが展開されることである。リレーション学習とは，複数の教科で内容を合科的・関連的につなげる学習を展開することである。教科で重視する資質・能力の顕在化を図るフォーカス学習によって内容を焦点化する。この３つの学びによって新教育課程標準時数比，約 700 時間の削減を行う。

エ　学びの選択

各教科の学習で，子供たちの多様性を尊重し，一人一人の特性に合った学び方や課題を選んだりすることができるようにする。さらに，毎朝のモジュール「たんれん」，個の創造性を十分に発揮させる「チャレンジ」を設定する。

オ　自己内省の充実

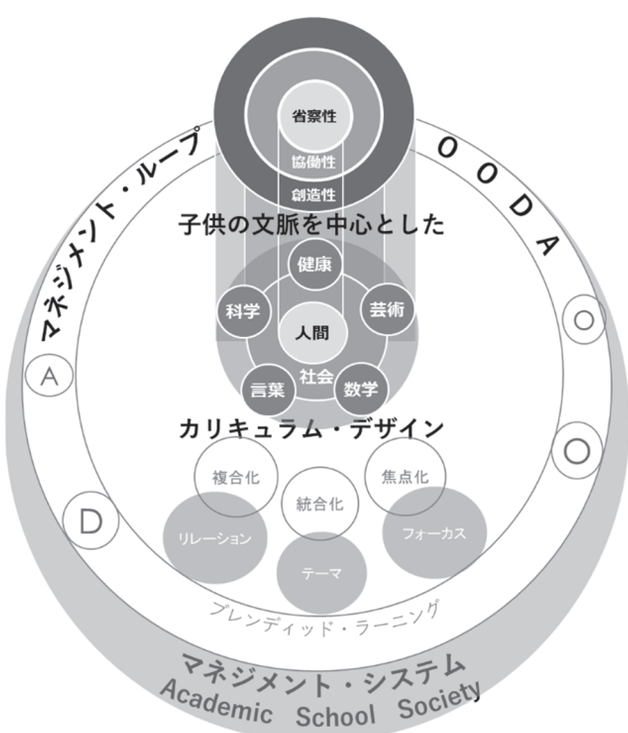
各教科の核となる「人間科」で，各教科のこれまでの学びのフィードバックと今後のフィードフォワードを行い，特に省察性を発揮させる。さらに各教科における西岡（2008）が示すパフォーマンス評価を重視し[17]，パフォーマンス課題に向けた学びのプロセスを見取り，自己調整的な学びが展開されるようにする。

(5) マネジメント・ループ

OODA ループを基にカリキュラムを円滑にブラッシュアップし，動かすベースとして，決められた時程の中での効率化と時数削減によってマネジメントを進める時間を生み出す。日常的なカリキュラムの改善を年間，数ヶ月，１単元レベルで実施していく。

(6) マネジメント・システム

学級担任・教科担任制を取りつつ，研究部が中心となったチームの連動によって，教科による系統性と学年による関連性を相互に発揮させ，カリキュラムの縦糸と横糸が有機的につながるようにする。カリキュラム全体を包括する視点で運営指導委員会や，教科の専門性を担保する共同研究者，具体的な授業実践に関わる授業協力者が一体となったマネジメント・システムを構築する。



【図１　研究概念図】

第２章　教育課程の基準

○第１節　本校教育課程の意義

本校教育課程は，学校教育目標「未来社会を創造する主体の育成」を達成するために，教育の内容を児童の心身の発達に応じ，授業時数との関連において総合的に組織した各学校の教育計画であると言うことができ，その際，学校の教育目標の設定，指導内容の組織及び授業時数の配当が教育課程の編成の基本的な要素になってくる。

そこで，まず，目指す子供の姿を「自己の学びを多角的に見つめたり，仲間や他者と協働的に実践したりすることを通して，自らの意思で社会を切り拓き，新たな価値を創り出そうとする子供」と規定した。その上で，このような子供は，「省察性」「協働性」「創造性」の３つの資質・能力をもっていると考えており，そのような子供を育成する教育課程について考えるものである。

○第２節　教育課程に関する法制

１　教育課程とその基準

本校の教育課程は学校教育法に基づいて，文部科学大臣による学校教育法施行規則第 55 条の規定により，本校の教育課程は，人間，社会，言葉，数学，科学，芸術，健康によって編成することを定めている。

第３章　教育課程の編成及び実施

○第１節　小学校教育の基本と教育課程の役割

１　教育課程編成の原則

教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い，児童の人間として調和のとれた育成を目指し，児童の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮して，適切な教育課程を編成するものとし，これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

(1) 教育課程編成の主体

省察性，協働性，創造性の３つの資質・能力が十分に発揮される状況づくりのある学びの中で，子供の文脈を中心とした教育課程編成を行う。その際に本校の外部評価委員である運営指導委員会や福岡教育大学と本校教職員 OB を中心とした共同研究会の適切な指導・助言の下，管理職及び研究部が主導しつつも一人一人の教師が子供と共に主体となって行う。

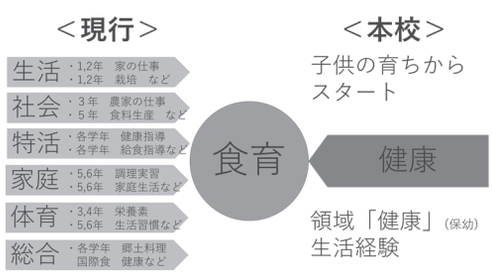
(2) カリキュラム編成の原理

文化の継承・発展や社会現実への対応を第一義とするのでなく，子供から見た学びの価値を中心にした教科を編成していくということをカリキュラム編成の原理とする。

このような原理に行き着いたのは次のようなことからである。その背景を紐解いてみると，カリキュラムの編成原理においては，次のような考えが見られる。佐藤（2019）は，①「子供中心主義」の系譜，②「社会効率主義」の系譜，③「社会改造主義」の系譜，④「生活適応主義」の系譜の４つがあるとした[18]。安彦（2019）は，①学問的要請，②社会的要請，③心理的要請に加え，④人間的要請があるとした[19]。さらに，奈須（2019）は教育課程の原理は①文化の継承・発展，②社会現実への対応，③子供の求めとし，現在は教科課程と生活課程の２つから成るとした[20]。本校は三者の考えに共通する「子供中心」「人間的要請」「子供の求め」などの共通事項があることに着目し，子供の文脈を中心に据え，社会現実に子供が挑み，文化の継承・発展に資するカリキュラムを構築したいと考えている。このことは次の３点から内容のスリム化につながると考える[21]。

①教科の論理ではなく子供の論理で内容を見るので重なりが少なくなくなる。

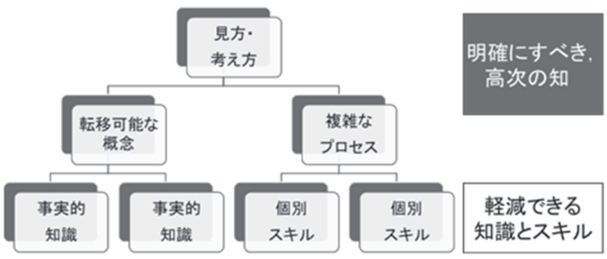
例えば，体育科，特別活動，家庭科のそれぞれに「食」に関する指導がある。「食育」の観点から，体系的に行う動きはあるものの，現行教科等にはそれらの内容が点在し，子供にとって同じ指導が繰り返されている。子供の論理でつくる内容配列ではこの重なりを排除できる。



【図２　子供の論理で内容を見る例】

②資質・能力を顕在化させる構造の理解を重視する。

各教科の概念的理解を重視しつつ，ブルーナーの論にある，構造を理解する[22]ために，有機的な関連や教科横断が引き起こされるようにする。すなわちこのことが，事実的知識と個別スキル軽減につながると考えている。



【図３　「知の構造」石井（2015）を基に齋藤が加筆[23]】

これは石井（2015）が示す本質的な内容を整理させ，深く学ぶべき内容を精選する出発点という指摘と合致する。

> ③子供をゼロとして見ず，子供の中に育っていることを基に学びをスタートする。

例えば，子供の文脈を中心にすることは，子供の詳細な実態に立ち返った単元のゴールと目標設定を行うことである。すなわち，教師の敷くレールではなく，子供がつくる学びの道標によって無意味な一斉指導がなくなる。

以上のような編成原理を基に内容のスリム化につなげる取組を進めていくことは，奈須（2014）の指摘にあるように転移はそう簡単に起こらないという課題を払拭する上で重要であるといえる[24]。それは，教科を単独で行う学習においても概念的理解や複雑なプロセスの適用を基に学習内容の転移が図れるレベルまで学びの次元を高めるからである。これは，石井（2017）の示す網羅する学習から看破する学習への転換を図ったものである[25]。そのためにも見方・考え方[26]こそが教科の本質であり，その本質的な問いに応える永続的理解を捉え直すことが必要になる[27]。そこで，分離独立した 10 数個の教科等の枠組みではなく，単純化した７つの教科へとシンプルにすることで，そもそもの構造を明らかにする。その上で教科それぞれに異なる「見方・考え方」を意識化する。このような理念の下，７教科に再編していく。

以上のことを踏まえ，①教育基本法及び学校教育法その他の法令並びに学習指導要領の示すところに従うこと，②児童の人間として調和のとれた育成を目指し，児童の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮することから教育課程を編成することは言うまでもない。

２　育成を目指す資質・能力

先述した通り，未来社会を創造する主体の資質・能力は次の３つである。

省察性

自分の学び方や在り方を深く内省し，自分のよさや課題を肯定的に受けとめ自己をあるがままに認め，これからの志を明らかにしていく資質・能力

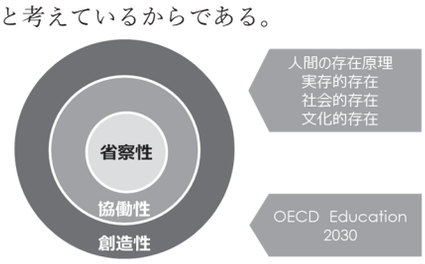
協働性

仲間や他者の考えに耳を傾け，自分と同じように尊重し，それらの人々とともに自分が人や社会，自然のために力を合わせ働きかけようとする資質・能力

創造性

自ら課題を設定し，調査・追究する過程の中で自分の獲得した知をつないだり組み合わせたりしながら新たな知を創造する資質・能力

本校の３つの資質・能力の構造は３つからなり，中核は「省察性」が担い，人間としてよりよく生きていくための大切な部分を担っている。松下（2016）は，「省察性」が様々な資質・能力論のキーとなるとしている 。わたしたちもこの「省察性」を重視したい。それは「省察性」における重要な能力がメタ認知能力であり，このように自己理解力や，目標設定能力などの能力や自己形成する資質が含まれているからである。つまり，省察性は「自己」を対象とした資質・能力といえる。そのためにも重要なのが「協働性」である。人間は他者からの目で自己を理解することができる。すなわち，自己とは他者から映し出された鏡とも言える。「協働性」は「省察性」と影響し合っている。この「協働性」は仲間や多様な他者と関わり力を合わせることができる人間関係形成力や傾聴力，他者理解力などの能力や共感性などの資質を含みこんでいる。これらの２つの資質・能力は特に近年注目されている非認知能力であり，安彦（2014）が指摘しているように人格形成の核となるうえで重要である 。「創造性」とは，このような「省察性」と「協働性」とともに発揮されるものであり，自分の知識及び技能を使いこなし，課題を設定したり，解決したりすることで新たな知を創造するものである。本校においては質の高い知識及び技能と思考力・判断力・表現力等は類別しない。それらは共に働くからこそ価値があり，個別に存在しないと考えているからである。



【図４　３つの資質・能力とその背景】

わたしたちがこのような３つの資質・能力を規定するに至った背景は大きく２つである。１つは本校研究で求めてきた人間像の大本にある，人間存在の原理である。ここから子供は，「自分はそもそもどう生きていくのか（実存的存在）」「他者や社会とどのように関わって生きていくのか（社会的存在）」「対象世界にいかに関わっていくべきか（文化的存在）」の３つの区分で生きる存在であると規定できる。ここから，省察性が実存的存在と，協働性が社会的存在と，創造性が文化的存在とそれぞれ深くつながっているといえる。もう１つは，OECD EDUCATION 2030 の「未来を変革し，未来を創り上げていくためのコンピテンシー」の３つの力との関わりである。創造性が「新たな価

値を創造する力」，協働性が「対立やジレンマを克服する力」省察性が「責任ある行動を取る力」とつながりがあると考えている[28]。

3　カリキュラム・マネジメントの充実

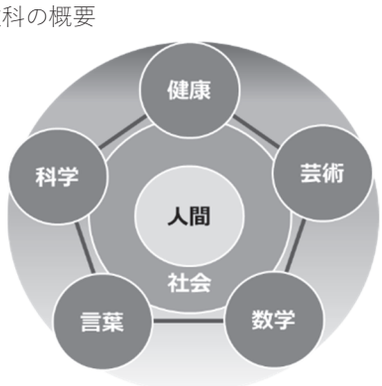
このような３つの資質・能力を育成する資質・能力ベースのカリキュラムのためには，真正の学び[29]が引き起こされる子供の文脈が中心となる。これを実現することができるのは現に子供に対峙している教師である。すなわち，田中（2005）の指摘にあるように[30]教師は目の前にいる子供たちに合ったカリキュラムをつくることが重要である。これはカリキュラム・マネジメントの３つの側面（カリキュラム・デザイン，PDCA サイクル，内外リソースの活用）のうち，田村（2019）が示す「目の前の子供に合ったカリキュラム・デザインを教師一人一人が実践できること」といえる[31]。そのためにも現行の複雑化した教科等そのものを見直し，子供の文脈を中心とした教科再編を考えていく。その中で，これから生きていく子供たちが資質・能力を育成するために本当に必要な内容をシンプルに厳選する。

(1) 子供の文脈を中心とした７教科とは

子供が見る世界に合わせ，自己への学びである人間，他者への学びである社会，対象世界への学びである言葉，数学，科学，芸術，健康の７教科のことである。

すなわち，子供が生きていく上での普遍的な対象を基に教科を単純化する。本校のこれまでの研究においても，子供は，「自分はそもそもどう生きていくのか（実存的存在）」，「他者や社会とどのように関わって生きていくのか（社会的存在）」，「対象世界にいかに関わっていくべきか（文化的存在）」という３つの区分をもって生きていく存在であることが明らかになっている[32]。そこで，この区分に合わせ，現行教科等の要素も踏まえ，人間科を核とした７教科を構成していく。その上で，内容をより子供の文脈に沿った形で精選していく。このことは石井（2015）の「社会の荒波の中で消費されつくさないための人間性の核，いわば「人間らしさを守るための鎧」を形成していく」[33]ことに矛盾しない。

(2) ７教科の概要



【図５　７教科の構造】

この７教科の特徴は，次の表の通りである。

【表１　各教科の特徴】

教科	特　　徴
人間	人格の完成に直接向かう，全教科の核となる教科である。本教科は，生きる意味や価値を見つめ直すことを通して，自分や他者，生命や世界との関わりにある道徳的な問題を解決する過程の中で今の自分を受け入れ，ありたい自分をつくり，自己形成を図る主体を育成することを目指す。特にありのままの自分の特徴や生きていく上で大切な価値を理解し，あるべき自分やありたい自分をつくろうとする省察性の育成を重視する。
社会	子供と生活や社会を基に各教科を関連させる役割を担う教科である。本教科は，日常や社会の生活における問題を見いだし，解決に向けて参画する活動を通して，日本を土台に世界に貢献する主体としての自覚や責任を培うことを目指す。特に日常や社会の生活における自己の役割や義務に気付き，日本に住む人間としての深い知見や良識をもって行動する協働性の育成を重視する。
言葉	過去と未来，自分と世界の人と人がつながるために必要な言語という文化的側面を学ぶ教科である。本教科は言葉に関する課題を捉え，その解決を図る，日常生活の言語活動を通して，言葉の豊かな使い手を養うことを目指す。特に，言葉に関する課題について筋道を立てて表現し，他者と協働し合いながら，新たな自分の考えを創り出す創造性の育成を重視する。
数学	人類が築き上げた数，量，形という文化的側面を学ぶ教科である。本教科では，数や形に親しみ事象を数理的に捉え，問題を他者とともに解決する活動を通して，自ら問いを見いだし，数学的な概念や原理・法則を見いだしたり，それらを活用したりする力を身に付けることを目指す。特に，事象から数や形，量についての問題を見いだし，論理的思考を通して，新たな考えや価値を見いだす創造性の育成を重視する。
科学	自然事象との出合いから生まれた問題を，仮説に沿って，粘り強く観察，実験し，科学的に解決する資質・能力を育むことを目指す。特に自然事象を生命の連続性，地球（地層や天体）の時間的・空間的視点，粒子の質的変化，エネルギーの量的変化で捉えて問題解決することで科学的に妥当な考えを創る創造性の育成を重視する。
芸術	表現欲求や感動体験を通して，人間が生み出した芸術という美を学ぶ教科である。本教科では，美を追究するために感性を働かせ，材や作品から美を感じ，思いや意図を明確にしながら表現する活動を通して，美的情操を培い美と豊かに関わることを目指す。特に感性と知性を一体化させ感受・知覚を往還させ，知識やスキルを習得・活用して新たな表現をつくる創造性の育成を重視する。
健康	子供が生涯にわたって心身の健康を保持増進するための基盤をつくる上で重要な教科である。本教科では，身体や食，運動に関わる課題解決に向けた体験的な活動を通して，自分と健康に関わる内容との関り方を見いだしていくことを目指す。特に，知識や技能を用いて課題解決に取り組み課題を解決することで新たな知識や技能を発見したり身に付けたりする創造性の育成を重視する。

これらの７教科は先述した通り，内容精選を３つの方法で図ることができると考える。

(4) 内容精選の３つの方法

３つの方法とは，知の統合化，概念の複合化，知識の焦点化の３つのから，子供たちにふさわしい教育内容を選び出すことである。

○　統合化

統合化とは，教科はそれぞれが分離独立するのではなく，そこで学ぶべき人間としての主概念とつながるものを教科の特質によって異なるそれぞれの概念をつなげるという考え方である。コア・カリキュラムや ＩＢ（国際バカロレア教育）の考え方も参考にしつつ，このような知の統合化に基づく内容を年間に２，３回実施し，豊かな学びを保障しつつ，内容精選するようにしていきたい。

○　複合化

複合化とは，同じ対象に対して，教科によって見方を変えつつも関連させるという考え方である。例えば，学芸会などの身体的と音楽的，空間的な表現などは同じ対象に向かって行われるが，適切に子供たち自身がそれぞれの見方で自覚化させることによって，いわゆる使えるレベルの知識へと成長させられる。こうすることで，知識が分離独立したものではなく，子供の中の生きた経験として蓄積されるとともに内容精選が図られると考える。

○　焦点化

焦点化とは，文脈的アプローチを重視しつつ，教師の「教える」という側面も大切にしつつ教科の本質を明らかにした考え方である 。ここには，特にその学習で必要となる見方・考え方を明らかにしていくとともに，短いスパンでの課題解決を図る部分を抽出していくことも重要である。また，これらの知識及び技能は子供たちの中で抜け落ちやすいということを踏まえ，「たんれん」と関連させながら，内容の獲得を目指す。

(5) 内容精選の理念を基に，次の３つの措置を検討する。

ア　知識やスキルを焦点化させ，内容に絞る

すなわち，焦点化である。いつの時代も必要となるべき不変の内容とこれからの子供たちが生きる時代に合った学ぶべき内容の総体となる概念や方略を獲得させるための内容を明らかにした上で，知識やスキルを焦点化する。

イ　概念や方略の複合化を図り，内容を合わせる

すなわち，複合化である。内容の関連性が高いものを他教科と関連させることで，それぞれに複数ある類似した内容を１つに合わせることができるようにする。

ウ　統合化によって，内容を構造的にする

すなわち，統合化である。中心となるのが「人間科」であり，他教科で学んだ概念との一体化を図る。またそれぞれの教科の特質に応じた「見方・考え方」がどのように発揮されたのか明らかにすることで，教科の構造の理解にもつなげていく。

○第２節　教育課程の編成

１　教育目標と教育課程の編成

教育課程の編成にあたっては学校教育全体や各教科における学びを通して育成する資質･能力を踏まえつつ，「未来社会を創造する主体の育成」という教育目標を明確にするとともに，教育課程編成についての基本的な方針が家庭や市民社会とも共有されるよう努めるものである。

２　資質・能力と教科

先に述べた通り，省察性，協働性，創造性の３つの資質・能力が十分に発揮される状況づくりのある学びの中で，子供の文脈を中心とした教育課程編成を進める。具体的には省察性が人間の学習と，協働性が社会の学習と，創造性が言葉，数学，科学，芸術，健康と強く関わっている。しかしながら，それぞれの資質・能力はどの教科にも作用するものであり，教科によって資質・能力を偏って育成するものではないことに留意する必要がある。

また，資質・能力は教科の枠組みを踏まえたもの，学習の基盤として活用される力，今後の社会の在り方に関するものに分けられるが，本校では，次のように考えている。

【表１　教科横断の視点に立った資質・能力との関係】

資質・能力	分　類	例
省察性	現代諸課題	・目標に向かって挑戦する力
協働性	現代諸課題	・グローバル化の中での多様性の尊重 ・現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史への理解 ・伝統や文化の尊重 ・多様な他者との協働
		・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
創造性	教科枠組み	・見方・考え方
	学習の基盤	・言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力
	現代諸課題	・健康・安全・食に関する力 ・主権者として求められる力 ・新たな価値を生み出す豊かな創造性 ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力 ・豊かなスポーツライフを実現する力

３　教育課程編成における共通事項

(1) 内容の取扱い

ア　各教科の内容に関する事項は得に示す場合を除き，取り扱わなければならない。

イ　特に必要がある場合は内容を加えて指導したり，一部削減したりすることができるただしそれぞれ

の教科の本質（見方・考え方）から逸脱することや児童の負担過重になったりすることのないようにしなければならない。

ウ　各教科の内容に掲げる事項の順序は特に示すが場合を除き，学習の順序を示すものではないので，その取扱いについて適切な工夫を加えるものとする。

エ　２学年にわたって示しているものは２年間を見通して計画的に指導することとし，特に示すが愛をのぞきいずれかの学年に分けて学習を行う。

オ　２つの学年の児童で編制する学級においては特に必要がある場合は各教科の内容について学年別の順序によらないことができる。

カ　人間科を中核に設定し，全教育活動を通じて行うようにする。

(2) 授業時数などの取扱い

【表２　福岡教育大学附属福岡小学校　教育課程表（令和２年度）】

	各教科の授業時数									道徳	外国語(科)活動	総合的な学習	特別活動	新教科							チャレンジ	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					人間	社会	言葉	数学	科学	芸術	健康		
第１学年	0 (-306)	- -	0 (-136)	- -	0 (-102)	0 (-68)	0 (-68)	- -	0 (-106)	0 (-34)	- -	- -	0 (-34)	68 (+68)	68 (+68)	204 (+204)	170 (+170)	68 (+68)	102 (+102)	102 (+102)	- -	782 (-68)
第２学年	0 (-315)	- -	0 (-175)	- -	0 (-105)	0 (-70)	0 (-70)	- -	0 (-105)	0 (-35)	- -	- -	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	210 (+210)	175 (+175)	70 (+70)	105 (+105)	105 (+105)	- -	805 (-105)
第３学年	0 (-245)	0 (-70)	0 (-175)	0 (-90)	- -	0 (-60)	0 (-60)	- -	0 (-105)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	210 (+210)	158 (+158)	87 (+87)	105 (+105)	105 (+105)	- -	805 (-140)
第４学年	0 (-245)	0 (-90)	0 (-175)	0 (-105)	- -	0 (-60)	0 (-60)	- -	0 (-105)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	193 (+193)	158 (+158)	87 (+87)	87 (+87)	105 (+105)	70 (+70)	875 (-140)
第５学年	0 (-175)	0 (-100)	0 (-175)	0 (-105)	- -	0 (-50)	0 (-50)	0 (-60)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	193 (+193)	158 (+158)	87 (+87)	87 (+87)	105 (+105)	70 (+70)	875 (-140)
第６学年	0 (-175)	0 (-105)	0 (-175)	0 (-105)	- -	0 (-50)	0 (-50)	0 (-55)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	105 (+105)	193 (+193)	158 (+138)	87 (+87)	87 (+87)	105 (+105)	70 (+70)	910 (-105)
計	0 (-1461)	0 (-365)	0 (-1011)	0 (-405)	0 (-207)	0 (-358)	0 (-358)	0 (-115)	0 (-597)	0 (-209)	0 (-70)	0 (-280)	0 (-209)	453 (+453)	523 (+523)	1203 (+1203)	977 (+977)	486 (+486)	573 (+573)	627 (+627)	210 (+210)	5052 (-733)

備考

①この表の授業時数の１単位時間は，45 分とする。

②人間科の授業時数は，小学校学習指導要領で定める人間科（学校給食に係るものを除く。）に充てるものとする。

③第 50 条第２項の場合において，人間科に宗教を加えるときは，宗教の授業時数をもってこの表の人間科の授業時数の一部に代えることができる。

ア　各教科の授業は年間 35 週（第１学年については 34 週）以上にわたって行うように計画し，週当たりの授業時数が児童の負担過重にならないようにする。ただし，各教科や学習活動に応じ効果的な場合には，夏季，冬季，学年末等の休業日の期間に授業日を特定の期間に行うことができる。

イ　人間科の授業のうち，児童会活動，チャレンジ及び学校行事については，それらの内容に応じ，年間，学期ごと，月ごとなどに適切な授業時数を充てる。

(ｱ) 各教科等のそれぞれの授業の１単位時間は，各学校において，各教科の年間授業時数を確保しつつ，児童の発達の段階及び各教科や学習活動の特質を考慮して適切に定める。

(ｲ) 各教科等の特質に応じ，10 分から 15 分程度の短い時間を活用して特定の教科の指導を行う場合において，教師が，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した中で，その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは，その時間を当該教科等の年間授業時数に含めることができる。

(ｳ) 給食，休憩などの時間については，各学校において工夫を加え，適切に定めること。

(ｴ) 各学校において，児童や学校，地域の実態，各教科等や学習活動の特質等に応じて，創意工夫を生かした時間割を弾力的に編成できること。

(3) 指導計画作成にあたっての配慮事項

次の事項に配慮しながら，全体として調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。

ア　探究の学び

未来社会を創造する主体を育成するのに必要な学びを

「探究の学び」である。ここでいう「探究」とは，人間の本質的な生き方や時代が変わろうとも変わらない価値や真理を求めていくことである。すなわち，学習者自身が学習したことによって得た知を発展させ，自分の人生や生き方にとって価値のあるものを求めていくことが重要である。「探究の学び」とは，学習者自身の生活や社会のつながりや関わりといった文脈を重視した学びの中で，知を概念化し，自分の学習と生活の関わりの価値に気付いたり，生き方に生かそうとしたりすることである。

4　学校段階等間の接続

(1) 幼児期教育との接続

幼児期教育との接続として，幼稚園教育課程から考える際には子供たちの今までの育ちという視点が重要である。幼児期は，幼稚園教育要領に基づき，教育課程が編成され，環境，言語，人間関係，健康，表現の５領域から教育課程が構成されている。この５領域は幼児の発達段階に沿って，複数の領域が同時に展開されている特徴がある。すなわち，１つの学習の中に複数の領域の内容が合わさっているので，領域は教師の見取りともいえる。このような子供主体の育ちを重んじる教育が我が国の幼稚園教育では早くからおこなわれている。昨今，問題視される小一プロブレムの根本的原因は初等教育課程にあるといわれているように，大切に培われた育ちを学びにつなげる，教育課程のグラデーションをつくることが求められると考えている。そうした視点からも小学校教育の教育課程においては，急な縦割りの教養と言われる枠組みではなく，子供の文脈を中心とした枠組みで行うことが重要であるといえ，より教科横断的に，より合科・関連的に行っていくことが重要ではないかと考えられる。

(2) 中学校及びその後の教育との接続

中学校学習指導要領及び高等学校学習指導要領を踏まえ，中学校教育及びその後の教育との円滑な接続が図られるよう工夫する。

○第３節　教育課程の実施と学習評価

1　探究による看破による３つの学び

探究の３つの学びの必要条件として真正の課題と，自らの学びを自ら評価し方向付ける学習としての評価を大切にした上で検証していく。真正の課題は，「知のまとまり」「たくましい追究」「学校を超える価値」の３つとする[34]。

【表３　課題の条件】

視点	内容
知のまとまり	学びの中で既存の知識と学ぶ内容を構造化して，新たな知を構築できるか
たくましい追究	主体的に追究することができる身近さや重要性が高い自分事の課題となるとともに，仲間や他者との対話や協働が必要か
学校を超える価値	学びそのものが，現代やこれからの社会にとって価値あるもので影響を与えるものか

例えば，第６学年社会科では，知のまとまり「少子高齢化の原因と理由，様々な政策のつくられる仕組みの理解」，たくましい追究「仲間や福岡市役所と共にプランへの粘り強い改善」，学校を超える価値「市に提案し未来社会を生きる一人としての自覚」の３つから真正の課題に向かって解決される学習が展開した。ここでは，予想される未来社会の正と負の両側面から，市民，行政，民間企業，有権者という立場から対立やジレンマを乗り越える協働性が育ったのか，パフォーマンス評価を行った。このように課題と評価をセットにした学習デザインが重要である。

(1) テーマ学習

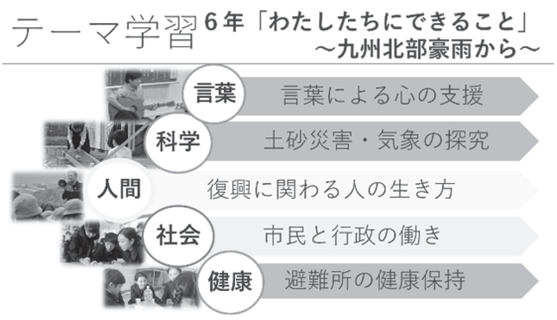
テーマ学習とは，子供たち自身がテーマを設定し，教科横断するようなダイナミックな学習の中で，概念的理解を拡大していく子供の文脈に沿った学びである。この学習では，学習者は具体的な経験サイクルの中で学習し，授業者は学校内外のリソースをより幅広く活用する。

平成 29 年度第６学年「わたしたちにできること」の学習で，九州北部豪雨の被災地を見学し，この災害をどう乗り越え，何を学ぶべきなのか，７つの教科の枠にとらわれない学びを行ったＡ児たちは休みの日に自ら災害ボランティアに参加し，次のような作文を表した。

> ９月に現地に行くとそこには雨によって押し出された土砂や跡形もなくなった田畑，そして家がありました。わたしはこの災害が目の前で起こっている大変な問題であると気付き，わたしたちにできることは何かという問いをもちました。その問いをもとに，仲間と共に雨がなぜこのような強い力で人に襲いかかるのか，その場合どのように行動すべきか，どのように避難所で健康を保って生きていくか調べたり，心を励ます歌もつくったりしました。その中で，授業で関わったボランティア団体の方にお願いして，11 月末の休日に，まだ土砂に埋まっているスモモ畑を救う活動に参加しました。道具も土もとても重たく寒かったのに気付けば，汗をかいて，膝は泥だらけになっていました。一人ですることは無理なのに農家の方々はなかなか助けてとは言えなかったそうです。みんなで数時間かけてやっとスモモの木を数本救い出すことができました。農家の人の「一生このことは忘れられない」という言葉は私も一生忘れられません。人の役に立つ幸せを感じながら，春，赤谷川のスモモの花が咲いてくれることを願って

います。これからも復興支援は続いていくと思います。自分にできることは何か，考え続けていきたいです。（一部抜粋）

九州北部豪雨に対する支援と防災から考える「互助とは何か」という哲学的な問いを中心課題として，そこから派生する科学，健康，言語，政治などの問いをつなげながら，探究した。そのような子供の文脈に沿った学びによって，知の統合化を形成することで，実際に社会に働きかけ，自分の生き方を見つめる学びを展開することができた。このような学習をテーマ学習として大切にしたい。この学習が最も理想的な探究と考えている。



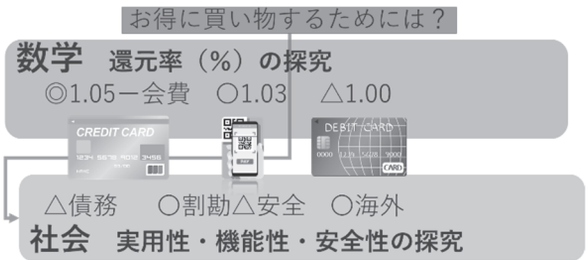
【図６　テーマ学習の例（H29 第６学年９月～11 月）】

(2) リレーション学習

リレーション学習とは，各教科の学習内容が有機的に結びつくことが想定される学習の展開である。ここでは，例えば同じ対象の学習を同時期に展開することで，同じ対象を異なる教科の視点から見つめることができると考える。

低学年期には，「社会」の学習で行われる季節と人のくらしへの気付きと，「科学」の学習で取り上げる，季節による気候や動植物への気付きを基に，「言葉」の学習での季節を表す言葉にしたり，造形遊びに発展したりする学びが想定される。このように学習対象は同じであるが自然と子供の学びが結びつき合って，子供たちの中で無自覚にあらゆる教科の見方で対象との関わりを考えることになる。そこを教科の見方・考え方で学びを自覚化させることが，リレーション学習の役割である。特に幼稚園教育において，教科は時間ではなく，教師の見取りと捉えられており，子供たちは表現や社会の時間と意識して学ぶのではなく，教える側が子供たちを教科の観点から見取ることを大切にしている。このような視点で子供の姿を見ることがリレーション学習として重要である。

例えば，第４学年では，次のような社会科と数学科のリレーション学習が展開された。本単元は「くらしをゆたかにするお金」の学習として数学科で「%」について知り，元の数を 100 で見ることを学んだ子供たちは，クレジットカード，スマホ決済，デビットカードのどれがお得かという還元率の視点で学んだ。その後，社会科では，それらの実用性や機能性だけでなく，安全性について探究する子供の姿が見られた。このようにどちらの学習対象を共有しつつもそれぞれの教科の見方・考え方を生かす姿を目指していくのがリレーション学習である。



【図７　リレーション学習の例（R１第４学年 11 月）】

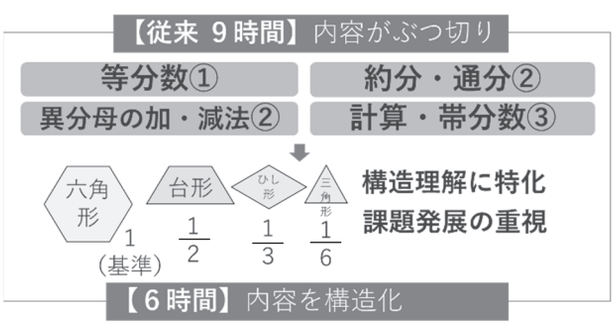
(3) フォーカス学習

フォーカス学習とは，知識内容を精選し，各教科で重視する資質・能力育成に資する質の高い知を求める探究のことである。そのために，次のような手順で学習が進められる必要がある。

「創造性」を育むことを目指す「言葉」「数学」「科学」「芸術」「健康」の５つの教科は人間存在の原理でいう，文化的側面に視点を当てた教科である。それらは，現代に受け継がれた文化の価値を基に，新たな価値をつくる役割を担っていると考えている。また，人間性の核となる「人間科」や他者や社会との関わりをつくる「社会科」においても質の高い知を生み出していくことが重要である。そこで各教科の質の高い知識と質の高いスキルの両面から構造化していく必要がある。教科の学習で見方・考え方を明示化し，個別の知識やスキルを軽減していく。

例えば，数学科の１つの見方・考え方として「揃える」というものがある。分数においても数範囲を限定しつつパターンブロックを使って，異分母や帯分数も含めた四則計算を視覚化しながら探究する学習を行えた。この学習においては，通常時数より３時間軽減することもできた。

以上のように教科の資質・能力に沿った効果的・効果的な学びが展開されるという特徴をもつのがフォーカス学習である。この学習においても探究を求めるが，必要に応じて教師の指導性を発揮することも重要である。



【図８　フォーカス学習の例（R１第５学年 11 月）】

(4) ICT を使った学び

情報活用能力の育成を図るため，各学校において，コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え，これらを適切に活用した学習活動の充実を図る。また，各種の統計資料や新聞，視聴

覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図る。

あわせて，各教科等の特質に応じて，次の学習活動を計画的に実施する。

ア　児童がコンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動

イ　児童がプログラミングを体験しながら，コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動

(5) 自己調整的な学び

以上のような子供主体の学びが展開される上においても，子供たちの学びへの意欲が状況的なものから，文脈的なものを乗り越え，パーソナリティ意欲へと高まっていく必要がある[35]。そこで自己内省を重視する。自己内省とは，自分が立てた目標設定に向けて自分がどこまで高まっているのかということを自分の学びの足跡から俯瞰して観たり，自分自身で辿って観たりすることである。そのために，①人間科の「マイタイム」重視，②各教科での振り返りの日常化が重要である。

ア　人間科の「マイタイム」の重視

学習者が自己内省と省察を行っていくために，自分のよさや課題を基に，自らを方向付ける「省察性」を育む教科が「人間」が重要である。「人間」は教育課程上の要となるとともに，核（コア）の部分を担う。この「人間」の中においても特に重要な役割を果たす内容は「マイタイム」である。ここでは，自分の変化を自ら見取り，「ありのままの自分」を見つめ，深い「自己肯定感」を育む。諸富祥彦氏によると「自己肯定感」とは，善悪を超えた次元で自分を受け入れ，自己の存在そのものの価値を捉えることであるとしている。すなわち，「ありのままの自分」のよい面とともに，伸び悩んでいる面にも目を向けることが，この深まりのためには重要である。そうすることで「自分を成長させたい」「自分を向上させたい」という欲求を生み出させられる。そのために子供たち一人一人が自分の目標や高めたい資質・能力によって自ら振り返ることや目標設定し，自己更新を進めていくことができるようにする。つまり，「マイタイム」は子供たちが各教科の学習や日々の生活から自分自身の成長や学びのプロセスを把握する上において重要な役割を担っているともいえる。

イ　各教科学習での学びの振り返りの日常化

教科学習における学びの振り返りも重要である。子供たちが目標設定した姿と今の自分の姿がどのくらいかということや，今どのくらい自分は歩みを進められているのかを重視していくことが重要である。すなわち，目標を絵に描いたもちにするのではなく，常に短いスパンで振り返る，自己内省を日常化していくことが重要である。そうすることによって子供たちは「省察性」を原動力とした文脈を自分自身の力で描けると考える。

(6) 体験活動

児童が生命の有限性や自然の大切さ，主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう，各教科等の特質に応じた体験活動を重視し，家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫する。

(7) 学校図書館，地域の公共施設の利活用

学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り，探究の学びの実現に生かすとともに，児童の自主的，自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また，地域の図書館や博物館，美術館，劇場，音楽堂等の施設の活用を積極的に図り，資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実する。

2　学習評価の充実

(1)学習としての評価の充実

学習としての評価が位置付いた学びにおいては，まず，「課題の設定」において，対象との出合いを通して，この学習の中心となるパフォーマンス課題を設定し，それに対する自分の目標（評価規準）を決める。ここでの学習のための評価のポイントは，ルーブリックをつくることである。次に「調査・追究」の場面では，自分の活動を毎回振り返り，自分が目指している目標に対してどこまで進んでいるのか考えることができるようにする。ここでの学習のための評価のポイントは学びの道標をつくることである。そして「交流・討論」の場面では自他の見方・考え方を比べ合い，吟味したり，意味付けたり価値付けたりする響き合う話合いの中で，教科内での自分自身の学習の変遷や他教科の学習が自分の学びに息づいていることを感じることができるようにする。「振り返り」においては，今までの学習の振り返りとともに，「人間」の学習で行う，マイタイムノートへの学びの振り返りを重視する。このような学習の中での「振り返り」を重視する。

(2) 学習評価に関する工夫

「探究の学び」が展開される中で，本研究のテーマ学習やリレーション学習，フォーカス学習の特質が顕著に出ているものを開発実証授業として，分析していく。開発実証授業は，年間 20～30 回実施し，子供たちの成長をつぶさに見取っていく。また，開発実証授業では 1 つの授業に複数の人間が関わるようにすることで，検証するルーブリックのモデレーションを実施し，より客観的なものにしていく。さらに，授業整理会では，その授業の是非を分析していく。ここではできるだけ，共同研究者や研究協力者にも授業を公開することで，さまざまな角度から，授業の価値を見いだせるようにしていきたいと考えている。その際に，次のような視点から開発授業の成否を判断していくことが重要であると考えている。

＜資質・能力＞
・３つの資質・能力は発揮されているのか
・ルーブリック（評価基準）は妥当か･･･など
＜内容＞
・その学年・時期でよかったか（適時性）
・内容は妥当だったか（内容性）
・内容に合った活動であったか（活動性）･･･など
＜探究の学び＞
・目指す資質・能力が発揮されたか
・子供が学びの主体になっていたか
・子供にとっての学びの文脈があったか
・真正の課題だったか
・３つの学びの特質が出た学習だったか
・学習としての評価になっているか
・子供自身が自分の高まりを感じているか･･･など

○第４節　児童の発達の支援

１　児童の発達を支える指導の充実

(1) 学級経営，児童の発達の支援

学習や生活の基盤として，教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため，日頃から学級経営の充実を図ること。また，主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと，個々の児童の多様な実態を踏まえ，一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により，児童の発達を支援する。

あわせて，小学校の低学年，中学年，高学年の学年の時期の特長を生かした指導の工夫を行う。

(2) 生徒指導の充実

児童が，自己の存在感を実感しながら，よりよい人間関係を形成し，有意義で充実した学校生活を送る中で，現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう，児童理解を深め，学習指導と関連付けながら，生徒指導の充実を図る。

(3) キャリア教育の充実

児童が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，人間科を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図る。

(4) 個に応じた指導の充実

児童が，基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め，学習内容を確実に身に付けることができるよう，児童や学校の実態に応じ，個別学習やグループ別学習，繰り返し学習，学習内容の習熟の程度に応じた学習，児童の興味・関心等に応じた課題学習，補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや，教師間の協力による指導体制を確保することなど，指導方法や指導体制の工夫改善により，個に応じた指導の充実を図ること。その際，「ICTを使った学び」に示す情報手段や教材・教具の活用を図る。

２　特別な配慮を必要とする児童への配慮

(1) 障害のある児童などへの指導

ア　障害のある児童などについては，特別支援学校等の助言又は援助を活用しつつ，個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。

イ　特別支援学級において実施する特別の教育課程については，次のとおり編成するものとする。

(ｱ) 障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第７章に示す自立活動を取り入れる。

(ｲ)　児童の障害の程度や学級の実態等を考慮の上，各教科の目標や内容を下学年の教科の目標や内容に替えたり，各教科を，知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科等に替えたりするなどして，実態に応じた教育課程を編成する。

ウ　障害のある児童に対して，通級による指導を行い，特別の教育課程を編成する場合には，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第７章に示す自立活動の内容を参考とし，具体的な目標や内容を定め，指導を行うものとする。その際，効果的な指導が行われるよう，各教科等と通級による指導との関連を図るなど，教師間の連携に努めるものとする。

エ　障害のある児童などについては，家庭，地域及び医療や福祉，保健，労働等の業務を行う関係機関との連携を図り，長期的な視点で児童への教育的支援を行うために，個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに，各教科等の指導に当たって，個々の児童の実態を的確に把握し，個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。特に，特別支援学級に在籍する児童や通級による指導を受ける児童については個々の児童の実態を的確に把握し，個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し，効果的に活用するものとする。

(2) 海外から帰国した児童や外国人児童の指導

ア　海外から帰国した児童などについては，学校生活への適応を図るとともに，外国における生活経験を生かすなどの適切な指導を行うものとする。

イ　日本語の習得に困難のある児童については，個々の児童の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。特に，通級による日本語指導については，教師間の連携に努め，

指導についての計画を個別に作成することなどにより，効果的な指導に努めるものとする。

(3) 不登校児童への配慮

ア　不登校児童については，保護者や関係機関と連携を図り，心理や福祉の専門家の助言又は援助を得ながら，社会的自立を目指す観点から，個々の児童の実態に応じた情報の提供その他の必要な支援を行うものとする。

イ　相当の期間小学校を欠席し引き続き欠席すると認められる児童を対象として，文部科学大臣が認める特別の教育課程を編成する場合には，児童の実態に配慮した教育課程を編成するとともに，個別学習やグループ別学習など指導方法や指導体制の工夫改善に努めるものとする。また，オンライン学習を行うことで，学校に来ることができなくても対応することができる環境づくりを構築することができるようにする。

○第５節　学校運営上の留意事項

１　教育課程の改善と学校評価等

教育課程を計画・実施・評価・改善するために，次のようなマネジメント・ループを基に進められるようにする。

(1) OODA ループで織りなすマネジメント・ループ

ア　年間の概要

４～５月　実態把握，現状分析，準備
６月　全体構想・学習指導要領作成
７月　提案授業，運営指導委員会①
８月　年間指導計画，単元計画，共同研究会①
９～11 月　開発実証授業，共同研究会②
12～２月　研究のまとめ，発信（教育研究発表会）
３月　研究の総括，次年度の方向性

大まかに以上のようなスケジュールで展開していく。ここで重要になるのが，子供の姿で研究の成果を発信していくということである。そのためにも日々の授業での子供の学びに注視した形で学習設計を進めていく。

イ　O 観察重視　４～６月

まずは実態把握が重要である。多感な子供たちである。４月で学級編制が行われたところから，良くも悪くも子供たちは変容する。その状況を細かく見取ることができなければ，研究は進められない。本校では後ほど紹介するが，学級担任・教科担任併用制の利点を生かし，複数の教師が学級に関わり，多面的・多角的に子供の様子や教師との関係を観察する。そうすることで，子供たちに必要な課題や興味・関心の傾向を見取る。これらは主に４，５月に行われるが，９月や１月など学期当初にも適宜に行われる。また，ここでは本校オリジナルの研究開発アンケートや，学級力アンケート[36]や生活アンケートなども実施され，子供たちの状況を分析的に把握するだけでなく，複数の教師が客観的に子供たちの姿を見て，それを目指す子供像へつなげるようにしている。ここでの目指す子供像を具体化したものが学級訓であり，これは「創造性」「協働性」「省察性」の３つから成っている。これを毎朝子供たちと共に唱えたり，下校前に振り返ったりすることで，意識化を図っている。「未来社会を創造する主体」を学級で具体化した学級の志は学年，学校の志にもつながっている。この学校全体の志を話し合う場が「志の会」である。このように資質・能力を学級訓や学校のスローガンにつなげることが重要である。

【写真１　「志の会」の様子】

ウ　O 仮説設定重視　７～９月

全体の方向性は研究部が話し合い，管理職の指導の下，全体での方向付けを行っていく。その上で，**資質・能力と内容を次のように規定する。**

資質・能力は次の３つの PROCESS で進めていく。

PROCESS 1

①　教科部長が資質・能力表と内容表をつくる。
②　教科部会を開き，系統性について話し合う。
③　資質・能力表と内容表を修正する。

PROCESS 2

①　学習指導要領試案（以下：試案）に着手する。
②　チームで，試案を教科間で見合う。
③　教科部会を開き，役割分担を決める。
④　各教科で学習指導要領を作成する。

この際に，先述したように内容の精選を進め，ゆとりある教育活動の中で，資質・能力が十分に発揮されるようにしていく。そこで，新学習指導要領の内容対照表を作成し，精選を図っていく。子供の文脈を中心とした資質・能力向上を図る，スリムな内容が明示された本校の内容と新学習指導要領の内容対照を示すことで，新教育課程にある重なりやずれを拾い上げ，具体的な内容精選を示すことができるようにする。しかし，ここで留意すべきことは 2006 年のいわゆるＰＩＳＡショックを発端とする「学力低下論争」への十分な応答である。この問題について，梅原や子安は，学力そのものの定義が曖昧であり，それを規定しない内容を注入する指導は失敗する可能性が高いとしている[37]。また，学力が低下したのではなく誤差の範囲で推移しているとした。さらに，学力向上が優位な学校の要因としては，村川ら（2014）の研究報告によると，総合的な学習の時間

などの「探究」を重視した取組にあるという報告も見られる[38]。このようなことから，子供の文脈を重視した上で，探究を大切にした本校の内容と新学習指導要領の内容を比較した上で，全国学力・学習状況調査の結果にも注視していきたい。

PROCESS 3

① 教科部会を開き，試案を読み合う。

② 他教科間で試案を読み合う。

A 人間⇔言葉⇔健康

B 数学⇔科学

C 社会⇔芸術

③ 教科部会で見直す。

④ 学習指導要領を完成させる。

以上のように，学習指導要領試案の完成を目標にして資質・能力と内容の規定を行っていく。

教科年間指導計画作成は次の通りである。

PROCESS 1

① 各学年が削減した時数で素案を作成する。

② 目指す人間像を核としたテーマ学習を構想する。

③ つなげられるリレーション学習を配列する。

④ フォーカス学習を位置付ける。

PROCESS 2

① 各教科で重視する資質・能力と内容区分の視点を年間のバランスが整っているか確かめる。

② 教科部長会でテーマ学習やリレーション学習についての内容の吟味を行う。

PROCESS 3

① 教科部と学年主任会で系統性を確かめる。

② 学年年間指導計画を学年主任が作成し，子供も見えるように掲示する。

③ 子供にも見えるところで1年間，書き加えたり見直したりしながら使う。

以上のように，教科における学びを仮説設定していくことで，年間の見通しをもつことができる。それとともに，資質・能力がバランスよく育っているのかどうか，6ヶ年を通した学びの中で考えることができる。また，教科の特質によっては，資質・能力の偏りなども考えられることから，教科ごとの役割もここから知ることができる。ここでのポイントは，スコープとシークエンスの2つの視点で年間指導計画をつくっていくことである。

エ DA 意思決定・実行重視 10〜12 月

学習としての評価も大切にするが，同時に今後の教育評価については，児童への質問紙調査，保護者への質問紙調査，教師からの評価，外部機関からの評価の4つから進められるようにする。

＜児童評価＞

○ 研究開発アンケート（年間3回6，11，2月）

○ 自由記述アンケート（年間3回6，11，2月）

＜保護者評価＞

○ 自由記述アンケート（年間3回6，11，2月）

○ 懇談会での意見集約（年間4，5回程度）

○ 抽出保護者インタビュー（年間数回）

＜教師評価＞

○ 自由記述アンケート（年間3回6，11，2月）

＜外部機関からの評価＞

○ 運営指導委員会（年間3回）

○ 共同研究会（年間3回）

○ 大学教員からの意見集約（年間5〜10回程度）

○ 附属学校ＯＢからの意見集約（年間5〜10回程度）

○ 学校評議委員会（年間2回）

以上のような教育評価を計画し，今後の研究の充実と発展に寄与することができるようにするとともに，文部科学省，運営指導委員会及び共同研究会の評価を基に4年間の研究評価を行い，次年度への方向性を明らかにしていく。

(2) マネジメント・サイクル

ア 校内組織を編制する

学級担任・教科担任併用制での効果的な指導体制とチームと部での活動を往還し，子供の学びの質を高めていく。

○ 学級担任・教科担当併用制

学級担任が朝や帰りの会，給食指導などを中心で進め，各教科の学習は教科担当が指導する。すなわち，7教科の学習を通常7名以上の教員が1学級に入る体制を敷く。このことが，質の高い学習の提供とともに，教師の専門力量の向上にもつながる。さらに教頭以下の教職員が学習に入る体制を敷くため，教員の持ちコマを20時間程度に抑え，空きコマで教材研究や打合せ，取材などを行えるようにする。こうすることで働き方改革に資するとともに，社会に開かれた教育課程として，学校外のさまざまなリソースへのアプローチも円滑に推進できるようにする。

4-1 月曜日

＜学級＞ ＜教員＞

時	教科	時	教科
1	数学	1	4-1
2	社会	2	6-2
3	芸術	3	空き
4	言葉	4	6-1
5	数学	5	4-1
6		6	空き

第4学年

	1組	2組	3組
人間	担任	担任	担任
社会	教科	教科	教科
言葉	教科	教科	教科
数学	担任	教科	教科
科学	教科	教科	教科
芸術	教科	担任	教科
健康	教科	教科	担任

【図9 学級担任・教科担当併用制の4年生の例】

○ 研究部

全体研究構想を作成し，研究全体のマネジメントを行うとともに，教科部長会や学年主任会の総括を務めるとともに次のプロジェクトチームの長を担う。

・学習指導要領作成チーム
　3つの資質・能力の分析，内容の精選を進める。
・内容精選シート作成チーム

各教科で考えられる内容精選を進める。
・学年年間指導計画作成チーム
各教科の３つの学びを基に年間指導計画をつくる。
・評価作成チーム
質問紙作成・分析，知識・技能テスト，学びの記述，通知簿等の素案を作成し，学年に提供する。

○　教科部長

各プロジェクトチームで出た方向性を基に，その全体的な方向性を共有し，各教科部の意見との摺り合わせを行い，内容の検討を協議していく。

○　学年主任会

各プロジェクトチームで出た方向性を基に，子供の発達段階と実態を考慮して学年での意見の摺り合わせを行い，資質・能力の検討を進めていく。

○　教科部会

主に教科における学習指導要領の作成を行い，その考え方を基に教科年間指導計画，評価計画の作成を進めていく。教科における学びの具体的な姿を提案していく。フォーカス学習の主体となる。

○　学年部会

主に学年年間指導計画と教材開発，教材分析，評価分析等を生かしたテーマやリレーション学習の計画の作成を進めていく。テーマ学習の主体となる。

イ　外部組織と連携する

○　運営指導委員会

本校研究に関わる，上智大学教授　奈須　正裕氏，國學院大學教授（前文部科学省初等中等教育局教育課程課視学官）田村　学氏を筆頭に，福岡教育大学及び福岡教育大学教職大学院，福岡県教育委員会，福岡教育事務所，福岡県教育センターから選出された委員から，本校研究についての指導を受ける。

○　共同研究会

福岡教育大学　教授（准教授）と本校職員ＯＢから組織され，学問的見地と教育実践による裏付けを基に，学びに向かう子供たちの姿について研究協力をいただく。ここでは実効性のある教育課程研究を進めたり，開発授業，評価分析をしたりして進めていく。

○　授業協力者

保護者や同窓会会員，地域の人材バンク（県や市の行政職員，他大学，NPO 法人など）から多数本校にお越しいただいている方々との交流を続け，必要に応じて子供たちが地域に繰り出したり，それらの方を学校にお招きしたりして，まさに真正の学びが行われるようにする。

以上のような研究組織を基に，開発研究を進めることで，学校を超えた社会的な空間の中での実践とアカデミズムによる理論が融合したカリキュラム・マネジメントが可能になる。このことは，図 12 のような学校が社会やアカデミズムと結び付いた構造転換を図っていると捉えられるとともに，本校の開かれたマネジメント・システムは小玉（2017）が示したカリキュラム・イノベーション[39]を具体化したものと言える。

2　家庭医や市民社会との連携及び協働と学校間の連携

教育課程の編成及び実施に当たっては，次の事項に配慮するものとする。

ア　学校がその目的を達成するため，学校や地域の実態等に応じ，教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど，家庭や地域社会との連携及び協働を深めること。また，高齢者や異年齢の子供など，地域における世代を越えた交流の機会を設ける。

イ　他の小学校や，幼稚園，認定こども園，保育所，中学校，高等学校，特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに，障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け，共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにする。

○第６節　人間教育推進上の配慮事項

人間教育を進めるに当たっては，人間教育の特質を踏まえ，前項までに示す事項に加え，次の事項に配慮するものとする。

1　指導体制と全体計画

人間教育の全体計画を作成し，校長の方針の下に，人間教育の推進を主に担当する教師を中心に，全教師が協力して人間教育を展開すること。なお，その全体計画の作成に当たっては，子供の実態を考慮して，学校の人間教育の重点目標を設定するとともに，人間科の指導方針，内容との関連を踏まえた各教科，家庭や市民社会との連携の方法を示す。

2　指導内容の重点化

(1) 各学年通じての配慮

児童の発達の段階や特性等を踏まえ，指導内容の重点化を図ること。その際，各学年を通じて，自立心や自律性，生命を尊重する心や他者を思いやる心を育てることに留意する。

(2) 学年段階での配慮

第１学年及び第２学年においては，挨拶などの基本的な

生活習慣を身に付けること，善悪を判断し，してはならないことをしないこと，社会生活上のきまりを守ること。

第３学年及び第４学年においては，善悪を判断し，正しいと判断したことを行うこと，身近な人々と協力し助け合うこと，集団や社会のきまりを守ること。

第５学年及び第６学年においては，相手の考え方や立場を理解して支え合うこと，法やきまりの意義を理解して進んで守ること，集団生活の充実に努めること，伝統と文化を尊重し，それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重すること。

３　豊かな体験の充実といじめ防止

学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに，集団宿泊活動やボランティア活動，自然体験活動，地域の行事への参加などの豊かな体験を充実すること。また，道徳教育の指導内容が，児童の日常生活に生かされるようにすること。その際，いじめの防止や安全の確保等にも資することとなるよう留意する。

４　家庭や市民社会との連携

学校の人間教育の全体計画や人間教育に関する諸活動などの情報を積極的に公表したり，人間教育を充実したりするために家庭や地域，企業などの人々の積極的な参加や協力を得たりするなど，家庭や市民社会との共通理解を深め，相互の連携を図る。

＜註＞

[1] 文部科学省（2017）『学習指導要領（前文）』[児童が，自分のよさや可能性を認識し，他者を価値のある存在として尊重し 多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることが求められるとした。下線は齋藤以下同様]

[2] OECD（2018）『The future of education and skills education 2030』.pp.3-7.[共通のビジョンとして，すべての学習者が一人の人間として成長し，その可能性を果たし，個人，地域社会，そして地球の幸福の上に築かれた未来の形成を支援するとし，共通の繁栄，持続可能性，すなわち幸福（well-being）を尊重する必要があるとした。子供たちは自律的な責任を負い，他者と協働し，そして持続可能性を目指す必要があるとした。教育に携わる者は子供たちが直面している課題を受け入れ，乗り越えさせるかにかかっているとした。（訳は齋藤）]

[3] 奈須正裕（2015）『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベイスの授業づくり』[R ホワイト（1959）がコンピテンス概念に込めた２つの意味合いとして，相互作用を求めて環境に関わろうとする意欲・態度的側面。相互作用によって形成された，認知的側面，行動的側面，関係的側面があるとした。また，原初的にして一生涯に渡る，精神的なエネルギーと能力に関する包括的で機能的な説明概念とし，力動的でホリスティックなものであるともした。尚，側面や要素に分割・分析することは，この概念の豊かさを減殺するおそれがあるとしている。]

[4] 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領　総則編』[付録６には，教科等を横断する視点として，「伝統や文化に関する教育，主権者に関する教育，消費者に関する教育，法に関する教育，知的財産に関する教育，郷土や地域に関する教育，海洋に関する教育，環境に関する教育，放射線に関する教育，生命の尊重に関する教育，心身の健康の保持増進に関する教育，食に関する教育，防災を含む安全に関する教育」などが挙げられており，そもそも教科の枠組みでは対応しきれていない。]

[5] 岡千賀衛（1909）「自學輔導新教授法　修補第６版」弘道館,[岡の実践によると①予習場面で教師が提示した項目を教科書で調べる作業が自学として位置付けられており，①机間指導で理解が遅い作業や作業で躓いた児童を支援する活動と，③補正・練習場面で予習内容の成否を確認する活動として位置付けられている。

深谷圭助（2011）『近代日本における自学主義教育の研究』三省堂[博士論文でまとめられたもので，大正新教育の自学主義の源流は地方から始まり，岡や立石の福岡師範時代の研究が礎となったと評価している。]

[6] 福岡教育大学附属福岡小学校（1991）『個が生きる授業の創造』北大路書房.pp.12-25[個性重視の社会的な要請を基に子供たちの「自己概念」が形成され拡大されるように実践が積まれている。]

[7] 福岡教育大学附属福岡小学校（1997）『21 世紀の教科・領域への挑戦―新時代の授業を創る―』明治図書.pp.8-38.

[8] 福岡教育大学附属福岡小学校（1988）『感動体験を中核とした「生活科」の授業づくり』明治図書.[昭和 58 年からの４年間で研究開発指定を受け，生活科の前身となる「体験科」を創設し，子供の学びの欲求とは何か，検証した。１年生の児童が西公園でどのような活動をするのか追って観察して，子供のもっている欲求とは何か観察しながら内容を構築した。]

[9] 岸本晴雄・津田雅夫（1993）『現代人間論への視座』法律文化社.pp.15-274「人間存在の原理については本著を基に構成されている。岸本は「文化存在，現実存在，意味存在としての人間」としている。」

福岡教育大学附属福岡小学校（2001）『研究紀要 No.32「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造～調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化～」』p.99.

福岡教育大学附属福岡小学校（2002）『研究紀要 No.33　「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造～教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開～」』p.98.を参照。

[10] 奈須正裕（2001）「新世紀の教育を拓く」奈須正裕・寺尾愼一福岡教育大学附属福岡小学校『調和的に展開する教科・総合的学習　新世紀の学力づくり』明治図書.pp.8-15.

[11] 奈須正裕・福岡教育大学附属福岡小学校（2003）『子どもの真の学力向上をめざして　子供が本気になる授業づくり―各教科・領域等の単元・題材づくりから発問まで―』明治図書.pp.8-16.

[12] 福岡教育大学附属福岡小学校（2019）『平成 30 年度研究開発実施報告書（第４年次）』.pp.91-100[平成 30 年度研究開発自己評価書の実施の効果と課題を基にまとめている。]

[13] 上掲載[全国平均を 100 としたときの全国比を平成 26 年度と 30 年度で比較すると，その差は，国語Ａ＋5.9ｐ，Ｂ＋4.0ｐ，算数Ａ＋19.4ｐ，Ｂ＋22.1ｐであった。質問紙調査の項目は，「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」平成 30 年度（平成 26 年度比）（とても・まあが＋7.5ｐ）「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」平成 30 年度（平成 26 年度比）（とても・まあが＋14.1ｐ）]

[14] Sue Bastian,Julian Kitching,Ric Sims 著一部抜粋／大山智子訳　後藤健夫編（2016）『Theory of Knowledge セオリー・オブ・ナレッジ―世界が認めた「知の理論」―』ピアソン・ジャパン株式会社.pp.18-40.

Wendy Heydorn,Susan Jesudason 著／小澤大心，久保敦，小林万純，仲田毅（2016）『TOK（知の理論）を解読する～教科を超えた知識の探究～』株式会社Ｚ会.P1-50.[国際バカロレアでは知識の枠組みに，異なる知識の領域間のつながりや結び付きを検討し，知識の範囲とキーコンセプト（鍵となる概念）を示している。知識の範囲は各教科の関連概念，キーコンセプトは主概念の定義づけの参考とした。主概念とは，各教科において汎用的な見方・考え方の大本になる知識の総体を表し，特に人間科の「価値」はこれに含まれる。関連概念とは，それに付随する単元

レベルで獲得する知識の構造と考え，これらの総体を主概念と関連概念と捉えている。]

[15] 前掲載書 12 [知識は実践的知識，知覚知，事実的知識として分類している。構造化されたり，一般化されたりしていないレベルの知識を知識として定義したとき，同じ対象に向かっても教科による見方・考え方で異なった知識がつながり合ったり，関わり合ったりすることを知識の関連化とする。]

[16] そもそも概念について，諸外国でのカリキュラム実施上，どのように捉えられているのかを次の 2 カ国から考えてみる。

まずカナダのブリティッシュ・コロンビアのカリキュラム（BC's New Curriculum）においては，

（https://www.translatetheweb.com/?from=en&to=ja&ref=SERP&dl=ja&rr=UC&a=https%3a%2f%2fcurriculum.gov.bc.ca%2f）コアコンピテンシーをすべての児童・生徒が深く生涯学習するために必要な知的能力，個人的・社会的能力，感情的能力の 3 つでとらえている。識字と数字の基礎とし，州独自の K-12 カリキュラムと評価システムを中心として，市民としての成長を直接サポートしている。このカリキュラム中ではいわゆるコンテンツのまとまりとして「概念」をビッグアイデアとして，教科の内容毎に明示している。

オーストラリアのカリキュラム（The Australian Curriculum）では

（https://www.australiancurriculum.edu.au/f-10-curriculum/humanities-and-social-ciences/history/structure/）

８つの学習分野(英語，数学，理科，保健体育，人文・社会科学，芸術，技術，言語)がある。後半の 4 つの学習領域は，複数の科目を含むように示されており，専門分野の習慣と実践を反映している。各学習領域または科目において，コンテンツの説明は児童・生徒が学ぶものを指定し，達成基準は，各年度末などに期待される理解の深さと知識とスキルの高度化を記述する。教科横断優先事項として，「アボリジニとトレス海峡」「アジアとオセアニア」「持続可能性」などが示されている。key ideas and concepts（鍵となるアイデアとコンセプト）として，それぞれの学習における思考に必要となる必要な知識とスキルが示されている。

一方，概念については様々な研究者の立ち位置によって異なるが，田中俊也（2008）「概念獲得と概念変化」田中俊也;平木典子・稲垣佳世子・斉藤こずえ・高橋恵子・氏家達夫・湯川良三（編）『児童心理学の進歩 2008Vol.47』金子書房.によると，田中（2008）は子供の生活世界における概念獲得と概念変化について，学齢期までに獲得した概念，あるいは学齢期以降も諸経験の中で獲得される概念は，多くの場合，生活世界の中では大きな不都合がなくても，学校教育という制度の中に組み込まれていくと，誤った概念としてその修正が要求されることが多く，特に日常生活場面から離れたところでの思考を要求される理科や数学の領域では学ばせたい科学的概念に対する「誤概念」「素朴概念」という形で扱われ，授業を通してそれらを科学的概念に置き換えることが図られる。誤概念は，一般的に受け入れられている科学的概念からみた「誤った」概念であり，素朴概念は生活世界の中で獲得された，生活世界での出来事を説明する際に整合的に用いることができる概念である。稲垣・波多野（2005）の概念獲得と変化が①置き換え，②拡張，　③分化，④統合があるとした考えを受けつつ，概念変化が既存の知識体系の大規模な再構造化であるとした。ここから概念は子供の内的な変化と構築と捉えられると考えられる。本校は概念をこの立場を手がかりとしたい。

[17] 西岡加奈恵（2008）「実践を踏まえて―『逆向き設計』の長期的展望―『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書.pp.120-137.[逆向き設計におけるマクロなカリキュラム設計が必要だとした上で，パフォーマンス課題のシナリオを①真正性，②妥当性，③レリヴァンス，④レディネスの 4 点に配慮するべきであるとした上で，単元設計において，①パーツ組立型，②繰り返し型，③折衷型の 3 つから単元を構造化することができるとした。さらにその中で子供たち自身の自己評価力を伸ばす取組や，長期的ルーブリックの作成が重要であり，マクロの設計とミクロの設計を相互環流させ，単元設計を洗練させる必要があり，モデレーションを行うことで評価の信頼性を確保できるとした。]

[18] 佐藤学「カリキュラム編成の基本問題」，日本カリキュラム学会（2019）『現代カリキュラム研究の動向と展望』.教育出版株式会社.pp.18-25.[カリキュラム編成の様式は①デューイ実験学校を起点とする「子供中心主義」の系譜，②ホビットを出発点とする「社会効率主義」の系譜，③カウンツに代表される「社会改造主義」の系譜，「生活適応主義」の 4 つがあったとした。]

[19] 安彦忠彦（2019）「カリキュラムとは何か」同上.pp.2-9.[カリキュラムには古くからカリキュラムのつくり方，かつては構成と訳され，今は開発といわれているが「顕在的カリキュラム」を指してきたとし，古典的には 3 つの要請を視野に入れないとされてきたとした。それは①教える価値のある学問・芸術等の成果と方法である学問的要請，②現在ないし近未来の社会が求める資質・能力からの社会的要請，③子供のからの興味・関心，個性，性格，発達心理的要請である。それに加え，1970 年代から必要性が認識され強調されたものとして，④人格性，人間性，地球・生命全体に対する責任としての人間的要請があるとしている。]

[20] 奈須正裕「教育課程編成の基本原理」奈須正裕・坂野慎二（2019）『【新訂版】教育課程編成論』玉川大学出版部.

[21]河野麻沙美（2018）「リレー連載　教育のゆくえ　理論・実践・学習指導要領を架橋する」高田教育研究会『教育創造 187 号』.pp.38-44.[河野は資質能力を育成する教育課程の実践化には学習者の学びの姿と理解過程に基づき，指導の内容と方法，在り方を検討していくことが求められるとし，改訂の次はエビデンスの提示，資質能力の育成に有効な内容の精選が課題であるとした。その上で，教科固有の見方・考え方が示されており，「教科の本質」に迫る学びが期待されているとした。その上で日本に伝統として根付く子供中心的教育と昨今の学習者中心の教育の差異を明らかにし，知を創造する主体として協働構築した知への責任，継続的な検討，吟味などを学習者に求めることを示した。]

[22]三神俊信（1983）「ブルーナーの教育論と構造（体）-思考過程の観点から-」明治大学政治経済学部『政經論叢』pp309-366[構造を理解すれば内容を理解しやすい。②構造を理解すれば細かな事実的知識は覚えなくてよい。③構造は一般性を持つ概念なので後に合う事柄を特殊事例として理解することができる。④小中学校で学ぶ初歩的な知識は学問の発展からあまりに遅れているのでギャップをうめられるとした。]

[23] 石井英真（2015）『日本標準ブックレット No.14 今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』.日本標準.pp32-47.[石井（2015）は，事実的知識以上に概念的知識への注目を促す工夫が新学習指導要領の方向性から見出せるとしつつ，実際には毎時間の断片的な内容を対象に教科毎に例示された思考活動を組織化することになりがちで，学びを深める必然性や時間的余裕が生み出しにくい状況があるが，各教科の本質的な内容（概念，方略，見方・考え方）を中心に，知識の類型を念頭に置きつつ学習指導要領の目標・内容を整理することは，深く学ぶべき内容を精選する出発点になるとしている。]

[24]奈須正裕（2014）「コンテンツ・ベイスの教育原理とその限界」奈須正裕，久野弘幸，齊藤一弥　編『シリーズ　新しい学びの潮流 1　知識基盤社会を生き抜く子どもを育てるーコンピテンシー・ベイスの授業づくり』ぎょうせい.pp.54-74.[奈須(2014)は，日本に限らず学校教育は領域固有の知識の習得を最優先の中心課題として，コンテンツ・ベイスで進められてきた。すなわち，「何を知っているのか」を問うことで成果を確認することができた。しかし，全国学力・学習状況調査における A 問題の堅調さと B 問題の不振から子供たちの身に付けている学力が意味の理解や活用の効く範囲に深刻な問題を孕んでいることが明らかとなった。子供を膨大な知識の貯蔵を目的としたストレージとしてみるのではなく，1970 年代から認知心理学が明らかにしたように形式陶冶に陥った教育の転移は起こらないことを認識し，コンピテンシー・ベイスに変革する必要性があることを指摘している。]

[25] 石井英真（2017）「学校改革とカリキュラム変革の歴史と現在」佐藤学，秋田喜代美，清水宏吉，児玉重夫，北村友人編（2017）『岩波講座　教育　変革への展望 5　学びとカリキュラム』岩波書店.[石井（2017）はカリキュラムの構造化をめぐっては.マルザーノらの認知過程の高次化を軸にしたものと，ウィギンズらの理解の深さを軸にしたもの，すなわち「本質的な問い」を問い続け，表面的な知識や教材の裏にある立場性や先達の経験などを「看破する」ことで「永続的理解」に至る探究的な活動としてカリキュラムを構想する立場があるとした。]

[26][26] 白井　俊（2019）によると OECD Education2030 project では，見

方・考え方が Epistemic Knowledge とされ，ディシプリン（学科，学問）に基づいて，例えば，数学者や歴史学者が、特定の問題に対処する際にどのように考えるかという知識とするとしている。

日本教育方法学会『今なぜ「見方・考え方」なのか-教育内容・教科内容の再構築-』第 22 回研究集会報告書において，石井（2019）は一般的な学び方としての「見方・考え方」の捉えはスキル訓練としての教科学習の形骸化や心理主義に陥るのではないかと危惧し，教科の本質を追究するからこそ生き方に響く真の意味での「深い学び」を構想する上での見方・考え方の生かし方を論じている。この中で，教科の見方・考え方を重視する教科する授業について提案している。とその批判を行った渡部の論を対比しつつ，学校で価値ある知識をどう選び，知識や文化や教養の総体をどう描き，カリキュラムの領域としてどう構造化するのかといった点について，原理的な検討を行うことが今後の課題としている。

対して，渡部（2019）は新学習指導要領前の社会科における見方・考え方は森分孝治が論じた概念的・説明的知識であり，内容知の一種と捉えられるとした。一方，新学習指導要領の「見方・考え方」は学問の構造（structure of the discipline）に近い性格をもつとした。しかしながら，このような背景に教育方法学者などを中心としたブルーム，その後継となるマルザーノ，ウィギンズ，マクタイの理解のための学習論があるとし，そこには「普遍性信仰」「健全性信仰」があり，学者に近い行動や思考があれば，自ずと人間目標が達成されると考えていると批判した。その中で「Doing History」に見られるように歴史学者の目でものを見るのではなく，それらの言説を利用して実際に政治家やテクノクラート，ロビーストと対等に語り合える主権者を育てていくことこそが求められるとした。

ここでは両者の考えの対立を踏まえつつ，共通項としてある概念（転移可能な概念）と方略（複雑なプロセス）の上にある，高次の知としての見方・考え方として考えることが妥当ではないかと判断している。

[27] 西岡加名恵（2019）「2017 年版学習指導要領とパフォーマンス評価」西岡加名恵・石井英真（2019）『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価－「見方・考え方」をどう育てるか－』日本標準，p.17[西岡（2019）は「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－」（2014）において教科等の「見方・考え方」は「本質的な問い」に対応する「永続的理解」に該当するものとして位置付けられていたが，学習指導要領においては「見方・考え方」はスキルに傾斜されて定義され直されていることから，「検討会」の到達点に立ち戻り，「本質的な問い」に対応する「永続的理解」を見方・考え方として明確にすることが求められているとしている。]

[28] 文部科学省「初等教育資料（2018.5.NO.967）」東洋館出版社，2018.5，pp.96-105.[（現　独立行政法人大学入試センター　審議官　白井俊氏らが中心となって（前文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室　室長）「OECD Education 2030 プロジェクト」まとめた。同会に石井，奈須もプロジェクトメンバーとして名前を連ねている。]

[29]フレッドMニューマン，渡部 竜也・堀田 諭 訳（2017）『真正の学び学力～質の高い知をめぐる学校再建～』春風社,p.35,[「真正」という用語は一般的に，人工的な／フェイクの／ご誘導するような事柄，ということとは真逆の，リアルな／正真正銘の／本当の何か，ということを指しているとしている。]

[30] 田中耕治（2005）「今なぜ「教育課程」なのか」田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加奈恵著『新しい時代の教育課程』有斐閣アルマ.pp.1-4.[教育課程が今まで以上に問い直されている動向に対しては，従来の「教育課程」の画一化を打破できる「「教育の自由化」であり，地域社会の活性化につながると賛意を表明する意見と，競争原理に基づく市場原理に地域社会や学校教育が蹂躙されるのではないかと危惧を表明する意見とに対立している。いずれにせよ，従来のトップ・ダウン式の「教育課程」の編成ではなく，学校を基礎にしたボトム・アップ式の「教育課程」の自主的編成を行うことが求められ，その編成能力が教師の重要な資質になろうとしているとしているとした。]

[31] 田村学（2019）『深い学びを実現するカリキュラム・マネジメント』文溪堂.pp.9-57.[カリキュラム・マネジメントを考える前提として，ＯＥＣＤ教育・スキル局長アンドレアス・シュライヒャー氏のインタビュー記事を引用し，記憶戦略，自己制御戦略，精緻化戦略の３つが重要であり，日本は精緻化が課題であるとした。その上でカリキュラム・マネジメントの３つの側面の①教育内容の組織的配列が重要であり，カリキュラム・デザインを実現する際の深い学びに直結する知識及び技能の活用・発揮を各教科間等，教育課程全体で考えることを意識すべきであるとした。その３つの階層として，全体計画，単元配列表，単元計画の作成があり，特に単元配列表を学びの地図と捉えることがＰＤＣＡサイクルにもつながるとした。]

[32] 前掲載８[人間存在の原理の３つの区分を基に「人間課程」「生活課程」「文化課程」の３つから，教科と総合的な学習の時間の合科的・関連的なカリキュラム研究を進めてきた。]

[33] 前掲載 24.pp.15-19.[経済界や市民社会の要請を意識しつつも，そうしたライフスタイルに早くから慣らしていくよりも，将来出会う社会の荒波の中で消費されつくさないための人間性の核，いわば「人間らしさを守るための鎧」を形成していく。社会への参加につながる学びと，人間としての個を育てる文化的学びの両面が保障されることで，社会に適応し生き抜くだけでなく，その中で自分らしさを守り，生き方の幅を広げ，社会をよりよく生きていく力が育まれるとした。現代社会で求められるコンピテンシーを育むことは，現場にとって遠い課題でなく，目の前の子供たちの生活背景や彼らの足元の課題を理解し掘り下げることと捉えられるとした。]

[34] 前掲載書 29.p.59.[表 1-4　真正の評価課題として，学問的内容，学問的プロセス，卓越した文章による伝達。真正の指導法として，深い知識，内容のある会話。子供の真正なパフォーマンスとして，学問的概念，卓越した文章による伝達」が挙げられている。本著では「鍛錬された探究」と示されているが，本研究における「探究」との混同を避けるため本研究においては「たくましい追究」とした。真正の課題についての本校の考え方の詳細は，前掲，研究開発報告書に示している。]

[35] 鹿毛雅治（2013）『学習意欲の理論－動機づけの教育心理学－』金子書房.

[36] 田中博之編著（2013）『学級力向上プロジェクト』金子書房を参照。

[37] 子安潤（2006）『反・教育入門［改訂版］－教育課程のアンラーン－』白澤社.pp.72-113.[学力そのものが仮に名付けられたものであり，虚構であるとし，学力低下を論じる①自然科学者・経済学者など，②科学主義的な左巻ら，③統制主義的な河上ら，④学力低下論を批判する加藤ら，⑤学力問題を格差社会という視点から苅谷らの主張を整理し，リテラシーという用語で捉え直す必要があると論じ，当時のマスコミ，世論，研究者などの論調が極めて科学的ではないことを指摘している。]

梅原利夫（2008）『学力と人間らしさを育む』新日本出版社.P28-43.[梅原(2008)は，学力の３要素として，①基礎的・基本的な知識・技能の習得，②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等，③学習意欲とし，習得・活用・探究という三分類法には根拠がなく納得しがたいとしている。活用力を PISA 型学力にすり替えていると言わざるを得ないとしている。しかし，OECD は 21 世紀を知識基盤社会と捉え，競争と技術革新，知識のパラダイム変換を求め，知識そのものや人材を巡る国際競争力を加速する社会としているのであり，学力観がこのようなレベルに留まっているわけにはいかないと警鐘を鳴らしている。]

[38] 村川雅弘，久野弘幸，野口徹，三島晃陽，四ヶ所清隆，加藤智，（2015）「総合的な学習の時間で育まれる学力とカリキュラムⅠ（小学校編）」日本生活科・総合的学習教育学会『せいかつ＆そうごう 22 号』，日本生活科・総合的学習教育学会　学会誌[小学校において，総合的な学習の時間で育まれた学力について、平成 26 年に学会が独自に行った調査結果を分析した。質の高い実践を行っている学校に固有な５つの能力を導き出した。]

[39] 小玉重夫（2017）「民主的市民の育成と教育カリキュラム」前掲載書 31.pp.185-208.[小玉（2017）は，ポスト戦後体制を画するカリキュラムの構造転換をカリキュラム・イノベーションとして位置付け，河野と社会的意義を中心とした学校と社会が結び付き，教師は，アカデミズムのエージェントから市民的批評空間のコーディネーターとなり，探究的市民を育成することが求められているとている。]

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校版）

人間科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

現代社会はグローバル化が急速な進展を続けており，異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような中で，様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや，科学技術の発展や社会・経済の変化の中で，人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となっている。このような課題に対応していくためには，深く内省し，物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度などの道徳性の育成が必要である。

我が国の道徳教育においては，西(1932)によると，儒学（朱子学）の影響を多く受けていると言われる[1]。「論語」はその始祖，孔子の教えをまとめてある。ここでは「夫子の道は，忠恕のみ。己れを尽くす。之を忠という。己れを推す。之を恕という。」とあり，日本の道徳教育の源流を見ることができる。新宮（2008）は「忠恕は自分の偽りのない心を突き究め，その心をもって相手に推すという意味である。」と述べている。自分自身の誠実さ，良心を磨き，その心をもって他者の心を推し量る思いやりの大切さが示されているといえる。

一方，米国では，「市民としての徳目や個人の特性について徐々に教えること」を目的とした，キャラクター・エデュケーションが各地で実施されている。その内容は，①信頼，②尊重，③責任，④公正，⑤配慮，⑥市民性の６つで構成されている。この考え方は，岩佐（2000）によると米国の社会問題に起因しており，心の教育の充実を図る我が国と問題意識が共通している[2]。

このように我が国の道徳教育において大切にしてきた不易の部分と新たな時代の流れ，いわゆる流行に目を向けた，よりよく生きる人間を育成するための教育が望まれていると言える。

そこで，本教科では，３つのことを大切にする。１つは，子供たちが自己の成長への願いや問いをもつことである。２つは，学校内外の仲間や他者と関わり合って共に学ぶことである。３つは，他の教科における学びを構造化して捉えたり，自分とは異なる見方や考え方に触れ，過去・現在・未来の自己を見つめたりすることである。このようにして，自己内省を繰り返すことを中心に据える。そのため，多様な人々との関わりを学習対象とする。そして，その出会いで触れる人の価値や見方，考え方，行い方から生きることに対する問いをもち，自己を見つめ直す。このように，人間科では，子供たちが人間として，「自己の価値観を豊かにし，自己の生き方をつくる主体を育てる」ことを求める。

(2) 現行道徳科，特別活動との関係

以上のように人間科の学習と関わるものに，道徳科と特別活動がある。まず，現行の道徳科では，「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことが目標の中で記されている。また，内容が「Ａ主として自分自身に関すること」，「Ｂ主として人との関わりに関すること」，「Ｃ主として集団や社会との関わりに関すること」，「Ｄ主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること」で構成されている。この内容は，児童にとっての自分自身と関わる対象の広がりに即して整理されている。しかし，それぞれの内容だけが単独に作用するということはほとんどない。梅原（2007）は「前もって定期的に掲げられる道徳性はどうしても作為的になり，子供の日常生活で直面するものとはかけ離れてしまいがちである。」[6]と述べている。このように，子供の生活場面と直結しない道徳性の育成が図られていたという課題もある。すなわち，一教材で，１つの内容項目を指導することの限界である。そこで，体験や経験を基にして，その中にある様々な道徳的価値について関連させながら理解し，自己の生き方を見つめ直すことが必要だといえる。

現行の特別活動では，「様々な集団活動に自主的，実践的に取り組み，互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことが目標に記され，内容が「学級活動」，「児童会活動」，「クラブ活動」，「学校行事」で構成されている。「幼稚園，小学校，中学校，『高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）(2016)」では，特別活動の課題として，各活動の関係性や意義，役割の整理が十分でないことや，課題を自分たちで見いだして解決に向けて話し合う活動が深まっていないこと，社会参画の意識の低さが問題となる中で，自治的能力を育むことがこれまで以上に求められていることが挙げられている。

これらの道徳科と特別活動の課題を踏まえ本校では，それぞれの教科の内容をスリム化する。子供が多様な人々と関わり，自分自身の生き方をつくることを意識して学習を進めることができるようにするために人間科を新設した。

(3) 人間科に関わる本校のこれまでの研究

人間科に関わって，本校では平成６年から 11 年まで領域「人間」が，平成 25 年から 28 年まで領域「生き方」が，平成 29 年から昨年度までは領域「にんげん」が，人間科の学習内容を担っていた。領域「人間」の学習においては，目標を「人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通して，人間性豊かに生きる実践的な態度を育てる」とし，内容を「どのような人とどのように共生していくか」

という実践のあり方から規定した「自分」「仲間」「生命」「福祉」「国際理解・協力」「環境」の６つとして研究を進めてきた。また，領域「生き方」の学習においては，目標を「人と対象との関わりを考え，多様な他者と協働的に実践する活動を通して，生き方への価値認識，他者尊重，自己への見方や考え方，自己実現する力を高め，自己形成する力を養う。」とし，内容を「いのち」「みらい」「くらし」「なかま」の４つとして研究を進めた。領域「にんげん」では，内容を「わたし」「わたしたち」「生きる道」の３つとして研究を進めてきた。人との関わりを通して，自己を見つめ直し，他者とよりよく生きようとする自己の生き方をつくることを大切にしてきた。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

４年間，現行の道徳科と特別活動の内容を含んだ領域「生き方」，「にんげん」「人間科」として取り組んできた結果，成果として次のことが挙げられる。

ア　成果

○　多様な他者の生き方に出合い，自分の今後の生活を見直し，実践することができた。
○　自己の課題の解決方法を自ら吟味しながら追究し，自己を更新していくことができた。
○　他の教科での学びを含めた自分自身の学びについて振り返り，整理する自己内省を繰り返し，よりよい自分をつくろうとすることができた。

しかし，領域「生き方」「にんげん」「人間科」を設定する上においては，以下のような課題も見られた。

イ　課題

●　集団内の問題や課題について話し合い，解決方法を見いだすことが不十分だった。
●　多様な他者だけでなく，周りの社会や自然との関わりを対象にした学習を展開する必要がある。
●　学校行事や児童会活動の人間科としての位置付けが曖昧であった。

このような成果と課題を踏まえ，本年度は，昨年度までの内容を改め，自己の価値観を豊かにし，自己を見つめ直し，よりよい自分をつくる人間科を立ち上げた。

２　目標

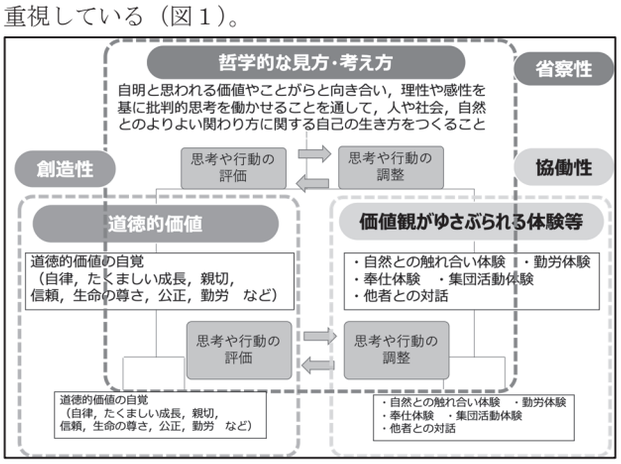
(1) 教科の目標

自分の生きる意味や価値を見つめ直すことを通して見いだした，自分や他者，社会，自然との関わりから生まれる問いを，自分事として解決する過程の中で，哲学的な見方・考え方を養うことで，３つの資質･能力を次の通り育成することを目指す。

(1) 自ら課題を設定し，調査･追究する過程で自覚した価値をつないだり組み合わせたりしながら，新たな価値をつくり出すことができる。（創造性）
(2) 仲間や他者の考えに耳を傾け，自分と同じように尊重し，それらの人々とともに自分が人や社会，自然のために力を合わせ働きかけようとする。（協働性）
(3) 自分の学び方や在り方を深く内省し，自分のよさや課題を肯定的に受け止め，自己をあるがままに認め，これからの志を明らかにしようとする。（省察性）

(2) 見方・考え方と資質能力の関係

哲学的な見方・考え方[5]とは，哲学的な問いに対応する「自明と思われる価値やことがらと向き合い，理性や感性を基に批判的思考[6]を働かせることを通して，人や社会，自然とのよりよい関わり方に関する自己の生き方をつくること」である。人間科の哲学的な問い[7]とは，「他者と対話し，批判的思考や創造的思考をはたらかせながら，更なる探究を行うための問い」である。概念と方略については，人間科においてはそれぞれ道徳的価値と価値観がゆさぶられる体験であると考える。これらの概念や方略の獲得の際に主に発揮されるのは，それぞれ創造性と協働性である。また，これらに支えられて発揮される省察性を人間科では重視している（図１）。



【図１　見方・考え方と資質・能力の関係図】

(3) 学年の目標

〔第１学年及び第２学年〕

(1) 目標

①　友達や家族など身近な人と関わる中で，自分の生き方を見つめ，なりたい自分の姿を考え，行動することができる。（創造性）
②　学級や学年における自分の役割に取り組み，友達と助け合って活動する大切さに気付き，考えを伝えたり聞いたりして，よりよい学級生活をつくろうとする。（協働性）
③　自分の目標を基に日々の生活を振り返り，自分と友達のがんばりやよさに気付き，気付いたよさについて友達と伝え合ったり話し合ったりして，よりよい自分をつくろうとする。（省察性）

〔第３学年及び第４学年〕

(1) 目標

①　多様な他者と関わる中で，自分にとって価値あるものは何かを考え，自分の学びの変容や自他の成長に気付き，友達と話し合ってよりよい自分の生き方をつくることができる。（創造性）

② 学級や学年，学校における自分の役割に取り組み，友達と協力して取り組むことの大切さに気付き，考えを伝えたり，受け入れたりしながら，よりよい学級，学年の生活をつくろうとする。（協働性）

③ 自分の目標を基に自分のよさに目を向け，自分自身の学びや成長を分類・整理する中で，自分の課題も受け入れ，よりよい自分の姿をつくろうとする。（省察性）

〔第５学年及び第６学年〕

(1) 目標

① 多様な他者と出会い，関わる中で，自分にとって価値ある生き方を考え，未来社会を生きていくためにできることについて友達と話し合い，理想に向かう大切な生き方を構築することができる。（創造性）

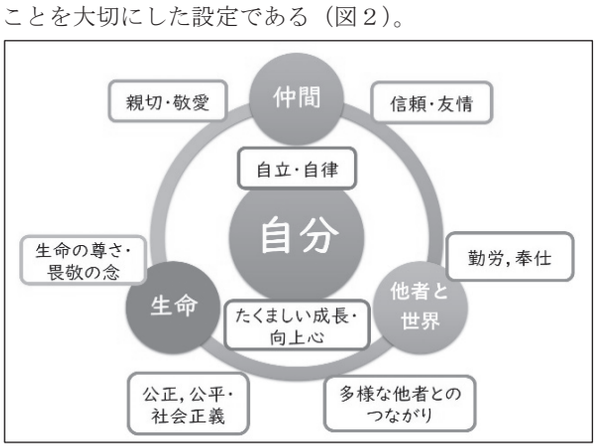
② 学級や学校生活における自分の役割に取り組み，友達と信頼し合って取り組むことの大切さに気付き，考えを伝えたり，互いを尊重したりしながら，よりよい学級や学校生活を進んでつくろうとする。（協働性）

③ 自分の目標を基に，自分の特徴に目を向け，分類・整理する中で自分の特徴を理解し，理想とする自分の姿をつくろうとする。（省察性）

3 内容構成

(1) 内容構成の考え方

内容を構成するにあたって，いつの時代も必要とされる体験やグローバル社会といったこれからの世界を生きる子供の実態を究明していくことが人間科の目標を達成するために必要であると考える。そこで，「どのような対象とどのように関わり，どのような価値を見いだすのか」という実践の在り方から内容を構成する。そこで，内容区分を「自分」「仲間」「生命」「他者と世界」とした。これは，学級や学校などの多様な仲間や他者，社会などと関わり合う中で，自分の価値観を豊かにし，一人の人間としての生きる意味や価値を見いだす，よりよい自分をつくっていくことを大切にした設定である（図２）。



【図２ 人間科の内容構成】

(2) 具体的な内容構成

そこで重視したい内容は，「自分」「仲間」「生命」「他者と世界」である（表１）。

【表１ 人間科の内容構成と内容の具体例】

A 自分	○道徳的価値と他者への思いやりに関わる道徳的価値への理解と自覚を深め自己の価値観を豊かにする学習 ○自己内省を繰り返し行い，自己理解，自己更新を深める学習	○自立・自律 ○たくましい成長・向上心
B 仲間	○仲間との連帯感や学び合う喜びを実感し，よりよい学級や学校にしていく学習	○親切・敬愛 ○信頼・友情 【主として２・３・４年生でのテーマ学習としての関連】
C 生命	○全ての生命がもつ連続性や有限性など侵し難い尊さを認識し，生きることの素晴らしさや生命のかけがえのなさを自分との関わりで考え，自覚を深める学習	○生命の尊さ・畏敬の念 【主として３・４・５・６年生でのテーマ学習としての関連】
D 他者と世界	○自分と多様な他者の双方が共によりよく生きていくための生き方や，自分や環境，社会など世界のあり方について考えを深める学習	○公正・公平，社会正義 ○勤労，奉仕 ○多様な他者とのつながり 【主として４・５・６年生でのテーマ学習としての関連】

(3) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と視点を生かした要素と学年の系統について表すと以下のようになる（次頁表２）。

【表２ 各学年と内容の系統性】

１，２年生	３，４年生	５，６年生
A 自分		
・しょうじきにすることはたいせつなのか ・よいことわるいことはどのようなこと	・感謝とは何だろう ・あきらめずに取り組むことはどうして大切なのか	・本当の親切とはどのようなものだろうか ・自由と自分勝手は違うのか

B　仲間		
・みんなでもっとなかよし ・ともだちのよいところ	・学級の仲間ブックをつくろう ・友達ともっと仲良く	・よりよい学校にするために ・６年間の思いを形に
C　生命		
・しぜんとふれあおう ・生き物をかおう	・自分の命みんなの命 ・自分のルーツを探ろう	・命を輝かせて ・生きるとは
D　他者と世界		
・ふじぐみともっとなかよし ・家ぞくのみんなありがとう	・みんなが笑顔で暮らすために ・さくら組の友達	・共生社会を目指して ・私たちにできること

(4) 内容のスリム化の考え方

ア　焦点化

取り扱う内容を焦点化して指導することで，内容のスリム化を図る。例えば，現行の道徳科では，友情，信頼，相互理解，寛容の内容をそれぞれで扱うことになるが，特別活動の内容である，学級や学校における諸問題の解決とともに扱い，指導をすることで，スリム化することが可能である。諸問題の解決を行う中で，友情を深め，相互理解できるようになっていくことを子供たち自身の学びにしていくことが焦点化につながると考える。

イ　複合化

人間科における関連化は，例えば次のようなことが考えられる。学習の対象が障害とはどのようなものなのか，障害を自分の力にして生活している方の生き方との出合いであった場合，人間科において，中心となるテーマ「みんなが笑顔で暮らすために必要なことは何か」を設定する。そのテーマの基，社会科でみんなが笑顔になれるような市民生活について追究したり，障害がある方の移動の仕方について，健康科で追究したりしながら，人間科で設定したテーマの追究を進めていくことである。

ウ　統合化

人間科は，中心となる主概念となる教科である。そこで特に，「人間として生きる意味や価値を見いだす」ことを重視する。「他者との協働」や「人間関係形成」，「他者理解」，「生命の尊厳」なども考えられる。これらは，学習する内容の特質によって異なる。例えば，「人との関わり方」という概念であれば，「周りの人や他者の理解」や「進んで関わりをつくろうとする態度」，「他者への関心」などが考えられる。

４　各学年の内容（ゴシック：複合化，統合化）

〔第１学年及び第２学年〕

【A　自分】

ア　これまでの自分を振り返りながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，健康安全に気を付け，物や金銭を大切にし，身の回りを整えるとともに，わがままやごまかしをせず，素直にのびのびと生活し，よいと思うことを進んで行うことの大切さを理解する。

イ　これから先の自分を見通しながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，自分の特徴に気付き，自分のやるべき勉強や仕事を行うことの大切さを理解する。

【B　仲間】

ウ　家庭，学級の人々との関わりについて話し合ったことを実践することを通して，身近にいる人に温かい心で礼儀よく接するとともに，家族など日頃世話になっている人々に感謝し，自分が役立つことの大切さを理解する。（統合化）

エ　学級や学校にある問題を解決するために話し合って決めたことを実践することを通して，友達と仲良くし，助け合うこととともに，自分の考えをもつことの大切さを理解する。（統合化）

【C　生命】

オ　自然や動植物と触れ合い，その成長や変化を喜び，生命の大切さについて考えることを通して，生きることのすばらしさを知り，身近な動植物に優しく接するとともに，自然や芸術の美しいものにふれたときのすがすがしさを理解する。（複合化）

【D　他者と世界】

カ　家庭・学校・社会などの中で自分や他者の権利を守ることと関連付けて，きまりの意義を考えることを通して，約束やきまりを守り，みんなが使うものを大切にするとともに，自分の好き嫌いにとらわれないで友達と仲良く接することの大切さを理解する。（統合化）

キ　学級の清掃や給食などの当番活動，係活動，家庭や地域社会での決められた仕事など自分が行った仕事を振り返ることを通して，自分に関わる人への親しみを感じ，仕事がみんなの役に立つことの喜び，やりがいを感じることを理解する。

ク　家族や友達，学校にいる人，近所の人など自分にとって身近な人との関わりを通して，自分と相手の違いを知り，自分が身近な人に守られて生きていることに気付き，自分の所属感を高め，親しみや愛情をもって接しながら相手を分かろうとすることが大切であることを理解する。（統合化）

〔第３学年及び第４学年〕

【A　自分】

ア　これまでの自分を振り返りながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，安全に気を付け，よく考えて自立的に行動し，過ちを改め正直に明るい心で生活するとともに，正しいと判断したことは自信をもって行うことの大切さを理解す

る。

イ　これから先の自分を見通しながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，自分の特徴に気付き，長所を伸ばすとともに，自分でやろうと決めた目標に向かって，強い意志をもち，粘り強くやり抜くことの大切さを理解する。

【B　仲間】

ウ　家庭，学級，学校の人々との関わりについて話し合ったことを実践することを通して，相手のことを思いやり，進んで親切にすることや礼儀の大切さを感じるとともに，家族，高齢者など今の自分を支えてくれている人に尊敬と感謝の気持ちをもって接することの大切さを理解する。

エ　学級や学校にある問題を解決するために話し合って決めたことを実践することを通して，友達と互いに理解し，信頼し，助け合うとともに，自分の考えを伝え，自分と異なる意見を尊重することの大切さを理解する。（複合化）

【C　生命】

オ　自然や動植物と触れ合い，その成長や変化を喜び，生命の大切さについて考えることを通して，生命の尊さを知り，生命あるものの素晴らしさや不思議さを感じ取るとともに，自然や芸術の美しさや気高さに感動する心を理解する。（統合化）

【D　他者と世界】

カ　家庭・学校・社会などの中で自分や他者の権利を守ることと関連付けて，きまりの意義を考えることを通して，約束や社会のきまりを守るとともに，誰に対しても分け隔てをせず，公正，公平な態度で接することの大切さを理解する。

キ　身近な生活の中で，自分ができる仕事を見つめ直したり，学校や地域の中で集団生活の向上につながる活動に参加したりすることを通して，働くことへのやりがいや喜びを深め，仲間と共に働くことのよさが分かることを理解する。

ク　地域に住む人や地域の障害のある人，外国人などとの関わりを通して，自分と他者の違いを理解するとともに，自分との類似性や同一性があることが分かり，他者の思いや考えを受けとめ，他者の生き方に学ぶことの大切さを理解する。（統合化）

〔第５学年及び第６学年〕

【A　自分】

ア　これまでの自分を振り返りながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，安全に気を付けることや生活習慣の大切さについて見直し，誠実で明るい心で生活するとともに，自律的に判断し責任ある行動をとることの大切さを理解する。

イ　これから先の自分を見通しながら，自分に合った目標を考え，実行することを通して，自分の特徴を知り，短所を改めるとともに，より高い目標を立て，困難にくじけず，努力を重ね，物事を探究しようとすることの大切さを理解する。

【B　仲間】

ウ　家庭，学級，学校，地域の人々との関わりについて話し合ったことを実践することを通して，誰に対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立って親切にすることや真心をもって接する大切さを感じるとともに，日々の生活が家族をはじめ多くの人々の互助努力で成り立っていることに感謝し，それに応えることの大切さを理解する。

エ　学級や学校にある問題を解決するために話し合って決めたことを実践することを通して，異性を含めた友達と互いに信頼し，学び合って友情を深めるとともに，謙虚で広い心をもち，自分と異なる意見や立場を尊重することの大切さを理解する。

【C　生命】

オ　自然や動植物と触れ合い，その成長や変化を喜び，生命の大切さについて考えることを通して，生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることが分かり，生命を尊重するとともに，自然や芸術の美しさや気高さに感動する心を理解する。（複合化）

【D　他者と世界】

カ　家庭，学校，社会などの中で自分や他者の権利を守ることと関連付けて，きまりの意義を考えることを通して，法やきまりを守り，自他の権利を大切にするとともに，誰に対しても差別や偏見なく，公正，公平な態度で接することの大切さを理解する。

キ　学級や学校，社会の一員として自分にできることを追究したり，社会のために働く人などと関わったりすることを通して，誰かのために働くことの満足感，仕事を成し遂げた際の喜びや奉仕することの喜びを味わい，他者のために自らが行動していく大切さを理解する。（統合化）

ク　他の地域に住む人や他民族，他宗教，性的マイノリティ，障害のある人などに関心を深め，他者と触れ合ったり，努力する姿に学んだりすることを通して，他者の考えの背景を捉え，謙虚な心や広い心で受けとめ，自分自身のアイデンティティを理解するとともに他者の誇り高い生き方を理解する。（統合化）

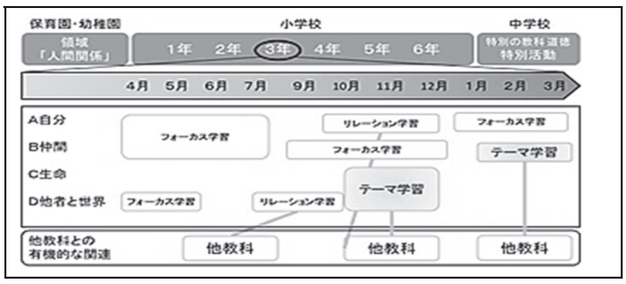
5　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

年間指導計画作成にあたっては，本校の全体計画に基づき，人間科においては，子供たちが自分の見方や考え方，行い方を振り返り，生き方を見つめ直せるものにしていく必要がある。そのために，特にテーマ学習においては他教

科とは有機的な関連が行えるようにする。さらに，教科横断的に学校内外の仲間や他者との協働的な活動を通した学びを子供たちの実態と発達段階に即して出会わせるようにする。保・幼・小・中の連携の視点から，保育園・幼稚園における「人間関係」[11]の学びとの適切な接続と，中学校道徳科，特別活動との系統を基に年間指導計画を作成していく（図３）。

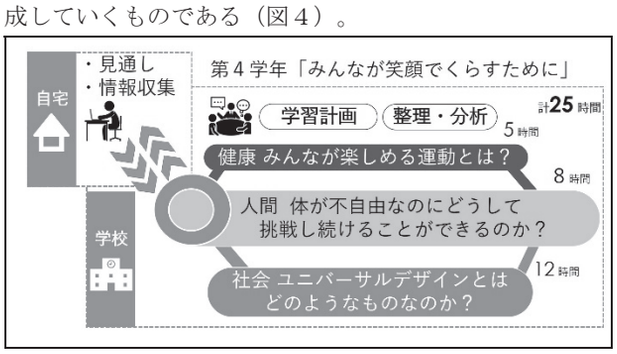


【図３　年間指導計画のイメージ】

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

人間科は，人格の完成に直接向かう全教科の核となる教科である[12]。そのため，テーマ学習においては，人間科での学びが出発点となり，各教科に広がっていくことが考えられる。人間科で出合った人物の生き方に触れ，その直接的な体験や経験から生まれる，子供自らの問いを中心のテーマに据えた学習を行うことが必要である。そして，常にテーマに戻る時間が，人間科の時間となる。人間科はテーマ学習における，各教科をつなぎ，主概念と関連概念を形成していくものである（図４）。



【図４　テーマ学習のイメージ】

(ｲ) リレーション学習

人間科では，主に社会科とのリレーション学習が強く表れると考える。学習対象が同じものであることから，人間で生きる意味や価値について，自分自身を見つめ直す学習をしながら，社会科では，多様な他者との関わりをつくる学習を進めることができる。多様な他者や社会に自ら参画し，協働して活動を進めていく中で，見つけた自他の成長やよりよい生き方などについて，整理していくことが人間科で行うことができる。

(ｳ) フォーカス学習

人間科では，学ぶことで「自分自身の今までの自分を振り返り，よりよい自分をつくることができることにつながる」，「自分の変化や成長を捉え，今後の自分の生き方を見つめることができる」のように，自分自身を見つめ直し続けることの価値を自覚することが大切である。

ウ　一単位時間の学習のプロセス

人間科の基本的な学習のプロセス[9]は，次のとおりである。導入では，本時に解決するべき問題を明確にする。展開では，解決するべき問題について，資料や体験[10]を基に，どのような価値が大切であるのかについて話し合い，自己を振り返ることで，自分の生き方を振り返る。終末では，新たに発見した自分自身について（自己理解）や，これから自分がどのように生きていくのかについて（自己更新）の観点で振り返る。子供の発達の段階を踏まえ，上学年においては，中心となる問いである哲学的な問いを単元を貫いてもちやすいと考えられるが，下学年においては，問いが，毎時間変化し，中心となる哲学的な問いを単元の中盤にもつことがあるということを留意する必要がある。

一単位時間においては，導入で，本時で取り扱う価値内容についてのこれまでの自分を振り返り，問題意識を高め，展開で，資料や体験を通して，価値理解を深めるとともに，自己を振り返り，価値の主体的自覚を図る。終末では，本時の活動を振り返り，見いだした新たな価値を基に，これから自分がどのように生きていくのかについて（自己更新）の観点で振り返る。

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

人間科は，中心となる主概念となる教科である。そこで子供たちがもつ気がかりや疑問，問題から生まれる「哲学的な問い」を重視する。その問いを基にして，各教科での学びを関連させていくことが必要である。特に，テーマ学習において，テーマや中心の問いとなるものを主概念とし，それに関わる関連概念を洗い出すことが必要になる。

イ　真正の課題の条件

次の３つの真正の課題となる条件を設定する（表３）。

【表３　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知のまとまり	今の自分やこれまでの自分，将来の自分など，自己形成を図るために自分自身を振り返り，これからの生き方につながる課題であること
たくましい追究	自己形成を図るために，他者との関わりが必然的に生まれる課題であること
学校を超える価値	多様な他者と共によりよく生きていくために必要な自己形成を図ることにつながる課題であること

ウ　学習としての評価

人間科における振り返りの軸の例を表４に示す。

【表４　振り返りの軸の例】

省察性	・自己理解（自分への気付き） ・自己更新

自己理解については，体験や学習を通して，どのような自分に気付いたのか，自己更新については，人や社会，自

然とどのように関わっていきたいか，という問いを，単元を通して問うことで，学習前と学習後の自分の考えを比較し，自己の変容やそのきっかけを捉えるなどといった省察性を発揮していくことができると考える。

(3) 人間科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，哲学的な見方・考え方の涵養を図るために哲学対話[11]を行っている。

内容としては，子供たちと一緒に哲学対話のテーマを考え，それについて話し合い，共通了解を図るものである。

具体的には次の通りである（表５）。

【表５　哲学対話のテーマ例】

	テーマの例
低学年	・　どうしてけんかをするのかな。 ・　成長ってどのようなことかな。
中学年	・　命ってどこにあるのだろう。 ・　障がいって何だろう。
高学年	・　差別とは何だろう。 ・　幸せとは何だろう。

(4) 人間科に関わるチャレンジの指導

どのチャレンジにおいても，自己内省を図りながら，学びを積み重ねていくため，全てのチャレンジに関わりがあると考える。人間科において発揮した省察性を活かして，各チャレンジでの自分の学びや成長を整理していくことができると考える。

＜註＞

[1] 西晋一郎（1932）『国民道徳講話』藤井書店. p. 5

[2] 岩佐信道（2000）「アメリカにおけるキャラクター・エデュケーションの動向」『比較教育学研究第 28 号』. p. 18-28.

[3] 伊藤啓一（1991）「統合的道徳教育の創造」. p. 22-25［このカリキュラムの目的は，責任ある市民を育成することである。責任ある市民とは，①行動する前によく考える，②自分と他人の対する結果を考慮して行為する，③生活において自分の目標を達成するために自己制御できるという３つができる人物だとしている。我が国における道徳性と重複する。世界的にも，共通して，他者への思いやりや誠実さ，責任，努力などの道徳的価値を捉え，主体的によりよい自己をつくることが求められているといえる。］

[4] 福岡教育大学附属福岡小学校（1997）「新時代の授業を創る　21 世紀の教科・領域への挑戦」明治図書［人間は，自然的存在，社会的存在，価値的存在であるとしている。①自然的存在とは，自然の恵みを受け自然と調和して生きることであり，生命の連環の中で生きているということ，②社会的存在とは，人とかかわって生きることであり，集団や社会の仕組みの中で協調し連帯して生きているということ，③価値的存在とは，理性と感性を高め，心の充足を求めて生きていることであり，創造的に自己実現を図りつつ生きているということであると定義している。これは，子供を捉える視点であるとともに，教育の目的，内容，方法にもつながるものであると考える。

[5] 安彦忠彦（平 4）「自己評価」図書文化. p. 23［近代以降の教育にあった５つの前提（①人間性に対する全福の信頼②進歩史観③人間中心の価値観④人間生存への確信⑤近代科学の絶対視）を次のように（①人間とその本性に対して，条件付きの信頼しかおかない②歴史は方向性をもって変化するのみであって，進歩はしない。(その変化がその時々の人間の意志によって進歩と見なされ，促される）③人間の価値観を，地球規模の，生物学的視野を含むものとする。④人間の生存は，自らによってそれを保障し，自らその責任を負う。⑤科学的知識を絶対視せず，知識の一部と見なし，むしろ科学の方法を重視する。）転換することで，「人間が自己自身を問う日常的態度」を形成することができると述べている。生き方を学ぶには，批判的思考が重要であると述べている。］

[6] 楠見孝・道田泰司（2019）「批判的思考　21 世紀を生きぬくリテラシーの基盤」新曜社. p. 7.［批判的思考とは，①証拠に基づく論理的で偏りのない思考である。②自分の思考過程を意識的に吟味する省察的で熟慮的な思考である。③よりよい思考を行うために目標や文脈に応じて実行される，目標指向的な思考である。批判的思考は，スキルと知識と態度に支えられている。スキルは，①情報の明確化②推論の土台の検討③推論④行動決定・問題解決のプロセスを支えるスキルである。知識には，演繹，帰納，類推，問題解決などの推論の方法に関する領域普遍的なものとテーマにかかわる領域固有のものがある。態度は，直面する問題やテーマを十分検討し，熟慮，探究し，証拠に基づいて客観的に判断することである。批判的思考において大切なことは，①相手の発言に耳を傾け，証拠や論理，感情を的確に解釈すること，②自分の考えに誤りや偏りがないかを振り返ること。つまり，相手の発言に耳を傾けずに攻撃することは，批判的な思考と正反対の事柄である。］

[7] 苫野一徳（2017）「はじめての哲学的思考」ちくまプリマー新書. p. 17［哲学とは，さまざまな物事の「本質」をとらえる営み。「絶対の真理」とは全然違う。あくまでも，できるだけだれもが納得できる本質的な考え方。そうした物事の「本質」を洞察することこそが，哲学の最大の意義である。哲学の本質は，「答え抜く」こと。絶対の正解ではなく，できるだけだれもが納得できるような「共通了解」を見いだそうと探究することであると述べている。また，マシュー・リップマン（2014）「探究のための共同体」玉川大学出版部. p. 292［思考には批判的，創造的，ケア的側面があり，これらが相互的かつ連続的に関わっている］と述べている。

[8] E・フロム　日高六郎訳（2019）「自由からの逃走」東京創元社. p. 289［自発的な行為は，個人が孤独や無力によってかり立てられるような強迫的なものではない。自発的な活動は自我の自由な活動であり，心理的にはsponteというラテン語の語源の文字通りの意味，すなわち，自らの自由意志のということを意味する。人が自我の本質的な部分を抑制しないときにのみ，自分が自分自身にとって明確なものとなったときにのみ，また生活の様々な領域が根本的な統一に到達したときにのみ，自発的な活動は可能である。活動によって自我を実現し，自分自身を外界に関係付けるならば，かれは孤立した原子ではなくなる。すなわち，かれと外界とは構成された一つの全体の部分となる。かれは正当な地位を獲得し，それによって自分自身や人生の意味についての疑いが消滅する。この疑いは分離と生の妨害から生まれたものであるが，強迫的にでも自動的にでもなく，自発的に生きることができるとき，この疑いは消失する，かれは自分自身を活動的創造的な個人と感じ，人生の意味がただ一つあること，生きる行為そのものであることを認めると述べている。つまり，生き方を学ぶには，子供の自発性が大事であると述べている。］

[9] 梶田　叡一（1987）「自己認識　自己概念の教育」ミネルヴァ書房. p. 9［子供一人一人の内面世界から出発し，またそこに帰着する教育を進めていこうとするならば，配慮すべき点を５つ挙げる。①子供一人一人の内面世界に届くよう働きかけを工夫すること，②子供一人一人が，自分の内面世界を対象化している場を設定する，③子供一人一人が，自分の内面世界の十分根ざした形で学習を進め深めていくように教育活動の場が必要である，④子供一人一人の内面世界に揺さぶりを掛け，既成の固定した見方や考え方を崩して流動化させ，もう一度自分自身の力で新たに整理し直さざるをえなくする，といった働きかけが必要である，⑤子供一人一人が自分の内面世界の在り方に責任をもち，自分自身でそれをより一層望ましいものに成長させていくようになるための訓練が，教育活動のなかで大切になる（自己評価をする習慣をつける）］

[10] 梶田　叡一（2016）「人間教育のために」金子書房. p. 38［体験の中にも意識レベルのみで受け止められ，処理されてしまうものがある。この場合には，「思い出」はできても，「経験」とはならない。実感や本縁が揺さぶられるような体験であって初めて，経験化されていくのである。体験がどのような形でその人を変えていくかについては，大別して次の三つの場合がある。①体験が直接的に感性（関心の持ち方，考えや判断の内準拠枠）を変えていく。②体験の気付き・見返り・再吟味によって物の見方・考え方が変わっていく。③特別の非日常特異的体験によって深層世界にクサビが打ち込まれる。］

[11] 西研（2019）「哲学は対話する　プラトン，フッサールの共通了解をつくる方法」筑摩書房 p. 374.［本質観取の手順①体験（わたしの’確信’）の即して考える②問題意識を出し合う③事例を出し合う④事例を分類し名前を付ける（キーワードを見つける）⑤すべての事例に共通性を考える⑥最初の問題意識や疑問点に答える。］

[12] 日本教科教育学会（2020）「教科とその本質」教育出版. p. 164［お茶小の「てつがく」は，探究を生み出す原動力である「問い」を知識の習得の手段ではなく，学習の目的とする領域をつくり出すことにより，探究の結果からその過程へと学習の重点を移行させる試みである。考えることそのものを育む目標ー内容ー方法を追求する「てつがく」の設定により，主体的に考え，探究しようとする試みの足がかりをつくり，そして，その意義や必要性を子供たちと教師が再認識する場をつくる出すことが企図されている。一方，「人間科」は，探究を生み出す原動力である「主体（人や社会とのよりよい関わりをつくる生き方）」を学習の目的とする領域をつくり出すことにより，探究の結果からそこに向かう内面へと学習の重点を移行させる試みである。「主体（人や社会，自然とのよりよい関わりをつくる生き方）」そのものを育む目標ー内容ー方法を追究する「人間科」の設定により，各教科での探究の学びとの往還関係をつくり出すことを企図している。］

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校）

社会科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

2019 年９月 24 日，国連サミットにおいて 2030 年までに持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための“野心的な行動の 10 年”を今後進めることが各国に求められた。「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の採択から４年経ったものの，目標の達成に向けた取り組みが進んでいない現状を受けたものである[1]。しかしながら，そもそも「世界はよい方向へと向かっているにも関わらず，不確かな情報によって，世界は悪くなり続けていると悲観的に世界を捉えている」[2]とする研究者もいる。このような時代を生きる子供たちに必要な力は，自分の生きる世界の状況を事実から正しく捉え，持続可能性を意識し，前向きに目標をもって解決策を考え，提案，実行できることである。

そこで，本教科では，「人間をとりまく人の営み」を学習の対象とする。「人間をとりまく人の営み」とは，自分の生活とそれを支えている目に見えない「人の思いや願い・工夫や努力・その仕組み」である。自分の生活は，身近な家庭，学校や地域社会の一員として，日本に住む者として，そして，世界との関わりの中で営まれている。だからこそ，現在だけでなく，未来の生活や社会とも関わっている過去や今現在の社会，そしてこれから進んでいくであろう社会を学習対象とする。この様なことから本校社会科では，「持続可能な世界をつくりだす主体をはぐくむ」ことを求める。

(2) 現行生活科，社会科，家庭科から見える課題

本校社会科と関わる教科として，生活科，社会科，家庭科があげられる。そこから次のような課題を見いだすことができる。

現行生活科から見える課題は以下の２つである。

- ●　教師の意図が強くなると，子供たちの試行錯誤の中から生まれる気付きが不十分
- ●　生活科と社会科の資質・能力，内容における系統，幼保教育との系統が不明確

現行社会科から見える課題は以下の３つである。

- ●　内容が現代社会に即していないこと
- ●　仕組みを学ぶための学習になっており，子供たちが何のために仕組みを学ぶのかの無自覚
- ●　今までの社会の仕組みは捉えられるが，これからの社会について考える余地のなさ

現行家庭科から見える課題は以下の２つである。

- ●　消費者としてのよりよい選択について考えることはあるが，持続可能性を意識した意思決定や判断には至っていないこと

本校では，持続可能な社会をつくる主体として，子供たちが未来社会において活躍できることを願い，社会科を設定することで現行の生活科，社会科，家庭科における課題の解決の一助となることをねらいとしている。

(3) 社会科に関わる本校のこれまでの研究

社会科に関わって本校では２度の研究開発指定（昭和 58 年～，平成６年度～）を受け，体験科と生活環境科を新設し，研究を進めてきた経緯がある。

体験科においては，低学年における「身近な学習対象に対する五感による気付きのある」学習を展開してきた。[3] 子供たちにとっては，教科としての枠組みよりも対象に対する驚きや疑問によって気付きが生まれるという点から，子供の興味・関心を大切にした教材の開発の重要性を見出してきた。特に，低学年における教材開発と内容構成について，子供中心の学習の在り方を明らかにしてきた。

生活環境科においては，中学年における「子供自身が環境の構成者であり，生活者になる」学習を展開してきた[4]。そこでは，子供たちが自分の生活する環境へ主体的に関わる姿を目指し，自分と生活環境との関わりを見直す具体的な活動や体験の設定の在り方や，学習対象の条件を明らかにしてきた。また，内容構成も見直し，子供たちが主体的に生活環境に関わり，自分の生活をつくりだすための知見を培ってきた。

２度の研究開発指定の中で，子供たちの文脈を大切にした真正の課題を設定することが資質・能力の発揮において重要であることが明確になったと言える。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

４年間の開発研において，１，２年次では領域「社会共創」，３，４年次では領域「くらし」として，研究を行ってきた。その中で見えた成果は４点，課題は２点である。

ア　成果

- ○　貧困や，環境問題，持続可能な住空間など，SDGs に関する対象を題材として取り扱うことができた。
- ○　よりよい市民に必要な資質・能力を分析し，それを内容の構成に生かすことができた。
- ○　自分を取り巻く社会と自分の関係から，課題を自分事として捉え，問題解決に取り組むことができた。
- ○　子供たち自身が課題設定から PDCA サイクルを回したことで主体的な学習となった。

イ　課題

- ●　地域や社会の課題に焦点化しすぎると，課題ばかりが意識されてしまうことがあった。
- ●　学習の中で発揮された考え方や方法を汎用的なものとして，子供自身に意識させるに至らなかった。

2　目標

(1) 教科の目標

社会や日常の生活の中から見出した問題を，持続可能な生活をつくるために解決する過程の中で，社会的な見方・考え方を養い，３資質・能力を次の通り育成することを目指す。

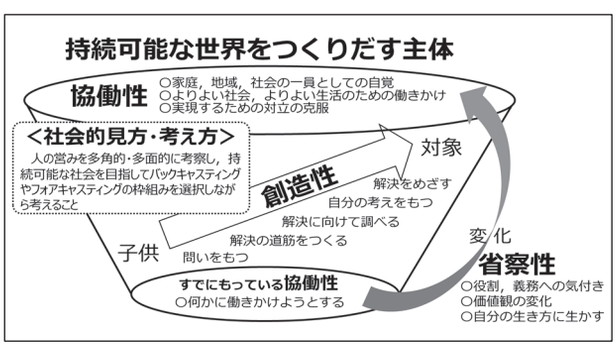
(1) 生活や社会における問題を見出し，目標や課題を設定し多面的・多角的に探究する中で，解決に向けて参画するための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

(2) 家族や地域，社会の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

(3) 日常や社会の生活における自己の役割や義務に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

(2) 見方・考え方と資質・能力の関係

社会科の究極的な目標は「持続可能な世界をつくりだす主体をはぐくむ」[5]ことである。そのような主体になるためには，協働性の発揮が欠かせない。協働性の具体としては，社会の「一員としての自覚」や行動することで感じる「変化の手応え」，目指す生活や社会の実現のための「対立の克服」などがある。協働性は対象に対してもった問いの解決を目指す（創造性）中で育成される。そして，これらの過程の中で養われるのが，社会的な見方・考え方である。本校社会科の社会的な見方・考え方とは，「人の営みを多角的・多面的[6]に考察し，持続可能な社会を目指してバックキャスティング[7]やフォアキャスティングの枠組みを選択しながら考えること」である。このように，問いを解決しようと創造性を発揮し，対象に働きかけようと協働性を発揮して行動に移す中で，自身の役割に気付いたり，価値観の変化に気付いたりする省察性が育成される（図１）。



【図１　社会科の資質・能力の関係】

(3) 学年の目標

〔第１学年〕

①　自分の生活や地域社会における問題を見出し，よりよい生活にするための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

②　家族や地域の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③　日常生活における自己の役割に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

〔第２学年〕

①　自分の生活や地域社会における問題を見出し，よりよい生活にするための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

②　家族や地域の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③　日常生活における自己の役割に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

〔第３学年〕

①　自分の生活や地域社会における問題を見出し，よりよい生活にするための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

②　家族や地域の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③　日常生活における自己の役割に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

〔第４学年〕

①　現代社会における問題を見出し，目標や課題を設定し多面的・多角的に探究する中で，解決に向けて参画するための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

②　社会の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③　社会の生活における自己の役割や義務に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

〔第５学年〕

①　現代社会における問題を見出し，目標や課題を設定し多面的・多角的に探究する中で，解決に向けて参画するための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

②　社会の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③　社会の生活における自己の役割や義務に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

〔第６学年〕

①　現代社会における問題を見出し，目標や課題を設

定し多面的・多角的に探究する中で，解決に向けて参画するための自己の考えを明確にすることができる。（創造性）

② 社会の一員であることを自覚しながら，自身の生活を変容させたり，対象に対して働きかけたりしようとする。（協働性）

③ 社会の生活における自己の役割や義務に気付き，自身の価値観の変容を実感し，自身の生き方に生かして行動しようとする。（省察性）

3 内容構成

(1) 内容構成の考え方

本校社会科は，協働性の育成を目指す教科であり，「持続可能な社会をつくりだす主体」の育成を目指す。そこで，ESD（持続可能な開発のための教育）[8]で取り扱う分野を参考に，内容区分を設定した。

(2) 具体的な内容構成

ESDにおける取り扱うべき分野として，４つある[9]。文化，社会，環境，経済である。また，これまで人間が人間として社会を形成する過程も踏まえ[10]，本校社会科では環境，経済，政治，文化として内容を構成した（図２）。

【図２ 社会科の内容構成】

以上の点から，内容を構成したものが表１である。

【表１ 本校社会科の内容構成と内容の具体例】

A 環境	自然の様子と生活のつながりを扱う内容	○自然の中での遊び ○気候 ○国土 ○環境問題 ○災害
B 経済	生活をよりよくする生産活動を扱う内容	○お金とは何か ○産業 ○金融 ○起業 ○日本の歴史
C 政治	生活をよりよくするシステムを扱う内容	○行政 ○憲法，法 ○人権 ○社会問題 ○日本の歴史
D 文化	多様性を感じることにつながる事柄を扱う内容	○世界の様子 ○日本の文化（現在） ○文化遺産 ○日本の歴史

また，現行の生活科，社会科，家庭科の内容の中で必要と考えるものについては，現行社会科の中でも扱う。一方で，以下のような条件を満たさない内容については削除したり，不足している部分については新たに設定したりした。その条件は次の３点である。

○ これからの未来社会を生きる上で，必要となる事柄であること
○ 子供自身がこのように生きていきたいという思いをもつために必要な事柄であること
○ 現代社会の状況に即していること

(3) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と学習対象や活動条件を生かした学年の系統性について，次のように考えている（表２）。

【表２ 各学年の内容構成】

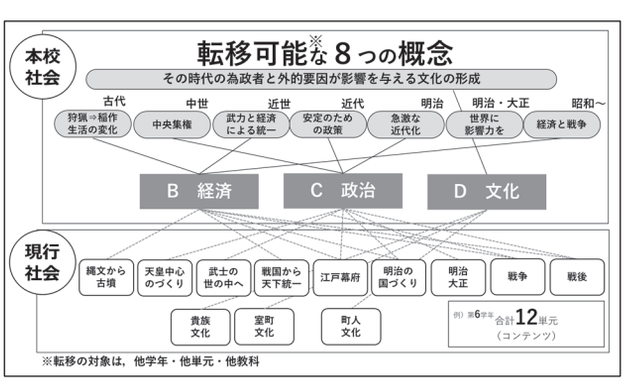
	１年	２年	３年	４年	５年	６年
A 環境	○自然の中での遊び ○自然を生かした公園 ○市や県の様子			○日本の気候 ○国土と領土問題 ○日本や世界の環境問題		
B 経済	○お金の支払い方 ○自分に使われるお金 ○値段の決め方			○産業の仕組み ○金融や投資 ○お金の価値 ○ソーシャルビジネス		
C 政治	○家や学校の周り ○家での仕事 ○地域を支える仕事 ○公共機関の使い方 ○地域のルール			○市や県，国の仕事 ○生活を支える仕事 ○ユニバーサルデザイン ○憲法と法 ○人権 ○日本の歴史		
D 文化				○文化遺産 ○地域，日本の文化 ○世界の国々の様子 ○日本の歴史		

「Ｄ文化」については，多様性を感じる事柄を扱うが，下学年の子供たちにとっては，発達段階を考えると多様性を感じる前に，自分たちがどのような存在であるか捉えることを重視すべきと考え，下学年では設定しない。

(4) 内容のスリム化の考え方

ア 焦点化

本校社会科は，現行社会科の内容を４つの内容区分から整理することによって焦点化する。例えば，歴史学習において，時代区分ごとの概念ではなく，政治や経済の視点から捉えるべき知識や概念を作り直す（図３）。

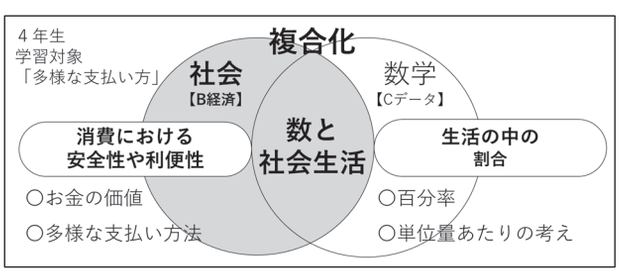


【図３ 社会科における焦点化の例】

結果，為政者の変化による時代区分では 12 あった内容（単元）が，政治や経済といった内容区分からスリム化すると８つの概念に整理することができる。こうすることによって，概念をその後の追究に活用することが可能となる。以上のことから，内容のスリム化を行うことが可能となる。

イ　複合化

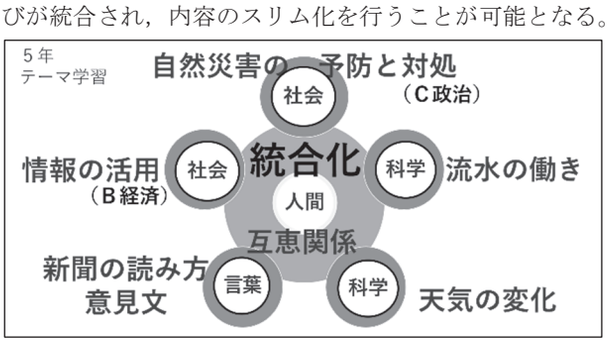
本校社会科は，子供たちが追究していく中で，他教科と内容が関連しやすい教科である。それは，社会における問題の解決や仕組みの解明をする際に，必然的にデータを分析したり，言葉で表現物を作ったりする必要があるからである。このように他教科と関連し，互いの教科の学びが深まり，それぞれの概念がより明確になることが概念同士の複合化である。例えば，多様な支払い方法を学習対象とした４年生の学習では，お得な支払い方について考える際に数学科と関連した。それによって数学科では生活の中の割合を捉えることができ，社会科ではお得かどうかだけでは支払い方を選択できないという視点から，安全性や利便性の視点を獲得することができた（図４）。このように概念の複合化によって，互いの教科の学びが深まり，それぞれの概念がより明確でき，内容精選を行うことが可能となる。



【図４　社会科における複合化の例】

ウ　統合化

社会科が扱う学習対象は自分の生き方に影響をあたることが多い。それは，自分の生活に直接的，または間接的に関わる事柄を教材として取り扱っているためである。つまり，自分の生き方について考える人間科の学習への関わりが大きい。例えば，５年生において災害に対して自分たちにできることはないかと考えるときに，社会科は自然災害に対する防災や支援の在り方，情報の活用を取り上げる（図５）。そうすることによって，市民と行政がどのようにして防災に取り組んだり，災害時に対応したり，復興に関わったりしているのか情報の活用との関わりで捉え，社会科の学びが生き方に影響を与える。このように教科の学びが統合され，内容のスリム化を行うことが可能となる。



【図５　社会科における統合化の例】

4　各学年の内容（ゴシック：複合化，統合化）

〔第１学年〕

【A　環境】

ア　身近な自然や道具を使った遊びをすることを通して，自分の興味･関心に基づいた遊びは，自分の生活を楽しいものにすることに気付く。（統合化）

イ　家の周りの身近な地域を調べることを通して，お気に入りの場所を見つけ，その場所は地域の方々が守ってくださっていることに気付く。

【B　経済】

ウ　お金の使い方を体験的に学ぶことを通して，家族から預かったお金を無駄遣いしないように大事に使うことが大切だと気付く。（複合化）

【C　政治】

エ　家や学校のきまりを体験的に学ぶことを通して，友達や家族と同意したきまりがあることで，快適に暮らすことができることに気付く。

オ　家庭における仕事を学んだり，実践したりすることを通して，自分も家族のためになることを実感し，家族を支える仕事の必要性に気付く。

〔第２学年〕

【A　環境】

ア　その季節にしかない自然物を使った遊びや遊び道具をつくり出すことを通して，自分たちが楽しく遊ぶことができるのは，自然があるからであり，季節の変化が遊びや生活に影響を与えていることに気付く。（統合化）

【B　経済】

イ　自分に使われているお金について学ぶことを通して，労働の対価としてお金を得て，それによって自分たちが養われていることに気付く。（複合化）

ウ　地域の仕事を調べたり，体験したりすることを通して，商品やサービスに対して価値が発生して労働の対価としてのお金の発生に気付く。（複合化）

【C　政治】

エ　みんなが楽しむことができる遊びのルールを目的や相手意識をもちながら，考えることを通して，目的を達成するには，少数派の意見も大切にしながら，より多くの人が納得し，目的を達成できるルールなどの仕組みづくりが大切であることに気付く。（統合化）

オ　公共機関や公共施設の利用の仕方を体験的に調べることを通して，よさを感じ，そのよさをつくり出すために働く人の存在があり，自分たちもできることがあることに気付く。（複合化）

〔第３学年〕

【A　環境】

ア　公園のある生活をしている自分たちという立場から身近な公園などの様子を調べる活動を通して，人工的につくられた公園の自然の中で，人の交流が生まれ，余暇を楽しむ生活を生み出していることを理解する。

【B　経済】

イ　その地域に住む一人としての立場から，地域の様子や時間の経過による変化を調べる活動を通して，人口が密集する場所に交通や施設などが集中し，地域の変化も人口の増減と大きな関わりがあることを理解する。

ウ　品物にかかる様々な経費に着目してお店の人，買う人の立場から価格の設定の仕方を学ぶことを通して，価格の設定には，原価でけではなく人件費や輸送費など目に見えないお金が含まれているとともに，利益を出す必要があることを理解する。

エ　地域の生産者の立場から農家や工場の仕事について学ぶことを通して，地域の産業はその地域の特色を生かして行われていることを理解する。

【C　政治】

オ　地域に住むお年寄りや自分たちを含む子供の立場から地域生活を送る上で必要なきまりを学ぶことを通して，地域の安全や安心を守っているのは，地域の人々自身であることを理解する。（統合化）

【D　文化】

カ　地域を紹介するという立場から自分の暮らす地域の様子を調べる活動を通して，地域の特色を示すものには衣食住，方言などの独特の言語，文化遺産などがあることを理解する。（複合化）

〔第４学年〕

【A　環境】

ア　地理的な側面から九州や他の地域を学ぶことを通して，その県の産業の発展や特色は，地形や日本や世界の中での位置的なことに影響をうけていることを理解する。（統合化）

【B　経済】

イ　サービスを受ける人，提供する人の立場から飲食や観光など人の欲求を満たすことを目的とした仕事を学ぶことを通して，消費者や生産者の立場からニーズを捉えることが，価格やサービス向上に生かされていることを理解する。

ウ　借りる，貸す，預ける立場からお金を運用することを目的とした仕事を学ぶことを通して，お金は循環することで価値が生まれ，そのような仕組みは信用を基盤としていることを理解する。（複合化）

【C　政治】

エ　サービスを受ける人，提供する人の立場から地方自治が整えるインフラの整備を学ぶことを通して，サービスを向上させ，持続可能なサービスを提供するためには，地域相互の対応や計画的に整備する必要があることを理解する。

オ　自分たちも含めた市民という立場から，高齢者や障害者などへの地域の福祉を学ぶことを通して，市民みんなが生活への不自由さを感じる方へ配慮していくことは，誰にとっても過ごしやすい環境を生み出すことにつながる（ユニバーサルデザイン）ことを理解する。（統合化）

【D　文化】

カ　地域の発展を目指した先人の立場から地域の発展を支えた事業について学ぶことを通して，地域の課題の解決のために住む人々の思いを受け止め，共感を得ながら取り組むことで住む人々を巻き込みながら取り組んだことを理解する。

〔第５学年〕

【A　環境】

ア　地理的な側面から日本の国土を学ぶことを通して，日本の国土は四季と気候によって変化に富むことために，それに合わせた生活の様子が生まれていることについて理解する。（統合化）

イ　政府や国民の立場や経済的，歴史的，地理的側面から国土を学ぶことを通して，隣接する諸外国との問題の多くに経済的背景があるが，問題はないとすることによって，我が国の国土を守ろうとしていることを理解する。

【B　経済】

ウ　生産者と消費者という立場や，国民生活の向上や起業としての利益向上という経済的な側面から，我が国の産業について学ぶことを通して，生産性をあげ，個のニーズに応えることで産業として発展し，わたしたちの生活を支えていることについて理解する。

エ　情報の発信者と受信者という立場から情報を活用した産業について学ぶことを通して，情報そのもの（コンテンツ）が価値を生み出すこと，情報は目に見えないが多くの人へ影響を与えることから送受信の責任が大きいことを理解する。

【C　政治】

オ　法をつくる人，守らせる人，守られている人の立場や，歴史的，経済的側面から我が国の法律と法律の成立までを学ぶことを通して，法は平等な社会の実現のために生まれ，それによって，生活が維持されていることを理解する。

カ　諸機関のそれぞれの立場から災害時や防災に関わる諸機関の働きを調べることを通して，防災，復旧，復興は公助，自助，共助に支えられている

ことを理解する。（統合化）

キ　直接的に苦しむ人，解決を目指す人，自分たちという立場や環境保全と持続可能性という側面から世界的な問題を学ぶことを通して，問題の原因の中心には政情不安があり，それを基に他の問題が派生していることを捉え，現状を変えていくためには，原因へのアプローチと対処療法的なアプローチが必要であることを理解する。（複合化）

【D　文化】

ク　日本人のわたしたちと海外の人の立場から，日本の文化を学ぶことを通して，日本の文化の形成に四季が影響していることを理解する。（統合化）

〔第６学年〕

【A　環境】

ア　地理的な側面から各国の様子を調べることを通して，その特色に気付き，気候や地形に応じた生活の様子や信仰，宗教が生まれ，大切にされていることについて理解する。

【B　経済】

イ　社会をよりよく変えたいという立場や課題の解決，理想の実現，持続可能性の側面から我が国の新たな産業や日本の歴史を学ぶことを通して，産業による成果物だけでなくアイデアに価値が見出され，資金が集まることで社会の変革が起きることを理解する。（複合化）

【C　政治】

ウ　古代における生活を維持するための方法の変化（狩猟→農耕）とそれによる生活の変化への影響を調べることを通して，生活を維持するための方法の変化が，集団の形成の在り方や，その組織づくり影響を与え，身分や役割と言った階級が生まれることを理解する。

エ　近世における天下を統一した人物の共通点をそれぞれの立場から調べることを通して，自由な交易や海外との貿易の強化によって，資金を手に入れ，それによる武力の充実と組織の拡充がその地域や国を統一するために重要な役割を果たすことを理解する。

オ　昭和期における他国との戦争について，日本や日本と戦争をした他国の立場から，戦争が起きた理由やその戦争における戦後の影響について調べることを通して，戦争や紛争が起きる要因の一つとして，自国民の生活が貿易や話合いにおいて改善されなかったり，生活するのに困るような状態が起きそだったりするときに，資源を得るために起きることを理解する。

カ　政治家，行政，市民や国民，民間企業の立場や公正で公平，民主的な側面から我が国の課題に対する取組や日本の歴史を学ぶことを通して，有権者のもつ一票は自分の未来への考え方を主張する価値があることを理解する。（統合化）

キ　私たちは憲法を守ることで憲法に守られているという立場や憲法成立の歴史的側面から人権や憲法を学ぶことを通して，から，人は住む地域や民族，宗教，人種，男女，職業，思想などの違いがあっても侵されることのない基本的な人権をもち，それを守るための世界的な取組や日本国憲法が存在することを理解する。（統合化）

ク　古代から中世において，巨大な建造物が作られていることを為政者としての立場と庶民の立場から調べることを通して，広い地域を治め，その考えを自身が治める地域全てに行き渡らせるためには，役人を中心とした官僚機構と納税による財政基盤が必要となることを理解する。

ケ　近代において，大きな戦乱が起きなかった要因を，経済的，政治的側面から調べることを通して，為政者は，武力行使ができないように財政を管理し，武力となるものを保持させないような政策をとることによって，武力による政変を起こさせないようにできることを理解する。

コ　明治期における急激な近代化を，外国からの刺激と国内における政策という側面から調べることを通して，国が急成長するためには，人材を育成するための教育，国が中心となって産業を興すことで進む財政の充実，他国からの侵略を防ぐ軍事力の強化を政策として進めることを理解する。

サ　明治・大正期において，条約の改正や国際的に発言力が強まった要因を，他国との関係や国の組織といった側面から調べることを通して，国際的に発言権を強めるためには，国としての考えを決定するプロセスが他国に理解され，明確の基準（憲法）のもと国の方針が決められていることが必要であることを理解する。

【D　文化】

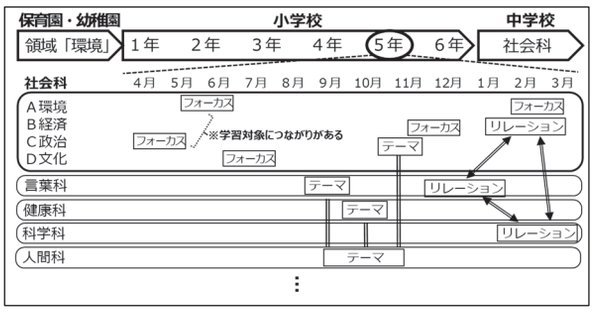
シ　自然と文化，経済と文化，為政者と文化の関係的側面から，日本や世界の文化について学ぶことを通して，それぞれの地域にある多様性とそれを尊重する大切さを理解する。（複合化）

5　指導計画の作成と内容の取り扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

年間指導計画作成にあたっては，他教科との関連，そして子供の文脈を大切にした作成を行う。社会科は社会の事象そのものを取り扱うが故に，多教科との関連が必然的に生まれてくる。他教科との関連を考えながら年間指導計画を作成することで，概念同士の複合化が生まれ，内容精選にもつながっていく（図６）。



【図６　年間指導計画のイメージ】

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

本校社会科におけるテーマ学習は，人間科の問いを解決する中で生まれる問いを追究するために生じる。自分たちの生活場面や社会の中にある具体に置き換えて考える。

例えば，人間科において「未来社会に向けて何ができるのか」という問いが生まれた場合，本校社会科においては，内容を構成している４つ（A環境，B経済，C政治，D文化）の中の適した内容でその問いに対して関連していることを取り上げ，考えることができる。

(ｲ) リレーション学習

本校社会科におけるリレーション学習は，社会科の学習で扱う対象から他教科への内容の関連が図られることが考えられる。[11] 自分の生活の様子や社会の仕組みを考える際に他教科の学びが生かされる。例えば，数学科の学びを生かして，データを分析したり，言葉科の学びを生かして，提案をしたりすることである。低学年であれば，芸術科において遊びを考え，それを生かすことが考えられる。このように自分の生活や社会の仕組みを学習対象とする社会科は他教科の学びを関連させる役割を担っている。

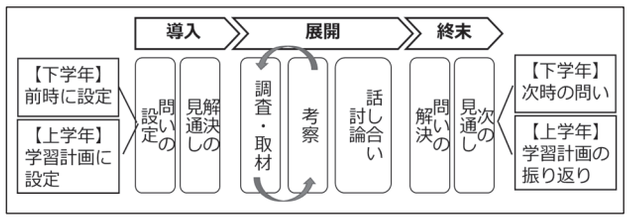
(ｳ) フォーカス学習

本校社会科におけるフォーカス学習は，学習対象へのアプローチの仕方を工夫することで焦点化を図ることができる。例えば，歴史の学習において，自分たちの関わりから歴史を捉えるために，近代から学習ようにする。そうすると，問いは必然的に因果関係を問うものになり，それによって焦点化されていく。時代の特徴を捉えることよりも歴史的な出来事がなぜ起きたのか因果関係を考えることで，知識は現代により生きるものとなり，同時に学習に費やす時間を減らすことができる。

ウ　一単位時間の学習のプロセス

本校社会科では，問いを確認し，その解決のために活動し，何らかの解を求めていく学習を一単位時間で行っていく。この流れは下学年，上学年ともに変わらないが，大きく違うのは一単位時間の問いのつくられ方である。

下学年は，次の時間の問いは前時の終末に生まれ，それが繰り返される。一方，上学年は単元の導入場面で大きな問いが生まれ，それが貫かれる（図７）。



【図７　一単位時間の学びのプロセス】

また，問いの設定や学習プロセスにはＰＢＬ（プロジェクト・ベースド・ラーニング[12]）の考え方を活用する。学習者が「現実的な状況の中」に立って，「現実の問題」を知り，「実現したいこと」のために考え，行動する過程の中で学ぶことができるためである。特に課題の設定の部分でこの考え方を生かすことで，子供たちに学習の過程において，知識の構造化を促すことができる。[13]

例えば，２年生の【Ｃ　政治】地域の公共施設の学習においては，福岡の太宰府天満宮に電車に乗って行こうというプロジェクトを進めるために，行き方の計画を立てたり，施設の仕組みや正しい使い方を調査したりすることが考えられる。実際に駅に調査に行ったり，電車に乗って目的地まで出かけたりする具体的な活動を通して，公共という概念をつくり，自分も地域の公共施設を利用する社会の一員としての自覚をもつことが期待できる。

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

社会科における学習対象と学習活動の条件は以下の通りである（表３，表４）。

【表３　学習対象の条件】

	下学年	上学年
対象	自分の生活の中から	自分の生活の先に
子供にとって	・関心がある ・気付きがある ・仕組みが分かる ・具体的な体験ができる	・関心がある ・今までの概念で説明できない ・何か提案できる
学習のゴール	自己決定や集団決定によって，自分自身の生活に変化が生じる	直接的な変化は感じられなくても，変化の兆しや変化の手応えを感じる

下学年の学習対象は，普段の学校生活の中や登下校中に目にする事象など，自分の生活の中から取り出す。子供にとって，関心をもてるものであり，何よりその学習を通して概念をつくることができる必要があり，自分自身の生活に変化が生じることを目指す。

上学年の学習対象は，自分の生活の先にあるものを扱う。具体的な生活場面では現れない対象であっても生活を支えており，つながりを感じることができる必要があり，学習によって社会の変化の兆しや変化の手応えを感じることができることを目指す。

考えられる学習活動は以下のようなものである（表４）。

【表４　学習活動の条件】

	下学年	上学年
調査活動	・体験的な活動 ・インタビュー （家族，地域等） ・書籍	・インタビュー （地域，社会等） ・シミュレーション ・書籍　・ネット検索
表現活動	・家族，地域へ提案 ・模擬的に再現 ・まとめて発表	・社会へ提案 ・対立討論 ・解決方法の話合い

イ　真正の課題の条件

社会科においては，次の３つの真正の課題となる条件を設定する（表５）。[14]

【表５　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知の まとまり	その問題意識の解決に向けて思考する中で，その社会事象に対する概念をもつことができる課題であること
たくましい 追究	社会を支えている人々や，よりよい社会へと変化させようとしている人々から力を借り，実際に問題を解決したり，解決に近付いたりする課題であること
学校を超える 価値	課題を解決する中で得た概念や価値観が自分が社会でこれから先に生きていく上で生かされる課題であり，社会に対して小さくても影響を与えることができる課題であること

ウ　学習としての評価

社会科は協働性の発揮を促す教科である。そこで，振り返る際の軸として以下の点から行う（表６）。

【表６　社会科における振り返りの軸】

協働性
【下学年】
○　家族，学級，学校，地域の一員としての自覚
○　周りの人の支えの実感
【上学年】
○　地域，日本，世界の一員としての自覚
○　社会が変化する手応え
○　対立の克服

(3) 社会科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，社会科における基礎的な知識や内容の習得を目指している。特に，地図記号や国旗，都道府県名，歴史上の人物など，学習の機会が十分でないものはフラッシュカードで絵や図，写真と言葉を繰り返し一致させながら学ぶ。このような「たんれん」を行うことによって，主体的に学ぶ意欲を高めたり，知識習得の達成感をもたせたりすることができると考える。また，問題データベースを活用しながら，基礎的な知識の習得を行う。

具体的な内容については次の通りである（表７）。

【表７　社会科における「たんれん」の内容】

A　環境	B　経済	C　政治	D　文化
・都道府県名 ・地域の特産	・地域の産業	・地図記号 ・歴史上の人物	・世界遺産 ・国旗

＜註＞

[1] 国債連合広報「https://www.unic.or.jp/news_press/info/34911/」

[2] ハンス・ロスリング（2019）「FACTFULNESS」日経ＢＰ社. p. 20-21

[3] 福岡教育大学附属福岡小学校（1988）『感動体験を中核とした「生活科」の授業づくり』明治図書.［昭和 58 年から４年間研究開発指定を受け，生活科の前身となる「体験科」を創設した。その中で特に低学年の子供たちの学びの欲求とは何か検証し，教材開発，内容の検討を行った。］

[4] 福岡教育大学附属福岡小学校（1997）「新時代の授業を創る（21 世紀の教科・領域への挑戦」明治図書.［平成６年から４年間研究開発指定を受け，「生活環境科」を創設した。その中で特に中学年の子供たちが自分の生活環境に対して，どのようにして主体的に関わり，生活を変えていくのか検証し，内容構成の検討を行った。］

[5] オーストラリアのカリキュラムにおける教科横断の優先事項の一つに「持続可能性」があげられている。そこでは，全ての教科が持続可能性に結び付く課題になり得ることが書かれているとともに，特に人文科学，社会科学の教科においては，物事を批判的に捉えながら，コミュニケーションによって課題を解決していく必要性を述べている。また，持続可能性を考える上での優先事項として「システム」「世界観」「過去と将来性」といった視点が大事であると述べている。つまり，仕組みを学び，それがどのような世界を形づくってきたのか整理しながら，過去の人の営みが世界や社会に与えた影響や今後与えるであろう影響を考えていくことが大切であると述べていると言える。そこで本校社会科においても，「持続可能性な世界をつくり出す主体」を育てることを目指す上でこれまでの社会科が行ってきた事実を捉え，それらの関係から仕組みを理解し，価値判断をすることを大切にしながら，将来へのつながりを意識して持続可能な社会をつくることができる主体を育みたい。（https://www.australiancurriculum.edu.au/）

[6] 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説　社会編」. p. 22，文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説　社会編」. p. 26［小学校学習指導要領解説においては，「多角的に考える」を「複数の立場や意見を踏まえて考える」としており，中学校学習指導要領解説においては，「多面的・多角的に考察」を「社会的事象自体が様々な側面をもつ『多面性』と，社会的事象を様々な角度から捉える『多角性』とを踏まえて考察すること」としている。この考え方を，本校も大切にしながら，小学校段階においても「多面的・多角的」を重視する。発達段階から，多角的に考えることは，低学年からも可能であると考えているが，多角的に考えることは，経済とは何か，政治とは何かある程度の概念をもっていなければできないため，高学年からできる思考だと考えている。］

[7] 五島敦子（編）（2010）「未来をつくる教育ＥＳＤ―持続可能な多文化社会を目指して―」. P. 131［バックキャストとは，目指す社会の様子を決めて，それに向かって様々なアプローチの方法を考えることである。今の状況から未来の姿を想像するフォアキャストと違って，どのような姿を目指したいかが先にくるため，多様なアプローチの仕方が考えられる。フォアキャストとバックキャストはどちらがよいというわけではなく，状況に応じて使い分けることが重要であるが，本校社会科においては，目指す社会を創造していく段階においては，バックキャストが有効であると考える。］

[8] トランスファー21（編）／由井義通（訳）（2012）「ESD コンピテンシー学校の質的向上と形成能力の育成のための指導方針」. P. 13［ESD とは，「持続可能な開発のための教育」であり，新学習指導要領にも「持続可能な社会」の文言が入り，重視されているところである。本校では，その一面を社会科が担うものとし，内容構成の視点として位置づける。］

[9] 前掲載書７. P. 102

[10] ヤニス・バルファキス，関美和（訳）（2019）「父が娘に語る経済の話」. p. 24［人間が社会をつくりだすきっかけとなったのは経済が発生したからであるとしており，その基盤となったのが農耕と言語の発明であったとしている。それまでは物々交換だった市場（いちば）が農耕によって余剰品を商品として扱う経済の場に変わり，それによって生まれた利益によって，人は社会を構成していったとしている。その考えから，本校社会科では，経済の視点を内容に明確に位置付けることで，経済が社会の形成に与える影響を子供に捉えさせたいと考える。］

[11] 町田市立鴨川第二小学校（2020）「平成３０年度研究開発実施報告書（要約）」.［「２１世紀型能力」の中核となる思考力の育成を目指した新教科「２１世紀スキル科」を新設し，教育課程，指導方法，評価方法の検討を行っている。その中で，自分自身や他者とかかわりながらこれまで学んだり経験したりした対象について，子供が主体的・協働的に目標を実現する協働プロジェクト型の学習を設定している。ここでは，学

習対象に対して，プランニングとモニタリングを繰り返しながら子供たちの設定したプロジェクトをメタ認知を働かせながら達成していく学習を目指している。そのための手だてと子供たちの思考を促す仕組みは明確になっているが，「これまで学んだり経験したことを生かす」ための仕組みは明確になっていない。そこで本校では，「生かす」のではなく，問題解決のためにどの教科で何を学ぶ必要があるのか考えることで学んだこと（知識）を生かすことから，教科を学ぶ意義を生み出すことを重視していく。そのための中心的な学習の型として社会科が中心となるリレーション学習があると考える。］

[12] L. トープ／S. セージ，伊藤通子他（訳）（2017）「ＰＢＬ学びの可能性をひらく授業づくり」．P. 18［PBL は，現実の問題に対する探究とその解決を中心に据えて集中して取り組む，体験的な（身も心も使った）学びと定義している。また，PBL は主体的な学習を促し，知識の構造化を支援し，授業と実生活とを自然に統合する本物の体験を学習者に提供するとしている。教師の役割はコーチングする支援者であり，子供主体の学びが展開される。このような学びの形は本校が目指す子供の文脈を大切にした学びであるとともに，持続可能な社会の形成を目指して社会に関わろうとする本校社会科の学習像とも一致するものであると考える。］

[13] 上越教育大学附属中学校（2020）「平成３０年度研究開発実施報告書（要約）」．［高度情報社会，少子高齢社会，グローバル社会の時代に求められる資質・能力（アビリティ）をバランスよく総合的に身に付けることができる教科として「グローバル人材科」を新設し，資質・能力の分析を行っている。具体的に６つの資質・能力を分析し，それを３つに分け「課題討論」「企画討論」「グローバルコミュニケーション」の時間で育成することをねらった。６つの資質・能力を分析したことによってそれぞれの学習段階によって，何が発揮されればよいか明確になった一方で，それぞれを育成するために時間が設定されるという教師側の文脈が押し出されたカリキュラムになってしまっている。本校はそれを子供の文脈の中に埋め込むためにも PBL の考え方を取り入れた学習の在り方を検討する。］

[14] 熊本大学教育学部附属中学校（2020）「平成３０年度研究開発実施報告書（要約）」．［社会の変化に対応し未来を拓くために必要な「思考力」を育成するための新教科「未来思考科」を位置付けた教育課程，新教科の指導内容，指導方法及び評価方法についての研究開発を行っていた。その中で，学習課題のレベル設定を５段階で行い，その例示を社会科で行っている。レベル１や２は事実的知識や関係的知識を獲得することができる課題であるのに対して，レベル３以降は，合教科型，教科統合型，教科・生活総合型と教科の枠組みを超えた学びになることが示されている。また，レベルがあがるにしたがって，社会に開かれていくことも示されている。これらのことからも，子供達の資質・能力をより発揮させるためにも，真正の課題になり得る必要があり，特に社会科においては「学校を超える価値」を重視した学習課題の設定が重要であることが分かる。］

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校版）

言葉科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

教科「言葉」は,言葉の豊かな使い手を育てる上で設定した教科である。情報化の進展に伴い,言葉を取り巻く環境が大きく変化する中，子供たちの話し合う相手や話し合い方，書いたり読んだりする方法が多様化してきている。例えばスマート・フォンの保有率は，2010 年では 9.7%であったが,2017 年では,75.1%と増加している[1]。そのため，短文的になりがちな言葉のやりとりにとどまらず，深い読みを身に付けさせることが急務である。PISA2018 の結果では，読解力に関わる問題の結果に低下が見られた。具体的には，テキストから情報を取り出す問題やテキストの質と信憑性に評価する問題において課題が見られた。その原因は，課題文の内容に関する既存知識・経験，コンピュータ画面上での長文読解の慣れ，また，課題文のテキスト種類の変更が考えられる。そこで，授業等において様々な文章を批判的に読み，適切な根拠を用いて自分の考えを表現することが必要である[2]。

(2) 現行国語科,外国語科(活動)から見える課題

以上のような課題があるものの，現行の国語科では，従前「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の３領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成されていた内容が〔知識及び理解〕，〔思考力，判断力，表現力等〕に再構成されたのみである。このことは，渋谷(1987)の，「未だに国語科教育の本質，学習内容と活動との関係等が分かりにくく，社会や理科などの言葉を使う教科と言葉を学ぶ教科である国語科との区別の意識がないまま授業が行われており，真の言葉の教育になっていない」[3]という指摘を解決しておらず，言葉の学びそのものが不明確であることを意味している。また，コミュニケーション能力の向上や考えを言語化することが求められている中，読解力の向上を図るために「読むこと」に注力されすぎている点も課題といえる[4]。

一方，現行の外国語科(活動)においても，一貫した外国語教育の実現に向け，中学年では外国語活動，高学年に外国語科が位置付けられた。しかし，子供の求めに応じたコミュニケーション活動になり得ておらず，自分や相手が話す言葉の意味を理解したり，慣れ親しんだ言語表現を他の場面で活用したりしながらコミュニケーションを図る課題も大きい。何より外国語科(活動)では，外国語によるコミュニケーション能力の向上を目指していること，言語を認知する過程，言語の普遍性という２点に共通点があり，資質・能力レベルでも国語科の内容と重複していると考えられる。アイデンティティ言語としての母国語と実用言語としての第二言語の立ち位置を明確にしたカリキュラム[5]が求められている。

以上の課題を踏まえ,指導内容を精選する。そうすることで，子供が言葉への気付きを効果的に深め，言語観を育てながら生涯にわたり主体的に言葉を尊重できるようにする。つまり，生涯にわたり主体的に言葉を学び，使っていく子供を育成するために言葉科を設定した。

(3) 言葉科に関わるこれまでの研究

本校ではこれまで，領域「言語文化」と領域「ことば」が学習内容を担っていた。特に領域「ことば」において，言葉に関する課題を捉え，言語活動を通して，主体的な言葉の使い手としての資質・能力を育成することを目指し，内容を「言語基礎」「言語活動」「言語文化」の３つとして研究を進めてきた[6]。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

ア　成果

○　日本語と英語を関連させることで，それぞれの言語の文化的背景の違いについて，新たな気付きや言葉のおもしろさを実感させることができた。
○　捉えさせたい内容や言葉による見方・考え方が似ている場合は，日本語と英語とを関連させることにより，双方の指導時数を減らすことができた。

１，２年次では，領域「言語文化」の学習において「言語基礎」「コミュニケーション」「創生」の３つの内容を通して,「言語文化の向上を担う主体としての意識を育む」ことができた。また，３年次では,「言語基礎」を「知る」とし，文字，言葉の特徴やきまり，文化の３つの内容で整理することができた。さらに，子供の言語能力の基礎が,日本語と英語とでは同じではないことから,内容を,それぞれ①日本語，②英語，③日本語と英語の関連で整理することもできた。さらに，４年次では言語の機能である伝達，思考，認識，創造を基に内容を再構成し，国語と英語の双方を合わせた形で指導することができるもの，あるいは指導内容に重なりが見られるものについては内容を精選することができた。

イ　課題

●　学習内容を広げすぎたために，どのような資質・能力を育成するか明確にすることができなかった。
●　文章理解から効果的に自分の考えを表出する単元開発が不十分であった。
●　児童の興味・関心が様々なテキストに向かうように授業を改善する必要があった。

そこで本年度は言葉科として，子供たちに身に付けさせたい資質・能力や子供の文脈を大切にして日本語と英語の関連題材の開発や，教科間の概念をつなぐ言葉科の学習理論の形成を基に内容の精選を行う。

2　目標

(1) 教科の目標

日常生活の言語活動を通して見いだした問いを，論理的に解決する過程の中で，言葉による見方・考え方を養うことで，３つの資質・能力を次の通り育成することを目指す。

(1) 言葉に関する疑問や追究したいことについて，言葉に着目して思いや考えを深めたり，言葉の価値を見いだしたりすることができる。（創造性）

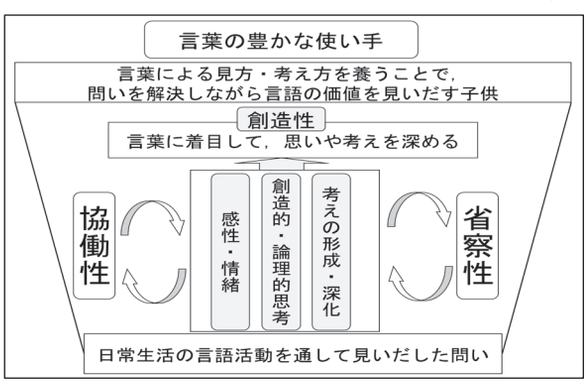
(2) 言葉に関する疑問や追究したいことについて，目的や意図，相手を意識して思いや考えを伝え合おうとしたり，高めたりしようとする。（協働性）

(3) 言葉に関する課題追究を通して，考えの変容や高まりを価値付けたり，言葉の使い手としての目指す姿を明確にしたりしようとする。（省察性）

(2) 見方・考え方と資質・能力の関係

言葉による見方・考え方とは，「言葉がもつ『機能』[1]から言葉を『運用』し，言葉の『効果』を捉えること」である。そのために，「言葉を使って感じたことや考えたことの理由や根拠を論理的に明らかにする言語の機能や運用におけるきまりの概念的な理解」と「状況や文脈，相手や目的によって対象と言葉の関係を吟味する方略的な表現」を関連付けて高めていく。

言葉科で重視する資質・能力は創造性である。言葉科に関する創造性は，情報を多角的に吟味し，構造化する創造的・論理的思考の側面，言葉によって感じたり想像したりする感性・情緒の側面，新しい情報を評価し取捨選択する考えの形成・深化の側面が含まれている[2]。これらの創造性が育成されるために，情報の理解，考えの精査・解釈，さらに，文章や発話による自己表現を行うことが重要である。このような方略を基に言葉を学ぶ価値を捉えていく。このように創造性を中心に育成していく言葉科の構造を図にすると次のようになる(図１)。



【図１　言葉科における目標と資質・能力の関係】

(3) 学年の目標

〔第１学年及び第２学年〕

① 言葉に関する課題について，言葉に着目して考えたり，自分の思いや考えを創り出したりすることができる。（創造性）

② 相手を意識して，言葉や追究課題に対する自分の思いや考えを伝え合おうとする。（協働性）

③ 言葉に関する課題追究を通して，考えの広がりに気付いたり，身の回りの言葉に関心をもち，言葉を学び，使う意欲を高めたりしようとする。（省察性）

〔第３学年及び４学年〕

① 言葉に関する課題について，言葉に着目して自分の思いや考えを明確にしたり，新たな考えを創り出したりすることができる。（創造性）

② 目的や相手を意識して，言葉や追究課題に対する自分の思いや考えを伝え合おうとしたり，考えをまとめたりしようとする。（協働性）

③ 言葉に関する課題追究を通して，考えの変容や広がりを捉えたり，日常生活においてどのように言葉を使うか，言葉の使い手としての目指す姿を明確にしたりしようとする。（省察性）

〔第５学年及び６学年〕

① 言葉に関する課題について，言葉に着目して自分の思いや考えを深めたり，新たな考えを創り出したりすることができる。（創造性）

② 目的や意図，相手を意識して，言葉や追究課題に対する自分の思いや考えを伝え合おうとしたり，高めたりしようとする。（協働性）

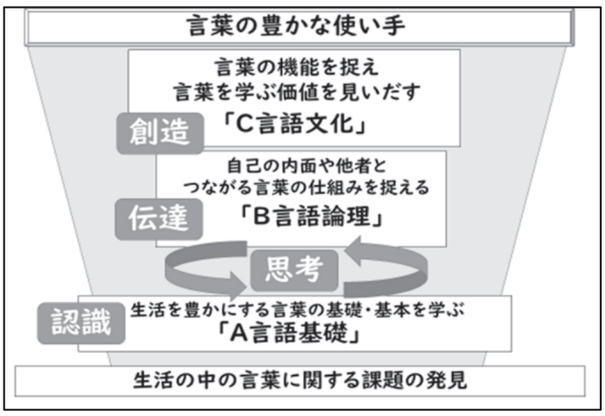
③ 言葉に関する課題追究を通して，考えの変容や高まりを価値付けたり，言葉の価値を捉え，言葉をどのように学び使っていきたいか，言葉の使い手としての目指す姿を明確にしたりしようとする。（省察性）

3　内容構成

(1) 内容構成の考え方

言葉科は，創造性の育成を目指す教科であり，「言葉の豊かな使い手」の育成を目指す。言葉の豊かな使い手を育成するためには，言葉を通して生活を豊かにできることを子供が実感することが大切である。そのためには，言葉で考えたり，互いの考えを伝え合ったり，言語文化に親しんだりすることを捉えながら，言葉を学ぶ価値を子供たちに気付かせることが必要である（図２）。

そこで，言葉科が目指す創造性を発揮した姿である「言葉の豊かな使い手」の育成において，言葉に関する課題について自分の思いや考えを深めるための言葉への着眼に関する基礎的な内容を「A 言語基礎」として扱う。また，実際に言語活動を行いながら，言葉に関する課題について，思いや考えを深めるための言語の論理的な構造を捉える内容を「B 言語論理」として扱う。そして，言葉を学ぶ価値を見いだす内容「C 言語文化」として扱う。



【図２　言葉科の内容構成】

(2) 具体的な内容構成

そこで上記のことを踏まえ，言葉の機能や運用におけるきまり，文化としての言葉の価値を基に，言語基礎，言語論理，言語文化として内容を構成する。言語基礎では，「言葉の特徴やきまり」，言語論理では，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」，言語文化では，「価値」を視点として位置付けるようにする。具体的には，次のように学習活動や学習対象を考えていく（表１）。

【表１　本校言葉科の内容構成と内容の具体例】

A　言語基礎	言語活動に必要な言語材料を扱う内容	ア・イ 言葉の特徴やきまり （文字，文法，語法）
B　言語論理	理解と表現に必要な言葉の構造を扱う内容	ウ・エ 話すこと・聞くこと オ・カ　（キ）書くこと ク・ケ・(コ)　読むこと
C　言語文化	言葉を学ぶ価値を扱う内容	サ・シ　価値

特に，「B 言語論理」のウ話すこと・聞くこと，「C 言語文化」のサ価値については，効果的に日本語と英語を関連付ける内容を設定する。そうすることで，言語の共通点や相違点から，言葉を通して自分のものの見方や考え方を広げ深めること，言葉の背景には，人々の社会や文化が関連付いていることを捉え，言葉の使い手として文化を創造することができる価値に気付かせることをねらっている。

(3) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と視点を生かした学年の系統について表すと以下のようになる。

【表２　「A言語基礎」の系統】

１・２年生	３・４年生	５・６年生
ア・イ　言葉の特徴やきまり（文字に関すること）		
・平仮名 ・片仮名 ・配当漢字	・配当漢字 ・ローマ字	・配当漢字
・アルファベット(読む)	・アルファベット(書く) ・英単語	・ヘボン式ローマ字 ・英文
ア・イ言葉の特徴やきまり（文法や語法に関すること）		
・漢字と仮名 ・長音，拗音，促音，撥音 ・主語と述語 ・句読点 ・かぎの使い方 ・敬体	・漢字と仮名 ・修飾と被修飾 ・改行の仕方 ・指示語，接続語 ・段落の役割 ・敬体と常体	・漢字と仮名 ・比喩，反復表現 ・文の接続 ・文章の種類と特徴 ・文章の構成と展開 ・敬語
・標準的な発音 ・語の連結による音の変化 ・強勢 ・イントネーション ・単文，否定文，疑問文	・標準的な発音 ・語の連結による音の変化 ・強勢 ・イントネーション ・区切り ・終止符やスペース ・単文，否定文，疑問文 ・疑問詞	・標準的な発音 ・語の連結による音の変化 ・強勢 ・イントネーション ・区切り ・コンマや疑問符などの符号 ・単文，否定文，疑問文 ・代名詞 ・過去形

「言語基礎」の内容については，第１学年から第４学年までは，言葉の学習の基盤として，高学年では，言葉がもつ特徴について気付くことを示している。このことが言語感覚を磨くことにつながるからである(表２)。

【表３　「B言語論理」の系統】

１・２年生	３・４年生	５・６年生
ウ・エ　話すこと・聞くこと		
・声の大きさ ・話す速さ ・実物の活用 ・落とさないように聞くこと ・発言を受けてつなぐこと	・抑揚や強弱 ・間の取り方 ・メモや質問をしながら聞くこと ・役割を果たしながら話し合うこと	・資料の活用 ・意図を捉えながら聞く ・立場や意図を明確にして計画的に話し合うこと
・声の大きさ ・アイコンタクト ・表情 ・ジェスチャー ・抑揚や強弱 ・質問したり，質問に答えたりしてやりとりすること	・話す速さ ・ジェスチャー ・抑揚や強弱 ・実物の活用 ・間の取り方 ・反応を返したり，質問したりして会話をつなぐこと	・声の明瞭さ ・ジェスチャー ・抑揚や強弱 ・実物や資料の活用 ・相手の意図を考えながら，反応を返したり，言葉を選んで話したりすること
オ・カ・キ　書くこと		
・事柄の順序 ・簡単な構成 ・読み返す習慣をつけること	・理由や事例との関係 ・段落相互の関係 ・文や文章を整えること	・事実と感想，意見との区別 ・資料の引用 ・文章全体の構成 ・文や文章を整えること
ク・ケ・コ　読むこと		
・時間的な順序と事柄の順序 ・内容の大体の把握 ・場面の様子や人物の行動	・段落相互の関係 ・叙述を基に捉える ・人物の行動や気持ち ・要約 ・情景，場面の移り変わり	・事実と感想，意見との関係 ・要旨の把握 ・人物の相互関係や心情 ・論の進め方 ・表現の効果

・場面の様子や人物像	・内容の大体の把握 ・語彙や表現の識別	・必要とする情報の収集 ・語彙や表現の識別 ・言葉を基に捉える

「Ｂ言語論理」の内容では，「エ話すこと・聞くこと」においては，ノンバーバルコミュニケーションに関わる概念を取り上げ，日本語と英語を関連付けて学習ができるように系統立てた。また，「オ・カ書くこと」と「キ・ク読むこと」の内容については，中心概念を表現と理解の関係としてひとまとまりの複合単元を構想できるようにしている。

その上で，全体として低学年では，時間や事柄の順序，人物の行動や会話を重視し，中学年では，理由や事例を挙げながら中心点を明確にすることや段落相互の関係，人物の気持ちの変化などを取り上げ，高学年では，反証事例や資料の効果，情景描写に込められた人物描写，全体像の把握など系統立てることにより，当該内容で捉えさせたい概念を明確にした（表３）。

【表４　「Ｃ言語文化」の系統】

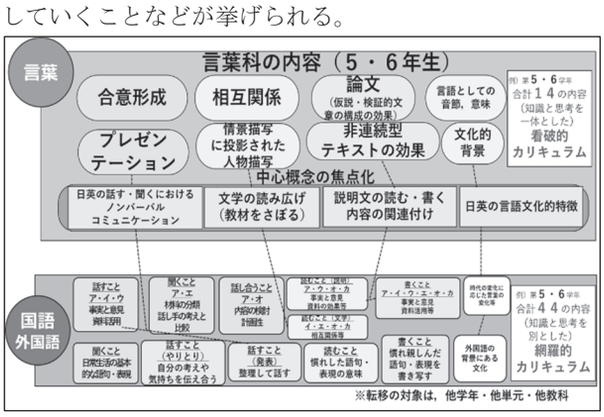
１・２年生	３・４年生	５・６年生
サ・シ　価値（言語材料例）		
・昔話や神話 ・言葉遊び	・俳句 ・ことわざや慣用句 故事成語	・短歌 ・古文 ・文語調の文章
・外国の絵本 ・外国の昔話 ・言葉遊び	・早口言葉 ・ことわざ ・RAKUGO	・英語の歌 ・HAIKU，TANKA ・英字新聞
サ・シ　価値（言語の特徴に関すること）		
・英語も日本語と同じように，物や場所，様子，気持ちを示す言葉があることや，同じ物や場所，様子でも違う見方がされていること	・英語と日本語では発音やリズム，イントネーションや意味が異なっていることや，言葉には，それを使う国の人々のものの見方や考え方が込められていること	・イメージを的確に示す英語に対して，表現に表れていない思いを推し量る余地のある日本語の特徴

「Ｃ言語文化」の内容では，「価値」のそれぞれに系統性をもたせた。「シ価値」では，日本語と英語の機能的な特徴を捉えさせることで，その共通点や相違点を統合して学習することができるようにしている。その上で，低学年では，日本語や英語のおもしろさに気付くこと，中学年では，日本語や外国語の音声や意味の違いに気付き，文化的背景があることを捉えること，高学年では，言語としての特徴を基に言葉に込められた思いや言葉を学ぶ価値を捉えることを意図した（表４）。

(4) 内容精選の考え方

ア　焦点化

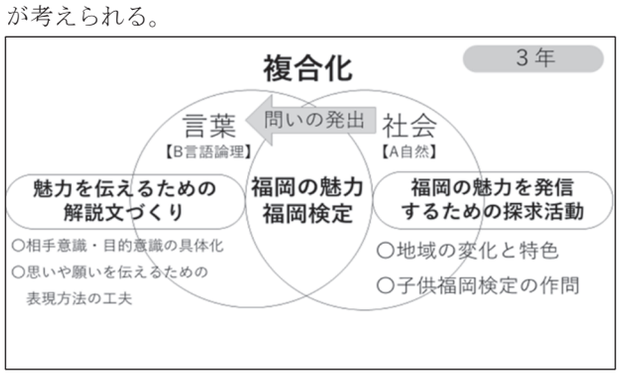
子供の文脈に沿いつつも，身に付けておくべき知識及び技能を焦点化し，効果的な指導を基に内容精選を図る。具体的には，現行国語科と外国語科（活動）から，重なりのある内容を統合することで時数を削減し，言語論理における文学的文章を読むことの中心概念を明確にし，その周辺の事実的知識を削減するとともに，教材数を削減していくことなどが挙げられる。



【図３　言葉科における焦点化の例】

イ　複合化

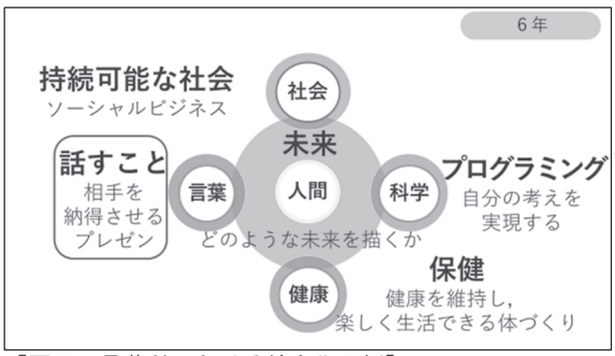
同じ対象に対して教科内で概念を複合的に捉え，単元を設定する。具体的には，読むことと書くことの概念の重なりから統合的な単元をすることなどである。言葉科は他教科で内容を捉え，方略として書く，話すなどの学習を展開する統合も目指す。具体的には，商品のよさを伝えるという学習に対して，社会科では，商店街の現状を調べ，解決策を考えることから，言葉科では，言葉の特徴を生かして商品のよさを伝える学習に発展することが考えられる。



【図４　言葉科における複合化の例】

ウ　統合化

人間科を主概念として，教科横断的な学習の中で，各教科の概念をつなぐ学習を行う際，言葉科は関連概念としてつながる内容が多い。具体的には，１年生との関わりを深める学習においては，人間科で主概念を位置付け，関連概念として，言葉科では１年生におすすめの本を紹介して，相手意識，内容意識，目的意識，場の意識を意識した自己表現を位置付けることなどがあげられる。このように方略を中心とした関連概念として言葉科の学習を位置付ける。



【図５　言葉科における統合化の例】

4　各学年の内容

〔第１学年及び第２学年〕

【A　言語基礎】

（言葉の特徴やきまり）

ア　相手を意識して，ひらがなやカタカナ，簡単な漢字を用いて日本語の文章を書いたり読んだりすることを通して，主語と述語の「誰が何する・何がどんなだ・何がなんだ」といった文の中における主語と述語との関係や言葉には，意味による語句のまとまりがあることを理解する。

イ　英語を使って交流することを通して，アルファベットの組み合わせによって，単語が作られ，それが意味をもっていることに気付き，それらを使うことで自分の考えや気持ちなどを伝えることができることを理解する。

【B　言語論理】

（話すこと・聞くこと）

ウ　自分の伝えたいことを日本語や英語で話し合うことを通して，自分が聞きたいことを明確にして話を聞いたり，事柄の順序を意識しながら聞いたりするとよいことを理解する。

エ　自分の伝えたいことを日本語や英語で話し合うことを通して，相手に伝わるように表現するためには，声の大きさや速さなどを工夫するとよいことを理解する。

（書くこと）

オ　自分の思いや考えを分かりやすく伝えるために日本語で文章を書くことを通して，内容のまとまりを理解するような文章に表現するには，語と語や文と文との続き方や事柄の順序に着目するとよいことを理解する。

カ　経験したことや想像したことを日記や手紙，短作文などの文や文章に表現することを通して自分の思いや考えを明確にするには，時間の順序に着目するとよいことを理解する。

（読むこと）

キ　自分の体験と結びつけながら感想をもつために日本語の文章を読むことを通して，内容の大体を理解するには，時間的な順序や事柄の順序を表す表現や，書き手が強く伝えたい言葉に着目するとよいことを理解する。

ク　自分の体験と結びつけながら感想をもつために日本語の文章を読むことを通して，登場人物の様子を具体的に想像するには，登場人物のしたことやそのときの表情や口調，様子に着目するとよいことを理解する。

【C　言語文化】

（価値）

ケ　昔話や神話・伝承などを読んだり，言葉遊びをしたりすることを通して，長く親しまれている言葉のリズムのおもしろさや時代に応じて表現の仕方が異なっていることを理解する。

コ　日本語と英語の表現を比較することを通して，英語も日本語と同じように，物や場所，様子，気持ちを示す言葉があることや，同じ物や場所，様子でも違う見方がされていることを理解する。

〔第３学年及び４学年〕

【A　言語基礎】

（言葉の特徴やきまり）

ア　目的や相手を意識して適切な表現を選んで日本語の文章を書いたり読んだりすることを通して，「何を～どうする・どんな～何が」といった修飾と被修飾の関係や，こそあど言葉（指示語）や順接・逆接といった接続語や意味のまとまりをつくる段落の役割を理解する。

イ　英語を使って交流することを通して，それぞれのアルファベットには，発音の仕方がいくつかあることに気付き，そのきまりに着目することで活字体で書かれた文字と発音を結びつけることができることを理解する。

【B　言語論理】

（話すこと・聞くこと）

ウ　互いの考えの共通点や相違点を明らかにするために日本語で話し合うことを通して，話の中心を適切に捉えたり，表現したりするには，考えの理由や事例を捉えたり，表現するとよいことを理解する。

エ　互いの考えの共通点や相違点を明らかにするために日本語や英語で話し合うことを通して，相手に分かりやすく伝えるためには，自分が最も伝えたいこと（話の中心）を意識して，言葉の抑揚や間の取り方を工夫するとよいことを理解する。

（書くこと）

オ　伝えたいことを相手に明確に表現するために日本語で文章を書くことを通して，伝えたいことが明確になる文章に表現するには，相手や目的を意識して，自分の考えとそれを支える理由や事例との関係に着目するとよいことを理解する。（複合化）

カ　体験したことや，想像したことを物語に表現することを通して，自分の思いや考えを明確にする

には，登場人物の性格や気持ちの変化，起承転結の構成や情景描写に着目するとよいことを理解する。

キ　英語の文章や言語文化に親しむことを通して，言葉や表現方法の特徴に気付き，考えと理由や事例を明確にして日本語で文や文章，英語で簡単な単語や文を書こうとする。

（読むこと）

ク　自分の体験や学習したことと関連付けて自分の考えをもつために日本語の文章を読むことを通して，書かれていることを要約するには，考えとその理由や事例との関係，内容の中心となる語や文に着目するとよいことを理解する。

ケ　虚構の世界を豊かに想像するために，日本語の文章を読むことを通して，登場人物の気持ちの変化を具体的に想像するには，行動や会話，情景など複数の表現に着目するとよいことを理解する。

コ　簡単な英語で書かれた文を読み，考えたことを話し合ったり，考えを共有したりして表現の仕方の特徴や一人一人の感じ方の違いを理解する。

【C　言語文化】

（価値）

サ　長い間使われてきたことわざや慣用句，故事成語などを読むことを通して，それぞれの時代を生きた人々の考えや知恵を言葉にすることで，後世に伝えることができることを理解する。

シ　日本語と英語の表現を比較することを通して，英語と日本語では発音やリズム，イントネーションや意味が異なっていることや，共通点として，言葉の意味には，それを使う国の人々のものの見方や考え方が込められていることを理解する。

〔第５学年及び６学年〕

【A　言語基礎】

（言葉の特徴やきまり）

ア　目的や意図に応じて，適切な表現を選んで日本語の文章を書いたり読んだりすることを通して，三段構成や四段構成といった論の展開には，きまりがあることに気付き，述べ方の違いによる文章構成の効果によって伝わり方が異なることを理解する。

イ　英語を使って交流することを通して，同じアルファベットであっても，単語を構成する際の位置によって発音が変わることに気付き，文章を書く際には，大文字の使い方やカンマやピリオドなどといったきまりがあることを理解する。

【B　言語論理】

（話すこと・聞くこと）

ウ　意見や提案など自分の考えを話したり，それらを聞いたりするために日本語で話し合うことを通して，目的や意図を適切に捉えたり，表現したりするには，事実と感想，意見を区別して構成を捉えたり，表現したりするとよいことを理解する。（統合化）

エ　自分の考えを相手と共有するために日本語や英語で話し合うことを通して，自分の考えを伝えるためには，資料の活用や相手の考えに応じて反応の仕方や内容の順序を変えるとよいことを理解する。（統合化）

（書くこと）

オ　自分の主張を相手に理解してもらうために日本語で文章を書くことを通して，目的や意図に応じた文章に表現するには，文章全体の構成として，頭括型・尾括型・双括型のそれぞれの効果に着目して書き分けるとよいことを理解する。

カ　作者の生き方や作品の背景と関連付けて想像したことや感じたことを短歌や俳句，詩に表現することを通して，イメージを的確に表現するには，比喩，倒置，擬人化，七五調のリズム，文語調における修辞法（切れ字，かかり結び）の効果に着目するとよいことを理解する。

キ　英語で文を書くことを通して目的や意図に応じて適切に表現することのよさを理解する。

（読むこと）

ク　自分の考えを再構成したり，強化したりするために日本語の文章を読むことを通して，筆者の主張を的確に捉えるためには，文章構成における反証事例や非連続テキストの効果に着目するとよいことを理解する。

ケ　虚構の世界にひたり，自分の生き方を考えるために，日本語の文章を読むことを通して，全体像を具体的に想像するには，人物の相互関係，情景描写に投影された人物描写，結末と読後感に着目するとよいことを理解する。

コ　簡単な英語で書かれた文章を読み，自分の考えを深めることを通して，表現の仕方の特徴や感じ方の違いを理解する。

【C　言語文化】

（価値）

サ　継承されている歌や古典文学などを解釈することを通して，表現する言葉や方法は変わっても，表現に込められた作者の思いは文字を介して時代を超えて学び手に伝わることを理解する。

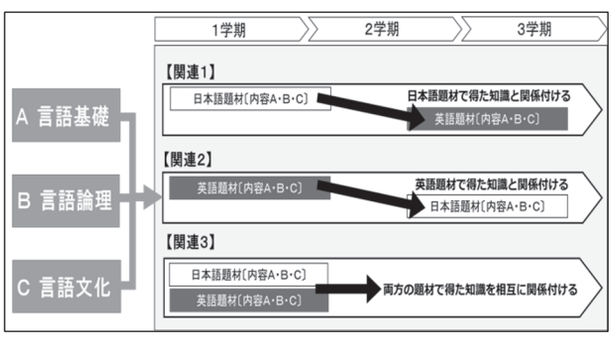
シ　日本語と英語の表現を比較することを通して，英語はイメージを的確に示すことができる言語であることに対して，母国語である日本語は表現に表れていない表現者の思いを推し量る余地のある言語であることを理解する。

5　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

言葉科の年間指導計画の作成にあたっては，他教科，日本語と英語との関連，そして子供の文脈を大切にした作成を行う。具体的には，日本語と英語との関連において，年間を通して，日本語と英語とを関連させた内容を１つずつ配列する。その単元で，言葉への価値を見いだすことができるようにする。その際，関連の視点を３つとする。１つは，英語文化への気付きを促す日本語題材を，関連する英語題材に位置付ける【関連１】。２つは，日本語文化への気付きを促す英語題材を，関連する日本語題材の前に位置付ける【関連２】。３つは，日本語文化と英語文化の相互に関連する題材を，並行して位置付ける【関連３】（図６）。



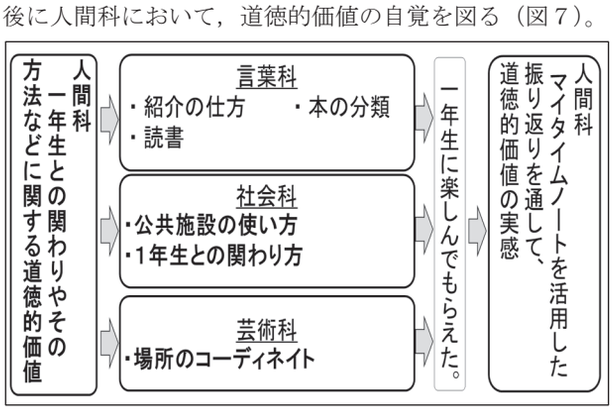
【図６　年間指導計画のイメージ】

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

本校言葉科におけるテーマ学習は，人間科を中心に言葉科や他教科において総合的･横断的に学びを展開する。

具体的には，人間科において「１年生との関わりを深めるためには，どのようなことが必要だろうか」という問いが生まれた場合，言葉科においては，読書が好きな１年生のために本を紹介するという思いをもつ。そして，本の紹介の仕方を知り，実践する。社会科においては，福岡市総合図書館の利用法や１年生との関わり方を考える。芸術科においては，１年生に本を紹介する場所の飾りづくりや飾り付けを行うなどの学習が考えられる。最後に人間科において，道徳的価値の自覚を図る（図７）。

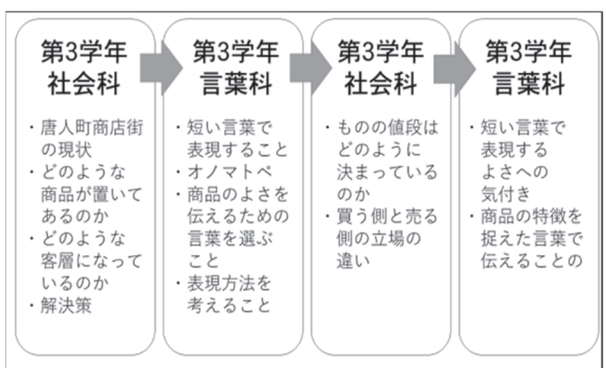


【図７　テーマ学習の例】

(ｲ) リレーション学習

本校言葉科におけるリレーション学習は，言葉科の学習で扱う対象から他教科の内容の関連が図られることが考えられる。

具体的には，第３学年においては，図８のような社会科と言葉科の学習が考えられる。まず，社会科において唐人町商店街に海外のお客さんが来るという現実や商品のよさが伝わりにくいという現状と出合い，解決策を考える。そのことを解決するために，次に，言葉科において短い言葉やオノマトペを使って海外の人に商品のよさを知らせる。さらに，社会科においてそれぞれの商品の値段の決め方について疑問をもち，自分たちが使っていたものをリサイクルショップで販売することでその方法を学ぶ。最後に，言葉科において，商品のよさを外国人に効果的に伝えることができたことを振り返る。

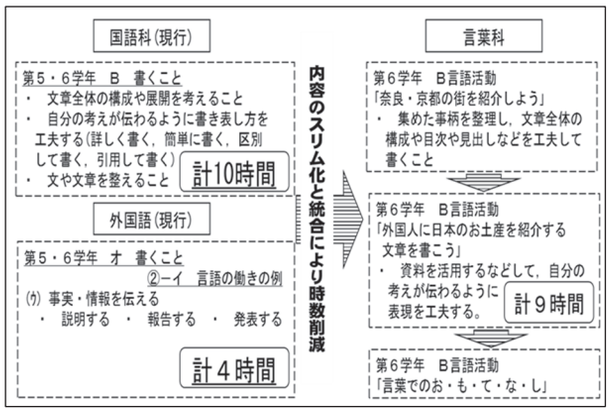


【図８　リレーション学習の例】

(ｳ) フォーカス学習

本校言葉科におけるフォーカス学習は，言語活動を統合的に扱う単元構成を位置付けることで，知識の焦点化を図ることができる。

具体的には，視点が３つある。１つは，テキストや資料から自分の考えを創り出し，書いたり，話し合ったりすることで考えを表出する単元構成である。２つは，文学的教材を読み，作者，テーマなどを関連付けて読み広げる単元構成である。３つは，日本語と英語の内容を統合する単元構成である。日本語と英語の内容を統合する単元構成では，現行の第６学年国語科で行う「話すこと・聞くこと」の 10 時間単元と外国語科で行う「話すこと」の４時間単元の内容を精選し，統合することにより，５時間の削減が可能となる（図９）。話し手と聞き手が互いの考えを理解し合うために必要な非言語の活用や話の組み立てを身に付けさせる。

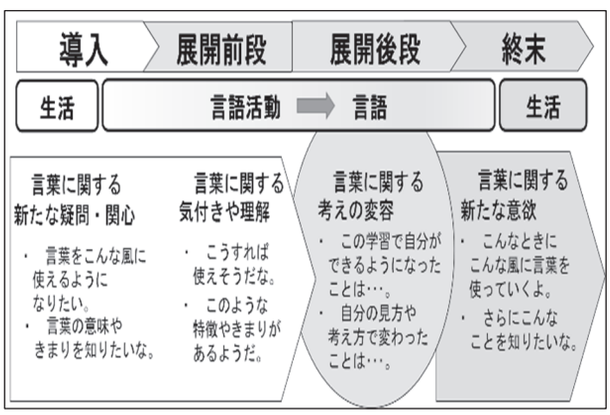


【図 10　フォーカス学習の例】

ウ　１単位時間の学習のプロセス

本校言葉科では，日常生活の中から言葉に関する問いを見いだし，言語活動を通して解決を図り，言語の価値を見いだす学習を一単位時間で行っていく。

具体的には，「Ｃ言語文化」の学習では，展開前段において，充分に言語文化の特徴に浸らせる。ここで学習の個別化を図り，子供が追究したいテーマを選択し，調べたり，同じテーマの友達と話し合ったりして言語文化の特徴や価値について掘り下げる。その上で，展開後段では，個別に追究した言語文化について異なる事例を調べた友達との共通点から言葉自体の価値や言葉を学ぶ意義について話し合っていく一単位時間の流れが考えられる(図 11)。



【図 11　一単位時間の流れ】

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

言葉科の指導にあたっては，３(5)の「内容精選の理念」に照らして，各学年の目標や内容のねらいが十分達成できるように次の事項に配慮する。

ア　学習活動の条件と具体

言葉科において螺旋的・反復的に行っていた学習内容や学習活動の精選や統合，他教科への移行を行う。子供の発達段階を考慮し，言葉の豊かな使い手を育てるために必要な内容を取り扱うとともに，子供に学びを自覚させながら，言葉の学びを積み上げていく。

具体的には，考えを表出する方法に言葉科では焦点化を図り，考えを形成するための活動は他教科に移行する。

イ　真性の課題の条件

４の各学年の目標及び内容に示す資質・能力を偏りなく養うことや「教科の究極の目標」を形成することをねらいとして，精選し，調和的に取り上げることとする。その際には，次のような真正の課題としての条件を満たした教材を精選することとする（表６）。

【表６　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知のまとまり	言葉そのものや言語文化から生まれた課題，これまでに学習した学び方などが上学年や中学校に系統立ててつながるもの
たくましい追究	言葉を話したり書いて伝え合ったりするなど，他者との交流を通して新たな考えを見いだせるもの
学校を超える価値	言葉や言葉を学ぶ価値に迫ることを通して，言葉を主体的に使おうとする意欲を高められるもの

ウ　学習としての評価

言葉科が目指す資質・能力も育成を目指し，以下の視点や方法で自己評価を行う（表７）。その際，学びにおける振り返りの軸は主に創造性の観点で設定していく。

【表７　振り返りの軸】

課題発見・解決, 言語感覚, 分析・生産, 論理	
下学年	例： この言葉にはこのような思いが込められていると思う。この言葉から登場人物がこのように考えていることが分かる。 この言葉の方がわたしの考えに合うと思う。○○さんの言葉を合わせると，より自分たちの思いや考えに近づくのではないか。
上学年	例： “Give if you can”というキャッチコピーはどのような意味なのだろう。どのような思いが込められているのだろう。意味を調べたり，使い手に尋ねたりしたことで，if に込められた思いや考えが分かった。 日本語と英語の語順は違う。日本語には物の様子や状態を表す形容詞がたくさんある。英語は単語と単語の音がつながることがある。

学びの足跡を書くことを通して，子供たちが目標設定した姿と今の自分の姿がどのくらいかということや,今どのくらい自分の歩みはすすめられているのか重視し,言葉科の時間に自己内省することができる。

(3) 言葉科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，創造性や協働性などの資質・能力を発揮しながら言葉科における学びを深めていく上で必要となる基礎的な知識や内容の習得を目指している。具体的には，日本語では，詩や俳句などを音読したり，言葉の特徴やきまり，漢字を読み書きする問題を解いたりすること，英語では，日常的な会話表現や様々な場面における会話表現をチャンツのリズムに合わせて読んだり，発話したりすることである。たんれんの 10 分間では，全体

で，フラッシュカードや群読，英会話の発話などを行い，自分の課題を設定して学習プリントに取り組むようにする。学習プリントについては，子供一人一人の課題や目的に応じた自己決定を位置付けることで，学ぶ意欲を持続・向上させたり，知識習得の達成感を味わわせたりすることができる。

たんれん「言葉」の内容は，Ａ言葉の特徴やきまり，Ｂ漢字，Ｃ読むこと，Ｄ英会話の４つである。具体的には，次の通りである（表９）。

【表９　たんれん「言葉」の内容】

Ａ言葉の特徴 やきまり	・主語や述語，修飾語の関係 ・接続語，指示語　など
Ｂ漢字	・当該学年で学習する漢字 ・漢字検定で出題されている漢字
Ｃ読むこと	・文学的な文章 ・説明的文章　など
Ｄ英会話	・日常生活の様々な場面で使う表現 ・自分の思いや考えを伝える表現

(4) 言葉科に関わるチャレンジ

言葉科に関わる落語チャレンジやイングリッシュチャレンジを選択した子供たちは，日本語，英語の各内容に取り組み，言葉への関心や言葉に関する技能，表現力を高めることを目指す。具体的には，日本語では，落語という古典のおもしろさを究明することに取り組むこと，英語では，スピーチやプレゼンテーション，留学生との交流を通して，英語での自己表現に取り組むことである。

ア　落語チャレンジ

（ア）　活動の目的

漫才づくり，落語をすることを通して，面白いことを考える発想力，考えたことを表現するプレゼンテーション力，他者とのコミュニケーション力を高めようとする。

（イ）　活動の内容

○　落語の台本を調べたり，覚えたりすること ○　漫才の台本を作成し，漫才を演じること ○　謎かけクイズをつくり，言葉の面白さについて追究すること ○　漫才コンテスト，落語コンテストの開催 ○　笑いの仕組みを調べること

イ　イングリッシュチャレンジ

（ア）活動の目的

言葉に関する課題を追究し，言語感覚を豊かにしたり，英語に関する知識及び技能を高め，英語を使って他者とよりよく関わろうとしたりする。

（イ）　活動の内容

○　英語による歌唱（通年） ○　英語によるスピーチコンテストの課題文の音読及び暗唱（後期） ○　英語によるプレゼン・落語（後期）

〈註〉

[1]岩淵悦太郎(1957)『現代国語学Ⅰ(ことばの働き)』筑摩書房

[2]高木まさき(2019)『教育課程部会資料３「PISA2018 読解力調査結果を受けて」』

[3]渋谷孝(1987)『「言語」教育の現状と課題』明治図書

[4]浜本純逸 (2008)『国語科教育の未来へー国語科・日本語科・言語科ー』. 溪水社.

[5]OECD 教育研究革新センター (2015) 『グローバル化と言語能力』. 明石書店.

[1]総務省(2018 年)「情報通信白書」我が国では，スマートフォンは 2010 年ころから普及が始まった。スマートフォンの個人保有率は 2013 年から 2017 年の間に全体で 10%以上増加している。スマートフォンの個人保有率は多くの世代で増加傾向にあるものの，20 代，30 代は 90%以上の利用者がスマートフォンを保有するのに対して，70 代のスマートフォン保有者の割合は 18.8%，80 代のスマートフォン保有率は 6.1%と，世代間の差が大きい。

[2]高木まさき(2019)『教育課程部会資料３「PISA2018 読解力調査結果を受けて」』読解を含め，言語生活全般の質を高める観点から，様々なテキストにふれ，言葉に対して自覚的になるような学習指導が必要である。また，目標や指導内容，学習過程の明確化とともに，学習者に学習の見通しをもたせ，適切に振り返りをさせることなどを通して，学びへの自覚を高め，自らの考えを形成させることが必要である。

[3]渋谷孝(1987)『「言語」教育の現状と課題』明治図書　国語科教科書の説明文教材を「材料」とした，情報習得学習はあってもよい。しかし，その立場は読み方学習指導とは趣の異なることであることを心得ておく必要がある。

[4]浜本純逸 (2008)『国語科教育の未来へー国語科・日本語科・言語科ー』. 溪水社 国語科で育てる学力は，生活に「生きて働く言語能力」であり，生活を向上させる言語を学ぶ力である。意図的にもうけられた「見る，聞く，話す，読む，書く」言語活動の過程において育つ。学習過程での積極的な参加意欲や学習計画力・調べたりインタビューしたりの探求活動および発表（報告）活動，その学習記録や制作物などに注目して評価していくことが必要である。

[5]国立大学法人福岡教育大学附属福岡小学校 (2016)『未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ』原作の英語と日本語訳の言葉，日本語訳の言葉と自分の言葉，友達が選んだ言葉と自分の言葉の３つの観点で言葉を比べて気付いたことを伝え合い，言葉についての感じ方の変容を実感できるようにすること

[6]高橋秀彰 (2012) 『岐路に立つルクセンブルクの３言語主義』文化的，学問的に豊かな背景を持ち，ルクセンブルク人の母語に最も近いドイツ語が授業言 語として最適であるという判断によって，小学校ではまずドイツ語で教育を行う言語教育政策 を採用している。それに伴い，小学校では言語科目としてのドイツ語の配当時間数が，2 年次 までは最も多くなっている。

[7]岩淵悦太郎(1957)『現代国語学Ⅰ(ことばの働き)』筑摩書房 言語は人間の社会生活の全分野にわたっており，書物を読んだり書物を書いたりする生活は，言語生活の限られた一部分にしか過ぎない。言語機能の考察はもっと広い視野に立って，その本質的なものをつかむようにしなければならない。

[8]OECD 教育研究革新センター (2015) 『グローバル化と言語能力』. 明石書店. 言語学習は，コミュニケーションを促進する手段であるだけでなく，アイデンティティや他者性，さらには文化や世界についての理解を深める鍵となる。

数学科編

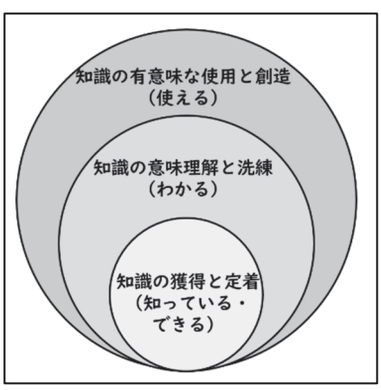
1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

算数科・数学科を取り巻く社会の状況は，近年激変している。高等学校までに学ぶ数学的な計算の大半は，アプリケーションソフトで代替可能である。また，大量なデータを基に，不確実性の度合いを数量的に評価して意思決定に利用することが常識になり，数理的に事象を把握・処理する力が，職業生活だけでなく，市民生活においても不可欠となっている。こうしたグローバル社会を生き抜く上で数理的に事象を把握・処理する力は必要な資質の核心に位置づけられるべき力となっている。こうした社会の状況に対応すべく，事象から数学的な問いを見いだし，論理的思考を通して新たな考えをつくり出すことができる創造性の育成が必要であるとされている[1]。

(2) 現行の算数科から見える課題

OECD 生徒の学習到達度調査（2018 年）の結果から，我が国における数学的リテラシーの平均得点は国際的に見ると高く，引き続き上位グループに位置しているなどの成果が見られるが，学力の上位層の割合はトップレベルの国・地域よりも低い結果となっている。また，ＴＩＭＳＳ 2015 の結果では，日本の中学生や高校生の数学を学ぶ意義についての意識や数学を学ぶ意欲は，改善が見られるものの，依然として他の国より低いことが明らかにされている[2]。こうした課題を受け，数学科においては，問題解決に対して子供が主体的に追究する学習活動を一層重視していく。また，現行の算数科は各学年の系統性がはっきりしているというよさがある一方，獲得した知識や技能が「知っている・できる」レベルに留まってしまい，実生活や他の学習で類似した場面に出合ったときに活用できる「使える知識」にまで高めることができていないという課題がある（図１）[3]。



【図１　学力の質的レベル】

そこで，これまでの学習内容を見直し，子供の生活，思いや課題意識を大切にしながら，「使える知識」を身に付けさせていくための指導の在り方を再考する必要がある。

(3) 算数科に関わる本校のこれまでの研究

算数科に関わって，本校では，昭和 34 年度から数学的な思考力に掉さす研究が進められてきた[4]。それ以前は「実用算数」をキーワードに，生活単元的な算数科の指導が行われており[5]，昭和 33 年の学習指導要領改訂を踏まえて数学的な思考力の育成が重視されるようになった。本研究における創造性が，約 60 年前から重視されていたことが分かる。本校における過去の研究を参考にしながら「数学的な思考力とは何か」ということや，数学的な見方・考え方と資質・能力との関係を捉え直し，現行の算数科における内容をスリム化していく必要がある[6]。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

ア　成果

研究を行った結果，以下の点が成果として見えてきた。

○　不易と流行の観点から，今後の未来社会に活かせるものを題材化することができた。
○　資質・能力を重視し，これから必要な内容を整理することで，現行の内容を精選することができた。

１，２年次は現行の理科と算数科を統合させた領域を新設したことで，自然の事象を数理的に処理していく資質・能力を育成することができた。３，４年次は「すうがく」という領域を新設し，数学的な問題解決に特化した内容を扱ったことで，数学的な思考力を養うとともに，数学的な世界の面白さを捉えさせることができた[7]。

イ　課題

４年間の研究を通して，以下の課題も明らかになった。

●　資質・能力を重視しているとはいえ，「活動あって学びなし」に陥らないためにも，獲得すべき内容をはっきりさせていく必要があった。
●　さらなる内容の精選を図っていくためにも，「算数科の本質とは何か」という問いに立ち返り，その視点から領域のカリキュラムを再編成していく必要があった。

今年度は教科「数学」として，現行の算数科で大切にされている「論理的思考力」，「数学的な見方・考え方」，「数理」，などの捉え方は踏襲しつつ，内容を落ちなく獲得した上で昨年度以上に効率的に思考力を育成していくための内容のスリム化を図る[8]。そのために，スリム化の原理を明らかにするとともに，原理に基づいたカリキュラムの見直しや，題材の開発に取り組んでいく。なお，数学科ではフォーカス学習を中心としつつ，子供の求めに応じてテーマ学習，リレーション学習を効果的に配列していく。

2　目標

(1) 教科の目標

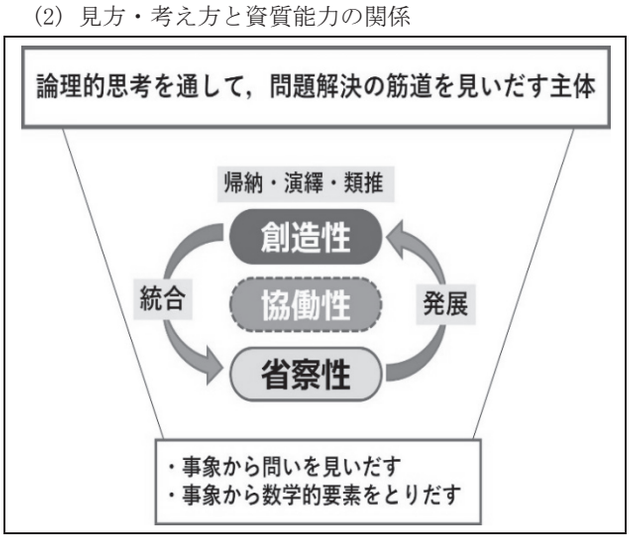
数学的な要素(数・量，形，データ・変化など)を含む事象から見いだした問いを数学的に解決する過程で，数学的な見方・考え方を養うことで，３つの資質・能力を次の通り育成することを目指す。

(1)数学的な要素(数・量，形，データなど)を含む事象から問いを見いだし，論理的思考を通して，新たな考えをつくり出すことができる。(創造性)

(2)見いだした問いに対して他者と共に考えをつくり出したり，図や式，表などを用いて考えを伝え合ったりすることができる。(協働性)

(3)問いを解決する過程を振り返ることで，自己の変容や高まりを自覚し，数・量，形，データなどについて考える楽しさに気付こうとする。(省察性)

(2) 見方・考え方と資質能力の関係



【図２　数学科における目標と資質・能力の関係】

数学的な見方・考え方とは，事象を数学的な視点で捉え，論理的思考を働かせながら問題解決の筋道を見いだすことである。数学科で重視する資質・能力は創造性である。数学科では創造性を，「数学的な要素(数・量，形，データ・変化など)を含む事象から問いを見いだし，論理的思考を通して，新たな考えをつくりだす資質・能力」と定義付け，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」を含み込んだものとして捉えている[9]。また，協働性，省察性は創造性を育成するために必要な資質・能力と位置付ける[8]。

(3) 学年の目標

〔第１学年〕

①　具体物や半具体物を用いた活動を通して，数や量，形の面白さや不思議さに気付き，自分なりの考えを見いだすことができる。(創造性)

②　具体物や半具体物を用いて，友達と話し合ったり，一緒に活動したりして，共に考えを出し合い，仲間と共に考えることを楽しもうとする。(協働性)

③　具体物や半具体物を用いた活動を通して，数・量，形に親しみながら，自己の伸びを振り返り，実感しようとする。(省察性)

〔第２学年〕

①　必要に応じて具体物や半具体物を用いた活動を通して，数の仕組みやきまりを見つけたり，図形の構成要素の特徴に気付いたりすることができる。(創造性)

②　必要に応じて具体物や半具体物を用いた活動を通して，友達とアイデアを出し合ったり，考えを伝え合ったりするなどして，よりよい問題の解決に生かそうとする。(協働性)

③　必要に応じて具体物や半具体物を用いた活動を通して，数学的に表現・処理し，それらを振り返り，数や量，形について追究することの楽しさを実感しようとする。(省察性)

〔第３学年〕

①　身の回りの問題解決に数や量，形を活用するなどの活動を通して，小数や分数，平面図形について理解し，論理的に推論しながら問題解決することができる。(創造性)

②　友達とつくった問題を出し合ったり，アイデアを出し合ったりしながら，友達に自分の考えを伝えたり，友達の考えを聞いたりすることを通して協力して身の回りの問いを解決しようとする。(協働性)

③　数学的に物事を表現・処理しながら問いを解決し，その活動を振り返ることによって，数や量，形の面白さに気付くとともに，自己の伸びを実感しようとする。(省察性)

〔第４学年〕

①　整数や小数，分数の計算の仕方を考えたり，図形の面積の求め方を考えたりする活動を通して，数処理の仕方や面積の意味および求め方について理解することができる。(創造性)

②　身の回りの問題解決に数や量，形を活用するなどの活動を通して，友達とアイデアを出し合い，問題解決に役立てようとする。(協働性)

③　事象を数学的に表現・処理し，その活動を振り返ることによって，自己の伸びを実感しようとする。(省察性)

〔第５学年〕

①　分数や小数の計算の仕方を求めたり，解決に必要な視点を考えてデータを基に追究するなどの活動を通して，数や量，形の処理について論理を基に推論したり，データを基に事象を多面的に考察したりして，問いの解決に生かすことができる。(創造性)

②　友達のアイデアを自分に取り入れたり，自分の考えを友達と伝え合ったりして，友達と協力しながら効率的に問いを解決したり，事象を多面的に

考察したりしようとする。　（協働性）

③　抽象的に数や量，形を処理したり，複数のグラフを基に事象を多面的に考察したりする活動を通して，数学的・多面的に物事を表現・処理し，その活動や活動を通した学びを振り返ることによって，自己の伸びを実感しようとする。　（省察性）

〔第６学年〕

①　分数や文字式の計算について考えたり，求積をしたりするなどの活動を通して，論理的に推論しながら問題を解決することができる。（創造性）

②　友達のアイデアを取り入れたり，自分の考えの根拠を明確にして友達に伝えたりして，協力しながら効率的に問いを解決しようとする。　（協働性）

③　抽象的に数や量，形を処理する活動を通して，数学的に物事を表現・処理し，活動を振り返ったり，未来のことを考えたりすることによって，自己の伸びや考えることの楽しさを実感し，さらなる目標を設定しようとする。　（省察性）

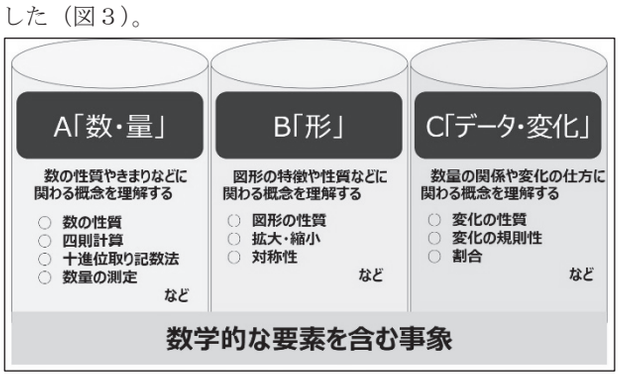
3　内容構成

(1) 内容構成の考え方

数学科は，問いを解決するために論理的に思考することを目指す教科であり，数理を獲得したり，帰納的，演繹的に問いを解決したりする力の育成を目指す。そこで，数学的な要素を基に内容区分を設定した[9]。

(2) 具体的な内容構成

数学科では，事象に含まれる数学的な要素に着目し，「A数・量」「B形」「Cデータ・変化」の３つから内容を構成した（図３）。



【図3　数学科の内容構成】

数学科の内容構成は，現行算数科の内容を削減したり統合（表１）したりして整理している。

【表１　内容の比較（具体例）】

現行	本校
A　数と計算（１年） ・　いくつと　いくつ ・　おなじ　かずずつ	A　数・量（１年） ・　ならべかたや　わけかたを　くふうしよう
C　変化と関係（５年） ・　単位量あたり ・　速さ	C　データ・変化（５年） ・　速さを比べよう！ ～わたしは旅行プランナー～
B　図形（６年） ・　図形の拡大・縮小 C　変化と関係（６年） ・　比とその利用	B　形（６年） ・　宝の地図を読み解け

内容の構成については，現行算数科の内容を見直し，スリム化を図っている。具体的には，取り扱う内容の中心概念を明らかにし，焦点化して指導したり，他教科と共通する概念を明らかにし，関連を図ったりする。さらに，現在の社会情勢と照らして必ずしも必要ではないと思われる内容については削除を行っている。以上のように内容のスリム化を進めていくことで，帰納的や演繹的に思考し，数学的な見方・考え方を養いながら問いを解決するという数学科の目指す姿がより具体化される。

(3) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と視点を生かし，学年ごとに扱う内容の系統について表すと以下のようになる(表２)。

【表２　学年の系統】

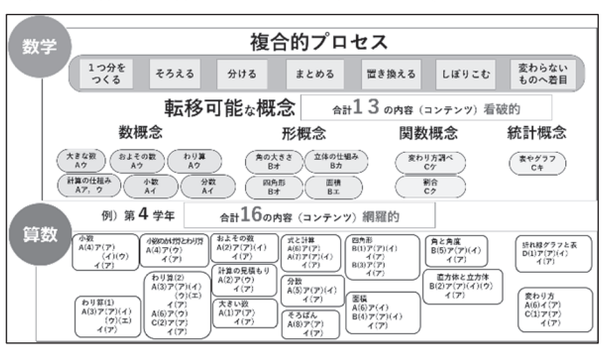
	A数・量	B形	C　データ・変化
１年生	○数 ・事象は数えたり比べたりできる ・数はほかの数の和や差としてみたり等分したりできる ・２位数までの十進位取り記数法の表記を理解する ○量 ・ものの量はほかの量のいくつ分で表すことができる	・ものの形は形状の特徴や機能的な性質をもつ ・形は合成したり分解したりすることができる	○データ ・身の回りの事象は数を用いて整理することができる
２年生	○数 ・数はほかの数の積としてみることができる ・十進位取りの仕組みを理解する ○量 ・ものの量は普遍単位のいくつ分で表すことができる	・平面図形の特徴は辺の長さや角の大きさといった構成要素を基にしていることを理解する	○データ ・事象は数量を用いて多様な方法で整理することができる
３年生	○数 ・小数や分数は「１を等分したもののいくつ分」であるという意味や表し方を理解する	・辺の長さの相等や直角といった長方形や正方形の性質を理解する。 ・「中心からの距離がすべて等しい図形」など	○データ ・棒グラフと表の特徴の違いを理解する ○変化 ・基準量と比較量の関係に

	・十進位取りの仕組みを用いた加法と減法の仕方を理解する ○量の測定 ・単位量のいくつ分を基にした表し方について理解する	円や球の性質を理解する。	ついて理解する
4年生	○数 ・計算には順序があることや一般化された式で表すことができることを理解する ・1より大きい小数や分数の表し方や，大きさの等しい分数の作り方について理解する ・十進位取りの仕組みを用いた乗法や除法の仕方を理解する	・「1㎠のいくつ分」とする広さの表し方を理解する ・辺の垂直・平行や角度を基にした平面図形の性質を理解する ・辺の垂直・平行や角度を基にした立体図形の特徴を理解する	○データ ・折れ線グラフでは変化の仕方を捉えることができること，表では2つの項目を見やすく整理できることを理解する ○変化 ・基準量を置き換えて比較量を捉えることができることを理解する ・数量の変化の仕方は規則性をもつ場合があることを理解する
5年生	○数 ・小数や分数は，整数と同じように倍や等分ができることを理解する	・かさを「1㎥のいくつ分」として理解する ・図形の形や大きさが決まる要素や図形の合同 多角形の性質について理解する ・図形の辺の長さや角の大きさといった特徴を利用した面積の求め方を理解する ・立体図形の特徴は，頂点，辺，面といった構成要素を基にしていることを理解する	○データ ・規則性に着目した推論 ・数量の関係に着目した比べ方や表し方 ・百分率 ○変化 ・事象の規則性に着目した推論について理解する ・基準量と比較量の関係に着目して，事象の特徴や傾向を捉えることができることを理解する ・数量の関係に着目した比べ方や表し方について理解する
6年生	○数 ・事象に含まれる数量の関係を一般化した式に表現できることを理解する ・小数や分数を用いた乗法や除法の仕方を単位小数や単位分数に着目して理解する	・曲線を含む図形の特徴を利用した円の面積の求め方を理解する ・図形を構成する辺の長さや角の大きさに着目して図形の対称性や縮図や拡大図について理解する ・かさは単位面積の幾つ分として捉えることができることを理解する	○変化 ・比例や反比例についての数量の関係を理解する ・データの特徴に着目して事象の傾向を多面的に捉えることができることを理解する ・比は二つの量の割合を簡単な整数の組で表すことができるということを理解する ・観点を決めて分類整理することを理解する

(4) 内容のスリム化の考え方

ア　焦点化[10]

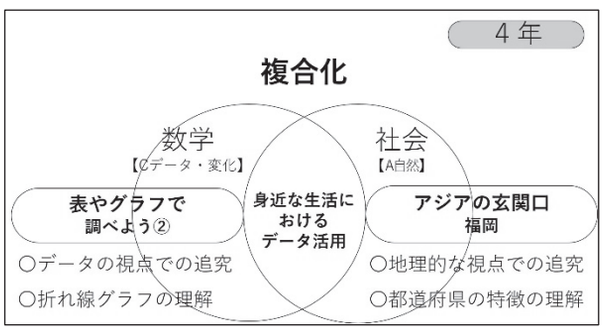
焦点化して指導することで，内容のスリム化を図る。これは現行の算数科の内容を絞っていくことにもつながっている。例えば第1学年の年間指導計画では，現行の教科書において20の単元で構成されているが，本校では複合的プロセスを基に転移可能な5つの概念に整理し，15の単元で構成し直している[11][12]。指導内容の中で，習熟や定着を図る内容を日常化したり，内容を数学的な見方・考え方の視点で構造化，統合化を図ったりする。このような内容を子供の学びの文脈に埋め込んでいくことで，結果的に時数の削減や内容のスリム化が図られる。



【図4　概念を基に整理した年間指導計画（第4学年）】

イ　複合化[13]

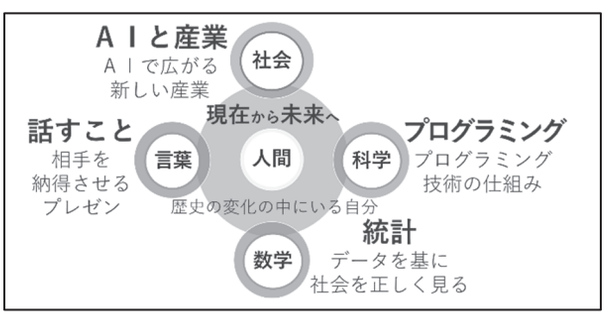
数学科においては，「C データ・変化」の内容の一部を社会科と合科的に進めていく。例えば第４学年「アジアの玄関口　福岡」において，データの視点で問いを解決していくような内容である。その際，社会科として獲得を目指す概念と，数学科として獲得を目指す概念とは共通しないので，対象を共通させることで複合化を図っていく。この複合化による内容のスリム化を図る上では，数学科が単なる問題解決の道具として機能するのではなく，数学科としても数理的な学びがあるように内容を構成していく（図５）。



【図５　数学科における統合化の例（第４学年）】

ウ　統合化[14]

人間科における概念は，自分や他者，生命との関わりにある道徳的な問題を基につくられる。このような概念を主としたときに数学的な課題を解決していく際は，主に「C データ・変化」の内容が関連概念として位置付けられる。その際，数の性質や形の特徴といった知識だけではなく，「帰納的，演繹的，統合的，発展的」などの思考の方法も含んでいる。例えば，第６学年における「歴史の変化の中を生きるわたしたち」では，人間科を中心に生まれた問いを，統計的探究プロセスに沿って，データを収集したり分析したりしながら解決していく（図６）。



【図６　数学科における統合化の例（第６学年）】

4　各学年の内容（ゴシック：複合化，統合化）

〔第１学年〕

【A　数・量】

ア　ものの個数を数えたり，数の関係を調べたりすることを通して，身の回りの事象を数理的に捉え，数えたり比べたりできることを理解する。

イ　ものの個数をまとめたり分けたりして数えることを通して，１つの数をほかの数の和や差としてみたり，等分したりすることができることを理解する。

ウ　ものの個数をまとめたり分けたりして数えることを通して，十進位取り記数法の表記を用いた２位数の表し方を理解する。

エ　身の回りのものの大きさの比べ方を調べることを通して，ものの量は他のものの幾つ分として表すことができることを理解する。（統合化）

【B　形】

オ　形を構成したり組み合わせたりすることを通して，ものの形には，かどの数が異なるといった形状の特徴や重ねて積み上げることができるといった機能的な性質をもつものがあることを理解する。

カ　形を構成したり組み合わせたりすることを通して，形は合成したり分解したりすることができることを理解する。

【C　データ・変化】

キ　ものの個数を調べて簡単な絵や図などに表すことを通して，身の回りの事象は数量を用いて整理することができることを理解する。（複合化）

〔第２学年〕

【A　数・量】

ア　ものの個数をまとめたり分けたりして数えることを通して，１つの数をほかの数の積としてみることができることを理解する。

イ　ものの個数をまとまりをつくりながら数えることを通して，十進位取りの仕組みを理解する。

ウ　身の回りのものの大きさを測定したり，比べたりすることを通して，ものの量は普遍単位の幾つ分として表すことができることを理解する。

【B　形】

エ　平面図形の構成要素に着目して観察や構成をすることを通して，平面図形の特徴は辺の長さや角の大きさといった構成要素を基にしていることを理解する。

【C　データ・変化】

オ　事象を表やグラフに表すことを通して，事象は数量を用いて多様な方法で整理できることを理解する。（統合化）

〔第３学年〕

【A　数・量】

ア　１より小さい量について調べることを通して，小数や分数が「１を等分したもののいくつ分である」という意味や表し方を理解する。

イ　数量をまとめたり等分したりして，工夫して数える方法を調べることを通して，「基準量は基にしている量」，「比較量は比べる量」など，基準量と比較量の関係について理解する。

ウ　まとまりの数と端数に分けて計算する方法を調べることを通して，十進位取りの仕組みを用いた加法や減法の仕方を理解する。

エ　身近なものの長さや重さの測定をすることを通して，「単位量のいくつ分」を基にした表し方について理解する。

【B　形】

オ　構成要素に着目して平面図形を分類することを通して，辺の長さの相等や直角といった長方形や正方形の性質を理解する。

カ　円の構成や球の観察をすることを通して，「中心からの距離がすべて等しい図形」など，円や球の性質を理解する。

【C　データ・変化】

キ　事象をグラフや表に表して，見いだしたことを表現することを通して，棒グラフでは数量を比較して量の大小を捉えることができること，表では１つの項目のデータを見やすく整理できることを理解する。

〔第４学年〕

【A　数・量】

ア　（　）や□，△などを用いた式で表す場面を調べることを通して，計算には順序があることや一般化された式で表せることを理解する。

イ　小数や分数をまとめたり等分したりして，工夫して数える方法を調べることを通して，１より大きい小数や分数の表し方や，大きさの等しい分数の作り方について理解する。

ウ　まとまりの数と端数に分けて計算する方法を調べることを通して，十進位取りの仕組みを用いた乗法や除法の仕方を理解する。

【B　形】

エ　平面図形の面積を調べることを通して，「１c㎡のいくつ分」とする広さの表し方を理解する。

オ　構成要素の関係に着目して平面図形を分類することを通して，辺の垂直・平行や角度を基にした平面図形の性質を理解する。

カ　立体図形の構成要素に着目して観察や構成をすることを通して，面や辺の垂直・平行や角度を基にした立体図形の特徴を理解する。

【C　データ・変化】

キ　事象を折れ線グラフや表に表して，見いだしたことを表現することを通して，折れ線グラフでは変化の仕方を捉えることができること，表では２つの項目を見やすく整理できることを理解する。

ク　伴って変わる二つの数量の変化の割合を調べることを通して，基準量を置き換えて比較量を捉えることができることを理解する。（複合化）

ケ　伴って変わる二つの数量の変化の仕方を調べることを通して，数量の変化の仕方は規則性をもつ場合があることを理解する。

〔第５学年〕

【A　数・量】

ア　基準量や比較量が小数や分数であるときの計算の仕方について調べることを通して，小数や分数は，整数と同じように倍や等分ができることを理解する。

【B　形】

イ　立体図形の体積を調べることを通して，かさを「１㎤のいくつ分」として理解する。

ウ　図形間の関係に着目して，構成の仕方について調べることを通して，図形の形や大きさが決まる要素や合同，多角形の性質について理解する。

エ　平面図形の面積の求め方を調べることを通して，図形の辺の長さや角の大きさといった特徴を利用した面積の求め方を理解する。

オ　構成要素に着目して立体図形を分類することを通して，立体図形の特徴は，頂点，辺，面などの構成要素を基にしていることを理解する。

【C　データ・変化】

カ　事象の変化の特徴を調べることを通して，事象の規則性に着目した推論について理解することができる。

キ　数量の関係をグラフに表して，見いだしたことを表現することを通して，基準量と比較量の関係に着目して，事象の特徴や傾向を捉えることができることを理解する。（複合化）

ク　異種の二つの量の変化の仕方について調べることを通して，数量の関係に着目した比べ方や表し方について理解する。

ケ　基準量と比較量の関係を調べることを通して，百分率を用いて二つの量の関係を表すことができることを理解する。

〔第６学年〕

【A　数・量】

ア　文字を用いた式で表される場面を調べることを通して，事象に含まれる数量の関係を一般化した式に表現できることを理解する。

イ　基準量と比較量のどちらも小数や分数であるときの計算の仕方について調べることを通して，小数や分数を用いた乗法や除法の仕方を単位小

数や単位分数に着目して理解する。

【B　形】

ウ　曲線を含む図形の面積の求め方を既習図形に分けて調べることを通して，曲線を含む図形の特徴を利用した円の面積の求め方を理解する。

エ　図形間の関係や特徴に着目して平面図形を類別することを通して，図形を構成する辺の長さや角の大きさに着目して，図形の対称性や縮図や拡大図について理解する。

オ　立体図形の体積の求め方を調べることを通して，かさは単位面積の幾つ分として捉えることができることを理解する。

【C　データ・変化】

カ　事象の変化の特徴を調べることを通して，比例や反比例についての数量の関係を理解する。

キ　数量を多様な観点から整理し，見いだしたことを表現することを通して，データの特徴に着目して事象の傾向を多面的に捉えることができることを理解する。（統合化）

ク　二つの数量の関係を表す方法を調べることを通して，比は二つの量の割合を簡単な整数の組で表すことができるということを理解する。

ケ　並び方や組み合わせ方を調べることを通して，観点を決めて分類整理することを理解する。

5　指導計画の作成と内容の取り扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

「数学科」においては，事象から問いを見いだしていく必要がある。特にテーマ学習においては，「社会科」や「人間科」を中核として，他領域の特質を生かした関連を行う。そこで，保・幼・小・中の連携の視点から，保育園・幼稚園における「環境」の学びとの適切な接続と，中学校数学科との系統を基に年間指導計画を作成していく。

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

「人間科」の学びにおいて，子供が数や量，形などの内容を必要としたときに位置付ける。

(ｲ) リレーション学習

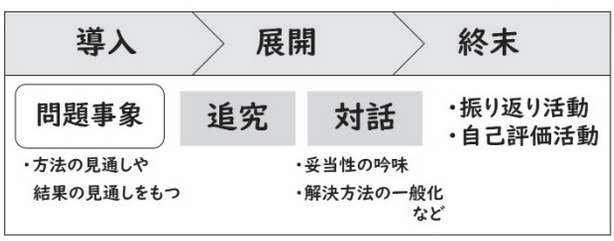
他教科と内容が有機的に関連する際に，リレーション学習を位置付ける。例えば第４学年リレーション「様子を表す言葉について調べよう」では，言葉科と関連させ，「副詞」という材を共有する。そして，各教科の見方・考え方を働かせながら学びを深めていく。

(ｳ) フォーカス学習

現行の算数科における内容で，削減・統合ができると考えられるものについては，焦点化して指導する。こうすることによって，内容のスリム化を図ることができると同時に，必要な知識・技能を短時間で獲得し，子供の求めに応じた主体的な学びを取り入れていく。

ウ　一単位時間の学習のプロセス

数学科では，フォーカス学習，リレーション学習，テーマ学習のどれにおいても基本的な学習のプロセスは同じである（図７）。導入で，問題事象と出合い，方法や結果の見通しをもち，展開で，追究活動を行った後に対話活動を通して解決方法の妥当性を吟味したり，一般化を図ったりしていく。そして，終末では，本時の活動を振り返り，見いだした新たな数理を整理して表現したり既習と関連付けてまとめたりしていく。最後に，自己の学びの価値や成長を見つけて学習プリントに記述する。リレーション学習やテーマ学習においては，導入の問題事象が他の教科の文脈から生まれているものになったり，活動の目的が他の教科の学習と関連付けられていたりする点が異なる。

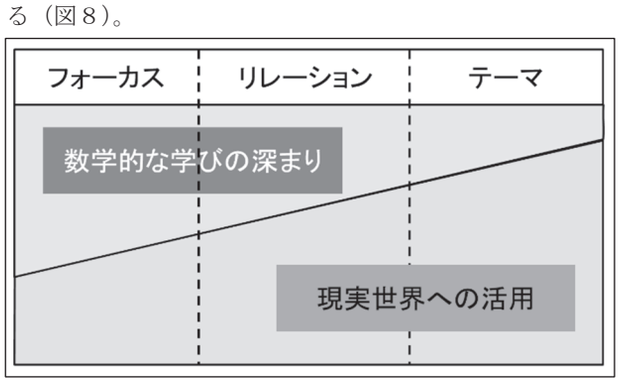


【図７　基本的な一単位時間の学習プロセス】

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

数学科で獲得を目指す概念が，そのまま主概念になることは考えにくい。そのような概念の獲得や，数学科で身に付ける論理的な思考力は，生活をより豊かにし，問題をより効率的に解決するために役立つものであるという立場に立って指導にあたるようにする。なお，これまでの実践から，テーマ学習においては「Cデータ・変化」の内容が他教科と関連しやすいと言える。リレーション学習については，各教科の学びに際し，より客観的な視点で解決を目指していく際に数学科の学びが生かされるものと考える。フォーカス学習においては，焦点化を行う際は，実用算数の考え方を基に，数学科の学びが「材を超えて生かされるものか」「これからの生活に必要なものか」という２点に配慮して行うものとする。なお，それぞれの学習の特徴として，「学びの文脈」と「数学的な内容の獲得（学びの深まり）」のどちらを重視するか，その割合が変わると考える（図８）。



【図８　3つの学習と学びとの関係】

イ　真正の課題の条件

数学科においては，次の３つの真正の課題となる条件を設定する（表３）。

【表３　真正の課題の条件】

	条件の内容（「数学」に置きかえる）
知のまとまり	１年生から６年生まで，系統立てられた課題であること
たくましい追究	論理的，統合的，発展的に考えることができるものであること
学校を超える価値	論理的思考力や，統計的問題解決能力など，現代やこれからの社会にとって価値があるものであること

ウ　学習としての評価

振り返りの軸の例を表４に示す。

【表４　振り返りの軸の例】

創造性
○　獲得した数理の整理
○　獲得した数理の統合
○　新たな問いの発見
○　数や量・形への新たな気付き
○　自己の変化や成長への気付き

(3) 数学科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，基礎的な知識や内容の習得を行っている。計算方法や図形の名前などを，繰り返し発音しながら行ったり，習熟プリントに取り組んだりしている。

内容としては，A計算，B図形，C公式，D単位換算の分野で習得を目指す。主体的に学ぶ意欲を高めたり，知識習得の達成感をもたせたりすることができると考える。

たんれんは，問題データベースやフラッシュカードを用いて実施している。

具体的には次の通りである（表５）。

【表５　「数学」の内容】

A計算	・たし算 ・ひき算 ・かけ算九九　など
B図形	・平面図形の名前 ・立体図形の名前　など
C公式	・求積公式 ・速さの公式 ・割合の公式　など
D単位換算	・長さの単位 ・重さの単位 ・かさの単位　など

(4)　数学科に関わるチャレンジ

チャレンジの時間に「MOM(Master of math)チャレンジ」を選択した子供は，自分たちで数学パズルの問いをつくり，それらを出し合ったり，自分で研究のテーマを決めて追究活動を行ったりしている。活動の目的は，数学クイズを解き合ったり，関心のあるテーマで追究したりする活動を通して，数学の面白さや有用性を見いだそうとすることである。個人で研究テーマについて考えたり，友達と話し合ったりする時間を設け，興味のある分野について，図書館や家庭で調べてきたことを基に出し合い，まとめていった。それを基に，自分の追究テーマを決めていく。例えば，「福岡ソフトバンクホークスの曜日ごとの勝率」「パスカルの三角形にひそむひみつ」など多様な分野から設定していく。学期末には追究したことをまとめる場を設定した。どのような目的で研究を行い，何が明らかになったのか，さらに今後の課題は何かをまとめ，発表する場も設定する。その中で，子供たちは自分で立てたテーマを研究して明らかになったことだけではなく，さらに追究していきたいことも話し合い，次の活動につないでいくようにしていく。

＜註＞

[1]平林一榮著（1992）『算数教育についての理解』皇學館大學講演叢書［平林は算数教育の目的について，①生活性ないし実際性，②陶冶性，③学問性ないし文化性の３点から整理している。昭和初頭の算数・数学教育で，「生活数学」「生活算術」を強調した現実主義の人々は，数学の重要性を見落として，実際に役立つこと，現実に存在することをとりあげたために，数理の一般性を意識できなくなったと批判し，創造性の重要性を述べている。］

[2]文部科学省・国立教育政策研究所(2019)「OECD 生徒の学習到達度調査2018 年調査のポイント」［数学的リテラシーの平均得点は国際的に見ると高く，引き続き上位グループに位置しているなどの成果が見られるが，学力の上位層の割合はトップレベルの国・地域よりも低い結果となっている。また，ＴＩＭＳＳ2015 では，小・中学生の算数・数学の平均得点は平成７年以降の調査において最も良好な結果になっているとともに，中学生は数学を学ぶ楽しさや，実社会との関連に対して肯定的な回答をする割合も改善が見られる一方で，いまだ諸外国と比べると低い状況にあるなど学習意欲面で課題がある。］

[3]石井英真著（2015）『今求められる学力と学びとはーコンピテンシーベースの光と影ー』日本標準［石井は学校カリキュラム全体で育成すべき資質・能力の内実を，階層性の側面から整理している。とりわけ「使えるレベル」の学力に高めるため課題遂行にどの知識が有効か考え，時には必要な情報を収集しながら，型にとらわれずに問題場面（文脈）と対話することが必要であり，いわば，「正解のない問題」に挑戦するプロセスを子供自身が遂行する機会を授業過程に盛り込むことを述べている。］

[4]福岡学芸大学付属福岡小学校研究紀要（昭和 34 年度）［昭和 33 年の学習指導要領改訂を踏まえ，「論理的思考を伸ばす数学的な考え方の指導」に重点を置かれている。具体的には割合の指導において，関数概念の育成と四則計算の完成の２点が重要であると述べられており，概念形成の重要性に言及している点で示唆的である。］

[5]福岡学芸大学付属福岡小学校研究紀要（昭和 33 年度）［暗算指導の研究がまとめられており，「生活経験を中心とした問題解決により，生活改善を目指して，進んで環境に働きかける態度や社会の実務的な事がらに対する理解，理解された物を実際に活用する能力などが養成されねばならぬ」としている。ここから，戦後の算数教育が生活改善を目指して行われていたことが分かる。

[6]中島健三(1981)『算数・数学教育における数学的な考え方』金子書房［中島は本著で統合的，発展的考察について詳しく説明している。例えば，拡張による統合については，はじめに考えた概念や形式が，もっと広い範囲に適用できるようにするために，はじめの概念の意味や形式を一般化して，もとのものを含めてまとめる場合と定義している。］

[7]山口武志（2010.10）「新しい算数・数学科学習指導要領に関する比較的視座からの考察」［本論文では，イギリスの「ナショナル・カリキュラム」，フィンランドの「ナショナル・コア・カリキュラム」，アメリカの「学校数学のための原則とスタンダード」を比較している。その上で，日本のカリキュラム研究への示唆として，①「内容」と「プロセス」という２つの視座からカリキュラムの充実を図ること，②カリキュラムにおいて達成度規準を具体化すること，③社会生活との関連性という視座から指導内容の選択・配列に関する枠組みを検討することを提案している。］

[8]中原忠男（1999）「数学教育における構成的授業論の研究（Ⅱ）－「数学学習の多世界パラダイム」の提唱－」［中原は本論文にて数学的知識は子供たち一人一人によって構成され，それが集団において洗練され，協定されていく」とする認識論に立ち，数学教育における構成的アプローチを提起している。本校研究における協働性や省察性の理論背景につながる。］

[9]片桐重男(2004)『数学的な考え方の具体化と指導』東洋館出版［片桐は本著において，内容と方法の２つの面から数学的な考え方を考察している。内容に関しては，単位の考え，集合の考え，関数的な考え，概括的把握の考えがあり，本校数学科における５つの中心概念と結びついている。なお，方法に関しては帰納，演繹，類推，統合，発展などをあげている。これらは思考の進め方であるので本校における方略として捉えている。］

[10]杉山吉茂(2010)『公理的方法に基づく算数・数学の学習指導』東洋館出版社［ブルーナーの教科の構造を研究した杉山は「見かけ上離れているかのように見える個々のことがらに共通の原理の存在を確認することによって，思考の節約をはかることができる」と述べ，さらに「構造を強調するというのはそういうものをただ単に捨てるのではなく，それらを何か共通の原理の中に位置付け，関係づけていこうとするものである」とある。本校数学科ではこの論を背景に，内容を数学的な見方・考え方の視点で構造化，統合化を図る。］

[11]アメリカ「スタンダード 200」［内容スタンダードには「数と演算」「代数」「幾何」「測定」「データ分析と確率」があり，プロセススタンダードに「問題解決」「推論と証明」「コミュニケーション」「関連づけ」「表現」がある。内容とプロセスの２つから教科を構成している点で示唆的である。

[12]フィンランド「ナショナル・コア・カリキュラム」［例えば第３学年から第５学年における数学指導の核となる課題は，①数学的思考を発達させること，②数学的な思考のモデルに関する学習を導入すること，③基礎的な計算や数概念を深めること，④数学の概念や構造を理解するための基礎となる経験を提供することである。第６学年～第９学年では，数学の内容に加えて，「思考技能と方法」が追加されており，「プロセス」に関する項目を内容に位置づけている点が注目される。］

[13]デビッド・A・スーザ(2017)『AI 時代を生きる子どものための STEAM 教育』幻冬舎［複合化を考える際の視点として STEM 教育がある。「Science」(科学)，「Technology」(技術)，「Engineering」(工学)，「Mathematics」(数学)の頭文字を取ったもので，科学・技術・工学・数学を重視した教育を意味する。ここに「Art」(芸術)を加えて「STEAM 教育」と呼ぶ場合もある。］

[14]畦森宣信（1983）『ベーシックな考え方』日本教育研究センタ

［畦森は本書で算数を重視する理由として，「言語としての算数」「思考法としての算数」そして「先験科学としての算数」というように算数という教科の成立意義についても明らかにしている。その中には，「道具としての算数」も含まれ，獲得した知識や方略を選び使うことも数学の意義であると述べている。］

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校）

科学科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

内閣府が提唱する society5.0 における第５期科学技術基本計画では，見出した問題を科学的に解決していく力の重要性が述べられている。また，我が国が科学技術イノベーション力を持続的に向上していくためには，次代の科学技術イノベーションを担う人材の育成を図り，その能力・才能の伸長を促すとともに，理数好きの児童生徒の拡大を図ることが重要であるとも述べている。[1]さらには，今回の新型コロナウィルス感染症拡大によって，最先端の科学技術に加えて，人文学・社会科学の知見が経済・社会的な課題の解決に果たす役割の大きさを改めて我々に示した。社会のグローバル化・デジタル化などの科学技術・イノベーションの急速な進展が，人間や社会の在り方に大きな影響を与えており，科学技術・イノベーションの進展と人間や社会の在り方は密接不可分で，自然科学と人文学・社会科学が協働して課題解決に取り組むことが重要となっている。また，科学技術の発展が期待されているからこそ，自然との共存，自然災害など，地球規模の問題をどのように解決するのか，人間と自然との関わり方の在り方も重要となっている[2]。

そこで，本教科では，社会との関連を図る内容を位置付け，科学技術の仕組みそのものや身の周りの自然の事物・現象を対象として，出合いから生まれた問題を仮説に沿って，粘り強く観察・実験し，科学的に解決する資質・能力を育むことを目指す。このように，子供が問題を発見し，問題解決を通して，既にもっている自然事象についての考えを少しずつ科学的なものに変容していくことを求める。さらには，最新の科学技術などを対象とすることで，その仕組みや利用されている自然の事物・現象の原理原則などを追究することができる。

(2) 現行生活科，理科との関係

科学科は，現行の学習指導要領，生活科と理科と深い関わりがある。生活科においては，理科的な内容を取り扱うものから対象や単元を選んでいる。さらには，生活科で大切にされている，具体的な活動や体験，つまり，科学の原体験になる活動を取り入れ，諸感覚を働かせることを重視する。その上で物化生地の４領域の系統性を明らかにし，子供の学びに必要な内容なのか吟味する。また，科学科における教科の本質は，以下の通りである[3]。

働きかける対象	獲得するもの，目指すもの
自然事象	働きかける方法（科学的なアプローチ）とその結果としての知的体系の獲得

具体的に言うと，理科という教科は科学的な理解と処理する基礎的な能力，科学的な能力や科学的な見方や考え方の育成を目指している。子供が再現性や実証性，及び客観性を保証する実験を行いながら，自然事象に対して働きかける方法とその結果としての知的体系を構築していくことである。その点においては，理科と同じである。さらに，現行の理科は，小学校から中学校までの９年間，４領域（物理，科学，生物，地学）を基にした内
容の系統性が密に示されている[4]。その上で物化生地の４領域の系統性を明らかにし，子供の学びや社会の求めにとって必要な内容なのか吟味する。そうすることで，現行理科の本質を大切にしながら，新しい教科の形をつくることができると考えている。

(3) 科学科に関わる本校のこれまでの研究[5]

科学科に関わって，平成６～９年度に２度目の文部科学省研究開発指定を受けた「生活環境科」の創設があった。生活環境科の目標には，「よりよい生活に生かす」とあり，「自然事象の原理・原則を利用して対象に働きかける」といった実働面と「自然事象に対する愛着がより一層強くなっていく」という心情面とがある。このように自然事象の原理・原則の利用は，教科の構造を明らかにすることで内容精選にもつながる視点である。さらに，同じく平成 27 年度から始まった指定を受けた，領域「自然探究」の創設があった。ここでは，自分の科学的・数学的な知と組み合わせながら新たな知識をつくりだすことをねらいとしている。領域「自然探究」では，教材化の視点として，「不易と流行での流行の視点から，現代社会の課題や要請，大学改革での学部編成の動き，最先端技術など，今後の未来社会で活かせるもの」があり，内容精選や学習対象としての視点だけでなく，内容構成においても，「C テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ」を位置付けている[5]。

2　目標

(1) 教科の目標

自然事象との出合いを通して，見出した問題を科学的に解決する過程の中で，科学的な見方・考え方を養うことで，３資質・能力を次の通り育成することを目指す。

(1) 自然事象との出合いから見出した問題を，粘り強く探究する中で，自然現象の原理原則や事物の規則性を活用し，妥当性のある新たな考えを創り出すことができる。（創造性）

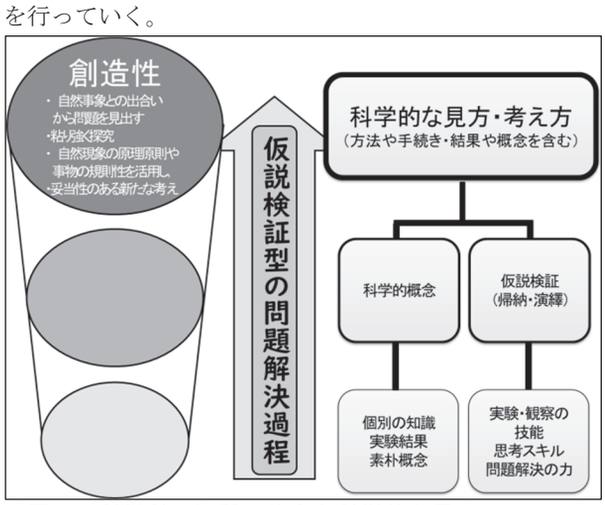
(2) 自然事象との出合いから見出した問題の解決に向けて，客観性を満たすために互いの考えを伝え

合ったり，妥当性を検討するために，様々な観点から解釈し合ったりしながら，科学的に解決することができる。（協働性）

(3) 問題解決の過程を振り返ることで，自然事象に対する科学的な学びの高まりに気付き，自然に対する心情や働きかけ方の変容を自覚することができる。（省察性）

(2) 科学的な見方・考え方と資質・能力の関係

科学科では協働性と省察性に支えられて発揮される創造性を重視している。科学科に関する創造性は，課題発見力と探究力，妥当性のある新たな考えの創出の３つからなる。これらの創造性が育成されるために，自然事象との出合いの段階で，自然事象の不思議に十分に触れた上で，自らの視点で仮説，追究計画を立てることが重要である。そして追究計画に沿って，仮説検証を重視した問題解決の過程を繰り返し，その過程で自然事象に対する働きかけ方や考え方，心情の変化に気付くことで，科学的な概念の獲得を行っていく。



【図１　科学科の資質・能力と科学的な見方・考え方】

科学的な見方・考え方とは，「自然事象との出合いから生まれた問題を，エネルギーの量的変化，粒子の質的変化，生命の連続性，地球（地層や天体）の時間的・空間的変化で捉え，仮説に沿って実験し，科学的に解決すること」である。つまり，科学的な追究方法によって得られた実験結果や子供が獲得した科学的な概念だけではなく，問題解決そのものも見方・考え方としている。それは，前学習指導要領における理科の究極的な目標であった，「科学的な見方や考え方」と同じである[6]。仮説検証型の問題解決過程を通しながら育成される三つの資質・能力を包含するものである（図１）。

(3) 学年の目標

〔第１・２学年〕

① 自然の事物・現象に親しみ，自分との関わりで捉え，試行錯誤しながら，自然の事象について自分の考えを表現することができる。（創造性）

② 自然の事物・現象に対する個々の問題をもち，他者の考えを聞くことで，自分の考えとの共通点や差異点に気付くことができる。（協働性）

③ 自然の事物・現象への観察，実験を通して，気付きを振り返ろうとする。（省察性）

〔第３学年〕

① 問題解決の過程において，問題解決の過程を理解し，主体的に問題解決することを通して，事象を比較し，問題に対する新たな考えを創り出すことができる。（創造性）

② 自然の事物・現象に対するグループの問題や個々の問題をもち，他者の考えと自分の考えを比べて，共通点や差異点に気付き，そこから問題を科学的に解決することができる。（協働性）

③ 問題解決過程を振り返ることで，科学的な見方・考え方や働きかけ方，心情の高まりを実感しようとする。（省察性）

〔第４学年〕

① 問題解決の過程において，主体的に問題解決することを通して，事象同士を関係付け，問題に対する新たな考えを創り出すことができる。（創造性）

② 自然の事物・現象に対するグループの問題や個々の問題をもち，他者の考えと自分の考えを関係付けて，そこから問題を科学的に解決することができる。（協働性）

③ 問題解決過程を振り返ることで，科学的な見方・考え方や働きかけ方，心情の高まりを実感しようとする。（省察性）

〔第５学年〕

① 問題解決の過程において，条件を制御しながら探究し，結果を多面的・多角的に分析・考察したりしながら，新たな考えをつくり出すとともに，考えや判断したことを表現することができる。（創造性）

② 自然の事物・現象に対する集団の問題や個々の問題を共有し，方法や結果の解釈を交流したり，結論の妥当性について吟味したりしながら問題を科学的に解決することができる。（協働性）

③ 問題解決を通して，積み重ねた自分の考えを見直すことで，科学的な見方・考え方や働きかけ方，心情の変容や高まりを実感しようとする。（省察性）

〔第６学年〕

① 問題解決の過程において，実証可能か探究方法を吟味したり，結果を多面的・多角的に分析・考察したりしながら，新たな考えをつくり出すとともに，考えや判断したことを表現することができる。（創造性）

② 自然の事物・現象に対する集団の問題や個々の問題を共有し，方法や結果の解釈を交流したり，結論の妥当性について吟味したりしながら問題を科学的に解決することができる。（協働性）

③　問題解決を通して，積み重ねた自分の考えを見直すことで，科学的な見方・考え方や働きかけ方，心情の変容や高まりを実感しようとする。
（省察性）

2　内容構成

(1) 内容構成の考え方

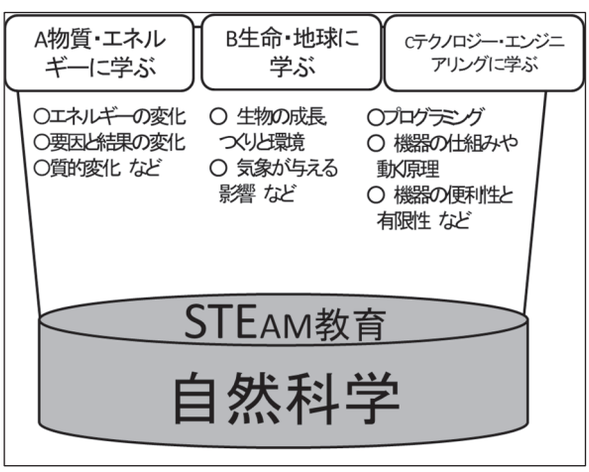
科学科は，自然の事物・現象に親しむことから問題を発見し，問題解決に向けて粘り強く探究して，新たな考えを創り出す力の育成を目指す教科である。そこで重視したい内容は「物質・エネルギーに学ぶ」「生命・地球に学ぶ」「テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ」である。科学科は先述した通り現行教科の理科と対応している。科学科の考え方から見ると，現行教科の理科の内容には次のよさと課題がある。

○　小学校から中学校までの９年間，４領域，内容の系統性が密に示されている。
○　発達段階に応じた問題解決能力「比較」「要因」「条件制御」「推論」が明確になっている。
●　未来社会に必要な科学技術の発展に即した内容の追加の必要性がある。
●　各学年に対象の重なりが見られ，未来社会を見据えた必要性と中学校学習内容との系統から，対象の見直しが必要である。

特に課題を受け以下のように内容を区分した。

(2) 具体的な内容構成

現行理科の内容は「物質・エネルギー」「生命・地球」であるが，本校科学科においては，「物質・エネルギー」，「生命・地球」に加えて「テクノロジー・エンジニアリング」で内容構成している（図２）。



【図２　科学科の内容構成】

以上の点から，内容を構成したものが表１である。

【表１　本校科学科の内容構成と内容の具体例】

A 物質・エネルギーに学ぶ	物質やエネルギーなどの対象の特徴や変化に伴う現象や働きを，何度も人為的に再現して調べることができる	○ビー玉コースター ○ペットボトルロケット ○てこの原理 ○風の力を利用した車，パラシュートなど
B 生命・地球に学ぶ	子供が生活者として主体的に生活環境に関わり，生活環境とよりよい関係をもつことができる	○生物の飼育・栽培・観察 ○身近な自然の実態調査（川，森，空気など） ○環境問題 ○自然災害，防災・減災
C テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ	プログラミングなどを使ったものづくりができる 最新技術の仕組みがわかる	○ブロック遊び ○ロボット作り ○プログラミングを用いた車，ドローン ○AI のアプリ，AI を活用した最新機器

(3) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と学習対象や活動条件を生かした学年の系統性について，次のように考えている（表２）。

【表２　各学年の内容構成】

	低学年	中学年	高学年
A 物質・エネルギーに学ぶ	自然や物を使う ・光遊び ・音遊び ・風遊び	内容構成としては，現行の理科の内容「物質・エネルギー」に準じる。内容精選については，削減・削除を中心に移行や統合，追加を図る。	
B 生命・地球に学ぶ	自然 ・飼育 ・栽培 ・観察	内容構成としては，現行の理科の内容「生命・地球」に準じる。内容精選については，削減・削除を中心に統合を図るとともに，自然災害の原因，防災・減災の視点で再構成，追加を図る。	
C テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ	具体操作 順次処理の基礎	具体的操作 抽象的操作 分岐処理 反復処理	抽象的操作 場合分け AI，最新技術の仕組み

(4) 内容精選の考え方

ア　焦点化

子供の文脈に沿いつつも，科学だからこそ学ぶべき内容に焦点化する。その内容において，身に付けておくべき概念及び検証方法を焦点化し，効率的な指導を基に内容精選を行う[7]。

イ　複合化

同じ対象に対して教科によって見方を変えながら関連し合う単元を行う際，科学科は他教科で自然を対象とする単元において関連を図ることができる。例えば，自然事象の音という対象に対して，材料の形状や材質の変化と，音の高低の関係性を捉えさせ，芸術科での音作りに発展することが考えられる。その他の対象としては，「光」で芸術科との関連を図ることが考えられる。

ウ　統合化

人間科を主概念として，教科横断するような，ダイナミックな学習の中で，概念的理解を拡大していく学びを行う

際，科学には，関連概念としてつながる内容が多い。

例えば，自然災害について学ぶ学習においては，人間科で主概念を位置付け，関連概念として，科学科では災害が起こる豪雨が振る原因だけでなく，自然の驚異により起こる豪雨から発生する自然災害に対する正しい認識を位置付ける。また，未来社会について考える際にも，人間科で主概念を位置付け，関連概念として，未来の科学技術の視点でプログラミング，そしてAIを始めとする最新機器の仕組みを学ぶ内容を位置付けることなどが考えられる。

4　各学年の内容（ゴシック：複合化，統合化）

〔第１学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　よく飛ぶ工作物を作って遊びたいという思いをもち，材質や作り方を工夫しながら，何度も飛ばして遊ぶ活動を通して風エネルギーについて理解する。（統合化）

イ　影踏みをしたり，光を反射させたりして遊ぶ活動を通して，日光と光の共通点や差違点について理解する。

ウ　水で遊びたいという思いをもち，押し方や水の出口を工夫しながら，水がでるおもちゃで遊ぶことを通して，強く押すと水が遠くに飛ぶことから，作用・反作用について理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

エ　学校の近くにある自然公園を探検して遊びたいという思いをもち，不思議なものや面白い自然のものを探して遊ぶことを通して，季節によって，生育する植物が違うことや自然の様子が変わることについて理解する。（複合化）

オ　生物を飼育したり，様子の変化を観察したりすることを通して，生物には命があることや生物の成長について理解する。

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

カ　立体物を組み合わせていろいろなものを組み合わせて遊びたいという思いをもち，何度も組み合わせて遊ぶことを通して，物と物を組み合わせると，違う形になることについて理解する。

〔第２学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　舞い落ちる対象をねらいに沿った動きにするために，材料を変えて作ったり，様子を比較したりすることを通して，風エネルギーの存在や滞空時間と風の力の関係について理解する。

イ　鏡を使って，光を反射させたり，集めたりして，違いを比較することを通して，真っ直ぐ進んだり，明るさが違ったりするという光の性質について理解する（複合化）。

ウ　ねらった音を出すために，弦の長さや性質，ストローの長さを試行錯誤しながら作り変え，その違いや共通点を調べることを通して，音が生まれる仕組みやその伝わり方によって，聞こえる音が変わることを理解する。

エ　回路の途中に対象を入れることで，豆電球が点灯したり，しなかったりすることに問いをもち，様々なものを回路の中に入れ，豆電球の光り方を比べることを通して，物には電気を通す物と通さない物があることを理解する。

オ　透明な色水とそうでない水の違いに問いをもち，いろいろなものを水にものを溶かし，色や溶け方など様子の違いを観察することを通して，色を混ぜる楽しさに気付き，溶かすものによって混ざり方が違うことを理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

カ　季節の動植物を調査することを通して，季節に応じた生き物の過ごし方や，種類によって違いがあることについて理解する。

キ　複数の生物と比較しながら飼育したり，様子の変化を観察したりすることを通して，生物には同じような生長の仕方や独自の生長の仕方があることについて理解する。

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

ク　ねらいに沿う動きになるように，コマンドを組み合わせたり，組み合わせを何度も変えたりすることを通して，プログラムの繰り返しや順番などの手順について理解する。

〔第３学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　より速く動かすことをねらい，風力で動く対象の帆の形を改良し時間を計測したり，動きや速さを比較したりすることを通して，風エネルギーが物を動かすエネルギーとなる，エネルギーの変換について理解する。

イ　磁石で引き付けるものとそうでないものを比べたり，その力について調べることを通して，鉄製の物を引き付けるエネルギーの捉え方について理解する。

ウ　身近な材料やものを使ったものづくりを通して，身近なものをつなぎ合わせれば，電流が流れることでものが動く仕組みや生活における便利性について理解する。

エ　いろいろな物の重さを比べたり，材質・大きさなどに着目して比べたりすることを通して，粒子の存在や材質による違いについて理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

オ　身の回りの生物やその周辺の環境について調査することを通して，身の回りの生物と環境との関わり自然環境を守る活動について理解する。

カ　学校の生物や植物の生育の実態について調査

したり，よりよくするための活動をしたりすることを通して，学校の自然環境のよさや問題，その改善計画について理解する。

キ　地球と月，太陽の位置や動きについて継続して調査し，共通点や差違点を明らかにすることを通して，３つの関係性について理解する。

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

ク　ねらいに沿う動きになるように，コマンドを試行錯誤しながら複数組み合わせることを通して，手続きや順序，コマンドの組合わせにより，動きをデータ記録しながら動かす方法を理解する。

〔第４学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　乾電池の数やつなぎ方を変えることで，プロペラの様子を比較したり，その要因を調べることを通して，エネルギーの変換と保存に気付き，電流の大きさや向きなどの電気の性質について理解する。

イ　巻数や乾電池の数を変えながら，電磁石の力について様々な方法で調べることを通して，エネルギーの変換と保存に気付き，電流がつくる磁力などの電気の性質について理解する。

ウ　空気，水，金属の温度と体積の関係を比べながら調べることを通して，粒子のもつエネルギーに気付き，温度変化させたときの体積変化について理解する。

エ　温度変化による水の体積変化を調べることを通して，粒子のもつエネルギーに気付き，温度変化させたときの体積変化について理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

オ　植物の神秘さや不思議について調査したり，仮説をもって環境保全に取り組んだりすることを通して，生物の連続性や自分にできる環境保全について考え，その価値について理解する。

カ　植物の形態について仮説をもって検証したり，調査結果の共通性を調べたりすることを通して，生物の不思議に気付き，数と植物のつながりを理解する。

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

キ　ねらいに沿う動きになるように，手続き，場合わけ，繰り返しを組み合わせていくことによる論理的な思考について学ぶことを通して，プログラミング的思考のよさや手順について理解する。

〔第５学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　てこの原理がどのように利用されているの，仮説をもち，様々道具の条件を制御しながら，手応えの変化を調べることを通して，一方が大きくなると，もう一方が小さくなるという力エネルギーの変換と保存について理解する。

イ　転がる対象の重さや転がす高さを変え，条件を制御しながら，仮説の基動きや距離などを調べることを通して，ものが動く仕みや動くものにはエネルギーがあるという性質，そのエネルギーを使って他のものを動かすという働きについて理解する。

ウ　より遠くへ飛ばすことをねらい，仮説の基，打ち上がる対象の飛び方や水・空気の量のデータを集めたり，分析したりすることを通して，ものが飛ぶ仕組み，水と空気のエネルギーの違いやその関係について理解する。

エ　どのような規則性があるのか，仮説をもち，現象が起こる要因の条件を制御しながら，関係性を調べることを通して，振り子運動の規則性について理解する。

オ　複数の対象を水に溶かし，様子を観察したり，仮説の基，水溶液を調べたりすることを通して，溶けた後の水中の粒子の結合，粒子の保存性について理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

カ　植物の発芽から結実までの過程，生物と環境について仮説の基条件を制御して検証することを通して，生命の連続の神秘に気付き，自分にできる環境保全について理解する。

キ　生命の循環について調査したり，仮説の基環境を再現したりすることを通して，生物の共存の大切さに気付き，自分との関わりについて考え，その価値を理解する。

ク　台風が起こる原因や台風がもたらす被害について調査することを通して，雨や風と流れる水の働きが引き起こす自然災害の原因や防災について考え，その価値を理解する。（統合化）

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

ケ　プログラムで動く対象を狙い通りに動かすことができるように，プログラムの順序と結果を照らし合わせ，試行錯誤することを通して，プログラムの順次，反復，分岐処理の組合わせについて理解する。

〔第６学年〕

【A　物質・エネルギーに学ぶ】

ア　複数の対象の持続時間を，仮設の基調べることを通して，エネルギー変換やその違いについて理解する。

イ　様々な方法での発電について体感を通してエネルギーの効率的な利用など働きについて理解する。

ウ　仮説の基，ゴムをつかって飛ぶ対象の記録のデータを集めたり，データを分析したりすることを通してものが動く仕組みとゴムにはものを動かすエネルギーがあることについて理解する。

エ　現象が起こる原因と空気の変化を調べることを通して，粒子の存在やその変化について理解する。

【B　生命・地球に学ぶ】

オ　自然の中の水を集め取り出したり，その水質を調査したりすることを通して，水は固体・液体・気体に姿を変えて存在し，それらは地球上を循環しており，生命にとっては必要なことを理解する。（統合化）

カ　モデルを試行錯誤しながら改良したり，データを基に検証したりすることを通して，地球と月，太陽の位置関係と地球からの見え方から月の満ち欠けが起こる理由について理解する。

【C　テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ】

キ　生活や社会をよりよくするプログラムを設計・実行することを通して，IoT を支えているセンサーの仕組みについて理解する。（複合化）

ク　画像認識をソフトを利用し体験したり，それを利用したプログラムを作成したりすることを通して，AI の仕組みを理解する。（統合化）

5　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

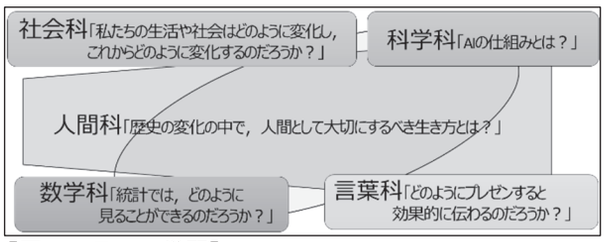
科学科の年間指導計画の作成にあたっては，従来の理科・生活科の内容を基に，資質・能力の視点から系統性を見直す。見直しの観点は，低学年理科が位置付いていた頃の理科学習指導要領と現行の学習指導要領の内容比較である。また，現在は位置付いていないが，今後必要になるであろう科学の内容を組み込んでいく。

イ　単元計画についての考え方

（ァ）テーマ学習

子供たち自身がテーマを設定し，教科横断するようなダイナミックな学習の中で，生活にリンクした概念的理解を拡大していく子供の文脈に沿った学びである。

例えば，第５学年「Aク　日本の自然災害」において，自然災害について触れることになるが，ここでは，人間科「Cカ　わたしたちにできること」で主概念を位置付け，関連概念として，豪雨から発生する自然災害に対する正しい認識を位置付ける。また，C「テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ」で AI などの最新技術の仕組みを調べたり，プログラミングを行ったりする際には，人間科を主概念に位置付けたテーマ学習で設定することが考えられる。例えば，「歴史の変化の中にいるわたしたち（D他者と世界）」で主概念を位置付け，関連概念として，AI の仕組みを追究することで，AI や最新技術の発展が，これからの生活や社会，人間の存在価値にどのような影響を与えるのかなど，追究できるようにする（図３）。

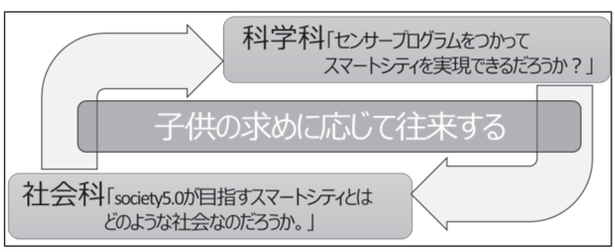


【図３　テーマ学習】

（ィ）リレーション学習

科学科と他の教科の学習内容が有機的に結びつくことが想定される学習の展開である。

例えば，第６学年において，未来社会において，society5.0 が目指す IoT やセンサーの仕組み，私たちの生活の変化を追究するなかで，エネルギーの効率的な使い方については，科学科で追究することができると考えられる。リレーション学習では，子供の学びや求めに応じて教科を往来することである。（図４）。

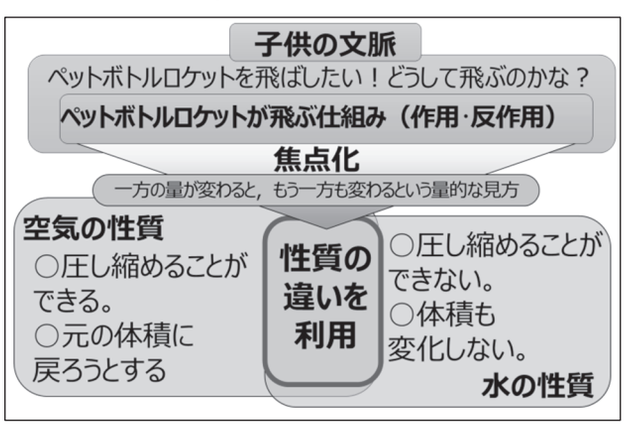


【図４　リレーション学習】

（ゥ）フォーカス学習

各教科で資質･能力にダイレクトに働きかけることができる効果的・効率的な探究である。

例えば第５学年「Aウ　ロケットを飛ばそう」において，空気と水の性質に焦点化する。現行理科では，閉じ込めた空気と水を比較しながらも，別々に追究している。そこで，ペットボトルロケットが飛ぶ仕組みである，作用・反作用について追究する。そうすることで，空気と水の性質を一体的に扱うことができる。エネルギーの見方については，空気の量という一方のエネルギーが変化すると，もう一方の水のエネルギーが変化するという量的な見方をすることができる（図５）。

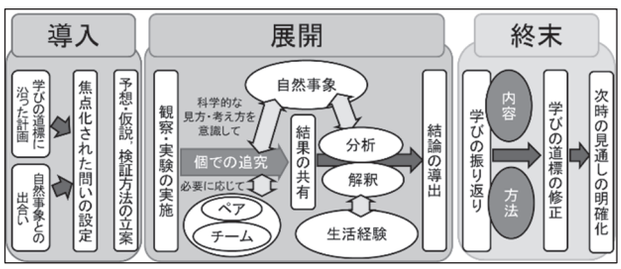


【図５　フォーカス学習】

ウ　一単位時間の学習のプロセス

仮説を設定してからの一単位時間全体の流れとしては，

演繹的プロセスを基本とする。科学科では，資質・能力（主に創造性）が育成されたか否かは，一単位時間だけではなく，学んだことが新たな場面や異なる状況とつながるのかどうかで判断する。また科学科では，自然事象との関わりの中で，見方・考え方を働かせ，科学的な見方・考え方を豊かにしていく過程が重要である（図６）。



【図６　一単位時間のプロセス】

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

(ｱ)　物質・エネルギー

この視点は，エネルギー・粒子から構成され，時間・空間の尺度の小さい範囲内で直接実験を行うことにより，対象の特徴や変化に伴う現象や働きを，何度も人為的に再現して調べることができやすい特性をもっている。例えば，「レールに角度をつけて鉄球を遠くに飛ばすにはどうしたらよいのか」という生まれた問いに対する問題解決の基，条件「速度，放物」を与えることで，飛んだ距離を調べる必然性が生まれ，成功率を上げるために，データ処理する必然性も生まれるような仕組みにすることが考えられる。このように，何度も繰り返し追究し，科学的な見方・考え方を養う姿を目指す。

(ｲ)　生命・地球

この視点では，子供が生活者として主体的に生活環境に関わり，生活環境とよりよい関係をもつことができる。また，これから重視される環境教育，防災教育も取り入れることができる[8]。具体的に，低学年から中学年にかけては，自分の生活の中に見られる，身近な事象や事象と自分との関わりに興味や疑問をもち，観察したり調べたりして，自分の生活を支えている事象への認識を深め，それに対して自分がどう行動したらよいか考えることである。高学年では，わが国という視野で環境や防災を考える。例えば，「九州北部豪雨」等の現代的課題について，甚大な被害に至った原因を究明する活動の中で，気象予報のメカニズムや災害避難速報のメカニズムなど，今後の防災の視点に役立つ内容につなげることができる。特に，事象から得た知識を生かして，自分と事象との新たな関係をつくりだし，生活の向上を求めていくことを目指す。

(ｳ)　テクノロジー・エンジニアリング

この視点は，内閣府から提唱されている society5.0 でも述べられているように，今後の情報化，人工知能などの未知の探究ができる学習内容を設定する。諸外国のアメリカやフィンランドなどでは，科学技術の発展につながる課題を解決していく力を育てるため，STEM 教育の考え方が導入され始めている[9]。STEM とは，【Ｓはサイエンス，Ｔはテクノロジー，Ｅはエンジニアリング，Ｍは数学】を指し，文系の知識と理系分野の教養が求められる。広義では理系の学問全般，狭義ではハイテク産業で求められるような知識やスキルのことである。近い将来，人工知能に使われるのではなく，使う側に回るための学問とも言われている[10]。2020 年から小学校でのプログラミング教育が始まっている。科学技術の進展に伴い，21 世紀社会に必要な資質・能力を育成するためである。STEM 教育の観点から，プログラミング教育は，数学，科学の分野が担うことができる。そこで，科学科では内容Ｃ「テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ」として，数学科と連携し，プログラミングなどを使ったものづくりを通して，学習を進めていく。また，子供たちの発達段階を踏まえ，小・中・高等学校を意識した内容の構造化を図っていく。具体的には高学年にかけて物質の対象と繰り返し関わり，科学的な見方・考え方を養うように位置付ける。活用事例としても，ＩＣＴを活用したプログラミングに触れるだけではなく，テーマ学習で未来の技術について考える学習を行う。またリレーション学習でも数学科と連携し，数学的知識とプログラミング的思考の向上が，未来社会を生き抜く子供たちにとって有益に働くという立場で，科学科で内容構成を担うように位置付ける。さらには，エンジニアリングの観点からＡＩ（人工知能）などの最新技術を対象として，その仕組みだけでなく，実際に体験・検証を通して，その仕組みや原理，生活や社会の中における有用性や有限性などを追究することができるものである。

イ　真正の課題の条件

教材は，４の各学年の目標及び内容に示す資質・能力を偏りなく養うことや「教科の究極の目標」を形成することをねらいとして精選の上，調和的に取り上げるようにする。また，その中で子供の興味・関心が強いもの，学びたいと思っているものを取り上げる。その際には次の３つの真正の課題となる条件を満たして，精選するようにする（表３）。

【表３　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知のまとまり	物質・エネルギーや生命・地球等から生まれた問題が，上学年や中学校に系統立ててつながる課題であること
たくましい追究	子供にとって身近な自然事象（音，光，電気，水，空気など）を対象に，生活経験を基に，明確な仮説をたてて，様々な方法で検証できる課題であること ものづくりを含んだ，子供の興味・関心

	が強いものであること
学校を超える価値	ものづくり（プログラミングも含む）や環境問題など，解決したことがこれからの実生活や実社会への働きかけ，その形成につながる課題であること

ウ　学習としての評価

(ｱ) 学びの道標

子供が事象に対峙したときに生まれる追究課題や問いに対して，学年の発達段階に応じて問題解決のプロセスをつくっていくものである（表５）。

【表４　学びの道標のプロセス】

下学年
調べてみたいや作ってみたい，やってみたいをゴールとし，そのゴールを学級で共有化した上で，調べる，作る，やるために必要な内容を地図上に示していく。 子供の思考を大切にしながらも教師が介入しながら方向付けていく。
上学年
解決したいゴールを個々で決めて，ゴールに向けての解決の道筋を地図上に示していく。 学習後に学びの道標に考えの変容の軌跡が見えるように不可・修正していく。

教師の目的としては，科学概念が含まれる内容の獲得に向かうためのものであり，子供の目的としては自分たちで考えて解決の道筋をつくり，学習をつくりあげていくものである[11]。その中には，考えられる検証方法や学ぶべき必要があることが明確になる。

(ｲ) 学びの足跡

子供たちが目標設定した姿と今の自分の姿がどのくらいかということを重視していくことが本校の評価で重視している点である。そこで日頃の科学の時間に自己内省していくシートを設定する。

また，学びの足跡における振り返りの軸は，主に創造性の観点で設定していく。この振り返りの軸が，子供の文脈において，具体的な対象と関わる中で科学科で発揮する思考である。つまり，内容や学年によって振り返りの軸は変わるものである（表５）。

【表５　振り返りの軸】

事象の因果関係（下学年を中心に）
（例：「楽器の音の違いは，弦の太さを比べると，太いと低い音がして，細いと高い音が出ることが分かりました」）
推論（上学年を中心に）
（例：「角度が上がれば，鉄球の勢いが増すため，より遠くに飛ぶはずだという仮説の基で実験すると，複数の数値のデータから，レール上の鉄球が遠くに飛ぶには，30°付近がよく，レールを曲げる角度と，鉄球を放す高さが関係しているが，曲げ過ぎると速さが遅くなるため飛ばなくなることが分かりました)」以上のように，上学年になるにつれて，仮説検証の視点が強くなっていくようにする。

(3) 科学科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，科学科における基礎的な知識や内容の習得を目指している。特に，覚えにくい用語や実験器具などを繰り返し発音しながら学ぶ。

内容としては，Ａ身近な生き物，Ｂ星座，Ｃ実験器具，Ｄ科学の分野で習得を目指す。主体的に学ぶ意欲を高めたり，知識習得の達成感をもたせたりすることができると考える。たんれんは，問題データベースやフラッシュカードを用いて実施している。

具体的には次の通りである（表６）。

【表６　たんれんの内容】

Ａ身近な生き物	・影絵での植物，生き物 ・季節の生き物 ・場所による生き物　など
Ｂ星座	・季節の星座 ・有名な星座　など
Ｃ実験器具	・学年で使用する実験器具 ・名前を間違えやすい実験器具 ・珍しい実験器具　など
Ｄ科学	・科学記号 ・元素記号　など

(4) 科学科に関わるチャレンジの指導

科学科に関わるチャレンジには「科学・実験」と「農園」がある。そこで，子供は研究内容を追究し，科学コンクール等に応募し，研究の成果を他者評価できるようにする。

ア　科学・実験チャレンジ

(ｱ) 活動の目的

自分の興味・関心がある自然事象について，追究内容を決め，個人課題を設定して，試行錯誤して，課題解決をして，自分なりの研究をすることができるようにする。

(ｲ) 活動内容

○　個人やグループでの目標設定
○　研究成果に関する交流会
○　ものづくり発表会
○　振り返りと今後の見通しの検討

イ　農園チャレンジ

(ｱ) 活動の目的

自分たちだけで，おいしい野菜を育てる，いただくという目的を決め，そのために必要なことを自分たちで調べたり，お世話の仕方を工夫したりして，おいしい野菜作りを追究することができるようにする。

(ｲ) 活動内容

○　育てる野菜についての調査
○　種をまくために，畑の整備，準備
○　野菜の世話，収穫
○　より大きく生長するように畑の整備
○　育てた野菜の収穫，調理，食事，販売，提供

＜註＞

[1]内閣府「Society5.0」https://www8.8.cao.go.jp/cstp/society5_0/『第５期科学技術基本計画』［現状として，ICT の進化等により,社会・経済の構造が日々大きく変化する「大変革時代」が到来し,国内外の課題が増大,複雑化する中で科学技術イノベーション推進の必要性が増していると認識します。］

[2]文部科学省（2020）『令和２年度版科学技術白書』.p.3.

[3]日本教科教育学会（2016）『今なぜ教科教育なのか』文溪堂.p.30,57.

[4]文部科学省(2017)『小学校学習指導要領の展開　理科編』.p.22.

[5]本校教育研究紀要平成 13，14，15，27，28 年度

[6]文部科学省(1977)『小学校学習指導要領の展開　理科編』.p.4.

[7]日本教科教育学会（2016）『今なぜ教科教育なのか』文溪堂［科学とは，再現性や実証性，及び客観性の保証する実験をともなうものである。子どもが再現性や実証性，及び客観性を保証する実験を行いながら，自然事象に対して働きかける方法とその結果としての知的体系を構築していくことである。］

[8]角屋重樹(2013)『なぜ,理科を教えるのか』文溪堂.p.92.[社会の変化への対応の観点から教科等を横断して解決すべき課題である。]

[9]日本 STEM 教育学会(2019)『３月拡大研究会』予稿集.p.28.[STEM 教育やロボットプログラミングといった内容や教材が最も適しているのではないか。]

10 デビット.A.スーザ(2017)『ＳＴＥＡＭ教育』.幻冬舎.p56-57.[STEM 領域での発見は古いアイデアを新しいことにつなげる創造的な思考過程を使ったことだ。］

11 小林辰至(2017)『探究する資質・能力を育む理科教育』大学教育出版.p.24.[子供の「なぜ」という疑問から問題を見出させて,観察・実験で探究する際の問題のつくり方について述べる。]
奈須正裕他（2015）『教科の本質から迫るコンピテンシーベースの授業づくり』図書文化.
角屋重樹(2013)『なぜ,理科を教えるのか』文溪堂.
日本 STEM 教育学会(2019)『３月拡大研究会』予稿集.
理科教育研究会(2009)『新学習指導要領に応える理科教育』東洋館出版社.
ソニーグローバルエデュケーション(2016)『プログラミング脳をこれから鍛える本』日経ＢＰ社.
吉田葵.阿部和宏(2017)『はじめよう！プログラミング教育』日本標準.
小林辰至(2017)『探究する資質・能力を育む理科教育』大学教育出版.
安川要平(2017)『Scratch プログラミング道場』ソーテック.
日本理科教育学会（2012）『今こそ理科の学力を問う』東洋館.
チャールズ・ピピアス（2020）『だれもが科学者になれる』新評論.
日本理科教育学会（2012）『理科教育学講座１，２』東洋館.
角屋重樹（2011）『新しい学びを拓く理科授業の理論と実践』ミネルバ書房.
日置・矢野（2007）『理科でどんな力が育つのか』東洋館.
朝倉淳（2018）『小学校教育課程実践講座　生活』ぎょうせい.
日本環境教育学会他（2019）『事典持続可能な社会と教育』教育出版.
伊藤恵理（2018）『みんなでつくる AI 時代』ccc メディアハウス.
中村一彰（2018）『AI 時代に輝く子供』ccc メディアハウス.
髙橋・三井（2019）『すぐにできるプログラミング授業実践小学校理』東洋館.
一般遮断法人 Think the Earth（2018）『未来を変える目標 SDGs アイディア book』
橋本・鶴岡・川上（2010）『現代理科教育改革の特色とその具体化』東洋館.

芸術科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

芸術科は，自然や生活，文化に存在する多様な美との関わり方について学ぶことや，芸術に関わることで感性を育み，豊かな情操を培うために設定した教科である。過去の芸術家たちが発揮してきた才能や感性は，多くの人が気付かない音色や色彩を発見し，自己や他者の心象風景を読み解き，物事の本質や自然の摂理を見抜き，作品を通して人々に伝えた[1]。これからの未来社会において，既存の職業の何割かは，人工知能に取って代わると予測されており，人間にできることは何かが吟味されていく。感性は人間のもつ知覚的な能力の最も大切なものの１つであると言われている[2]。この感性を養うためにも，芸術科は欠かすことのできない教科である。時間芸術の音楽。空間芸術の造形。これらの芸術対象は，時間と空間の中で生活をしている人間にとって，生活を潤いのあるものにし，豊かさを享受させる。そのため，感性を働かせ，音楽や造形に関わる芸術表現を通して，価値あるものや美を見いだしていこうとする態度や能力の育成を図ることができる学習が，より一層重要となる。

(2) 現行音楽科，図画工作科との関係

本校芸術科に関わる教科として，音楽科，図画工作科があげられる。そこから次のような課題を見いだすことができる。

- ●　活動自体や作品の完成が目的化され，他者と協働しながら作品を生み出し，生み出した作品のよさや価値などを考えるまでには至っていない。
- ●　活動ごとに内容が整理されているため，内容が多岐にわたっている。

現行学習指導要領では，生活や社会の中の音や音楽，形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成が求められている。しかし，活動重視である芸術科目において，活動を目的化してしまったり，学んだことと生活や社会との関わりを見いだせていなかったりする。そのため，本来育てたい資質・能力を明確にし，活動を通した資質・能力の育成が必要である。また，子供の表現欲求の連続，発展を促すことで，人間がそもそももっている感性を豊かにしつつ，子供の文脈を大切にした学習展開が期待できる。

しかしながら，これまでの音楽科，図画工作科で大切にされてきた次の２点は大切にされるべきと考えている。

- ○　豊かな情操を培うこと
- ○　生活に生かす教科であること

豊かな情操を培い，生活との関わりを考えさせるには，子供自身が芸術に対する価値を認識することが重要である。低学年期から，芸術の楽しさを十分に味わい，表現する喜びを実感させることで，芸術への価値を見いだすことにつながる。

このようにして，本校では，生活が潤い，人が豊かな生活を送ることができる対象である「芸術」を学ぶ芸術科を設定することで，現行の音楽科，図画工作科における課題の解決の一助となることをねらいとしている。

(3) 芸術科に関わる本校のこれまでの研究

芸術科に関わって，本校では，領域「表現」から領域「げいじゅつ」へと名称を変更し，研究を進めてきた。この領域「げいじゅつ」の学習においては，領域目標を「感性を働かせながら，美を感じたり表したりする活動を通して，自分の表現をつくりだす力を高め，豊かな美的情操を養う。」とし，内容を「造形」「音楽」「複合」の３つとして研究を進めてきた[3]。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

ア　成果

この４年間の開発研究における，領域「表現」と「げいじゅつ」での研究の成果は，次の２点であった。

- ○　自分が感じたことを基に，自己の表現を主体的につくりだすことができた。
- ○　材と関わりながら，造形や音楽に表現していく活動の中で，自分たちの思いを作品として表現していく喜びを味わうことができた。

イ　課題

しかし，領域「げいじゅつ」を設定する上においては，次の２点の課題も見られた。

- ●　活動自体の楽しさを味わわせることはできたが，内容構成の考え方と，育てたい資質・能力との関わりが見えにくかった。
- ●　従来の図画工作科や音楽科の内容を関連させて，新たに「複合」を位置付けることが，内容精選となっているのか明確にすることができなかった。

このような成果と課題を踏まえ，本年度は，特に昨年度から行っている，芸術要素を視点とした追究活動を行う。音楽的要素，造形的要素といった芸術要素から美の追究を行えるよう，取り扱う芸術要素と発達段階に応じた芸術要素の考え方を設定していく。具体的には，次の２点から見いだせる。１つは，芸術要素を設定し，美を追究していく中で，音楽的な特徴や造形的な特徴を理解していき，感性の働きが知性と一体化されて活発になり，生活や社会の中の美と豊かに関わらせる。２つは，内容を育てたい資質・能力から整理を行うことで，芸術科が目指す子供像との関連をもたせる。このように，内容構成を主に「創造性」に関

する資質・能力「発想・構想」「分析」「技能」,「協働性」に関する資質・能力「受容・調整」に分け，それぞれの対象を「音楽（表現及び鑑賞）」「造形（表現及び鑑賞）」に整理し，現行の音楽科と図画工作科の特性を重視しながら，知識や技能を焦点化したり，内容をスリム化したりしていく。

2　目標

(1) 教科の目標

感性を働かせながら，思いや意図を音楽や造形に表現していく過程の中で，芸術的な見方・考え方を養うことで，美と豊かに関わる３つの資質・能力を次の通り育成することを目指す。

(1) 芸術に関わる材や作品のよさや美しさを音楽的，造形的な視点から感じ取り，思いや意図を実現するための知識・技能を習得・活用しながら表現をつくりだすことができる。（創造性）

(2) 自他の表現のよさや美しさを感じ取り，他者と共有する喜びを味わうことができたり，感じたことを伝えたりしようとする。（協働性）

(3) 自己の思いや意図を明確にもった活動を通して，材や作品に多様に関わり，自分自身の伸びを自覚することができる。（省察性）

(2) 芸術的な見方・考え方と資質・能力の関係

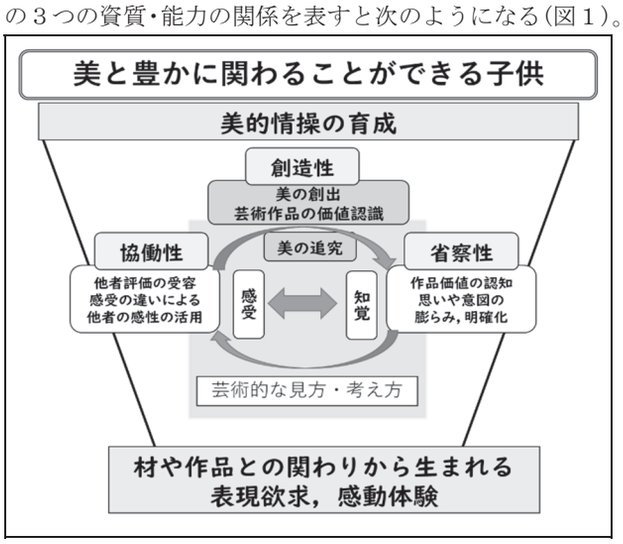
「感性を働かせながら表現していく過程」とは，感動体験や子供が感じたこと，思いついたイメージ，表したい思いや意図を大切にしながら表現していく姿を想定している。この過程を通して，芸術的な見方・考え方を養う。芸術的な見方・考え方とは，「材や作品などの対象を，音楽的，造形的な視点で捉えること」及び「自己のイメージや感情，生活や社会などと材や作品とを関連付け価値を認識していくこと」である。このような見方・考え方を養うために，芸術科の本質的な問いとして「なぜ音楽作品や造形作品は美しく感じるのだろうか」や「どのような表現方法をとれば，思いや意図，よさや美しさを音楽や造形で表すことができるのであろうか」のような，自己の感性や知性を基にした方法を含むものを考えている。この本質的な問いに対応する永続的な課題を積み重ねていくことで，芸術的な見方・考え方が養われる。このように，芸術的な見方・考え方を養うことは芸術科を学ぶ上で価値が高いものである。

芸術科の究極的な目標は「美と豊かに関わること」である。美と豊かに関わる上で「美的情操」は，重要な要素と言える。美的情操とは，美しいものを美しいと感じ，美に感動する心の働きである。

芸術科における「美」とは，思いや意図を実現した作品や，これまでの芸術作品を知覚的に分析，解釈して味わうことのできる価値のことである。「美」には，次の２つの側面がある[4]。１つは「感受的な美」である。これは，対象の形態特性そのもの（形や色，旋律や音色など）から感受する美であり，感性を働かせて認識するものである。２つは「知覚的な美」である。これは，対象から何らかの意味や解釈をすることで知覚する美であり，知性を働かせて認識するものである。

このように，芸術科において，美的情操を養うためには，感性と知性の両側面が必要不可欠である。感受したことを基に，対象や行為を分析し，知覚的に認知することで，より感性の働きが強くなる。このことから，感性と知性が一体化されて美的情操は生まれるものである。これは，美しいものに感動する心を育て，多様な美しさをもった作品を尊重する心にもつながるものである。

そのために育むべき，３つの資質・能力は次のとおりである。まず創造性は，芸術に関わる材や作品のよさや美しさを感じ取り，表現をつくりだすことである。発想力や構想力を発揮したり，作品に対して分析を行ったりしながら美を追究していく際に，「感受」と「知覚」の往還が行われる。次に協働性は，自他の表現のよさや美しさを感じ取り，他者と共有する喜びを味わうことである。他者の感じたことや作品の価値に対して，受容したり，互いの考えや表現方法を調整してよりよい表現に高めたり，心を合わせて表現したりすることのよさを実感することである。最後に，省察性は，材や作品に多様に関わり，表現したり鑑賞したりしていく活動を通して，自己の知識や技能的な伸びや，作品に対する新たな価値観を認識することである。この３つの資質・能力の関係を表すと次のようになる（図１）。



【図１　芸術科の目標構造図】

(3) 学年の目標

〔第１学年及び第２学年〕

① 材や作品の特徴を音楽的，造形的な視点から気付き，音楽的や造形的な面白さや楽しさを味わうための技能を身に付け，楽しく発想や構想をしたり，事象や対象の楽しさを見いだしながら表現を工夫したりすることができる。（創造性）

② 他者との芸術活動や対話活動を通して，作品や表し方などのよさや面白さの感じ方を共有し，一緒

に活動する楽しさを味わうことができる。(協働性)
③　思いや意図を明確にもち，材や作品に楽しく関わり，自分の表し方の面白さや楽しさに気付き，自己の変容を自覚することができる。　(省察性)

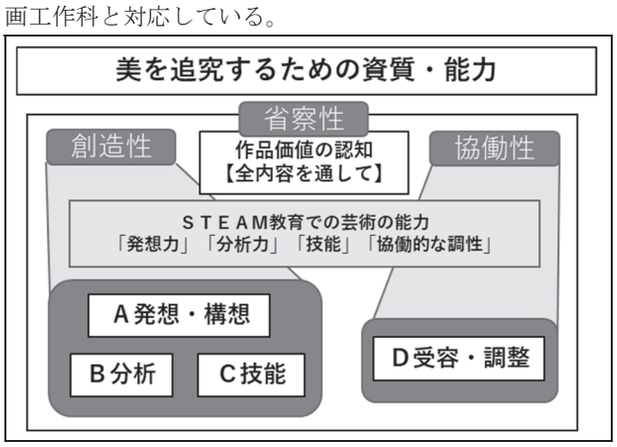
〔第３学年及び第４学年〕
①　材や作品の特徴を音楽的，造形的な視点の関わり合いから気付き，音楽的や造形的なよさや面白さを味わうための技能を身に付け，豊かに発想や構想をしたり，事象や対象のよさを見いだしながら表現を工夫したりすることができる。　(創造性)
②　他者との芸術活動や対話活動を通して，作品や表し方などのよさや面白さの感じ方を共有し，一緒につくりだす楽しさを味わうことができる。(協働性)
③　思いや意図を明確にもち，材や作品に進んで関わり，自分の表し方のよさや面白さに気付き，自己の変容を自覚することができる。　(省察性)

〔第５学年及び第６学年〕
①　材や作品の特徴を音楽的，造形的な視点の関わり合いから多角的に理解し，音楽的や造形的なよさや美しさを味わうための技能を身に付け，創造的に発想や構想をしたり，事象や対象の美しさを見いだしながら表現を工夫したりすることができる。　(創造性)
②　他者との芸術活動や対話活動を通して，作品や表し方などのよさや美しさの感じ方を共有し，一緒につくりだす喜びを味わうことができる。　(協働性)
③　思いや意図を明確にもち，材や作品に主体的に関わり，自分の表し方のよさや美しさに気付き，自己の変容を自覚することができる。　(省察性)

3　内容構成

(1) 内容構成の考え方

内容は「発想・構想」「分析」「技能」「調整」である。「発想・構想」「分析」「技能」は主に創造性に関わる資質・能力である。「受容・調整」は主に協働性に関わる資質・能力である。芸術科は先述した通り現行教科の音楽科，図画工作科と対応している。



【図２　芸術科の内容構成】

(2) 具体的な内容構成

現行教科の音楽科，図画工作科の内容は，「表現」「鑑賞」「共通事項」で構成されている。活動別で見ると，音楽科では「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」の４つの活動，図画工作科では「造形遊び」「絵」「立体」「工作」「鑑賞」の５つの活動が示されている。このように，音楽科，図画工作科の内容はともに「教科を特徴付ける活動」を基に設定されている。しかし，芸術科においては，「美的情操の育成」「生活や社会の中の美」という視点で考え，活動ごとではなく，「発想・構想」「分析」「技能」「受容・調整」で構成し，育てたい資質・能力で整理する。こうすることで，音楽科，図画工作科に存在した，「学校での学びが生活や社会に転移しない」「活動自体が目的になってしまう」という課題を解決できると考える。その上で，活動を行っただけにとどまらず，「美的情操の育成」「生活や社会の中の美」という視点で，音楽科，図画工作科の内容について考え，教科の本質的な問いに迫っていく。このことにより，活動に柔軟性をもたせ，「美的情操の育成」「生活や社会の中の美」の視点で，内容を構成することができる。以上の内容構成の視点は，内容が整理されることや，芸術科が目指す美的情操を養い，生活や社会の中の美と豊かに関わる姿がより具体化できる。

また，デビット・Ａ・スーザ，トム・ピレッキ（2017）は，ＡＩ時代を生きる子どもたちに必要なＳＴＥＡＭ教育の重要性を示している。その中で，芸術は，人間の経験にとっての基本であることを唱えており，芸術には次に挙げる７つの能力を養えるとしている[5]。

・好奇心を誘導する
・正確に観察する
・異なった形をした対象物を知覚する
・意味を構築し，観察したことを正確に表現する
・他者と効果的に仕事をする
・空間的に考える
・運動感覚的に知覚する

これらのことから，好奇心を誘導するための「発想力」や正確に知覚できる「分析力」，正確に表現する「技能」，他者との関わりである「協働的な調性」が重要であることが分かる。そのため，芸術科では，活動ごとに内容を明記するのではなく，育てたい資質・能力で内容を構成する。

以上の視点から，次のような学習活動や学習活動を考えていく。

ア　音楽

ここでは，時間芸術である音楽を中心に取り扱う。例えば，音色，リズムなどの音楽を形づくっている要素を含む音や音楽への関わりを基に，感じたことを音楽的な表現活動を中心に表したり，自分の思いや意図を伝えるための音楽的な表現をつくりだしたり，曲や演奏のよさなどを見いだし，曲を全体にわたって味わって聴くことが考えられる。

イ　造形

ここでは，空間芸術である美術やデザインなどを中心に

取り扱う。例えば，形，色などの造形要素を含む素材への関わりを基に，感じたことを造形的な表現活動を中心に表したり，自分の思いや意図を伝えるための造形的な表現をつくりだしたり，自分たちの作品や親しみのある美術作品などを見て，自分の見方や感じ方を深めたりすることが考えられる。

(4) 各学年の内容構成と系統

上記の内容構成と視点を生かした要素と学年の系統性について表すと以下のようになる（表１）。

【表１　内容構成の例】

	１・２年生	３・４年生	５・６年生
【ア音楽】	A発想・構想 ・面白さや楽しさ B分析 ・反復や呼びかけとこたえなどの仕組みと音色や強弱，リズムの楽しさや面白さ C技能 ・発音 ・音色 ・拍にのって演奏する D受容・調整 ・共に活動する楽しさ	A発想・構想 ・よさや面白さ B分析 ・変化などの仕組みと，速度や音の重なりのよさや面白さ C技能 ・発音 ・呼吸法 ・音色 ・響き ・副次的な旋律に合わせる D受容・調整 ・共につくりだす楽しさ	A発想・構想 ・よさや美しさ B分析 ・音楽の縦と横との関係などの仕組みと和音の響き，調，音階などによる曲や演奏のよさ C技能 ・発音 ・呼吸法 ・音色 ・響き ・各声部の響きを合わせる D受容・調整 ・共につくりだす喜び
【イ造形】	A発想・構想 ・面白さや楽しさ B分析 ・身の回りの作品 C技能 ・材料や用具の慣れ D受容・調整 ・共に活動する楽しさ	A発想・構想 ・よさや面白さ B分析 ・身近にある作品 C技能 ・材料や用具の適切な活用 D受容・調整 ・共につくりだす楽しさ	A発想・構想 ・よさや美しさ B分析 ・親しみのある作品 C技能 ・活動に応じて材料や用具の活用 D受容・調整 ・共につくりだす喜び

(5) 内容精選の考え方

ア　焦点化

取り扱う内容を焦点化して指導することで，内容のスリム化を図る。例えば，現行の図画工作科では，造形遊びをする活動，絵や立体，工作に表す活動の２つの活動において，発想や構想に関する項目には，「どのように活動するのか」「どのように表すのか」など，表現対象に違いはあるが，発想や構想に関することは共通である。そのため，造形遊び，絵や立体，工作に活動を区別して内容を設定するのではなく，発想・構想に関する事項に焦点化をあてて題材を設定し指導を行えば，「造形遊び」「絵」「立体」「工作」それぞれの活動に区別することなく指導をすることが可能になる。このように内容を焦点化させることで，時数と内容の削減を図ることができる。

イ　複合化

芸術科において内容の関連は，学習対象が芸術分野に関わるものと関連ができると考える。例えば，古典文学は，日本古来の伝統芸能と関わる部分が大きい。昔の人のものの見方や感じ方を理解して，芸術作品に生かすことで，内容の関連を行うことができる。また，季節に関することも多く関連することができる。このように，季節や文学など，関わる対象が何かで，内容の関連を図ることができる。

ウ　統合化

人間科を主概念として，教科横断するようなダイナミックな学習の中で，概念的理解を拡大していく学びを行う際に，芸術は，関連概念としてつながる内容が多い。芸術科での関連概念は「芸術活動の楽しさ」「感受の違い」「作品の分析的理解」「思考的制作過程」「共感から生まれる感動」などが挙げられる。例えば，捉えたことを自己のイメージや感情などと関連付けることは芸術科で育まれる概念である。関連概念の中には，「感受」「思考」「共感」の３つの働きがある[6]。この３つの働きがあることで主概念へとつながり，内容精選を行う際の重要な視点となる。

4　各学年の内容（ゴシック：複合化，統合化）

※　複合化，統合化に関しては，どの内容にも関わることができる。

〔第１学年及び第２学年〕

【A　発想・構想（創造性）】

ア　音遊びや歌唱，器楽の活動の中で，感じ取った曲想を基に表現を工夫しながら，どのように演奏するのかについて思いをもち，表したい思いと音楽の構造との関わりに気付く。

イ　身近な自然物や人工物との遊びの活動の中で，いろいろな形や色を基に，感覚や気持ちを生かしながら，どのように表すかについて考え，表したいことと身近な材や作品の形や色などとの関わりに気付く。

【B　分析（創造性）】

ウ　音楽的要素を見いだしながら音楽表現や音楽鑑賞を通して，曲や演奏の面白さや楽しさと音楽の構造との関わりに気付く。

エ　造形的要素を見いだしながら造形表現や身の回りの作品の鑑賞を通して，造形的な面白さや楽しさと材や作品の造形的な特徴との関わりに気付く。

【C　技能（創造性）】

オ　発音や音色などに気を付けて歌ったり演奏し

たりする活動の中で，互いの音や伴奏を聴いて音を合わせることができる。

カ　造形活動の中で，身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れ，並べたり，つないだり，積んだりするなどして表現することができる。

【D　受容・調整（協働性）】

キ　互いの演奏や音を合わせる活動の中で，互いの楽しさや面白さの感じ方を共有しながら，一緒に活動する楽しさを味わうことを通して，共有した楽しさや面白さの感じ方の違いに気付く。

ク　共同して造形作品を製作する活動の中で，互いの楽しさや面白さの感じ方を共有しながら，一緒に活動する楽しさを味わうことを通して，共有した楽しさや面白さの感じ方の違いに気付く。

〔第３学年及び第４学年〕

【A　発想・構想（創造性）】

ア　即興表現や創作，歌唱，器楽の活動の中で，捉えた曲の特徴を基に表現を工夫しながら，どのように演奏するのかについて思いや意図をもち，表したい思いや意図と音楽の構造との関わりを理解する。

イ　自然物や人工物などを用いた造形活動の中で，形や色，材料を基に，思い付いた新しい形や色などを生かしながら，どのように表すかについて考え，表したいことと材や作品の形や色などとの関わりを理解する。

【B　分析（創造性）】

ウ　音楽的要素を見いだしながら音楽表現や音楽鑑賞を通して，曲や演奏のよさや面白さと音楽の構造との関わりに気付く。

エ　造形的要素を見いだしながら造形表現や身近にある作品の鑑賞を通して，造形的なよさや面白さと材や作品の造形的な特徴との関わりに気付く。

【C　技能（創造性）】

オ　発音や呼吸法，音色や音の響きなどに気を付けて歌ったり演奏したりする活動の中で，互いの音や副次的な旋律，伴奏を聴いて音を合わせることができる。

カ　造形活動の中で，材料や用具を適切に扱い，組み合わせたり，切ってつないだり，形を変えたりするなどして表現することができる。

【D　受容・調整（協働性）】

キ　互いの演奏や音を合わせる活動の中で，互いのよさや面白さの感じ方を共有しながら，一緒につくりだす楽しさを味わうことを通して，共有したよさや面白さの感じ方の違いを理解する。

ク　共同して造形作品を製作する活動の中で，互いのよさや面白さの感じ方を共有しながら，一緒につくりだす楽しさを味わうことを通して，共有したよさや面白さの感じ方の違いを理解する。

〔第５学年及び第６学年〕

【A　発想・構想（創造性）】

ア　即興表現や創作，歌唱，器楽の活動の中で，捉えた曲の特徴を基に，その特徴にふさわしい表現を工夫しながら，どのように演奏するのかについて思いや意図をもち，表したい思いや意図と音楽の構造との関わりを理解する。

イ　材料や場所，空間などの特徴を用いた造形活動の中で，構成したり周囲の様子を生かしたりしながら，どのように主題を表すかについて考え，主題と材や作品の形や色などとの関わりを理解する。

【B　分析（創造性）】

ウ　音楽的要素を見いだしながら音楽表現や音楽鑑賞を通して，曲や演奏のよさや美しさと音楽の構造との関わりについて理解する。

エ　造形的要素を見いだしながら造形表現や親しみのある作品の鑑賞を通して，造形的なよさや美しさと造形的な特徴との関わりについて理解する。

【C　技能（創造性）】

オ　発音や呼吸法，音色や音の響きなどに気を付けて歌ったり演奏したりする活動の中で，各声部の音や全体の響き，伴奏を聴いて音を合わせることができる。

カ　造形活動の中で，材料や用具を選択し，前学年までの材料や用具についての経験や技能を総合的に生かしたり，方法などを組み合わせたりするなどして表現することができる。

【D　受容・調整（協働性）】

キ　互いの演奏や音を合わせる活動の中で，互いのよさや美しさの感じ方を共有しながら，一緒につくりだす喜びを味わうことを通して，共有したよさや美しさの感じ方の違いを理解する。

ク　共同して造形作品を製作する活動の中で，互いのよさや美しさの感じ方を共有しながら，一緒につくりだす喜びを味わうことを通して，共有したよさや美しさの感じ方の違いを理解する。

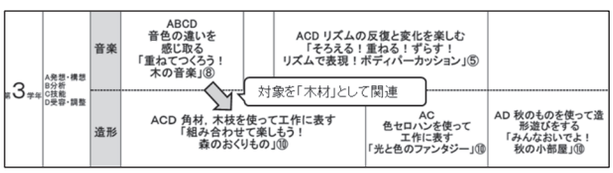
5　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

年間指導計画の作成にあたっては，本校の全体計画に基づき，芸術科においては，子供たちが自分たちの生活や社会との関連を感じ取りながら，身近なひと・もの・ことの

多様性にふれ，自分の表し方をつくりだしたり，自分の伝えたい思いや意図を造形や音楽で表現したり，芸術作品等からよさや美しさを感じ取ったりすることができるようにする必要がある。そのために，学校行事や学習する季節との関連を図ったり，他教科の学習とのつながりをもたせたりする。また，単元間で内容や扱う材料・主題などを関連させる（図３）。

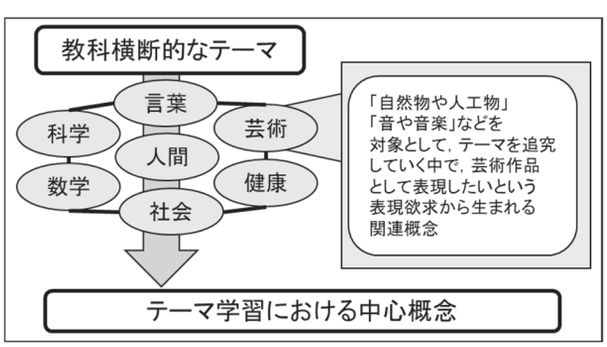


【図３　単元間の関連例】

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

子供たち自身がテーマを設定し，教科横断するようなダイナミックな学習の中で，概念的理解を拡大していく子供の文脈に沿った学びである。芸術科の造形や音楽などの芸術活動を通して学ぶという特質を考えた場合，テーマ学習で成立するのは，対象と内容の具体の「自然物や人工物」「音や音楽」である。人間科で学習する内容を主概念として位置付け，他教科から派生されるテーマ学習では，芸術科の内容として取り扱うことが可能な内容を芸術科で取り扱うこととなる。そのため，追究していく中で，芸術作品として表現したいという思いが，テーマ学習としての芸術科の位置付けとなる（図４）。

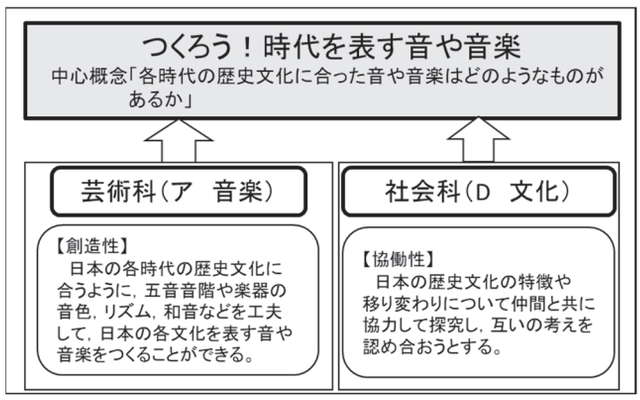


【図４　テーマ学習】

(ｲ) リレーション学習

各教科での学習が，対象によって結び付き内容を統合する学習展開である。

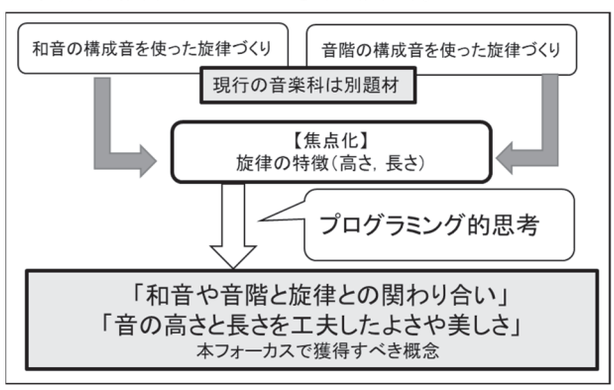
例えば，社会科の歴史文化の学習が「昔の人のものの見方や感じ方を捉える」内容であることと，日本における芸術文化を生かした表現活動とを関連させることで，文化理解の概念で関連が可能になる（図５）。



【図５　リレーション学習】

(ｳ) フォーカス学習

現行の音楽科，図画工作科の内容を芸術科の視点で焦点化することによって，内容精選が図られ，フォーカス学習となる。音楽科の音楽づくりの題材を旋律の特徴などの音楽的要素で焦点化することで，内容を削減した音楽づくりの学習を展開することができる（図６）。

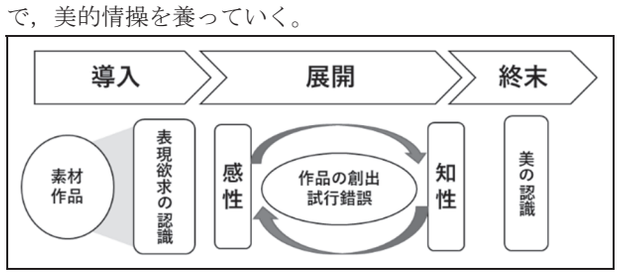


【図６　フォーカス学習】

ウ　一単位時間の学習のプロセス

芸術科では，一単位時間において，子供の文脈を中心とした表現欲求の連続を重視する。導入段階では，自己の表現欲求の認識を行い，表現活動への原動力とする。

展開段階では，感性を働かせて表現活動を行う中で，試行することで，感受と知覚を繰り返していく。終末段階では，表現活動で生まれた作品や行為について振り返ることで，美的情操を養っていく。



【図７　一単位時間の学習のプロセス】

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

芸術科では，学習活動を「音楽」「造形」の２つの活動を行う。これらの活動が芸術科の学習として成立するためには，芸術要素の取り扱いが必要となる。芸術要素は，造形的要素，音楽的要素の２つの要素から成り立っ

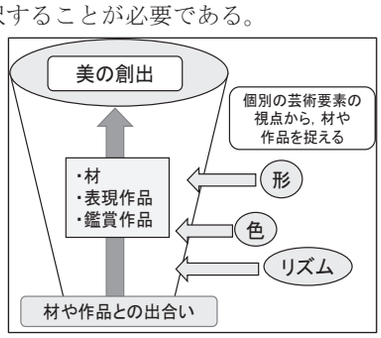
ている[6,7]。それぞれの取り扱う対象は以下の通りである（表３）。

【表３　対象となる芸術要素】

芸術要素
音楽的要素
【音楽を特徴付けている要素】 音色　リズム　速度　旋律　強弱　音の重なり 和音の響き　音階　調　拍　フレーズ 【音楽の仕組み】 反復　呼びかけとこたえ　変化 音楽の縦と横との関係
造形的要素
【形】　【色】 立体　平面　明度　彩度　色相　濃淡 【線】 太細　長短　直線　曲線　波線 【材質】　【光】 質感　触感　肌理　強弱　濃淡　明暗 【造形原理】 統一　変化　強調　対照　比例　パターン 動き　リズム　バランス　空間

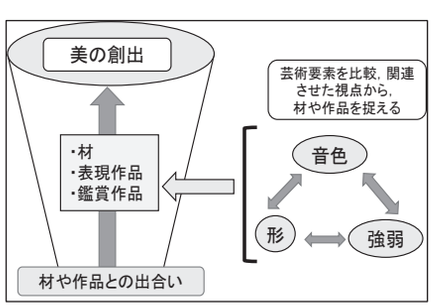
これらの芸術要素を取り扱うことで，音楽的，造形的な視点を働かせながら，思考することができると考える。これは「音楽」「造形」ともに共通して取り扱う事項である。また，これらの芸術要素は，児童の発達段階や取り扱う材に応じて，適切に選択することが必要である。

芸術要素は，児童の発達段階に応じて作品への視点が変化してくる。低学年では，材や表現作品，鑑賞作品と関わる時に，芸術要素の視点からそれらを捉えることができるようにする（図８）。



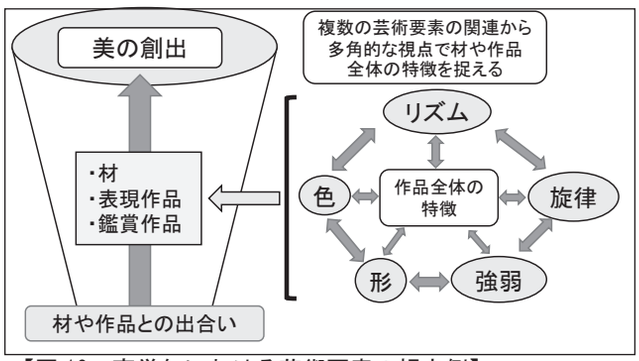
【図８　低学年における芸術要素の視点例】

中学年では，材や表現，鑑賞作品と関わる時に，複数の芸術要素を比較，関連させた視点からそれらを捉え，感じたことを言葉や絵，図等で表現することができるようにし，芸術要素の関わりの視点から，それらを捉えることができるようにする（図９）。



【図９　中学年における芸術要素の視点例】

高学年では，材や表現作品，鑑賞作品と関わる時に，芸術要素の視点からそれらを多角的に捉え，複数の芸術要素から材や作品と関わったり，芸術要素同士の関わりから，音楽的や造形的な作品の全体像の特徴を理解したりすることができるようにする（図 10）。



【図 10　高学年における芸術要素の視点例】

このように，発達段階に応じ，芸術要素の視点が深まってくると考える。ただし，これらの芸術要素は，単に知識として教え込むものではなく，子供の発達段階や指導のねらいに応じて，取り扱う教材や内容との関連から，必要と考えられる際には，その都度繰り返し指導を行っていくものとする。６年間を見通した学習を進めることを意図する。

イ　真正の課題の条件

芸術科においては，次の３つの真正の課題となる条件を設定する（表４）。

【表４　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知のまとまり	材や芸術作品から感受したこと，発想したことや，芸術作品の要素が上学年や中学校に系統立ててつながる課題であること
たくましい追究	子供にとって美を感じる芸術作品を対象に，作品がもっている芸術要素から，一人では解決できない課題であること
学校を超える価値	生み出す作品が，子供にとって美を感じるものであり，これから出合う美に対して，豊かに関わることができる課題であること

ウ　学習としての評価

芸術科の振り返りでは，振り返る際の軸として以下の点から行う。

【表５　振り返りの軸】

感受・発想（全学年共通）
例：他のグループの演奏を聴いて，強く演奏したり，音をたくさん重ねたりして，にぎやかで元気よく感じました。細長くした粘土の形から，蛇のような生き物を思いつきました。
芸術要素（全学年共通）
例：木の音色が美しかった。形を変化させて，動きを表現したい。赤い色が作品を明るくしています。強く演奏することで，迫力のある作品にすることができました。

構成（中学年・高学年）
例：生き物が増えていく様子を表すために，木琴をたたく人をだんだん増やす工夫をしました。

(3)　芸術科に関わるたんれんの指導

芸術科に関わるたんれんの指導では，表現する際の技能の高まりを重視する。そのために，学校行事での表現の場に向けて，表したい思いや意図を子供自身が明確にしながら，指導を行っていく。

(4)　芸術科に関わるチャレンジの指導

芸術科に関わるチャレンジの時間に「アート」「ミュージック」を選択した子供は，以下の内容に取り組む。そこで，子供はそれぞれの内容から美を追究し，発表会やコンクールに応募し，成果を他者評価できるようにする。美の追究に没頭し，どのような表現方法がよいのかや，よりよい表現方法に必要な技能や多様さについて考えるなど，美を追究していく内容を決定し，音楽，造形活動を行っていく。

具体的な内容は，次の通りである。

ア　ミュージックチャレンジ

(ｱ) 活動の目的

自分たちで，どのような演奏をしていきたいのか思いをもち，目標を決め，そのために必要な発声法や奏法などの基礎的，発展的な練習を行い，よりよい歌い方や演奏をつくりだそうとする。

(ｲ) 活動内容

○　演奏に対する思いをもつための話合い
○　基礎体力をつけるための筋力トレーニング
○　基礎的な発声トレーニング
○　全体での合唱・合奏練習
○　練習してきた成果を発揮する発表会

(ｳ) 活動の具体例

① オリエンテーション

オリエンテーションでは，実際にモデルとなる合唱や合奏を鑑賞し，どのような声で，歌ったり，どのような奏法で演奏したりすれば，よりよい音楽になるのかを探っていく。どのような姿勢や発声が美しい声になるのか，実感を伴いながら，美しい声づくりに向けて体力づくりなどの追究を行う。

② 課題設定

基礎的な声づくりを基にして，曲にも挑戦したいという思いを膨らませる。これまで練習してきた成果を発表したいという表現欲求をもたせる。オープンスクールでの発表や独自のコンサートを企画していこうという課題を設定し，そのためには，楽曲数を増やすこと，より美しいハーモニーをつくりだすことという目標を設定する。

③ 課題の追究と交流

基本的に，毎時間，自分たちで計画を立て，筋力トレーニングや発声練習を行う。その際に，教師の助言や，子供たち同士のアドバイスを基に，自分たちにとって，よりよいハーモニーをつくるための練習を行う。

その後の全体での合唱練習においては，パートごとに分かれたり，ソロを設定したりして，個が自分の課題に対して追究できるように練習を行う。練習の段階では，自分たちの演奏を録音して，聴く活動を設定することで，今の自分たちの演奏のよさや課題を分析し，全体で共有する話合いを行う。その際には，目標とする声や，どのような演奏をしたいのかという自分たちの思いと照らし合わせながら分析，共有を行うことで，これからどのような練習が必要なのか，目的意識の高い，明確な練習計画につなげることができる。これらのような練習活動を通して，オープンスクールでの発表を行い，練習の成果を発揮する場を設定する。

④ 振り返り

自分たちの成長を認識することができるように振り返りを行う。発表会を通して，課題や今後に挑戦したいことを明確にすることができる。

イ　アートチャレンジ

(ｱ) 活動の目的

試行する中で美を表現したり，多様な美を感じ取ったりし，表したい思いを表そうとしている。

(ｲ) 活動内容

○　追究テーマをもって表現活動を行う。 ・創作書道　・折紙アート　・スノードーム ・ミニチュアアート　・紙バンド工作 ・風景画　・デッサン　・割り箸造形　など
○　「アートチャレンジ展」の開催
○　紙バンド工作
○　消しゴム版画

(ｳ) 活動の具体例

① オリエンテーション

オリエンテーションでは，絵や立体，工作の様々な作品や材料を紹介し，どのような表現に挑戦したいかということについて話し合う。風景画やデッサンなどの絵画表現，消しゴム版画，習字とコラボした創作書道，スノードームや紙バンド工作など，生活を彩る立体造形の製作に取り組みたいという考えを表出させる。消しゴム版画では，自分の好きな文字や絵をデザインし，陽刻・陰刻の違いに注意しながら，彫刻刀等を使ってつくる。紙バンド工作では，かごやランチョンマット，コースターなど，編んだり組んだりしながら，自分が使いたいものや贈りたい相手を考えながらつくり進める。

② 課題設定

「オープンスクールで作品展を開こう」というゴール像を基に，次に自分の追究したい内容を考え，各自が好きなアート作品づくりを進める。

③ 課題の追究と交流

基本的には，自分のテーマ（「折紙でリアルな形をつくる」，「学校から見えるあらつの街をかく」等）に応じて様々

な表現方法を試行しながら，自分なりの表現で作品づくりを行う。作品展では，自分のブースを設けて作品を飾ることにし，それに向けどの作品をどのぐらい飾りたいかを考えて取り組むことができるようにする。

④ 振り返り

オープンスクールにおいて作品展を開くことで，つくった作品を多くの方に鑑賞してもらう機会を設ける。

ふり返りでは，「きれいにできたかなと考えるようになった」という作品に対する愛着，友達と交流したり，協力してつくったりする中で，見方，感じ方を広げ表現を追究したこと等の記述を行う。作品展で多くの方に見てもらうという機会を設けることで，意欲的に表現することにつながると考える。

＜註＞

[1] 菅野恵理子（2018）『未来の人材は「音楽」で育てる』アルテスパブリッシング.pp2-31.［人間にできることは何かがさらに追究されていくだろう。それは，人間ほんらいの力を再発見することにつながる。ではどのようにすれば，その力に気づくことができるだろうか？たとえば古今東西の芸術作品には，過去の音楽家や芸術家が発揮してきた才能や感性の断片が刻まれている。人間の感性を極限までに活かした人々である。］

[3] 日本認知心理学会（2010）『現代の認知心理学〈1〉知覚と感性』北大路書房.

[3] 福岡教育大学附属福岡小学校(2018)『平成29年度研究開発実施報告書』

[4] 野口薫編（2007）『美と感性の心理学』日本大学文理学部

[5] デビット・A・スーザ，トム・ピレッキ（2017）『ＡＩ時代を生きる子どものためのSTEAM教育』幻冬舎

[6] 奥村高明編著（2018）『小学校教育過程実践講座図画工作』ぎょうせい.

[7] 宮下俊也編著（2018）『小学校教育過程実践講座音楽』ぎょうせい.

[8] 山本文茂（2018）『音楽はなぜ学校に必要か』音楽之友社.

[9] 佐々木達行(2011)『造形教育における授業デザインと授業分析－授業構造とその構成要素から捉えた授業構成論－』東洋館出版社

[10] 藤江充，佐藤洋照(2011)『図画工作科研究』日本文教出版

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校版）

健康科編

1　教科新設の経緯

(1) 現代社会の要請から

健康科は，人が生活する上で必要な資源である「健康」を学ぶ上で設定した教科である。WHOは「健康とは，身体的，精神的，社会的に完全に良好な状態で，単に病気あるいは病弱ではないということではない。」と定義している[1]。また，ヘルスプロモーションの理念[2]からも，健康について学ぶことは，自己実現を目指す個人が学ぶ内容として必要なことである。健康科では，内容領域ごとに個人の中にある健康について学ぶ内容，家族や友達などの自分の身近な人も含めた健康について学ぶ内容を設定し，健康を幅広く捉えることができるようにする[3]。健康はすべての人の願いであり，共通に実現されるべきものである。今から 30 年後の社会では，現代社会では困難だった病気の治療や健康に関する課題の解決など，先進医療が発達すると言われている。すなわち，健康寿命が延び，人々の疾病や健康に対する考え方も大きく変化していると考えられる[4]。しかし，社会がどれだけ変わろうと，毎日の生活に満足感をもち，身体的な健康や精神的な健康を維持して，生活の質を生涯にわたって向上させていく力を付けることは必要不可欠なことである[5]。そこで，健康科では，人の身体や食生活，運動習慣について理解するとともに，体力を保持増進し，心身の健康を保持増進するという視点を中心に据える。それは，どのような時代になろうとも，自分自身の心と身体の状態に気付き，心と身体の状態を良好に保つために周囲に働きかけて対処していくことができるようにすることが必要だからである。そのため，子供が自分自身の身体について理解し，心身ともに良好な状態で生活を送るための体力を身に付け，よりよい食生活を送ることができるように学習内容を設定する。このように，健康科では，子供が「身体，食，運動」について，「自分自身の心と身体の状態を良好に保つことを自覚しながら，体力を保持増進し，必要な知識や技能を身に付けていくこと」を求める。

(2) 現行家庭科，体育科との関係

健康科の内容と関わる教科として，主に家庭科と体育科があげられる。家庭科では，「日常生活に必要な技能を身に付けること」「生活の営みを豊かにしていくこと」が目標の中で記され，内容が「A家族・家庭生活」「B衣食住の生活」「C消費生活・環境」で構成されている。しかしながら，日常生活に必要な知識・技能を身に付けさせるための活動中心の学習が散見され，家族や家庭生活についての概念を形成するには不十分である。また，現代社会では学校の学習内でしか使わない知識・技能の習得も含まれている。また，衣服の洗濯については，現行体育科の中に汚れについて学習する内容があるため，その部分と同時に指導することで時数や内容の削減を図ることも可能である。これらの内容の重なりや時代の要請に合わないものを移行，統合することも可能である。また，体育科では，「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する」ことが目標に記された。内容は「運動領域」「保健領域」で構成されている。特に運動領域においては，現代社会のスポーツは競技やアダプテッドなど多岐にわたり，その種目も増加している。これらの競技種目に必要な技能を学習に盛り込もうとするあまり，身に付けなければならない技能も増えて，内容が多岐にわたってしまっている。このようなことから，子供の生涯にわたってスポーツに親しむ資質・能力を育む内容に焦点化して指導することで内容の精選を図ることも可能であると考える[6]。

本校では，人が生活する上で必要な資源である「健康」を学ぶ健康科を設定することで，現行の家庭科や体育科における課題解決の一助となることをねらいとしている[7]。

(3) 健康科に関わる本校のこれまでの研究

健康科に関わって，本校では一昨年度まで，７教科の中で，領域「けんこう」が教科「健康」の学習内容を担っていた。この領域「けんこう」の学習においては，自分の身体や食，運動に関わる課題解決に向けた体験的な活動を通して，体力を向上し，健やかな心と身体を育むための理解を図り，望ましい行動を実践しようとする態度を身に付けた主体としての資質・能力を育成することを目指し，内容を「身体」「食」「運動」の３つとして研究を進めてきた[8]。

(4) ４年間の開発研究で見えてきたこと

４年間，領域「けんこう」として取り組んできた成果と課題を整理すると，以下のようになる。

ア　成果

○　健康な生活習慣を形成する内容に焦点化して学習内容を構成することができた。
○　自分の日常生活における運動習慣や食習慣を課題として生活の改善に取り組むことができた。
○　運動の目標を分けることで生涯にわたって運動に親しむための基礎を培うことができた。

イ　課題

●　教科「健康」が省察性の発揮を求める内容と創造性の発揮を求める内容に明確に分かれることが明らかになった。
●　スポーツや食など文化につながる題材の開発が十分に為されていなかった。
●　自分の健康状態を子供自身が捉える学びを成立させることが困難であった。

このような成果と課題を踏まえ，今年度は子供が学ぶことで自分自身の目指す姿を実感しながら学びを深めることを目指し，教科「健康」を設定した。また，内容の理解を図ったり，体力を保持増進したりするために，６ヵ年の系統を見直すとともに，学ぶ目的を明確にして内容を構成し新たな学習をつくることができるようにしていくこととなった。

２　目標

(1) 教科の目標

自分や多様な人々の生活や運動に関わる体験的な活動を通して見いだした身体や食，運動に関する問題を解決する過程で，自分と健康との関わりを見いだす見方・考え方を働かせることで，３資質・能力を次のとおり発揮させることを目指す。

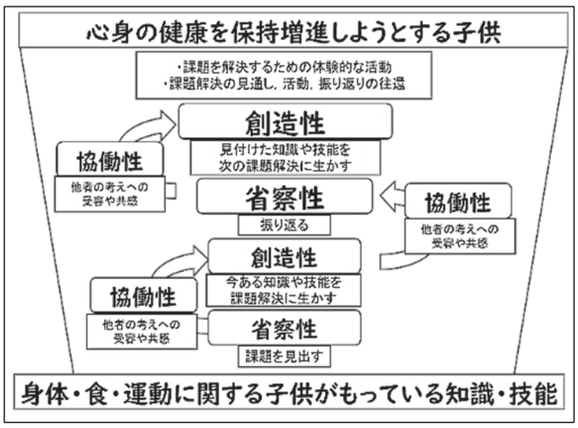
① 健康の課題を解決する過程を通して，必要な知識や技能を身に付けたり，それらを活用したりして，対象との新たな関わり方を見いだすことができる。（創造性）

② 健康の課題を解決するために，自他のよいところを生かし合ったり，不十分なところを補い合ったりして課題解決をすることができる。（協働性）

③ 健康の課題を解決する取組を基に，自他の現状を捉え，ありたい自分の姿を明らかにすることができる。（省察性）

(2) 見方・考え方と資質・能力の関係

健康科では，自分と健康との関わりを見いだす見方・考え方を働かせることで，上記３資質能力を最大限に発揮することができるようにする。この見方・考え方とは，「運動や食，身体について課題を見いだし，課題解決のために，自分の行動，周囲の環境，周りの人との関わり方を変容させ，自分にとっての納得解を見いだしていくこと」である。これは，健康科の本質的な問いに対応する「他者とよりよい生活をつくりだしていくための内容知と方法知」である。このような見方・考え方を働かせるために，健康科の本質的な問いは「どうアプローチすると，より自分に合った食事になるだろうか」や「もっと運動を楽しむためにはどのように運動に関わればよいだろうか」など，正解に近づけるのではなく，自分の納得解を見いだすことに主眼を置くものになる。この本質的な問いに対応するために，単元ごとに見方・考え方を積み上げていくことで，教科内容の見直しにつながるとともに，内容を精選することができると考える。



【図１　健康科の目標構造図】

健康科で重視する資質・能力は創造性である。そこには，自分の生活や動きなどから課題を解決する力，身に付けた知識や技能を生かして課題を解決しようとする，活用する力が含まれている。この資質・能力が育成されるために，知識や技能が活用される中で新たに構築されたり，深められたりする。学習の中で，課題を捉え，課題解決のための活動の有効性を考えるのに必要なのは，省察性である。すなわち，創造性と省察性は常に往還しながら発揮されるものである。以上のような健康科で育まれる資質・能力は現行教科の家庭科，体育科，学級活動と重なる部分が大きい。

そこで健康科では，子供が課題を追究していく過程で必要な知識を身に付けたり，自分との関わりで明らかにしたりしていくことをねらう。そのため，現行の教科と「知識及び技能」においては，事実的な知識を獲得することをねらいとするのではなく，事実的な知識を発見したり，活用する中で自分との関わりを見いだしたりしていくという点で違いがある。また，運動においては，学習のねらいに迫る活動を行う過程で子供自身が動きに気付いたり，技能を身に付けたりすることを目指す。そのため，現行の知識を活用するための思考力や表現力についても，健康科の創造性の中に含むものである。協働性については，現行の中には含まれていないものであるが，表現力の中に含まれていると考えている。省察性については，現行の学びに向かう力，人間性等では態度に特化しているが，健康科では学びの価値付けを行うため，学び方を子供が捉えることができると考える。

(3) 学年の目標

〔第１学年及び第２学年〕

① 自分の健康や運動に関する体験的な活動を通して，健康な生活を過ごす楽しさを感じ，課題を解決するための方法を考えることができる。（創造性）

② 自分の身体や食，運動の課題を解決するために，友達と互いの考えのよさに気付きながら考えを伝え合おうとする。（協働性）

③ 自分の身体や食，運動の課題を解決する活動を通して，自分の生活をよりよくしようとする。（省察性）

〔第３学年及び第４学年〕

① 自分や身近な人の身体や食，運動についての課題を解決するための体験的な活動を通して，課題を解決するよさや大切さを感じ，解決に向けた考えを創ることができる。（創造性）

② 自分や身近な人の身体や食，運動の課題を解決するために互いの考えのよさに気付き，目的をもって考えを伝え合おうとする。（協働性）

③ 自分や身近な人の身体や食，運動の課題を解決する活動を通して，自分自身の成長を見付けようとする。（省察性）

〔第５学年及び第６学年〕

① 自分や家族を含む多様な他者の身体や食，運動についての課題を解決するための体験的な活動を通して，課題を解決する必要性を感じ，解決に向けた考えを創りだすことができる。（創造性）

② 自分や家族を含む多様な他者の身体や食，運動の課題を解決するために，情報や考えを伝え合い，互いの考えのよさに気付こうとする。（協働性）

③ 自分や家族を含む多様な他者の身体や食，運動の課題を解決する活動を通して，現在とこれからの自分の生活と成長を考えようとする。（省察性）

3　内容構成

(1) 内容構成の考え方

健康科は健康や運動の課題を見付け，それらを解決していくことで資質・能力を発揮させ，望ましい生活を実践する力の育成を目指す教科である。子供が健康の価値を捉えていくためには，「身体」「食」「運動」の３つが必要である。具体的には，①自分自身の心と身体の状態について捉えることができること，②体をつくる基となり，活動の源となる食生活のつくり方を捉えること，③運動の楽しさや喜びに触れることなどである。

また，健康な生活を送るためには，①よくない状態になることを防ぐこと，②健康な状態を維持したり高めたりすること，③未来の自分自身につながることを捉えることが必要である。そのため，「身体」「食」「運動」の内容を指導する際には，「①予防的な方法，②健全な身体の育成，③これからの自分自身」のいずれかの考えを子供自身が構築することができるように指導することとする。

(2) 具体的な内容構成

上記の３つの視点から，健康科の「身体」「食」「運動の３つの内容を整理すると以下のようになる（表１）。

【表１　健康科の内容における３つの視点の取り扱い】

	ア　予防的な方法	イ　健全な身体の育成	ウ　これからの自分自身
A　身体	○	○	○
B　食	○	○	○
C　運動		○	○

ア　予防的な方法

ここでは，健康な状態を維持する方法や，疾病などの健康を阻害する要因を避けるための方法，その大切さについて取り扱う。小学校期は，体が十分に発達しておらず様々な予防的な行動を身に付ける必要がある時期でもある。そのため，「身体」の内容を中心に指導する。例えば，う歯や感染症の予防，環境衛生を整えることなどが考えられる。指導の際には，予防をすることで周囲の健康も保持することにつながることを捉えさせ，自分を取り巻く人々の健康にも気付くことができるようにする。また，「食」の内容では，疾病を予防するために必要な栄養や食事の仕方などについて取り上げることが考えられる[9]。その際，学年が上がるにつれて，自分だけではなく家族の健康も意識して献立を立て，自分をとりまく健康について考えの広がりをもたせる。「運動」の内容においては，自分自身の体を維持させるために，適度に運動をする必要があることを理解させるとともに，運動の楽しさや自己の運動との関わり方を捉えさせる。

イ　健全な身体の育成

自分の身体をよりよく発育・発達させるために必要な事柄について取り上げる。小学校期は心身の発達が著しく，生活習慣の土台を形成する時期でもある。そのため，「身体」「食」「運動」全ての内容で指導を行う。「身体」では，食や運動，睡眠や休養を適切にとっていくことが必要であることを統合的に捉えることができるようにする。「食」の内容では，低学年では，味覚について学び，食への関心を高める。その後，食品群や栄養素の働きについて指導する。また，中学年から和える，切る，ゆでるなどの基礎的な調理の技能を身に付けられるようにする[10]。「運動」の内容では，自分自身の目指す動きや運動への取り組み方を明確にし，運動の楽しさや喜びを味わい，体力を向上させることを重視して取り扱う。「身体」の内容においては，中学年で二次性徴について取り扱う。

ウ　これからの自分自身

情報化がますます進む社会の中で，生涯にわたって自分の健康な生活を見通すことをねらい，主に「身体」を中心に内容を取り扱う。高学年では，生活習慣病を中心に取り扱う。それらを関連させて，「食」や「運動」の内容を総合的に取り扱う。また，「食」では，自分の体へ取り込むものを主体的に選択することができるよう取り扱う[11]。「これからの自分自身」について取り扱う際には，自分自身だけではなく，多様な人々の健康について考えることができるようにする。このように，内容を関連させて取り扱うことで，健康の大切さを多面的に捉えることができる。

(3) 各学年の内容構成と系統

「身体」の内容については，発達段階を考慮し，学習する内容が子供自身の体や身近なところから始まり，空間の広がりや将来を見通した健康な状態へ視野が広がるように構成した（表２）[12]。

【表２　身体の系統】

内容	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
病気の予防	○歯の健康 ・磨き方 ○病気の予防 ・風邪・熱中症		○環境衛生 ・衛生，換気 ・衣服の汚れ		○生活習慣病 ・身体的不活動 ○感染症の予防 ・心の健康	
これからのわたし			○発育・発達 ・第二次性徴 ・体のつくり ・睡眠		○薬の摂取 ・効果と副作用 ・薬物乱用防止	

「食」の内容については，発達段階を考慮し，身近な食材である学校給食から，各家庭への食事へと広がるように構成した。また，低学年から配膳やマナー，切るについて行うことで，調理技能を確実に身に付けさせることもねらう。さらに，低学年で味覚について考えさせることで，食べるものや食べることそのものへの興味や関心を高めることを意図した（表３）。

【表３　食の系統】

内容	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
栄養と食			○食品の体内での働き ・食品の主な働きによる分類 ○食と安全 ・食中毒		○食品の体内での働き ・五大栄養素とその働き ・旬の食材に含まれる栄養素 ○食と安全 ・食品添加物	
調理の基礎	○基礎的な調理 ・洗う ・ちぎる ・まぜる ○食品・器具の取扱い ・食品の衛生的な取扱い		○基礎的な調理 ・切る ・和える ・味の付け方 ○食品・器具の取扱い ・包丁，まな板，ふきん，食器などの器具の安全で衛生的な取扱い		○基礎的な調理 ・材料や目的に応じた切り方や味の付け方 ・ゆでる ・いためる ・米飯およびみそ汁の調理 ○食品・器具の取扱い ・加熱調理器具の安全な取扱い	
食生活	○食事の役割 ・楽しく食べるための食事の仕方の工夫 ○食事の構成 ・味覚 ・配膳の仕方		○食事の役割 ・食事の役割と大切さ ・食生活を整える必要性 ○食事の構成 ・献立を構成する要素		○食事の役割 ・伝統的な日常食のよさ ・バランスのよい食事 ○食事の構成 ・1食分の献立の工夫 ・食品の組合せ	

さらに，「運動」の内容については，発達段階や将来の運動との関わりを考慮し，健康を保持・増進するために運動とのかかわり方を学ぶ内容と，スポーツに親しむための内容で構成した。学習で取り上げる際には，発達段階に応じて機能的特性に着目して運動することの楽しさや喜びを味わうことができるように留意する。それは，これから様々な運動に出合った際に，運動本来の楽しさを見いだし，その楽しさを自ら広げていくことが生涯にわたって運動に親しむことにつながると考えるからである。また，これからの共生社会では，多様な他者とスポーツを楽しむことも求められる。そのため，取り扱う運動の楽しさ十分に味わわせるために，ルールや人，自分自身の動きに着目して関わり方を変容させていく学びが必要である。このように，多様な人と運動と関わる経験が生涯にわたって運動やスポーツに親しむ人を育てることにつながるため，発達の段階に応じて「多くの人と楽しむことができる運動にする」ことを意図して学習を進めることを大切にしたい。そこで，現在，生涯スポーツにおいて，最も取り組む人口が多いウォーキングや，フィットネスにもつながるリズムダンスを取り入れている。また，社会的な健康を維持したり向上させたりすることにつながると考えられる集団で行うスポーツについては，バスケットボールなどのゴール型やバレーボールなどのネット型，ベースボール型を中心に取り扱う（表４）[13]。運動の内容については，複数の単元で同一の内容を指導することが，生涯にわたって運動に親しむための技能や知識を身に付けることにつながるため，複数の単元で同一の内容を指導する場合もある。

【表４　運動の系統】

内容	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
健康の保持・増進，関わり方を学ぶ内容	多様な動きをつくる運動 ・力を試す運動遊び ・体を移動する運動遊び ・鬼遊び		多様な動きをつくる運動 ・柔軟性，持久力，巧緻性，筋力を高めるための運動 ・水の中での運動 ・生活の中の運動		多様な動きをつくる運動	
スポーツに親しむ内容	スポーツにつながる運動 ・投げる，捕る ・蹴る，止める		スポーツにつながる運動 ・リレー ・幅跳びや高跳び ・ボールを使ったゲーム		スポーツにつながる運動 ・水泳	

(4) 内容精選の考え方

ア　焦点化

取り扱う「運動」の内容は現行の体育科の内容を焦点化して取り扱っている。例えば，現行では「器械運動」の内容領域には「マット」，「鉄棒」，「跳び箱」がある。クローズの状況で非日常の感覚を味わうことが共通している内容のため，「マット」と「跳び箱」に焦点化し，隔年で指導することとしている。このようにすることで同じ内容でも時数を削減したり，複数の内容を統合して行ったりすることが想定される。また，体つくり運動の領域においては，運動への関わり方を見いだすことができるよう内容を焦点化している。

イ　複合化

健康科では，他教科から生まれた子供の文脈において運動に取り組んだり，身体や食の内容について学んだりする必要性が生じた場合に関連を図ることが想定される。

また，健康科は，健康という概念の下に運動と食の関連を図るために存在している教科である。そのため，教科内においても，「運動と食」や「身体と食」などの関連が図られる。

ウ　統合化

人が生活する上で必要な資源である健康について学ぶ教科である健康科は，よりよい生活を求めることを基盤としている。

人間科を主概念とした教科を横断する学びでは，自分自身の生活や行動などに着目して学びを進めることで，主概念の拡大理解を進めることができる。

例えば，人間科において「共生」という概念を形成する学習があったとする。その際に，「多様な他者とスポーツを楽しむ」ということを下位概念として学習をすることが考えられる。

4　各学年の内容

〔第１学年及び第２学年〕

【A　身体】

ア　手洗いやうがいなどの自分の行動と疾病などとの関係を調べることを通して，手洗いやうがいをすることで病気を予防することができることや，その行い方を理解する。

イ　自分自身の歯の生え方や磨き方の特徴とう歯の関係を調べることを通して，食生活とう歯との関連について理解する。

【B　食】

ウ　会食のよさや楽しさについて話し合うことを通して，会食の所作や話題などのマナーと会食の楽しさの関係を理解する。

エ　野菜の味を調べることを通して，野菜にはそれぞれ特有の味があり，また，野菜によって含まれる栄養が違うことを理解する。

オ　食材を洗ったり，ちぎったり，まぜたりする簡単な調理を通して，食品を衛生的に扱うこと調理のよさを理解する。

カ　おやつに含まれる成分について調べることを通して，よりよいおやつの摂り方について理解する。

【C　運動】

キ　多様な動きが表出する運動遊びの場や動きを工夫することを通して，場や遊び方と味わう運動の楽しさとの関係に気付く。

［対象の具体］

・力試しの運動・走る運動・跳ぶ運動・転がる動き
・這う動き・水の中で浮いたりもぐったりする動き

ク　ボールゲームの楽しさを味わうために，空いた場所を目指す動き方を身に付けたり，ゲームをより楽しくするためにルールを工夫したりすることを通して，動きやルール，友達との関わりの変容と楽しさの広がりの関係に気付く。（統合化）

［対象の具体］

□　ボールゲーム

・ねらったところにボールを投げる，蹴る
・相手コートにボールを投げ入れたり，捕ったりする
・ボールを捕ったり，止めたりする
・ボールが飛んだり転がったりしてくるコースへの移動
・ボールを操作できる位置への移動

□　鬼遊び

・空いている場所を見付けて，速く走ったり，急に曲がったり，身をかわしたりする
・相手のいない場所への駆け込み
・少人数で連携して相手をかわしたり，走り抜けたりする

〔第３学年及び第４学年〕

【A　身体】

ア　気持ちのよい過ごし方についての自分の行動と身の回りの環境と換気や清掃，整理整頓の仕方を調べることを通して，自分や身近な人のために環境を清潔に保つ大切さに気付く。

イ　体の発育・発達と栄養の取り方や睡眠・休養，運動などの自分の生活の仕方との関係について調べることを通して，成長には個人差があることを理解する。

【B　食】

ウ　発育・発達と生活習慣の関係について調べることを通して，食生活を整える大切さに気付き，よりよく自分の身体を成長させるために食生活を整える必要性を理解する。

エ　野菜を切る，和える調理を通して，調味料の種類や役割，材料や目的に応じた調理の仕方について理解する。

オ　安心して食生活を送るために話し合うことを通して，食事は摂り方によっては食中毒を起こすことや調理器具の衛生など，食と安全の相関関係を理解する。

カ　学校給食の献立など，身近な献立を調べることを通して，献立を構成する基本的な要素である主食，主菜，副菜について理解するとともに，自分や家族の健康のために「食品の組合せ」から栄養バランスを考えた食事をとる必要性を理解する。

キ　調理器具の正しい使い方について調べる活動を通して，包丁の安全な取り扱いと食器やまな板，ふきんの衛生的な取扱いについて理解する。

【C　運動】

ク　多様な動きが表出する運動の場や動きを工夫することを通して，友達と楽しく運動をするために行い方を工夫するよさに気付く。

［対象の具体］

・力試しの運動・走る運動・回る動き・水に浮いたり水の中で律動的に動く運動

ケ　運動の特性に応じた楽しさや喜びに触れながら，自己やチームの課題に適した練習の方法や競争の仕方を工夫したり，考えを友達に伝えたりすることを通して，動きの特徴や競争の仕方を理解し，友達の考えを認め，誰とでも仲よく運動に取り組む大切さに気付く。

［対象の具体］

・ハードル走・幅跳び・高跳び

コ　ゲームの楽しさを味わったり，喜びに触れたりするために，空間を意識した動き方を身に付けたり，ゲームをより楽しくするためのルールを工夫したりすることを通して，動きやルール，友達との関わりの変容と楽しさの広がりの関係に気付く。

［対象の具体］

□　ゴール型

・味方へのボールのパス，シュート，ゴールへの持ち込み
・ボール保持時に体をゴールに向ける
・ボール保持者と自分の間に守備者がいないよう移

動する
□　ネット型
・ボールを片手、両手または用具などではじいたり，打ち付けたりする
・相手から返球されたボールの返球
□　ベースボール型
・ボールをフェアグラウンド内に蹴ったり打ったりする
・投げる手と反対の足を一歩前に踏み出してボールを投げる
・向かってくるボールの正面への移動
・ベースに向かって全力で走り，駆け抜けること

コ　アダプテッドスポーツやニュースポーツなど，様々なスポーツの楽しさを味わいながら，運動を工夫することを通して，学校や地域の中にいる多様な他者と楽しく体を動かすための工夫の視点に気付く。（複合化）

〔第５学年及び第６学年〕

【A　身体】

ア　心身共に健康な生活についての自分や身近な人の行動と薬やサプリメント，食品添加物との関係について調べることを通して，その効果や利用の目的，望ましい活用の仕方について理解する。

イ　食事や睡眠，運動などの自分や身近な人の生活の仕方とそれらが基で起こる病気について調べることを通して，これからの自分の生活の仕方を整えていく必要性を理解し，改善していく。

【B　食】

ウ　家庭の食事や学校給食，異なる文化の食事について調べたり，献立を考えたりすることを通して，伝統的な日常食のよさを理解する。（統合化）

エ　食事に含まれる栄養について調べたり話し合ったりすることを通して，自分の日常の生活の中から，食事の内容についての課題を見いだし，課題解決の過程において，自分や家族のよりよい食生活のために食事の組合せや献立の立て方について理解する。（複合化）

オ　目的に合った調理の計画を立てることを通して，調理に必要な材料の分量や手順を理解する。

カ　ゆでる，いためる調理を通して，材料や調理の目的に適した加熱操作や調理の仕方を理解する。

キ　ごはんとみそ汁の基本的な調理を通して，米がごはんになるまでの炊飯に関する一連の操作や変化，だしのとり方や実の組合せ，切り方を理解する。

ク　調理器具の正しい使い方について調べることを通して，自分や全体の課題解決のために，調理に必要な用具の安全で衛生的な取り扱い方，加熱用調理器具の安全な取り扱い方を理解する。

ケ　食事の栄養について調べたり話し合ったりすることを通して，栄養のバランスを考えた１食分の献立の食品の組合せを理解する。

【C　運動】

コ　多様な運動の楽しさを知り，様々な目的をもって多様な人と運動を行うことを通して，運動の楽しさや価値に気付き，運動に積極的に取り組む大切さを理解する。

サ　自分の体の状態や体力に応じて自分の課題を設定し，巧みな動き，力強い動き，動きを持続する能力を高めるための運動の行い方を工夫したり，自分や仲間の考えたことを他者に伝えたりすることを通して，課題に応じた運動の行い方の工夫に気付き，仲間の考えや取組を認めたり，場や安全に気を配ったりして，運動に積極的に取り組む大切さを理解する。

［対象の具体］

・力試しの運動・走る運動・回る動き・水に浮いたり水の中で律動的に動く運動

シ　運動の特性に応じた楽しさや喜びを味わいながら運動をすることを通して，考えを他者に伝えながら自己の能力に適した課題の解決の仕方，競争や記録への挑戦の仕方，自分に合った課題の解決の仕方や運動の行い方に気付き，仲間の考えや取組を認めたりして積極的に運動に取り組む大切さを理解する。

［対象の具体］

・器械運動・ハードル走・幅跳び・高跳び

ス　ゲームの楽しさや喜びを味わうために，空間を使った連係した動き方を工夫することを通して，チームの中での自分の動きや友達との連係した関わりの変容と楽しさの広がりの関係に気付く。

［対象の具体］

□　ゴール型
・近くにいるフリーの味方へのパス
・相手に取られない位置でのドリブル
・パスを受けてのシュート
・ボール保持者と自分との間に守備者が入らない位置への移動
・得点しやすい場所への移動
・ボール保持者とゴールの間に体を入れた守備
□　ネット型
・自陣のコートから相手コートへのサービス
・味方が受けやすいようにボールをつなぐ
・片手，両手，用具を使っての相手コートへの返球
・ボールの方向に体を向けることとボール方向への素早い反応
□　ベースボール型
・止まったボールや優しいボールをフェアグラウンドに打つ
・打球の捕球

・捕球する相手に向かっての投球
・打球方向への移動
・塁間の全力での走塁
・守備の隊形をとって得点を与えないようにする

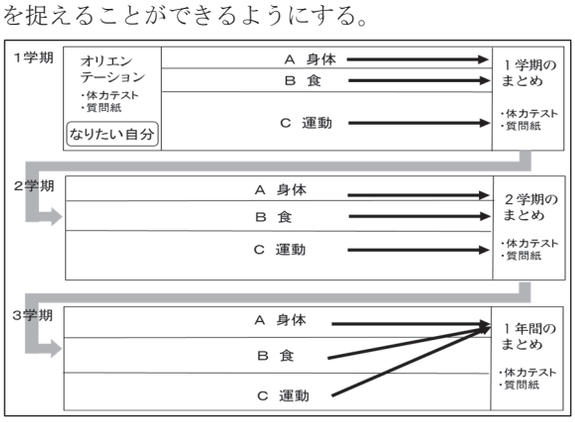
セ　アダプテッドスポーツやニュースポーツなど，様々なスポーツの楽しさを味わいながら，運動を工夫することを通して，学校や地域の中にいる多様な他者と楽しく体を動かすための工夫の視点に気付く。（複合化）

5　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画作成上の配慮事項

ア　年間指導計画についての考え方

年間指導計画作成にあたっては，本校の全体計画に基づき，健康科においては，子供たちが自分の成長を感じながら学んでいくことができるようにする必要がある。そのために，各学年段階の始めには，オリエンテーションを行い，自分の体力の状態を確かめ，その年度での学び方や体力についての目標を設定するようにする。さらに，３学期には，１年間を振り返り，成果や高まりを捉えることができるようにする（図２）。そのため，３学期の後半では，身体や食，運動の内容を統合して扱い，自分自身の一年間の成長を捉えることができるようにする。



【図２　年間の題材配列】

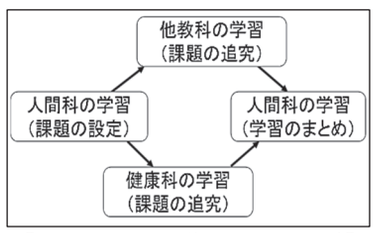
運動の指導については，機能的特性に着目し，その運動種目のもつ楽しさを十分に味わうことができるよう配慮して，実施計画を作成するように配慮する。特に，低学年においては，幼稚園からの接続であることや神経系に刺激を与えて動きを増やすことが大切な時期であることを踏まえて，なだらかに運動技能の習得へとつながるようにする。食や身体の指導では，既有知を活用することで，新たな知識や技能の必要性を感じて身に付けていくことができるよう，子供主体の学習を進めることができるよう配慮する。

イ　単元計画についての考え方

(ｱ) テーマ学習

テーマ学習は人間科の学習が核となるものである。人間科の学習でテーマを設定し，そのテーマについて健康科で学ぶ必要があれば，健康科で学ぶこととなる（図３）。平成 29 年度第６学年の実践では，九州北部豪雨を扱い，災害時における健康の維持の内容を健康科で取り扱った。

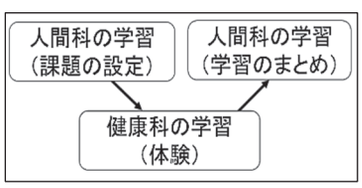
健康科の身体活動を通して学ぶという特質を考えた場合，テーマ学習として成立する内容は，A身体とB食の内容である。テーマ学習は他教科からテーマが生まれ，健康科の内容として取り扱うことが可能な内容を健康科で取り扱うこととなる。そのため，食文化の追究や自分自身の体の構造や健康状態の維持などがテーマ学習で取り扱う内容として考えられる。



【図３　テーマ学習のイメージ】

(ｲ) リレーション学習

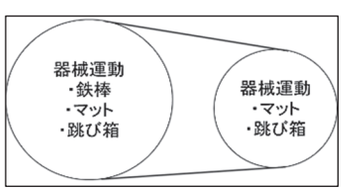
共通する学習対象を複数の教科で指導する場合に，可能となる考え方である。健康科の場合は，例えば，人間科で障がいのある方と交流し，「もっと仲良くなりたい」という願いをもつ。そのための１つの方法としてアダプテッドスポーツを一緒に行うことが考えられる。子供の意識としては健康科の学習としての認識は薄く，結果として健康科の内容に触れる場合にリレーション学習として設定されることが考えられる（図４）。



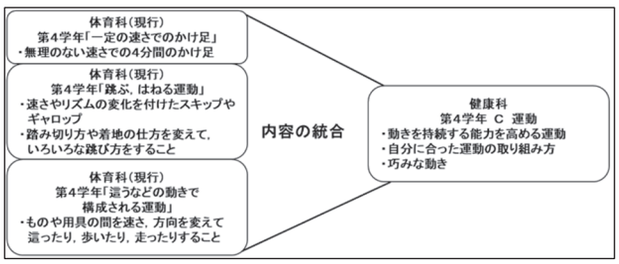
【図４　リレーション学習のイメージ】

(ｳ) フォーカス学習

健康科におけるフォーカス学習は３種類あると考える。１つは，内容削減のフォーカス（図５）である。現行の体育科や家庭科の内容において健康科の目標に照らして内容を精選し，重点化して指導するものである。例えば，現行の体育科における器械運動の領域では，３つの運動種目を行うことが示されている。健康科では，器械運動を「自分自身の体の動かし方に着目して動きの高まりを感じる」ために適した材として考えるため，腕の支持や回転，跳躍などの非日常的な動作が表れるマットと跳び箱に焦点化している。２つは，単元における時数削減のフォーカスである。これは，現行の教科時数で実施しているものよりも少ない時数で単元を実施することを目指したものである。そのためには，下学年からの確実な知識や技能の積み重ねが必要である。３つは，内容統合のフォーカスである。例えば，現行の体育科では，体つくり運動の領域と陸上運動の領域とで似ている動作を行うものがある。これらを統合して指導することで，時数の削減を図ることができる（図６）。



【図５　内容の削減】



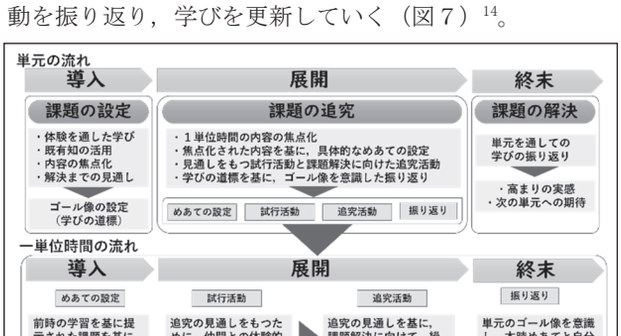
【図６　内容統合のフォーカス例】

また，健康科においては，同学年の内容間をつないで学習を行うことも考えられる。「身体」「食」「運動」を内容によっては一体的に扱い，学習効果を高めつつ，時数削減につなげていく。

ウ　一単位時間の学習のプロセス

健康科では，「関わり」を大切にした学習のプロセスを位置付けることで，自分と健康に関する見方・考え方を更新していく。単元においては，まず，導入段階でゴール像を設定することで，学びの道標をつくっていく。展開段階においては，１単位時間ごとの内容を焦点化し，学習を展開していく。その際，単元のゴール像を見通して立てた具体的なめあてを基に，自分と対象との関わりを毎時間振り返る。終末段階では，学びの道標を基に振り返りを行い，高まりを実感したり次の単元への期待感を高めたりする。

一単位時間においては，特に，単元の展開段階において，学びを連続させることができるように，課題解決のプロセスを位置付けていく。導入段階では，問いが生まれるように，前時の振り返りを基にした課題を提示する。その際，一人一人が的確に自分のめあてをつかむことができるよう，具体的な場面を提示する。展開段階では，まず，「分かる」ことを大切にし，仲間と共に課題解決の糸口を見付ける。そして，それを基に，試行錯誤を繰り返しながら課題を追究していく。終末段階では，めあてを基に自分の活動を振り返り，学びを更新していく（図７）[14]。



【図７　学習プロセスの例】

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

ア　学習活動の条件と具体

健康科では，学習の目標に向かって，自分の課題を明らかにし，対象に進んで関わりながら，身体活動を通して課題を解決していくことを大切にしている。その上に立ち，学習活動を展開していく際に大切にしたい条件は，次の３つである。

(ｱ) ゴール像を明確にする

健康に関する課題を解決するに当たって，子供一人一人が目標（ゴール像）を設定することは，大きな原動力となる。ゴール像を設定する際には，特に，明確さを大切にしたい。自分が立てた目標が実行可能なのか，また，行動の結果として，目標が達成できたのかが分からなければ，学習の成果を実感したり新たな課題を見いだしたりすることは困難である[15]。

(ｲ) 対話を通して自分を見つめる

創造性を発揮しながら学習活動を展開していくためには，関わりが大切になる。対象との対話，自己との対話，他者との対話を活発に行うことで，自分の健康に関する新たな関わりを見いだすことができると考える[16]。

(ｳ) 振り返りによって，学びを連続させる

健康に関する課題解決活動は，連続することで効果を高めていく。その上で重視したいのが振り返りである。振り返りは，単にその学習で分かったことやがんばったことを機械的に想起させるのではなく，単元や一単位時間のまとまりを見通したり，変容を自覚したりすることを大切にして行っていく。このような振り返りを繰り返すことによって，学びが効果的に連続し，資質・能力を最大限に発揮させることができると考える[17]。

イ　真正の課題の条件

教材は，４の各学年の目標及び内容に示す資質・能力を偏りなく養うことや「教科の究極の目標」を形成することをねらいとして，精選して調和的に取り上げることとする。その際に次の３つの真正の課題となる条件を満たして，精選する（表５）。

【表５　真正の課題の条件】

条　件	内　容
知のまとまり	自分なりの価値観（健康観）をつくることができる課題であること
たくましい追究	身体活動を伴った課題解決に向かう活動をする過程で既有知や身に付けた技能を活用することができ，それによって解決への意欲が高まるもの
学校を超える価値	健康な行動を取ることの価値に気付くとともに，自分や周囲の人の健康を願うことができるもの

子供は自分自身の健康を保持・増進するための知識について，生活経験の中で得ていることが多い。そのため，学年の発達段階に応じて，健康についての知識を課題の解決に資するように整理し直したり，新たな知識を獲得したりすることができるようにする。特に低学年では，自分自身の体の動きや健康な状態について，実際に触れたり，動かしたりすることで実感を伴った気付きが生まれるようにする必要がある。このような学びを行うことは，健康に対する関心を高め，自分自身の健康な生活をつくり出していくことにつながっていく。

そこで，健康科では，子供が実際に触れたり，動かした

りしながら課題を解決していくことで，目には見えない健康を，実感をともなって理解することができるとともに，既習知や生活で得た知識を子供自らが再構成することができることを大切にする。そのため，身体や食の内容においては特に，子供の身近な場面や環境から問題を見いだすことができるようにする必要がある。健康科における課題設定については，３つの条件を大切にしていく（表６）。健康科では，たくましい追究，学校を超える価値を重視して題材を開発することで，健康な生活への意欲を高めることができると考える。

ウ 学習としての評価

健康科では，３つの資質・能力のうち，特に，創造性の発揮を重点とし，以下の振り返りの軸を中心に評価をしながら，学びを連続させていく（表６）。

【表６　健康科の振り返りの軸（例）】

単元導入
変換（例：「この部分を変えると，きっとみんなで楽しむことができるゲームになるよ。」） 類推（例：前○○の学習をしたときに，こんなやり方をしたから，今回も使えそうだね。」）
単元展開
反復検討（例：「この方法がよかったから，もう一度試してみよう。」） 結合（例：「このタイミングで手の着き方に気を付けるとよさそうだね。」） 演繹（例：「今までやってきたことを合わせると，こんなことが分かったね。」）

⑵ 健康科に関わるたんれんの指導

たんれんでは，２学期の後半の時期に「持久走」を行う。ここでは，「長い距離に対してどれだけ速く走ることができるのか」を目標にする児童と「時間に対してどれだけの距離を走ることができるのか」を目標にする児童とで，それぞれに課題を設定し練習を行う。

⑶ 健康科に関わるチャレンジの指導

健康科に関わるチャレンジは，「ロープジャンプ」，「ダンス」の２つがある。どちらも，健康科の授業では十分に技能を高めることを目指す内容としては位置付いていない。そのため，チャレンジの時間において，より高いレベルの技能を習得することを求めている。そのために，外部講師の招聘を行っている。

ア　ダンスチャレンジ

(ｱ) 活動の目的

リズムに乗って踊るための技能を身に付けるとともに，動き方や振り返り付けを工夫することができるようになることを目的に設定している。

(ｲ) 活動内容

○　準備運動 ○　課題別練習 ○　全体練習 ○　振り返り

(ｳ) 活動の様子

オリエンテーションでは，ダンスの様々なジャンルについて説明をした。メンバーが決定した後，話合いを行い，「みんなにダンスを見てもらいたい。」という意見が多く出たため，運動会やオープンスクールであるあらつフェスタでの披露を目標として設定した。その後，動画を見ながら振り付けを真似し，自分たちで練習を行った。しかし，練習を進めるうちに，動画を見るだけでは細かい振付が分からず，スキルの向上が難しいことが分かった。そこで，ダンスのＧＴから教えてもらいたいという意見が出たため，ＧＴに来ていただくことになった。ＧＴに積極的に分からないことを聞いたり，教えてもらいながら何回も一緒に踊ったりして練習に励む姿が見られた。技能を身に付けることができるようになるとともに，本番直前には進んで練習に取り組み，衣装も自分たちで考えて準備をするなど，主体的に活動に取り組む姿が見られた。運動会当日には，グループや全体でダンスを披露し，練習の成果を発揮することができた。振り返りでは，自身の成長や友達と協力することの楽しさ，ダンスの面白さを実感する記述が多く見られた。これは，自分たちで目標を設定し，そのゴールに向かってどのように取り組んでいけばよいのか考え，練習を積み重ねてきたからだと考える。

イ　ロープジャンプチャレンジ

(ｱ) 活動の目的

憧れを抱いた技ができるようになるために，縄の操作の仕方やリズム等を工夫したり，気付いたことを伝え合ったりして技能を身に付けることができるようになる。

(ｲ) 活動内容

○　基本練習 ○　グループで練習 ○　発展技の練習 ○　振り返り

(ｳ) 活動の様子

オリエンテーションでは，まず，アクロバットパフォーマンスチームＶＩＶＯ（以下ＧＴ）や体操教室の子供たちのパフォーマンスを動画で視聴し，活動のイメージをもたせた。その後，下から上がってくる縄を跳ぶ「迎え」の跳び方を経験し，その後，ダブルダッチに挑戦した。メンバー決定後は，ダブルダッチをはじめ，二人でペアになって跳び，ボールを捕るなど，様々に試す時間を設定した。子供たちは，ダブルダッチを共通課題として取り組むとともに，個別の課題として，様々な動きを取り入れて，達成課題を設定することができた。しかし，「入るタイミング」「回し方」などに困難さを感じるようになってきた。そこで，先述のＧＴに来ていただき，ロープジャンプを行うに当たって大切なことを指導していただいた。ＧＴからは，

リズムを大切にした跳び方を教わった。２学期には，運動会に向けた練習に取り組んだ。その過程で，互いに動きを確かめながら，自分たちが披露する技の精度を上げていった。そして，運動会では全員が取り組んできた技を披露することができた。今後は，チャレンジの最終報告会で披露する技の選定と，新たな技の習得を行う。

＜註＞

[1] 世界保健機関．「健康の定義」https://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html［健康とは，病気でないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあることをいいます。］

[2] 鵜木秀夫（2013）『健康づくりのための運動の科学』化学同人．P5［個々人が健康をコントロールし，改善することができるよう世界的に働きかけていくヘルスプロモーションといった活動もスタートさせた。］

[3] 和田政史（2007）『健康科学のヘルスプロモーション理念』犀書社．

[4] 和田雅史・齊藤理砂子（2016）『ヘルスプロモーション』聖学院大学出版会

[5] 畑栄一(2009)『行動科学』南江堂．

[6] 岡野昇・佐藤学（2015）『体育における学びの共同体の実践と探究』大修館書店．P202［このように子供の事実から学ぶエピソード記述は質的研究が求められている体育の授業研究においても価値ある方法といえよう。］

[7] 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社.p５［生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現することを重視し，体育と保健との一層の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ，指導と評価の充実を進めてきた。

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説家庭編』東洋館出版社.

[8] 青柳領(2006)『子供の発育発達と健康』ナカニシヤ出版.

秋峰良二(2014)『快適な身体環境を求めて』ナカニシヤ出版.

[9] 荒井三津子（2014）『食学入門』光生館

[10] 平本福子『食育の場をどうデザインするか』女子栄養大学出版部

[11] 服部幸應（2017）『食育の本』オーガニックヴィレッジジャパン

[12] 石井克枝ら（2016）『ピュイゼ　子どものための味覚教育　食育入門編』講談社

[13] 鈴木秀人ら（2009）『小学校の体育授業づくり入門』学文社

[14] 新潟市教育委員会（2015）『リーフレット 新潟市の授業づくり』

[15] 三宮真智子（2018）『メタ認知』北大路書房Ｐ82〔目標が明確であればあるほど，自分の立てたプランが現実の自己のリソース（能力，技術，知識，環境，時期等）に見合うものかを評価することができる。〕

[16] 岡出美則ら（2016）『新版体育科教育学の現在』創文企画Ｐ167〔感覚的かつ知覚的であり，自己自身，自己と他者，自己と世界，自己と文脈の間で生まれる身体を投企した相互作用から学びが生成される〕

[17] 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説総則編』東洋館出版社

小学校学習指導要領（福岡教育大学附属福岡小学校）

評価の考え方

1　評価の基本方針

(1) 現代社会の要請から

令和２年度完全実施の学習指導要領では，学習評価の項目に新たな項目が置かれた。具体的には，単元や題材など内容やまとまりを見通しながら，児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に，評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価することを示し，授業の改善と評価の改善を両輪として行っていくことの必要性を明示した[1]。このような指導と評価の一体化を図るためには，児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という観点を一層重視し，教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り，学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。

しかしながら，現行学習指導要領の評価の在り方には２点の課題があると考えている。１つは，「教えから学びの転換」の視点が見えないことである。松下(2017)が示す「教えから学びの転換」は，子供が何を身に付けたのかを教師が把握することであり，これは，評価活動を子供の学習として組織し直そうとする試みである[2]。これはこれからのコンピテンシーベースの教育観に合致する。本校においても，この考え方を基に，子供の資質・能力を評価していく。２つは，知の構造と評価の関係性が示されていない課題である。今回の改訂において，内容精選や，時数削減が行われていない結果，教科の指導内容において内容依存になっていると言わざるを得ない現状がある。その結果，評価においても，教師が子供の現状を見取る学習評価として，内容理解を知識・技能テストを中心に総括的に評価することに頼らざるを得ない。そこで，本校では，教科を再編することで資質・能力の育成に寄与しやすい状況づくりを担保し，見方・考え方を頂点とした教科の知の構造を基に，知の構造の段階に応じた形成的な評価を構想している。

(2) 本校研究の成果と課題

ア　実施の成果

○　令和元年度，本校の職員質問紙調査（N=30 人）の，「各教科の特質を出し，子供と評価を共有して学習を進めることができた」の項目において，８０％が肯定的な回答であった。

○　本校の児童質問紙調査から，「振り返り」などのメタ認知に関わる数値の向上が見られた。

イ　今後の課題

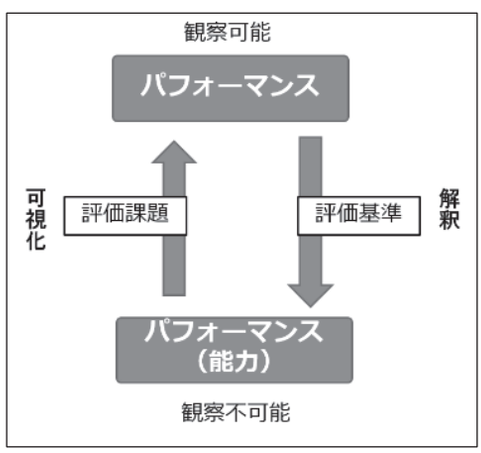
●　資質・能力の見取りが職員によって異なり，共通した指標が明確になっておらず，単元や年間レベルでのルーブリック等の共有，実践を行っていくことが不十分であった。

2　本校評価の考え方

(1) 学習としての評価　～Assessment as Learning～

本校では，まず課題設定において，対象との出合いを通して学習の中心となるパフォーマンス課題を設定し，それに対する自分の目標（評価規準）を決める。ここでの学習としての評価のポイントはルーブリックをつくることである。その後は子供とルーブリックを共有しながら調査・追究していく。学習終末の振り返りでは，本時の見方・考え方の理解度が自覚できる振り返りの軸を設定する。

パフォーマンス課題に対して作成するルーブリックを基に，子供の言動を評価していく。ここでのパフォーマンス課題は，一定の文脈の中で行われる学習者のパフォーマンスを手がかりに，概念理解の深さや知識・スキルを総合的に活用する能力を質的に評価する（図１）。



【図１　資質・能力の評価】

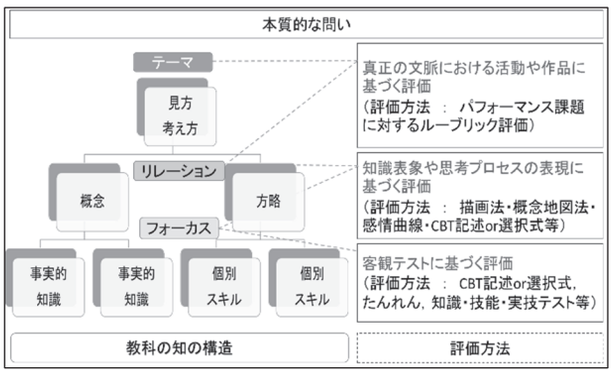
(2) 評価を生かしたカリキュラムと授業設計

本校の評価システムについては，西岡(2018)が示す思考スキルや話し合いなどの能力と，教科内容の両輪を重視する方法を挙げる。具体的には，①求められている結果（目標）を明確にする，②その結果が達成されたかどうかを確認する上で承認できる証拠（評価方法）を決定する，③①や②に対応できる学習経験と指導を計画することが推奨されている[3]。

(3) 知の構造と評価方法の対応

本校では，研究構想でも述べているように，最も低次には「事実的知識」と「個別スキル」が存在している。この「知っている/できる」レベルの評価は，知識・技能テストや，単純な実技テストで評価できる。また，「概念」「方略」の「分かる」レベルの知識と意味理解の洗練を評価するには，描画法や概念地図法，感情曲線などの表現や記述を用いることで評価できる。最上級にある「見方・考え方」の「使える」レベルの知識の有意味な使用と創造を評価す

るには，レポートや制作物，スピーチや演奏・演技など，様々な知識やスキルを使って行われる，パフォーマンス課題で評価できる（図２）[4]。



【図２　「知の構造」石井(2016)を基に永田が加筆】

３　本校評価の具体的取組

(1)　学習としての評価

(ｱ)　学びの道標

子供が事象に対峙したときに生まれる追究課題や問いに対して，学年の発達段階に応じて問題解決のプロセスをつくっていくものである（表１）。

【表１　学びの道標の基準】

下学年
調べてみたい（つくってみたい）ゴールを学級で共有化した上で，調べる（つくる）ために必要な内容を地図上に示していく。 子供の思考を大切にしながらも教師が介入しながら体験を重視しながら方向付けていく。
上学年
解決したいゴールを個々で決めて，ゴールに向けての解決の道筋を示していく。学習後に学びの道標に考えの変容の軌跡が見えるように付加修正していく。

教師の目的としては，概念が含まれる内容の獲得に向かうためのものであり，子供の目的としては自分たちで考えて解決の道筋をつくり，学習をつくりあげていくものである（図３，４）。

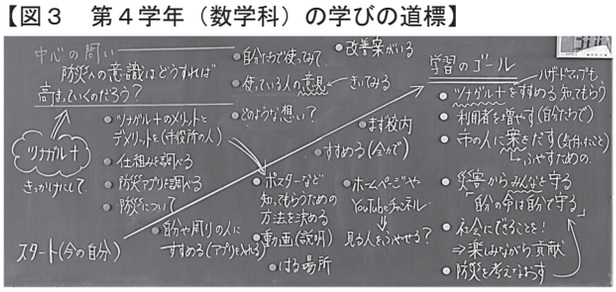
図３は，第４学年の数学科「表やグラフで調べよう」（C データ・変化）の実践である。本実践は，社会科「アジアの玄関口　福岡」とのリレーションであり，子供たちは，「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いについて，地理的な視点やデータの視点から答えをつくっていった。その際，子供自ら空港の利用者数等の与えられたデータを参考に，５時間分の学習計画を立てたものである。

図４は，第５学年の社会科「わたしたちにできること～広げよう！ツナガル＋高めよう！防災の意識～」（C 政治）の実践である。子供たちは，人間科の学習で九州豪雨の被災の現状を知り，社会科の学習の導入で「災害による被害を減らすためにどうすればよいか」という問いをもつことをねらいとした。

学習計画と評価

時間	計画（自分でつくる）	基準	評価	ふり返り
第１時	外国人がどの都道府県によくきているかグラフ化する。	A	2	私は全体をたんとうして，円グラフを作ることができた。
		B	3	
第２時	こうえきのルートについて調べる。	A	2	今回，調べると，分かったことは，たくさん福岡からがこまでのてつどうにのって，にもつをはこび，日本のいけんをはなしあう」に行っていると思った。
		B	3	
中間報告会	グラフなどを作り，発表し，わるいところを次の学習でなくす。	A	3	てりぞのさんの発表は字が大きくて，声も大きいので，とてもわかりやすかったです。私は，スライドの字が多すぎということをきめたので，もうすこしかんたんにまとめていきたいです。
		B	3	
		C	2	

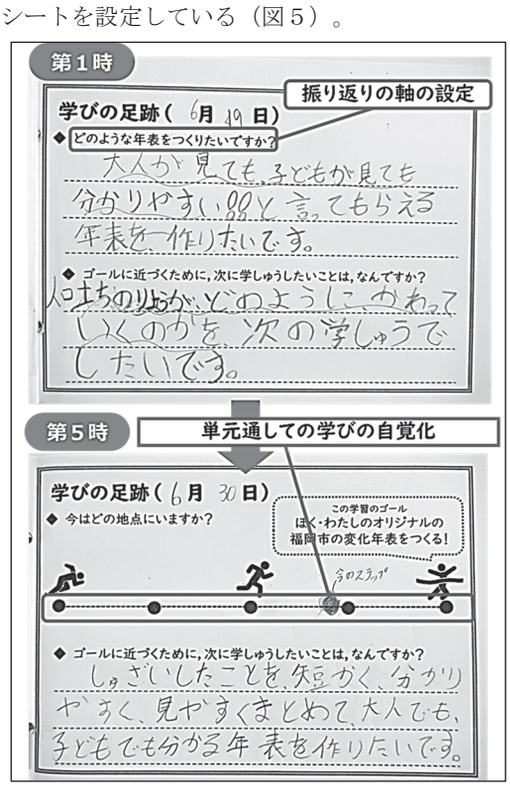
【図３　第４学年（数学科）の学びの道標】



【図４　第５学年（社会科）の学びの道標】

(ｲ)　学びの足跡

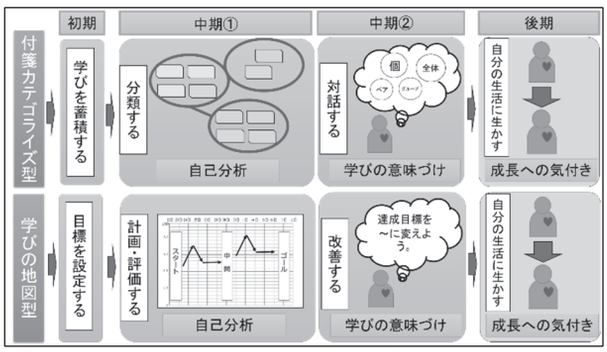
子供たちが目標設定した姿と今の自分の姿がどのくらいかということや，今どのくらい自分は歩みを進められているのかを重視していくことが本校の評価で重視している点である。そこで日頃の各教科の時間に自己内省していくシートを設定している（図５）。



【図５　第３学年（社会科）の学びの足跡】

(ｳ)　マイタイムノート

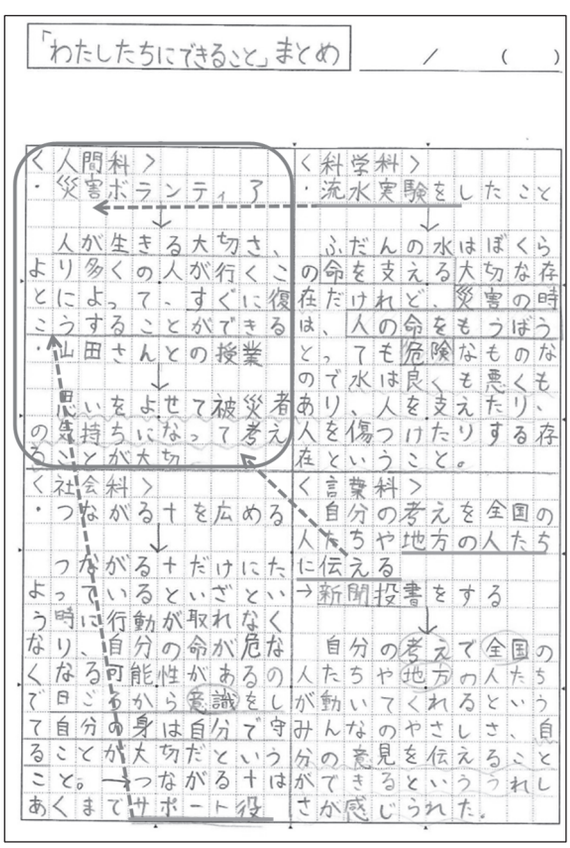
マイタイムノートは，自分自身がそれぞれの教科で身に付けたことや成長したこと，考えてきたことなどを振り返るための本校独自のノートである。自分自身のことを自分で深く見つめるために，「今の自分と，これからの自分を比べる」ことをねらいとして取り組んでいる（図６）。



【図６　マイタイムノートの活用法】

人間科に位置付いているマイタイムノートの活用は，「ありのままの自分」のよい面とともに，伸び悩んでいる面にも目を向けることが，目的である。そうすることで「自分を成長させたい」「自分を向上させたい」という欲求を生み出させられる。そのために子供たち一人一人が自分の目標や高めたい資質・能力によって自ら振り返ることや目標設定し，自己更新を進めていくことができるようにする。つまり，「マイタイム」は子供たちが各教科の学習や日々の生活から自分自身の成長や学びのプロセスを把握する上において重要な役割を担っているともいえる。

具体的には，低学年では絵日記のようにして活用し，一日を通して自分が感じたことや発見したことを絵や文で表すようにしている。中学年では，人間科を中心に自己の成長を振り返り，付箋で分類したり，線でつないだりしながらまとめるようにしている。高学年では，各教科での学びをつないで，自己の変容を図化しながらまとめるようにしている（図７）。



【図７　第５学年（人間科）のマイタイムノート】

(2)　学習のための評価

(ｱ)　ルーブリック（パフォーマンス課題に対する）

本校では逆向き設計論（Wiggins, G. と Mctighe, J.）を基にカリキュラムにパフォーマンス課題を位置付けている。このパフォーマンス課題を真正の文脈の中に位置付けることで，知の構造の最上級にある「見方・考え方」の「使える」レベルを評価する。

具体的には単元（長期的）または一単位時間の中で本質的な問いに対する見方・考え方を設定し，評価基準を基に指導者が見取っていく[5]。上学年では，評価指標を子供と共有し，学習者が評価していくような学習としての評価の要素も取り入れながら行う（図８）。

問い：将来の自分の健康をつくり出すために今の自分にできることは何だろうか。

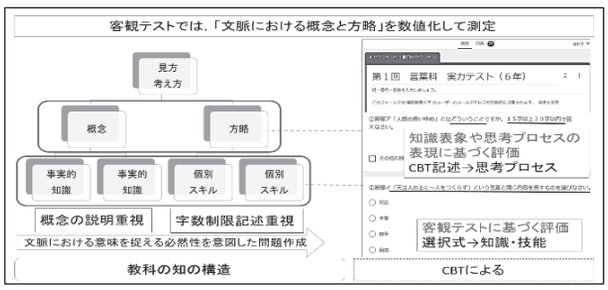
	創造性	協働性	省察性
3 よい	運動や睡眠，食事などの日頃の生活習慣が身体に及ぼす影響やその原因を理解することができる。また，10年後の自分の健康状態のイメージを具体的にもち，今の自分にできることを，自分の生活スタイルに合わせながら，食，生活，運動の３つの側面から実践内容を考えたり，実践したりすることができる。	自分の考えや実践を伝えたり，友達の考えを聞いて自分の考えを深めたりすることで，「ヘルスアッププロジェクト」をよりよいものにしていくことができる。	日頃の生活を振り返って，自分の健康に関するよい点や課題を見いだすことができる。また，10年後の自分の健康のために現在の生活習慣について見つめ直し，今の自分にできることを考えたり，学んだことをこれからの生活に生かそうと具体的なイメージをもったりすることができる。
2 合格	運動や睡眠，食事などの日頃の生活習慣が身体に及ぼす影響や原因をとらえることができる。また，10年後の自分の健康状態のイメージをもち，今の自分にできることを，食，生活，運動のうちの２つの側面から実践内容を考えたり実践することができる。	目指す姿 …いて自分の考えを深めたりすることができる。	現在の生活習慣から自分の課題を見いだし，10年後の自分の健康のために今の自分にできることを考えたり，学んだことをこれからの自分の生活にどのように生かしていくのか考えることができる。
I もう少し	日頃の生活習慣が及ぼす影響や原因についてとらえることができるが，今の自分にできることを考え，実践することができない。	自分の考えを伝えたり，友達の考えを聞いて自分の考を深めたりすることができない。	学んだことをもとに，将来の自分の健康をつくり出すために，これからどのように生活していくのか，自分の考えをもつことができない。

【図８　健康科におけるルーブリック】

上記は，第６学年の健康科「ヘルスアッププロジェクト」（A身体，B食，C運動）の実践である。本実践では，健康の保持増進のために，今の自分にできることについて考えをもつことをねらいとした。そこで，上記ルーブリックは，導入段階で，自分の睡眠や運動の時間，食事の内容や勉強時間等，日頃の生活を振り返った子供たちが，「今の自分にできることはどのようなことか」について追究していく際に，教師と子供で作成したものである。このように，ルーブリックを教師と子供で作成することで，日々の学習の振り返りにも必然が生まれ，子供が学習をつくる主体として学習を展開していく上でも価値があると考える。

(ｲ)　オンラインを活用した客観テストによる評価

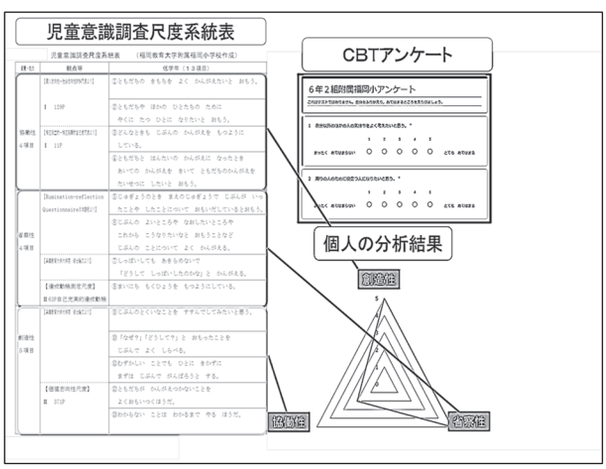
本校では，実力テスト（５，６年生を対象とした知識・技能テスト）をオンラインで実施している（CBT の活用）。そこでは，文脈における意味理解を問うことで，概念知の理解度を見取り，記述式説明問題を重視することで方略知の評価を機能させる（図９）。また，CBT の即時フィードバック機能により，学習者にその場で評価を返すことも可能になった。このデータは，グラフ化して学習者や家庭と共有することで，子供一人一人の概念知や方略知の理解状況の変容を基に，次の課題設定に活用することができる。



【図９　ＣＢＴを活用した第６学年言葉科実力テスト】

(ｳ)　資質・能力実態調査アンケート

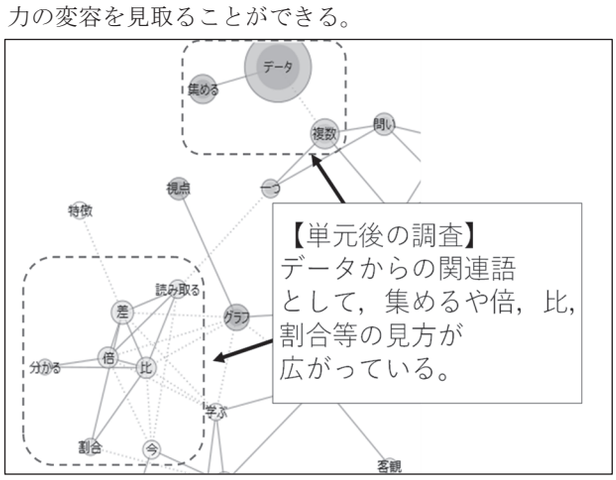
本校では資質・能力の評価の一つとして，本学教育心理ユニット生田教授と共同で作成している。具体的には，3資質・能力の分析を認知能力４項目，非認知能力９項目の計 13 項目で調査する。分析結果は，レーダーチャート化して個人に返し，課題を認識した上で学習にのぞむようにすることで，課題克服に意識をもってのぞむ（図 10）。



【図 10　資質・能力実態調査アンケート】

(ｳ)　語彙分析による text mining 評価

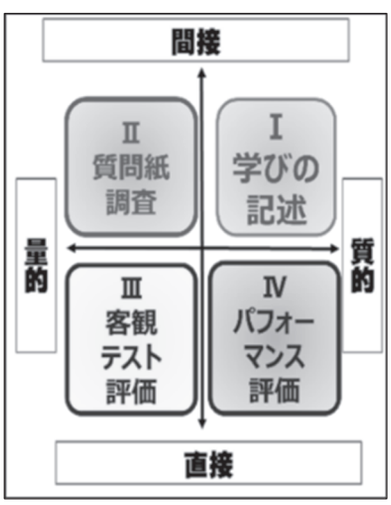
本校の資質・能力の向上を見取る際，定性的（文章や発話）なものの分析は，text mining 評価方法等を用いる。この評価方法は，子供が単元の前後でどのように考え方が変容したのかを，記述した表現物を基に分析することができる。本校研究においては，学習のねらいと子供が記述した語彙を紐付けすることで，創造性を中心とした資質・能力の変容を見取ることができる。



【図 11　第６学年（数学科）の text mining 結果】

上記は，第６学年の数学科「データでせまる歴史の変化」（C データ・変化）の実践である。単元前の子供の語彙分析では，「データ」から思い浮かぶ言葉は「集めること」「調べること」のような関連しか見られなかった。しかし，単元後には，図 11 からも分かるように，「データ」や「グラフ」の関連語として「複数」「倍」「比例」「割合」などが付加されている。これは，知識量が増えただけの見取りではなく，本校のテーマ学習を行ったことによる子供の学びが深まったことの裏付けにもなると考えている（図 11）。

このように，本校では教師が児童に対して行う評価と子供自らが評価の主体となる評価を効果的に位置付けながら，資質・能力の発揮・成果を見取っていく。そのために，一単位時間の指標ではなく，日頃から子供をつぶさに見取り，形成的に評価を積み重ねることが大切だと考えている。



【図 12　評価指標】

つまり，松下・石井(2017)が提案する質的なものと量的なものというベクトルと，直接的なものと間接的なものというベクトルで捉えた，４項目を総合的に評価し，本年度の評価を共通実践していくようにする（図 12）[6]。

なお，それらの分析においては，定量的（数量や数値）な分析は Excel で，定性的（文章や発話）な分析は，text mining 評価方法等を用いて，学習のねらいと語彙を紐付けすることで，実践を評価していくようにする。また，カリキュラム評価の観点から，資質・能力の変容を見取る児童質問紙や，全国学力・学習状況調査を CBT で実施していく。

評価チーム　○永田裕二　大村拓也　永松聖子
土橋和恵　烏田聖良

＜註＞

[1] 文部科学省(2017)「『学習指導要領』

[2] 松下佳代・石井英真(2017)「アクティブラーニングの評価」東信堂

[3] 西岡加名恵(2018)「逆向き設計で確かな学力を保障する」明治図書

[4] 石井英真(2016)「今求められる学力と学びとは」日本標準

[5] 西岡加名恵・石井英真(2019)「教科の深い学びを実現するパフォーマンス評価」日本標準

[6] 松下佳代・石井英真(2017)「アクティブラーニングの評価」東信堂

MEMO

令和元年度～４年度　文部科学省研究開発学校指定　延長　第２年次

学年
年間指導計画

R２年度　年間指導計画　第1学年

学年目標：「なかよく・たのしく・あたらしく」

教科	領域	１学期	時数	計	教育実習
学校行事		始業式／入学式／歓迎遠足／藤見学芸会／防災訓練／授業づくりセミナー／プール清掃／相撲・綱引き大会／終業式			始業式／防災訓練②／月見学芸会／あらつ大
言葉	A言語基礎	ひらがなをかこう (7)／アルファベットとなかよし(大文字) (2)／かたかなをかこう (3)	12	64	ひらがなやかたかな、かんじをつかってかこう (10)／くてんやかぎをつかってかこう (7)
	B言語論理	はじめまして (4)／しょうかいします　すきなもの (6)／なぜだか　かんがえよう (6)；げきに　あらわそう (14)／Hello,world　せかいの　いろいろなことばで　あいさつしよう (2)／Storytelling　えいごで　おはなしをきこう (2)；Numbers　1から10までのかず (1)	35		きいて　おしえて　じゆうけんきゅう (4)／いきものって　おもしろい (7)；いきものクイズをつくろう (6)；I`m happy.ジェスチャーをつけて伝えよう (2)／Storytel… えいごで　おはな…
	C言語文化	おはなしを　きこう (8)／しりとりをしよう (3)／なかまのことばをみつけよう (2)／Brown Bear,Brown Bear what do you see (4)	17		ふくおかにつたわるおはなし (7)／カルタであそぼう (5)
数学	A数・量	かずって　おもしろい (12)／なんばんめ (10)／あわせて　いくつ　ふえると　いくつ (16)	38	53	のこりは　いくつ　ちがいは　いくつ (16)／大きな　かずの　けいさん (17)／いろいろな
	B形	じぶんだけの　かたちぱずるを　つくろう (15)	15		
	Cデータ・変化		0		
科学	A物質・エネルギーに学ぶ	おおきくなあれ！わたしのおはな (12)／みずを　つかって　あそぼう (5)	17	23	かみひこうき　けんきゅうじょ (8)
	B生命・地球に学ぶ	みんなの　にしこうえん (6)	6		おおきくなあれ！わたしのおはな (13)／みんなの　に
	Cエンジニアリング・テクノロジーに学ぶ		0		
社会	A環境	こうえんに　いってみたら (11)	11	21	みんなで　つくろう　プレイパーク (12)
	B経済		0		
	C政治	しょうがっこうって　どんな　ところ (10)	10		いえの　しごとって　ぼくの　わたしの　しごと？ (8)
テーマ・リレーション		リレーション学習　社会・科学／リレーション学習　数学・芸術			
人間	A自分	がっこうに　なれよう (2)／こんなに　ふえたよ　できるように　なったこと (4)／ありがとうを　つたえよう (3)／じぶんの　まなびは　どのようなもの (3)	12	24	しょうじきの　たいせつさ (2)／ありがとうを　つたえよう (2)
	B仲間	やってみよう　かかりかつどう (4)／もっと　たのしく　すごそう (4)	8		みつけた　ともだちの　よいところ (4)／なかよしかいを　しよう (3)
	C生命		0		しぜんと　ふれあおう (4)
	D他者と世界	おじいちゃん　おばあちゃん　ありがとう (4)	4		
芸術（A発想・構想／B分析／C技能／D受容・調整）	音楽	みんなで　うたおう（B分析　C技能　D受容・調整） (10)／すてきなリズム　見いつけた（A発想・構想　B分析　C技能） (8)	18	35	つくってみよう！はじめてのげき（A発想・構想　D受容・調整） (10)／ドレミと…（A発想・構想…
	造形	すきなもの　いっぱい（A発想・構想） (5)／いっぱい（A発想・構想　B分析） (5)／ひもひも　ねんど（A発想・構想　C技能　D受容・調整） (3)／すきなかたち　いっぱい（B分析　C技能　D受容・調整） (4)	17		はこハコ　大しゅうごう（A発想・構想　C技能） (7)／丸めて　の…（A発想・構想…
健康	A身体	オリエンテーション (1)／１学期のまとめ (1)	2	29	
	B食	きゅうしょく　おいしいね (3)	3		
	C運動	げんきいっぱいはしろう (8)／カいっぱいひいたりおしたり (7)／水となかよし (9)	24		「ボールとなかよし (15)／「つくってあそぼうぴょんぴょ… きをため…
チャレンジ					
たんれん	朝タイム×週5	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学）／数学（四則計算，単位，公式，図形）			人…
時数計		249			

2学期（運動会／小中合同防災訓練／あらつフェスタ／持久走記録会走ろう会／遠行会／終業式）	小計	計	3学期（始業式／防災訓練③／教育研究発表会／お別れ集会／卒業証書授与式／修了式）	小計	計	時数計	
アルファベットとなかよし(大文字) 2	19	72	もじのかたちのひみつをみつけよう 5 ／ かみにあわせてかこう 3 ／ アルファベットとなかよし(大文字 1	9	68	204	言葉
つづきの はなしを つくろう 7 ／ ふじぐみと あそぼう 5	36		○○ずかんをつくろう 5 ／ おはなしをくらべよう 9 ／ しをつくろう 9	37			
			Storytelling えいごでおはなしをきこう 9 ／ 1ねんせいのおもいでと2ねんせいでしたいこと 5				
…lling. …なしを きこう 2 ／ 「Fruits and Vegetables. くだものとやさいのいいかたをしろう 3							
This is me! じぶんのことをしょうかいしよう 4 ／ 「Christmas songs. えいごでうたおう 1	17		カルタをつくろう 7 ／ きせつのことばをつかってあらわそう 8 ／ 「Fukuwarai からだのぶいのいいかたをしろう 2 ／ Let's make a speech. ありがとうのきもちをつたえよう 5	22			
…りょうを くらべよう 7 ／ なかよくわけて プレイパークを つくろう 6 ／ みんな なっとく！大きさくらべ 14	60	73	みのまわりの すうがくを さがそう 3 ／ すごろくあそび パズルあそび 3 ／ すうがくじゆう けんきゅう（1年生） 4	10	44	170	数学
かたちっておもしろい 13	13		みのまわりの すうがくを さがそう 3 ／ すごろくあそび パズルあそび 3 ／ あつめて わけよう にている かたち 8 ／ すうがくじゆう けんきゅう（1年生） 4	18			
	0		みのまわりの すうがくを さがそう 4 ／ すごろくあそび パズルあそび 4 ／ しん1年生に しょうかいする ばしょを きめよう 4 ／ すうがくじゆう けんきゅう（1年生） 4	16			
	8	33	音って ふしぎ？ 4	4	12	68	科学
…しこうえん 6 ／ たいようと つきのふしぎ 6	25			0			
	0		ブロックやつみ木であそぼう 8	8			
	12	31	がっこうの おすすめの ばしょを しょうかいしよう 10	10	16	68	社会
しょうてんがいで かいものをしよう 11	11			0			
	8		ようこそ ふぞくしょうがっこうへ 6	6			
テーマ「プレイパークをつくろう」～なぜあそびはたのしいの？～			リレーション学習 科学・芸術 ／ リレーション学習 社会・数学 ／ テーマ「なかよく たのしく あたらしく」～どんなことが せいちょうしたのかな？～				テーマ・リレーション
まなびを つなげよう 4 ／ あそびは なぜ たのしいの？ 3	11	30	かぞくへの おもい 1 ／ じぶんと ともだち 1 ／ さいごまで つづけよう 1 ／ 1ねんかんのせいちょう 2	5	14	68	人間
	7		1ねんせい そつぎょうのかいを しよう 2	2			
ふじぐみと もっと なかよし 8	12			0			
	0		きらきら かがやく ぼくたち わたしたち 7	7			
…リズム …（… C技能） 9 ／ プレイパーク ～マラカスせいさくじょ～（A発想・構想 B分析） 3	22	43	手づくり楽器で えんそうしよう ～音であそぼう わたしだけのたいこ～（A発想・構想 B分析） 4 ／ うたごえとがっきの音をあわせてみよう（A発想・構想 C技能 D受容・調整） 4	8	24	102	芸術
…のばして …（… C技能） 7 ／ せんのかんじ いいかんじ（A発想・構想 B分析 D受容・調整） 7	21		うごくおもちゃは たのしいね（B分析 C技能D受容・調整） 5 ／ くしゃくしゃ 大へんしん（A発想・構想 B分析） 5 ／ てでさわって きもちいいね ～あたらしい じぶんをひょうげん！～（A発想・構想 D受容・調整） 6	16			
2学期のまとめ 1	1	45	がっこうでのせいかつをみなおしてげんきなからだをつくろう 3 ／ 学年のまとめ 1	4	28	102	健康
	0			0			
…んコース」「いろいろなうご…そう 20 ／ つづけてはしろう4ふんかん 9	44		おにあそび 8 ／ ドロップボールゲームであそぼう 8 ／ へんしんしてあそぼう 8	24			
							チャレンジ
…人間（討論） ／ 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）				たんれん
327			206			782	時数計

学年年間指導計画

R２年度　年間指導計画　第２学年

学年目標：ぐんぐん　のびる　２年生，みんな　なか

		１学期													
学校行事		始業式　入学式　歓迎遠足　藤見学芸会　防災訓練　授業づくりセミナー　プール清掃　相撲・綱引き大会								終業式		教育実習　始業式　防災訓練②　月見学芸会　あらつ大			
言葉	A言語基礎	うつくしい字形で書こう	7	なか間の言ばをあつめよう	3	アルファベットとなかよし	2			12	71	ひつじゅんに気をつけて書こう	7	ようすをあらわす言ばをあつめよう	3
	B言語論理	春を見つけた	5	じゅんじょに気をつけて書こう	8	おすすめします	8			50		聞いて教えて夏休みのこと	8	読んで考えたことを話そう	4
		大じなことをおとさずに	7	音読げきをしよう	10	インタビューをしよう	6					話の組み立てを考えよう	4	せつ明	
		Do you hava "a"? アルファベットクイズをつくろう	3	Storytelling えい語でお話を聞こう	2	Nombers１～20までの数	1					I like soccer. すきなものをつたえよう	3	Storytel えい語でお話	
	C言語文化	日本の言葉をあつめよう	5	Let's make a speech.わたしの家ぞく	4					9		百人一首であそぼう	5	日本につたわるお話	10
数学	A数・量	1000までの数と計算	18			伝えよう，長さ，かさ	22			40	60	目ざせ！九九マスター	28	九九のふしぎをさぐろう	15
	B形			三角四角を見つけよう	20					20					
	Cデータ・変化									0				１年生	
科学	A物質・エネルギーに学ぶ			いろいろまぜて　色あそび	6	ぎゅっとにぎってどろだんご	6			12	24	空気のふしぎ発見～パラシュートをつくろう～	7		
	B生命・地球に学ぶ	はるとなかよし	12							12				生き物を	
	Cエンジニアリング・テクノロジーに学ぶ									0					
社会	A環境									0	21	身の回りのものでうごくおもちゃをつくろう	12		
	B経済									0					
	C政治	１年生にしょうかいしよう！ ふぞく小のいろいろ	7	ふぞくふくおか小 マナーアッププロジェクト	7	ぼくたち・わたしたちを はこんでくれるのりものたち	7			21				うみだせ！２年生のも	
テーマ・リレーション															
人間	A自分	思いやり　友だちのよいところ	2	せきにん　自分の仕事について考えよう	8	せい長する自分せい長日記をつくろう	6	なりたい自分　２年生になって	2	18	26	人にやさしく	2		
	B仲間	学級くんや学級のめあてをつくろう	2	学級をよりよくする かかりかつどうをつくろう	2	１学期の行じの志を立てよう	2	１学期のまとめの会をしよう	2	8		2学期の行じの志を立てよう	2	教生先生と おわかれの会をしよう	2
	C生命									0		『もっとなかよく』ってどういうこと？	6		
	D他者と世界									0					
芸術	音楽（A発想・構想 B分析 C技能 D受容・調整）	うた声と楽きの音を合わせてみよう	7	耳をすませて　いろいろな音	7	楽きの音色	7			21	37	やくになりきってげきをつくろう	5	リズムをかさね	
	造形	ビリッ　クシャ　はっ見	5	ぼかしあそびで	5	チョキチョキ　つないで　ドンドンドン	6			16		あわあわからのひらめき	6	おめんでつ ぼく・わ	
健康	A身体	からだのふしぎ	2	１学期のまとめ	1					3	33	びょうきから体をまもろう	4		
	B食	やさい　おいしいね	2							2					
	C運動	おりかえしリレーきょうそうをつくろう！	10	水の中で　やってみよう	9	力いっぱい引いたりおしたり	9			28		ボールであそぼう	10	はらはらどきどきする おにあそびをつくろう	7
チャレンジ															
たんれん	朝タイム×週５	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学）				数学（四則計算，単位，公式，図形）								人間	
時数計		272													

いよし　２年生

２学期：運動会 / 小中合同防災訓練 / あらつフェスタ / 持久走記録会走ろう会 / 遠行会	計	終業式	３学期：始業式 / 防災訓練③ / 教育研究発表会 / お別れ集会 / 卒業証書授与式	計	修了式	時数計	
気もちをあらわす言ばをあつめよう 3 / アルファベットとなかよし 2	15	79	学んだかん字をつかおう 5 / うごきをあらわす言ばをつかって文を作ろう 2 / マス目に合わせて書こう 2 / アルファベットとなかよし(小文字) 1	10	60	210	言葉
げきに表そう 4 / 手紙を出そう 3	45		よんでほしいな わたしのおはなし 10 / ようすがくわしく つたわるように話そう 4 / 発明したよ 9	36			
しよう 6 / ようこそ！お話広場へ 8			自ぜんをあらわす しをつくろう 9				
lling. を聞こう 2 / Let's play cards. 休み時間を楽しもう 3			Storytelling. 英語でお話を聞こう 1 / I like stsr! すきな形をつたえよう 2 / What day is it today? 今日は何曜日？ 1				
Let's make a speech. わたしのお気に入り 3 / Chiratmas songs. 英語で歌おう 1	19		せかいの絵本 10 / Let's make a speech.1年間の思い出を気持ちとともに伝えよう 4	14			
10000までの数と計算 18	52	68	同じ数ずつ分けよう 10 / 長いものの長さ 10 / 数学自由研究（2年生） 6	26	47	175	数学
	0		はこのかたちの　ひみつをさぐろう 7 / 数学自由研究（2年生） 6	13			
とのあそびを決めよう 7	16		数学自由研究（2年生） 8	8			
	7	28	あかりは　なぜつくの 8 / 光のふしぎ発見 ～光と色で表すアートラボ～ 3	11	18	70	科学
飼おう 12	12		冬となかよし 7	7			
自分の思いを　形にしよう～モーターカーをうごかそう～ 9	9			0			
	12	28		0	21	70	社会
おしごとちょうさたい 9	9		ぼくたち　わたしたちが つかっているお金っていくら？ 11	11			
っと　なかよしあそび 7	7		いこう！びじゅつかん ～みんなで使う場所～ 10	10			
テーマ 「もっとなかよく」って どういうこと？			テーマ つたえよう！ 家ぞくにありがとう！ / リレーション 芸術・科学 / リレーション 社会・芸術・言葉				テーマ・リレーション
自分にできることについて考えよう 4 / 学びをふりかえ返ろう 4	10	30	家ぞくとのかかわり 3 / 自分の高まり 2 / ど力の大切さ 2	7	14	70	人間
2学期のまとめの会をしよう 2	6		おわかれ集会の志を立てよう 1 / 学級のおわかれ会をしよう 2	3			
『いのちの大切さ』について考えよう 4 / 生きものを　かおう 4	14			0			
	0		何があるかな？自分のしごと 4	4			
て楽しもう 8 / くりかえしを見つけよう 7	20	40	ようすを音楽でげきをつくろう 6 / みんなで合わせて 6 / 地きゅうからのおくりもの 4	16	28	105	芸術
たえよう たし 8 / コロコロおもちゃ 6	20		にぎにぎねんど 4 / 光のプレゼント ～光と色でつくる世界～ 5 / お気に入りの作品を見つけよう 3	12			
2学期のまとめ 1	5	42	学年のまとめ 1	1	30	105	健康
	0			0			
とびばこやマットをつかってあそぼう 10 / つづけて走ろう　5分間 10	37		いろいろなとび方であそぼう 10 / キックターゲットゲーム 10 / へんしんしてあそぼう 9	29			
（討論） / 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）				たんれん
315			218			805	時数計

学年年間指導計画

R2年度　年間指導計画　第３学年

学年目標：自分のよさを伸ばす３年生

		１学期										教育実習			
学校行事		始業式	入学式	歓迎遠足	藤見学芸会	防災訓練	授業づくりセミナー	プール清掃	相撲・綱引き大会	終業式		始業式	防災訓練②	月見学芸会	あ
言葉	A言語基礎	国語辞典 2	漢字の音と訓 2	こそあど言葉 2			アルファベットを書いてみよう 5			11	74	修飾語 4			
	B言語論理	登場人物の変化に気をつけて読もう 7		すがたをかえる食べもののひみつを読み合おう 6			様々な仕事のくふうへ −報告する文章を書こう− 8			41		組み立てをとらえて物語のおもしろさを伝えよう 8		話題と例の書かれ方について話し合おう	
		山小屋で三日間すごすなら 7		What sport do you like? 好きなスポーツを伝えよう 4			Storytelling 英語を聞いて想像しよう 2					わたしの学校じまん 7		Wh	
		I can swim. できることを伝えよう 4		How many? 1から60までの数 3								What's this ? 英語でクイズ 4			
	C言語文化	俳句を楽しもう 8	あらつ地域に残るオリジナル物語を書こう 8				Show and tell. わたしの特技 6			22		生活の中のことわざと故事成語 9		バイリンガル絵本の世	
数学	A数・量	わり算の世界 20		どんな計算になるかな I 4			発見！大きな数のしくみ 10		重さの世界 11	45	54	ひっ算の世界を広げよう 足し算と引き算 18			
	B形				丸いものについて調べよう 9					9					
	C データ・変化									0				グラフ	
科学	A物質・エネルギーに学ぶ	スピードウインドカーにちょうせん 5								5	20	地球は大きな磁石なの？発見しようじしゃくのふし			
	B生命・地球に学ぶ	すごいね　生き物のひみつ 15								15		つくろう！わたしたちの小さな			
										0					
社会	A環境	公園をさがしてみよう〜周りの地図を書いてみよう〜 11								11	21				
	B経済									0		地域を支えるいろいろな仕事 〜農家や工場，スーパーマーケット〜			
	C政治			地域にあるいろいろなきまり〜みんなで守ろう地域のルール〜 10						10					
	D文化									0					
テーマ・リレーション												リレーション 言葉・社会	リレーション 人間・健康		
人間	A自分	自分のよいところ 2		3年生になって 2		自分の役割について考えよう 2		学びを振り返ろう 4		10	22	3年生のみんなと仲を深めよう 4		自分の特徴について考えよう	
	B仲間	学級訓や学級のめあてをつくろう 2		学級をよりよくする係活動をつくろう 2		学級の友達との仲を深めよう 2		1学期のまとめの会をしよう 2		8		志を立てよう 2		教生先生とお別れの会をしよう	
	C生命					自分の命を見つめよう 4				4					
	D他者と世界									0		さくら組の友達と仲良くなろう			
芸術	B分析 音楽	つくろう！げきの世界へ 5		新たな表し方との出合い 〜リコーダーの音色 I 〜 6			せんりつのとくちょうをかんじとろう 4			15	38	重ねてつくろう！木の音楽 8			
	C技能 造形	広がれ　すてきな世界 7		広がれ　絵の具の世界 10		ぬのをつないで 6				23		組み合わせて楽しもう！森のおくりもの 9		光と色	
健康	A身体	オリエンテーション 1							1学期のまとめ 1	2	37				
	B食									0		毎日元気なわたし			
	C運動			幅跳びに挑戦 6		縄跳びに挑戦 7	すもう・つなひき 6	リレーにチャレンジ 7	水泳運動 9	35		マット運動 7	ディスクキックゲーム 6	ダブルバッターベースボール	
すてきなたんれん															
	朝タイム×週５	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学）					数学（四則計算，単位，公式，図形）								
時数計		266													

教科	２学期	計	教科計	３学期	計	教科計	時数計
行事	らつ大運動会 小中合同防災訓練 あらつフェスタ 持久走記録会走ろう会 遠行会 終業式			始業式 防災訓練③ 教育研究発表会 お別れ集会 卒業証書授与式 修了式			
言葉	漢字の意味 4 アルファベット(小文字)を書いてみよう 5	13	82	伝わる言葉 2 分けるくらべる 2 コンピューターのローマ字入力 2 単語を書いてみよう 2	8	54	210
言葉	方 8 話題と例の書かれ方をとらえて読もう 8 福岡のステキが伝わる解説文を書こう 4 hat time is it ? 今，何時？ 2 Storytelling 英語を聞いて想像しよう 2	43		読んで伝えよう物語の世界 10 説明文を読んで感想を伝え合おう 8 これがわたしのお気に入り 6 グループで意見をまとめよう 6 福岡のステキをつたえるかいせつ文を書こう 3 Storytelling. 英語を聞いて想像しよう 1 What's “Osechi”? 日本のお正月を伝えよう 3	37		
言葉	界 9 Show and tell. クイズ大会をしよう 4 Chiratmas songs. 英語で歌おう 4	26		世界で使われる日本語を探そう5 6 Let's make a skit.スキットをつくろう 3	9		
数学	かけ算のひっ算 16 学校の長さをはかろう 10	44	59	どんな計算になるかなⅡ 2 1より小さい数の計算 12 数学自由研究（3年生） 5	19	45	158
数学		0		三角形と角 15 5	20		
数学	で発見！みんなのすきなもの 15	15		6	6		
科学	ぎ 8 ものと重さについて調べよう 10	18	39	未来につながるひみつ道具～電気のしくみを生かして～ 17	17	28	87
科学	森 13 わたしたちのすむ地球と月・太陽の関係 8	21			0		
科学		0		つくろう 創造の世界 11	11		
社会		0	29	地図をもっとひろげよう～わたしたちのすむまち～ 10	10	20	70
社会	18	18		知りたいな値段の秘密～リユースのよさってなんだろう～ 10	10		
社会	福岡のステキ発見～子供福岡検定をつくろう～ 11	11			0		
社会		0			0		
テーマ・リレーション	テーマ「友達の大切さを考えよ			リレーション 言葉・科学 テーマ「地域の人とともにあたたかな関係をつくろ			
人間	つ 6 家族の大切さについて考えよう 4 学びを振り返ろう 6	20	34	「仲間」について考えよう 3 Wish～4年生になる前に～ 2 4学年になる前に 2	7	14	70
人間	ら 2 2学期のまとめの会をしよう 2	6		お別れ集会の志を立てよう 1 学級のお別れ会をしよう 2	3		
人間	友達の大切さを考えよう 4	4			0		
人間	4	4		地域の人とともにあたたかな関係をつくろう 4	4		
芸術	そろえる！重ねる！ずらす！リズムで表現！ボディパーカッション 5	13	40	音色とリズムでつくろう！3年○組動物園 7 思いから生まれるかげ絵げき 10 気もちを合わせて 歌と合奏で 4	21	27	105
芸術	色のファンタジー 9 みんなおいでよ！秋の小部屋 9	27		積んでつなげて ならべて組んで 6	6		
健康	2学期のまとめ 1	1	38	めざせ さわやか生活 1 大きくなるからだ 4 学年のまとめ 1	6	30	105
健康	しのために 3	3			0		
健康	8 ターゲットゲーム 5 つづけて走ろう 6分間 8	34		跳び箱運動 8 サークルゴールゲーム 8 リズムダンスを楽しもう 8	24		
チャレンジたんれん	人間（討論） 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）			
時数計	321			218			805

学年年間指導計画

R2年度　年間指導計画　第４学年

学年目標：全力，協力，助け合い

		1学期										2学			
学校行事		始業式	入学式	歓迎遠足	藤見学芸会	防災訓練	授業づくりセミナー	プール清掃	相撲・綱引き大会	終業式		教育実習			
												始業式	防災訓練②	月見学芸会	あらつ大運動会
言葉	A言語基礎	漢字辞典の使い方 2	つなぎ言葉のはたらき 2	漢字の組み立て 2		短い言葉を書き写そう 2				8	65	要約 4	熟語の意味		
	B言語論理	場面と場面のつながりをとらえて読もう 9		筆者の考えをとらえて自分の考えを発表しよう 8		新聞をつくろう 9				39		特別な言葉に着目して読もう 7	感じ方のちがいに気付きよさを見つけよう 7	理由や	
		聞き取りメモの工夫 9		Storytelling英語を聞いて想像しよう 1		What do you want?誕生日に欲しいもの 3						Storytelling英語を聞いて想像しよう 1	Where is the treasure?宝さが		
	C言語文化	慣用句 6		季節の言葉 6		広めよう！日本の心～英語にしたい日本の言葉～ 6				18		時代と共に変わる言葉 7			
数学	A数・量	大きな大きな数 10				おとその数 8				18	53	便利な計算の仕組み 7	広がる小数の仕		
	B形	角の大きさを比べよう 10		いろいろな四角形 11						21			広さを表そう		
	C データ・変化			表やグラフで調べよう① 6		変わり方に目をつけて 8				14		表やグラフで調べよう② 8			
科学	A物質・エネルギーに学ぶ	熱をくわえて大きさへんしん水・空気・金属のひみつ 12				電池はどのような性質かな電池のひみつをさぐろう 8				20	25	どうやって動く？モーターの仕組み			
	B生命・地球に学ぶ	自然の生き物たちの生長 5								5			自然は数を知		
										0					
社会	A環境									0	33				
	B経済	くらしを守る～災害から守る～ 11				くらしを守る～水の確保とゴミ処理～ 12				23		ユニバーサル都市ふくおか			
	C政治									0			どうすればお金		
	D文化	福岡の発展につくした人たち 10								10					
テーマ・リレーション												リレーション 社会・数学			
人間	A自分	友達と協力しよう 2	4年生になって 2	『働くこと』について考えよう 4		自分史をつくろう 6				14	26	障がいについて考えよう 2	自分らしさをみつめよう 5	『友情	
	B仲間	学級訓や学級のめあてをつくろう 2	学級をよりよくする係活動をつくろう 2	1学期の行事の志を立てよう 2		1学期のまとめの会をしよう 2				8		2学期の行事の志を立てよう 2	教生先生とのお別れ会		
	C生命			自分のルーツを探ろう 4						4			自分の命　み		
	D他者と世界									0					
芸術	B分析 音楽	気持ちを合わせて歌と合奏で 4		新たな表し方との出合い～リコーダーの音色Ⅱ～ 6		夏の音楽 5				15	30	日本の秋 8	音の		
	C技能 造形	光のさしこむ絵 7		ハッピーカード 8						15		わりばしオブジェ 5	まぼろしの花		
健康	A身体	オリエンテーション 1		快適な住まい方 3					1学期のまとめ 1	5	35	体のつくり			
	B食									0		食の安全を考えよ			
	C運動			高跳びに挑戦 11	すもう・つなひき 10	水泳運動 9				30		陸上運動に取り組もう 6	ラリーゲームを楽しもう 8	マット運動を楽しもう	
		イングリッシュ		農園		プログラミング			ミュージック			ダンス			
	朝タイム×週5	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学）				数学（四則計算，単位，公式，図形）						人間（			
時数計		267										32			

2学期（続き）	計	2学期計	3学期	計	3学期計	時数計	
小中合同防災訓練 / あらつフェスタ / 持久走記録会走ろう会 / 遠行会	終業式		始業式 / 防災訓練③ / 教育研究発表会 / お別れ集会 / 卒業証書授与式 / 修了式			時数計	
ミ 4 / 短い英語を書き写そう 7	15	75	くわしく様子を表す言葉 2 / 百科事典の調べ方 2 / まちがえやすい漢字 2 / 分ける・くらべる 2 / 短い英語を書き写そう 3	11	53	193	言葉
例を挙げて伝えよう 9 / 調べて話そう，生活調査隊 8	46		登場人物の変化と出来事の関係をとらえよう 8 / 文章を要約して分かりやすく伝えよう 7 / 文章の感想を伝え合おう 5	27			
しをしよう 7 / 話し合って考えを深めよう 7			クラスみんなで決めるには 6 / Storytelling英語を聞いて想像しよう 1				
子供新聞のよさとは 7	14		日本で長く愛されてきた絵本 7 / 昔話でLet's talk!～We are good friends.～ I 8	15			
世界 15 / わり算マスター 17	39	62	分数の計算 9 / 数の仕組みを探ろう 5 / 数学自由研究（4年生） 5	19	43	158	数学
う 10	10		立体のしくみ 9 / 数学自由研究（4年生） 5	14			
くらしをゆたかにするお金 5	13		いくら集める？クラウドファンディング 4 / 数学自由研究（4年生） 6	10			
みを探ろう 17	17	39	ふしぎだね　自然の中の水 9	9	23	87	科学
っている自然の生き物たち 22	22			0			
	0		段ボールロケット犬 14	14			
アジアの玄関口福岡 18	18	43		0	29	105	社会
12	12		くらしを守る～調べてみよう～ 15	15			
は増えるの？ 13	13		実現したいな！ぼく・わたしのアイデア～クラウドファンディングしてみよう～ 14	14			
	0			0			
テーマ「みんなが笑顔でくらすために」			テーマ「何だろう？ボランティア」				テーマ・リレーション
』について考えよう 2 / 学びを振り返ろう 3	12	30	何だろう？ボランティア 5 / 将来なりたい自分について考えよう 2	7	14	70	人間
会をしよう 2 / 2学期のまとめの会をしよう 2	6		お別れ集会の志を立てよう 1 / 学級のお別れ会をしよう 2	3			
みんなの命 4	4			0			
みんなが笑顔でくらすために 8	8		つながってわかり合おう 4	4			
ひびきを感じ取ろう 10	18	35	日本の音楽でつながろう 7 / 曲の気分を感じ取ろう 4	11	22	87	芸術
5 / 日本の秋～灯明アート～ 7	17		色でつくろう～インスタレーションでつくる世界～ 6 / 気持ちを伝える色・形 5	11			
3 / 2学期のまとめ 1	4	40	ヘルスアッププロジェクト～めんえき力UPで毎日元気～ 3 / 学年のまとめ 1	4	30	105	健康
う 2	2			0			
7 / 6分間走 8 / スポーツ鬼ごっこ 5	34		ハンドボールをしよう 10 / リズムダンスを楽しもう 9 / リズム縄跳びに挑戦しよう 7	26			
アート			ロープジャンプ / 落語 / MOM			70	チャレンジ
討論） / 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）				たんれん
24			214			875	時数計

R２年度　年間指導計画　第５学年

学年目標：自分にできることを考え，主体的に行動し

教科	領域	１学期	領域計	教科計	（2学期）
学校行事		始業式 / 入学式 / 歓迎遠足 / 藤見学芸会 / 防災訓練 / 授業づくりセミナー / プール清掃 / 相撲・綱引き大会 / 終業式			教育実習 / 始業式 / 防災訓練② / 月見学芸会 / あらつ大
言葉	A言語基礎	漢字の成り立ち 2 / 和語・漢語・外来語 2 / 同じ読み方の漢字 2 / 英語を書き写そう 2	8	67	敬語 2 / 漢字の読み方と使い方 2
	B言語論理	物語の全体像をとらえ，考えたことを伝え合おう 6 / 文章の要旨をとらえ，自分の考えを伝え合おう 8 / みんなが過ごしやすい町へ 8	37		登場人物どおしの関わりをとらえ，感想を伝え合おう 7
		よりよい学校生活のために 9 / Storytelling　読み聞かせをしよう 1 / 「She can sing well. マイ・スーパースターを紹介しよう 5			生活の中で詩を楽しもう 2 / あなたはど
					When is your birthday? 友達の誕生日を尋ねよう 4 / 「I want to g 友達を旅行
	C言語文化	「短歌・俳句を楽しもう 8 / 古典の世界 ―声に出して楽しもう― 10 / 「Let's make a speech.　わたしの憧れの人 4	22		オオカミと7ひきの子やぎ 7 / This is HAIKU.　俳句で広がる言葉の世界 6
数学	A数・量	広げよう整数の世界 5 / ぼくもわたしも小数博士 22 / 音楽から聞こえる数学 4	31	55	倍数と約数 10 / 「パターンブロック
	B形	しきつめもうようのひみつを探ろう 8 / いろいろな物の体積を求めよう 10	18		工夫して求めよう　いろいろな面積 10
	Cデータ・変化	論理パズルに挑戦！ 6	6		
科学	A物質・エネルギーに学ぶ	科学ビー玉コースターをつくろう 13	13	25	生活の中のてこを見つけよう 9
	B生命・地球に学ぶ	植物の一生～日光と生長の関わり～ 12	12		小さな自然を水槽の中に再現しよう 17
	Cエンジニアリング・テクノロジーに学ぶ		0		
社会	A環境	日本ってどんな国？ 8 / どうする？わが国の領土問題 10	18	38	
	B経済	わが国を支える食料生産 11	11		盛んなのか？わが国の工業 17
	C政治	どうする食糧問題？ 9	9		広げよう！ツナガル＋
	D文化				
テーマ・リレーション					
人間	A自分	高学年になった自分 1 / 一人一人の感じ方 1 / 誰にでも同じように 2 / 自分が自分であるために 4	8	30	自分の特徴を見つけよう 2 / 自由と自分勝手 2
	B仲間	学級目標を決めよう 1 / 一人一人の声や思いから 4 / 本当の仲間になるために 4	9		2学期の行事の志を立てよう 2 / 教生先生との思い出を形に 2
	C生命	生命の尊さ　同じ命　違う命 3	3		
	D他者と世界	地域の高齢者と共にあたたかなつながり 10	10		わたしたちにできること 6
芸術（A発想・構想 B分析 C技能 D受容・調整）	音楽	「友との絆を歌と合奏で」（A　発想・構想　C技能　D受容・調整） 5 / 「アンサンブルの魅力」（A　発想・構想　B分析　C　技能　D受容・調整） 8 / 和音の移り変わり（B　分析　C　技能） 4	17	30	詩にに込められた思い（A　発想・構想　C技能） 10
	造形	線で形をつくり出そう～空間アート～」（A　発想・構想　C技能） 7 / 「消してかく」（A　発想・構想　C技能） 6	13		「ビー玉大ぼうけん」（A　発想・構想　C　技能） 6 / 「自然は大きなキ（A　発想・構想　B 容・調
健康	A身体	オリエンテーション 1 / 1学期のまとめ 1	2	32	生活習慣がもとで起こる病気 2
	B食	つくろう　ごはんとおみそしる 11	11		3
	C運動	巧みに体を動かす運動に挑戦 7 / 相撲・綱引き 6 / 水泳運動 6	19		陸上運動に取り組もう 9 / セレクトベースボールを楽しもう 7
チャレンジ					
たんれん	朝タイム×週5	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学） / 数学（四則計算，単位，公式，図形）			人
時数計		277			

よう

2学期	2学期 小計	2学期 教科計	3学期	3学期 小計	3学期 教科計	時数計	
運動会 / 小中合同防災訓練 / あらつフェスタ / 持久走記録会走ろう会 / 遠行会 / 終業式			始業式 / 防災訓練③ / 教育研究発表会 / お別れ集会 / 卒業証書授与式 / 修了式				
英語を書き写そう 2	6	69	方言と共通語 2 / 複合語 2 / 日本語の表記 2 / 英語を書き写そう 2	8	57	193	言葉
新聞投書をしよう 7	44		すぐれた表現に着目して読み，物語のみりょくを話し合おう 7 / この本，おすすめします 7	35			
う考える 8 / みんなでトークSNS 8			事例と意見の関係をおさえて読み，考えたことを話し合おう 7 / 提案しよう言葉とわたしたち 7				
o to Italy. に誘おう 4 / I study japanese. マイ時間割をつくろう 4			Who is your hero? もうすぐ6年生 7				
言葉をよりすぐって俳句・短歌をつくろう 6	19		海外に広がる日本語 6 / 「Let's make a speech. 最後の一年に期待をこめて 8	14			
から見える数と形 6 / 全力！脳力アップタイムズ 3	19	55	ぼくもわたしも分数博士Ⅱ 6 / 4	10	48	158	数学
正多角形を調べよう 11	21		図形を切り開いて 8 / 和算に挑戦！ 7 / 数学自由研究 4	19			
世界がもし100人の村だったら 15	15		おすすめの旅行プランを提案しよう 8 / 割合をつかって調べよう 7 / 4	19			
発見しよう！もののとけ方のひみつ 6	15	39	発見！ゆれるきまりの規則性 5 / ロケットを飛ばそう 水で飛ぶ？空気で飛ぶ？ 11	16	23	87	科学
自然災害はなぜ起こるのか 7	24			0			
	0		ロボットが動く，話す 7	7			
	0	38		0	29	105	社会
トップオブメディアは何か？ 比べてみよう！いろいろなメディア 13	30			0			
高めよう！防災の意識 8	8		なるかもしれない 裁判員 18	18			
	0		見つけよう！日本の魅力 11	11			
テーマ「わたしたちにできること」			テーマ「日本らしさって何だろう」				テーマ・リレーション
誰にでも同じように 2 / なりたい自分らしさとは 1	7	23	最上級生に必要なこと 2 / 仲間とともに 2 / 親切は優しくすることなのか 2 / 1年間の自分の成長 2	8	17	70	人間
自分が自分であるために 4	8		お別れ集会の志を立てよう 2 / 学級卒業式をしよう 2	4			
かけがえのない生命 2	2			0			
	6		日本人らしさって何だろう 5	5			
「思いを表現に生かそう」（A 発想・構想 B分析 C 技能） 8	18	35	日本の音楽に親しもう 8	8	22	87	芸術
チャンパスだ」 3 分析 D 受 整） 4 / 「パシャリ！コマ動きで ストーリーをつくりだそう」（A 発想・構想 B 分析 D 受容・調整） 7	17		色・形」（A 発想・構想 C 技能） 5 / 「音と光の世界をつくりだそう」（A 発想・構想 B 分析 D受容・調整） 9	14			
2学期のまとめ 1	3	42	つないでシュート ゴールゲーム 7 / 学年のまとめ 1	8	31	105	健康
全力！脳力アップタイムズ 6	9		世界とつながる和食 6	6			
ハーフコートバスケットボールにチャレンジしよう 6 / 8分間走 8	30		難しい跳び方に挑戦しよう 7 / リズムダンス 10	17			
人間（討論） / 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）				チャレンジたんれん
301			227			805	時数計

学年年間指導計画

R2年度　年間指導計画　第６学年

学年目標：よりよい社会の担い手として，他者のため

		1学期																			
学校行事		始業式	入学式	歓迎遠足	藤見学芸会	防災訓練	授業づくりセミナー	プール清掃	相撲・綱引き大会	終業式		教育実習									
												始業式	防災訓練②	月見学芸会	あらつ大						
言葉	A言語基礎	漢字の形と音・文の組み立て	4	話し言葉と書き言葉	2	英語を書いてみよう	4	10	70	熟語の成り立ち	2	言葉の変化	2								
	B言語論理	視点の違いに着目して読み感想を書こう	8	This is my weekend. 休日のすごしかた	6	Welecome to Japan. 四季を受け継ぐ国日本	8	43		作品の世界を捉え自分の考えを書こう	9	My summer vacation. 夏休みの思い出	5								
		表現の工夫を捉えて読み，それをいかして書こう	8	自分の意見を論理的に伝える意見文を書こう	8					筆者の主張や意図をとらえ，考えを											
		学級討論会をしよう	5							お土産を紹介する文章を書こう	8	心を									
	C言語文化	わらしべ長者	5	世界に広がる三十一文字	6	修学旅行の思い出	6	17		I want to…私が言葉を選ぶ理由	5										
数学	A数・量	分数のしくみをみつけよう	20					20	63												
	B形		美しい図形のひみつ	12	円の面積	10	立体の体積	10	32	古地図から浮かび上がる数と形	6										
	Cデータ・変化				全部で何通り？			11	11	2つの数で割合を表そう	4	伴って変わる量	15								
科学	A物質・エネルギーに学ぶ	なぜものは燃える？	13					13	32	電気の利用について学ぼう	6	音の震 糸電									
	B生命・地球に学ぶ				地球と月・太陽の奇跡の関係	6	なぜ自然災害は起きる？	13	19												
	C エネルギー・テクノロジーに学ぶ								0			AIの強みとは？	5								
社会	A環境								0	35											
	B経済	地方自治と国の政治の在り方 中央児童会館と国民主権	5						5			世界に歩みだした日本 富国強兵政策の功罪「日清・日露戦争と帝国主義化する日本」									
	C政治			日本国憲法の3つの柱はなぜ大切なのか？	5	ムラからクニへ 農業革命はよかったの？	5	理想的なリーダーは誰？ 天皇，道長，頼朝の国づくり	5	室町から戦国へ 信長・秀吉・家康の生き方	5	家光の幕藩体制 町人文化と新しい学問は平和な時代があったから？	10	30		若い武士たちが新たな日本を創る	5					
	D文化																	日本の文化の移り変わり 世界に発信する魅力的な文化はどれ？			
テーマ・リレーション												リレーション 社会・芸術									
												リレーション 社会・科学									
人間	A自分	1年生に教えることは	2	自分の長所・短所	5	違いはよいこと悪いこと	2	自分の将来の道	5	14	30	2学期の学びをつくろう	4	仲間と友達	4						
	B仲間	学級目標を決めよう	2	1年生との関わりを深めよう	4	学校のために取り組もう	4			10		2学期のゴールの姿をみつめよう	2	みんなで話そう 仲間と共にできること	6						
	C生命			同じ命ちがう命	6					6		生きるとはどのようなことか	7								
	D他者と世界									0											
芸術	A表現・構想 B分析 C技能 D実験・調整 音楽	つくろう！ぼくたちわたしたちの劇	5	表そう！ぼくたち・わたしたちの思いを音楽で	7	つくろう！ぼくたちわたしたちの合唱・合奏Ⅰ	8	20	30	残したい音・音楽	10	つくろう！時代を									
	造形	感じたままに花	5	光の形	5			10		つくろう！ぼくたち・わたしたちの福岡小学校の誇り	10										
健康	A身体					1学期のまとめをしよう	1	1	40												
	B食	つくろう　朝の食事	10					10		工夫しよう1食分の食事	10										
	C運動	体力を高める運動に挑戦	13	相撲・綱引きに挑戦	6	アクアビクス	10	29		自分に合った陸上運動	10	8分間走をしよう	9								
マーレンジ																					
たんれん	朝タイム×週５	言葉（日本語，英語，ことわざ，辞書引き，文学）				数学（四則計算，単位，公式，図形）				人間											
時数計		300																			

に自分ができることを考えて行動する子供

2学期			3学期			時数計	
運動会 / 小中合同防災訓練 / あらつフェスタ / 持久走記録会走ろう会 / 遠行会 / 終業式			始業式 / 防災訓練③ / 教育研究発表会 / お別れ集会 / 卒業証書授与式 / 修了式				
自分の思いや考えを英語で書こう 4	8	76	仮名の由来 2 / 漢字を正しく使う 2 / 思いや考えを英語でかいてみよう 3	7	47	193	言葉
What do you want to do? 将来の夢 5	46		登場人物の関係をとらえ人物の生き方を書こう 7 / 筆者の考えを読み取り社会と生き方を書こう 8 / 言葉でのおもてなし 6	31			
：書こう 9 / 詩を朗読して紹介しよう 3			今，私はぼくは 6 / My best Memory　私の6年間 4				
を動かすプレゼンテーション 7							
日本文化を発信 9 / 狂言「柿山伏」 8	22		翻訳にチャレンジ～生き方を伝える言葉の力とは～ 6 / Let's make a speech. 卒業を前に今思うこと 3	9			
量の単位 8	8	38	文字を使って広がる数学 5 / 数学自由研究（6年生） 7 / 小学校のまとめ 4 / さらなる数学の世界へ 5	21	57	158	数学
	6		数学自由研究（6年生） 5 / 小学校のまとめ 5 / さらなる数学の世界へ 5	15			
データでせまる　歴史の変化 5	24		統計でみる 世界の現実 6 / 数学自由研究（6年生） 5 / 小学校のまとめ 3 / さらなる数学の世界へ 7	21			
え方を利用して話をつくろう 6	12	24	しょうとつのエネルギーってどれくらい？ 9	9	31	87	科学
	0		生きるために必要な水を確保できるのか 8	8			
センサープログラムで実現しよう　私たちのIoT 7	12		ドローンのプログラミング開発 14	14			
コロナ禍における政治，経済，文化，外国との関わりはどうなるの？	0	44	グローバル化する世界における日本の役割 12	12	26	105	社会
6 / soaiety5.0の社会でできること 5 / 日本の経済の在り方は？スタートアップAI企業に学ぶ 12	23		提案しよう！私の考えるソーシャルビジネス 9	9			
長い戦争と平和な日本へ 6 / 国の財政を考えよう（財政教育プログラム）	11			0			
5 / 世界の宗教について知ろう 5	10		日本と関係の深い国との関わり 5	5			
テーマ「歴史の変化の中にいるわたしたち」			テーマ「well being　民族・国境を超えたよりよい生き方とは」				テーマ・リレーション
哲学を考えよう 2 / 積み上げよう生活と学び 6	16	44	幸せとは何だろう 2 / 自分の自由とは 2 / なりたい自分 2 / 6年間の学び 2	8	31	105	人間
12才の哲学 7	15		6年間の思いを形に 3 / 卒業する自分たち 3	6			
	7		支え合うわたしたちの命 10	10			
歴史の変化の中にいるわたしたち 6	6		well being民族・国境を超えたよりよい生き方 7	7			
表す音や音楽 5 / つくろう！ぼくたちわたしたちの合唱・合奏Ⅱ 5	20	35	つくろう！ぼくたちわたしたちの合唱・合奏Ⅱ 4 / つくろう！ぼくたちわたしたちのマイミュージック 6	10	22	87	芸術
和のものを使って絵や工作に表そう 5	15		12才のデザイナー 9 / 思い出のあの場所に 3	12			
2学期のまとめをしよう 1	1	43	酒や飲酒について調べよう 4	4	22	105	健康
	10		これからのわたしの健康をつくろう 7	7			
アウトナンバーバスケットボールを楽しもう 13	32		みんなで難しい跳び方に挑戦しよう 7 / リズムダンス 4	11			
							チャレンジたんれん
（哲学的な問いについての討論） / 環境（都道府県，地図記号，世界の国旗，歴史人物）			科学（身近な生き物，星座，実験器具，科学記号）				
304			236			840	時数計

芸術科実践事例　第1学年　テーマ学習「プレイパークをつくろう～マラカス　せいさくじょ～」

指導者　　倉橋　　慎二

1　目標

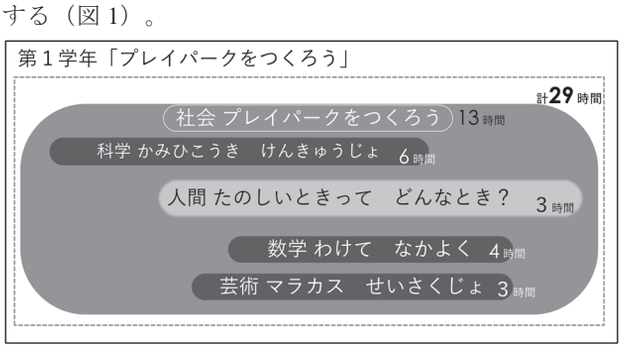
◎　手作りマラカスの音色の違いに気付き，音には様々な音色が存在していることを捉え，特徴を生かした音遊びをつくることができる。　　（創造性）

○　他者と音を合わせるよさや面白さの感じ方を共有し一緒に音遊びする楽しさを味わう。　　（協働性）

○　思いを明確にし，音色や仕組み（反復，呼びかけとこたえ）の面白さや楽しさに気付き，自然物の音に対する価値の変容を自覚することができる。（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，１年生がみんなで仲良く遊ぶためにプレイパークをつくる活動を通して，楽しさについて考えたり，友達を増やしたり，友達と進んで関わろうとしたりする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科，社会科を中心に，みんなが楽しいプレイパークをつくるためには，何が必要かを追究していく過程で，数学科や科学科，芸術科において，仲良く楽しく遊ぶために数量を分けたり，遊びを楽しむための仕組みや音などについて考えたりするという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（図１）。



【図１　第１学年のテーマ学習の概要】

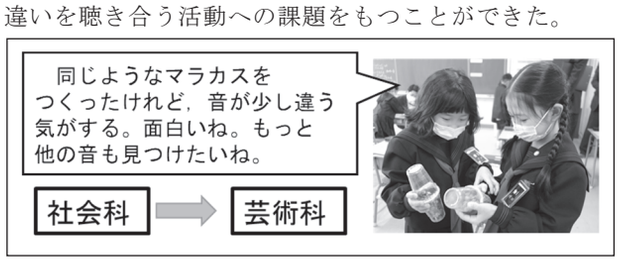
特に芸術科では，内容「Ａ発想・構想，Ｂ分析」に関わり，プレイパークをつくる活動の中で，手作りマラカスを使った音遊びを通して，様々な音色を見つけることや演奏することの価値（楽しさや面白さ）に気付くことをねらいとした**【たくましい追究】**。楽しい音遊びにするために，音楽の構造に着目して表現をつくることは，美と豊かに関わる子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として創造性に関わる項目が低かった。特にＡ児は，「より正しい考え，自分にしか思いつかないこと」の項目が課題であった。そこで，人間科や社会科の学習を通して，芸術科の表現欲求を高めたり，音遊びの楽しさや様々な音色についての課題を解決させたりしていく。ここでは，社会と芸術のつながりを中心に述べていく。

3　授業の実際と考察

導入段階（社会科）

導入段階では，社会科の学習の中で，マラカスの音に興味・関心をもったり，音の違いについての課題を設定したりすることをねらいとした。そこで，社会科の「プレイパークをつくろう」の導入で，遊びの例示として，秘密基地づくりや手づくり楽器などの自然物や人工物を使った遊びの紹介を行った。実際の活動の中で，自然物を使った手づくり楽器を製作した複数の児童がいた。そこで，楽器をつくり，音を鳴らす活動を行い，芸術科へとつなげた。Ａ児は「同じマラカスをつくったけれど，音が少し違う気がする。」と発言し，芸術科での音色の違いを聴き合う活動への課題をもつことができた。



【資料１　音色の違いを確認した後のＡ児の発言】

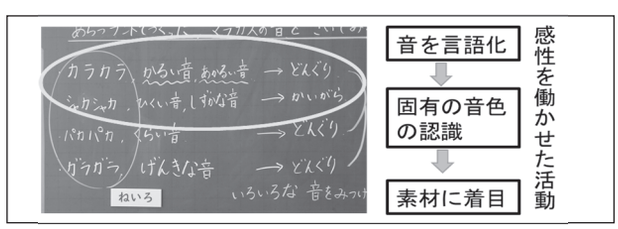
考察１

社会科の学習で，遊びの例を提示したり，製作したマラカスの音を鳴らす活動を設定したことは音が違うことを捉えたり，他にもどのような音があるのか課題をもったりする上で有効であった。その根拠は，資料１のＡ児の発言である。Ａ児は，聞き比べをすることで，音の違いを捉え，他にもどのような音が鳴るのか追究したいという思いをもつことができたといえる。

展開段階（芸術科）

展開段階では，芸術科の時間に社会科でつくったマラカスを聴き合い，どのような音が鳴っているのか，中身の材質や音色と関連させながら，同じ材質でも音色が違うことや，音色によって感じ方の違いがあることを捉えることができることをねらいとした。

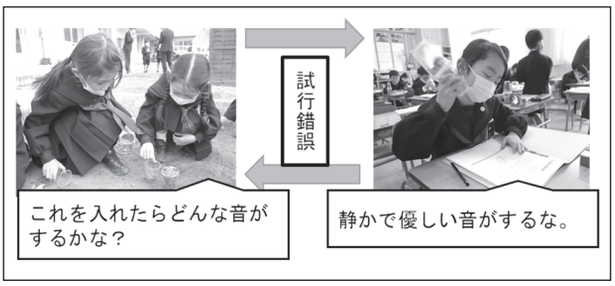
まず，社会科でつくったマラカスの音を全体で聴き合い，どのような音がするのか，言葉で表す活動を行った。Ａ児は，どんぐりや貝殻の音を，「パカパカ」や「カラカラ」と表現し，音色の違いを捉えていた（資料２）。



【資料２　音色の違いを捉えるための言語化】

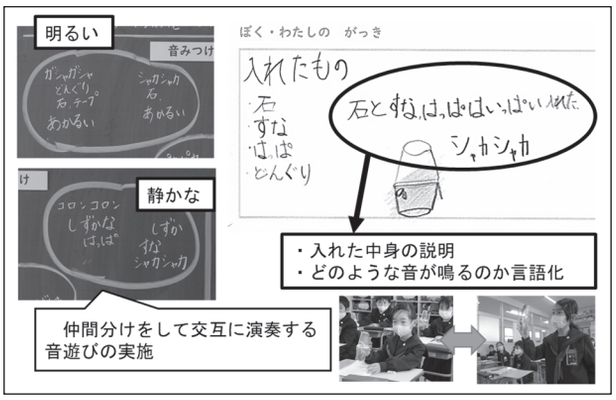
また，優しい音色やきれいな音色，軽い音などを材質と関連させながら音に着目する活動を行い，これからもっと，いろいろなマラカスをつくり，演奏してみたいという表現欲求をもつことができていた。

次に，もっと他にも色々な音の鳴るマラカスを作れないか考え，自分だけのマラカスづくりを行う活動を設定した。ここでは，モデルとなるマラカスを聴いて，感じたことを交流した後に，実際に自分だけのマラカスを製作する活動を設定した（資料３）。



【資料３　マラカスの音づくりの試行錯誤】

実際に教室横のクローバー畑に素材となるものを探しに行き，マラカスの中に入れて音を鳴らしながら試す活動を行った。資料４に示すように，実際にどのようなものを入れるとよいのか，絵や図をかいて説明を行った。また，製作したマラカスの音を，仲間分けし，音には多様な音色があることと，その中でも似たような音があることを捉えていった（資料４）。



【資料４　音の設計図と仲間分けの板書】

この仲間分けを基に，同じような音がする仲間で同時に音を鳴らしたり，違う音同士で交互に音を鳴らしたりする音遊びの活動を設定した。

考察2

自分だけのマラカスをつくり，音を鳴らしながら音色の違いを捉え，同じような音色同士で仲間分けをして，その仲間で音遊びをする活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，Ａ児の「同じどんぐりでも大きさや数を変えると音に違いがある」「優しい音色や静かな音色がするマラカスがある」という発言からである。さらに，振り返りには，「音色の違いをつかって，みんなで舞台にのって演奏して，プレイパークの開演の演奏をしたい」という，さらなる表現欲求にもつながったと考える。

終末段階（社会科）

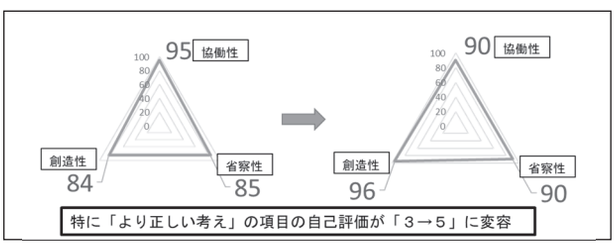
終末段階では，社会科のプレイパークで遊ぶ活動の開演のときに演奏して，その演奏を振り返る場を設定した。するとＡ児は，「みんなのマラカスは，音が違っていて面白い。いろいろな音色があることが分かった。」と発言した（資料５）。

【資料５　演奏の様子＆発言】

考察3

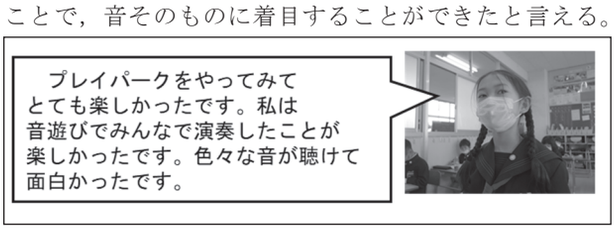
社会科でのプレイパークに演奏会を位置付け，音を聴き合いながら演奏し，演奏の価値を振り返ったことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の子供の発言と学習ノートの記述からである。

全体考察



【資料６　Ａ児の創造性に関する変容】

本単元は，特に，「より正しい考え，自分にしか思いつかないこと」という創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は，６月と 12 月に行った，創造性に関するアンケートを比較した，子供の変容からである（資料６）。「より正しい考え，自分にしか思いつかないこと」の項目は，特に芸術科では，「発想力・構想力」を育む内容であると考える。自分だけのオリジナルのマラカスを製作し，聴き合い活動や音遊び活動を設定したことで，音そのものに着目することができたと言える。



【資料７　人間科でのＡ児の発言】

さらに，人間科でプレイパークの学習から「遊びの楽しさとは何か」という問いに対して交流した際には，資料７のような発言が見られた。これは，音には様々な音色が存在していること，音色の違いを生かした音遊びの面白さや楽しさを捉えることができている。これは，芸術科で大切にしている「芸術要素と感じ方との関わり」を捉えることができており，芸術科の見方・考え方を養うことができたと考える。

数学科実践事例　第2学年　テーマ学習「1年生とのあそびを決めよう」

指導者　田中　智史

1　目標

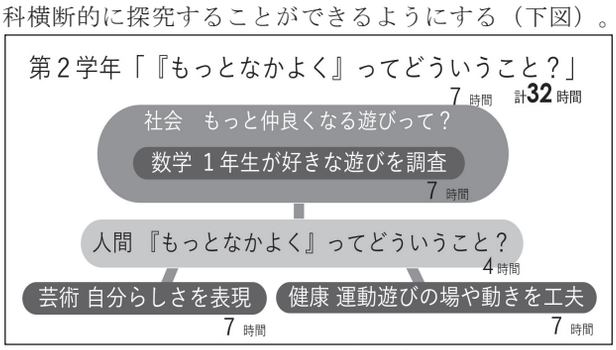
◎　必要なアンケートの項目を決めて，自分が調べたいことが分かるようにデータを整理して，目的に応じて特徴を読み取ることができる。　（創造性）

○　データに対する気付きを伝え合い，事象を多面的に捉えてデータを処理することができる。　（協働性）

○　データの収集や読み取りを想起し，次のデータ処理に生かそうとすることができる。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，友達との過ごし方を見直し，自分とは異なる他者とよりよい関わり方をしようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，「仲良くなる」とはどういうことかを追究していく過程で，社会科，数学科，健康科，芸術科において，みんなが楽しく仲良くなるための遊び方や，自分らしさについて考えるという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第２学年のテーマ学習の概要】

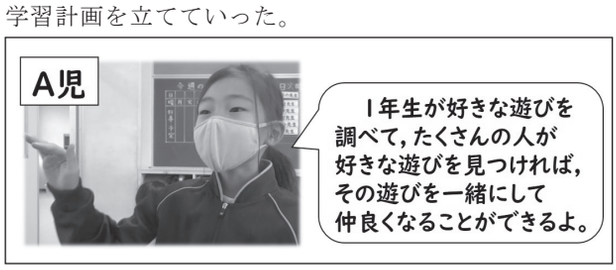
特に数学科では，内容「C データ・変化オ」に関わり，１年生と仲良くなるためにはどのような遊びをすればよいかを決定するために，アンケートを取り，アンケート結果の数の大小に着目して特徴を捉えることがねらいである**【たくましい追究】**。社会生活の場面においても，目的に応じて必要な情報を集めたり，情報を基に考えをつくったりすることは，データを利活用して問題解決を行う子供の素地を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として創造性に関わる項目が低かった。特にA児は，「難しいことでも人に聞かずに自分で頑張ろうとする」ことや「分からないことは分かるまでやる方だ」といった創造性に関わる項目が課題であった。数学で学んだことを実生活に生かすことができると実感できている子供は約８割いる。そこで，人間科や社会科の学習を通して，もっと仲良くなるとはどういうことかを考える過程で数の大小にも着目しながら自分の考えをつくり，自分とは違う他者を認めながら課題を解決させていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，社会科の学習で生まれた問いを解決するために「１年生が好きな遊びは何が多いかな」という問いの解決に関わる統計的探究についての見通しをもつことをねらいとした。そこで，問いを解決するために数学の学習で明らかにすることは何かを話し合う活動を行った。A児は「アンケートをとって，どの遊びが多いかを表やグラフにすれば分かると思う。」と発言し，学習計画を立てていった。



【資料１　数学科の学習計画を話し合うA児】

考察１

社会科で生まれた問いを基に，数学の学習において明らかにすることは何かを話し合う場を設定したことは，統計的な探究についての見通しをもつ上で有効であった。その根拠は，資料１のA児の発言である。データを収集し整理することで，目的に応じた必要なデータを集めて問いを解決することができるという見通しをもち，学習計画をたてることができたといえる。

展開段階

展開段階では，１年生に対して好きな遊びを尋ねたアンケート結果を整理して，１年生との遊びを決めるためのデータの収集ができることをねらいとした。

まず，１年生に対して，好きな遊び，苦手な遊びを尋ねたアンケートの結果を表やグラフに整理した。A児は，好きな遊び調べと苦手な遊び調べの結果を収集することができた。

次に，好きな遊びと苦手な遊びを整理した表やグラフから分かることを出し合う場を設定した。ここでは，探究を一度立ち止まらせ，教科の見方・考え方を見いだす「看破するアプローチ１」として，好きな遊び調べの数の大小に着目して順位付けをおこない，その後に好きな遊び調べの結果を基にして１年生との遊びを話し合う場を設定した。すると子供は，好きな遊び調べの１位である「けいどろ」は，苦手な遊び調べで苦手と答えている１年生もいる遊びであるということに着目し，好きな遊び調べの結果だけで１年生との遊びを決めてよいのかという問いをもつことができた（資料３）。

好きな遊び調べの結果だけを基にして遊びを決めて

【資料３　遊びの決定の仕方について発言するＢ児】

よいかどうかを話し合うことで子供は，①好きな遊び調べと苦手な遊び調べ，苦手な理由調べの結果を関連付ける必要性や，②苦手な理由の結果を基にして遊びのルールを変えれば，多くの１年生を楽しませることができるという課題解決の方法を見いだし，社会科の学習で詳しく話し合う必要があることを主張した。

そこで，社会科の学習で，アンケート結果を基にして１年生との遊びを決める話し合いの場を設定した。すると子供は「一番好きな人が多い遊びはけいどろだけど，苦手な人もいます。」「苦手な理由でずっと鬼の人がかわいそうと言っている人がいるから，交代でできるようにすれば嬉しいのではないかな。」などと好きな遊びの結果に苦手な遊びの結果やその理由を関連付けて，誰もが楽しめる遊びにしようと工夫を発言することができた（資料４）。また，今のままでは必要な情報が足りないことから，アンケートの内容を考えて再度データを収集する必要性に気付いた。

【資料４　社会科の話し合い活動の板書】

考察2

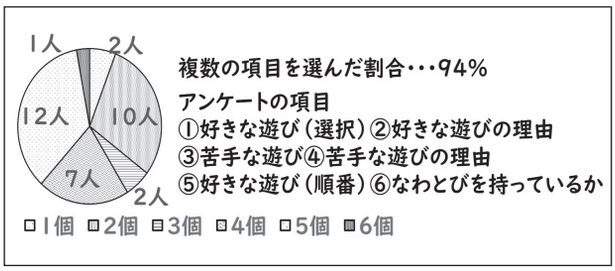
探究を一度立ち止まらせ，数の大小に着目した順位付けをおこなった後に，好きな遊びの結果だけを基にして遊びを決めてよいかどうかを話し合う場を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料３のＢ児の発言と資料４の複数の観点から課題解決方法を見いだすことができた姿からである。さらに，１年生との遊びを決定するための情報が不足していることに着目させたことで，再アンケートを実施する必要性に気付くことができたと考える。

終末段階

終末段階では，２度目のアンケート結果を整理し，社会科の学習での話合いに向けて考えをつくる活動を設定した。すると子供は，自分の目的に応じて必要な情報を選んで複数の項目の集計に取り組んだ（資料５）。

考察3

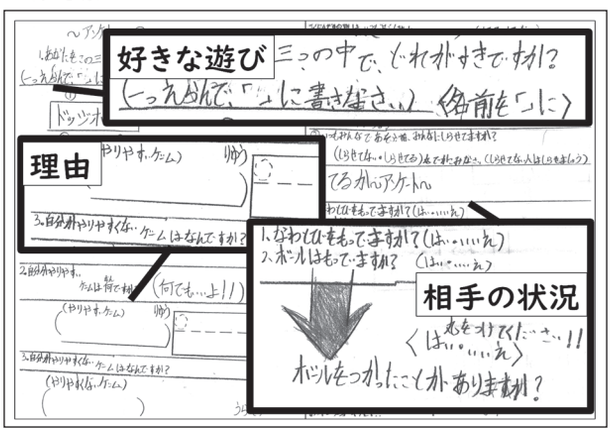
２度目のアンケート結果を整理し，社会科の学習での話合いに向けて考えをつくる活動を設定したことは創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５に示す



【資料５　再アンケートに対する集計の実態】

再アンケートに対する集計結果の実態とその結果を用いて考えをつくる子供の様子からである。子供は，アンケート項目①の好きな遊びを選択する問題に対する集計を基に順位付けをするだけでなく，苦手な理由を取り出して遊びの工夫の仕方を考えたり，アンケート項目⑤の複数の遊びに順番を付ける問題に対して，順番をポイントに換算して全体の傾向をつかもうとしたりして，目的に応じてデータの処理の仕方を考えながら，話合いに向けた準備を進めることができた。子供は収集したデータの中から必要な情報を取り出し，データを利用して課題解決の方法を見いだすことができたといえる。

全体考察



【資料６　子供が作成した再アンケートの内容】

本単元は，特に目的に応じた情報を判断し，収集したデータを利用して課題解決の方法を見いだすという創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は資料６に示す再アンケートの内容と資料５に示す再アンケートの集計の実態からである。再アンケートを実施する際，全員がアンケート案を作成した（資料６）。内容項目を見ると，好きな遊びに関する項目は 100%，理由等に関する項目は 83%，相手の状況に関する項目は 44%の子供がアンケート項目として選んでおり，数の大小だけでなく相手の状況に応じて方法を考えようとしていることが分かる。また，こうしたアンケートの結果を集計するにあたり，94%の子供が複数項目の集計をおこない，複数の情報を関連付けて問題解決の方法を見いだすことができた（資料５）。

このことから，リレーション学習として社会科と横断しながら身近な事象に対する統計的探究をおこなうことで，必要なデータを判断したり，事象を多面的に捉えたりする見方・考え方を養うことができたと考える。

健康科実践事例　第3学年　フォーカス学習「空いている場所を見付けて攻めようディスクキックゲーム」

指導者　　新田　　聖

1　目標

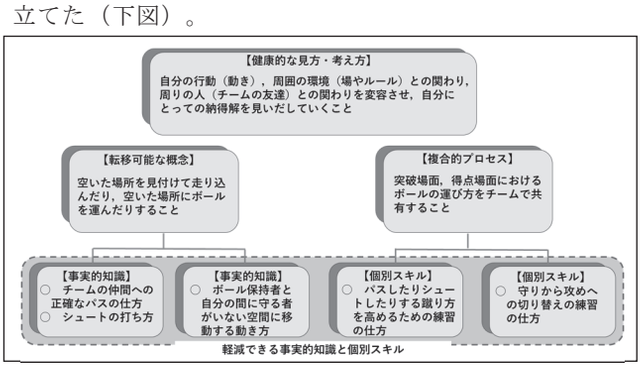
◎　みんなで楽しむことができるゲームをつくる過程において，チームの実態に合わせて，空いた場所を使った動き方を捉えて練習を行い，練習したことをゲームの中で発揮しながら，得点を競い合うゲームの楽しみ方を見いだすことができる。　　（創造性）

○　友達と一緒にゲームづくりをする過程において，自分の考えや動きを新たにしながら，チームにより合った楽しいゲームをつくることができる。　（協働性）

○　みんなで楽しめるゲームづくりを基に，自分や仲間のできるようになった動き方，ゲームの楽しさの広がり，今後のゲームづくりの課題を捉え，自分の運動への関わり方を更新することができる。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本フォーカスでは，一人一人の思いをかなえ，みんなで楽しめるゲームを追究する中で，自分の動き方や場，友達との関わり方を変容させながら，運動の楽しみ方を広げることをねらいとしている。そのために，場を見渡し，空いた場所を見つけて走り込んだり，空いた場所にボールを運んだりすることを中心概念とし，学習を組み立てた（下図）。



【図　第３学年のフォーカス学習の概要】

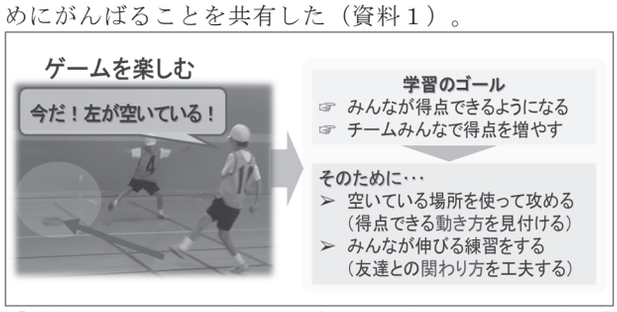
内容のＣ運動コ「ゴール型」に関わり，本単元は，第３学年の発達段階から，ゲームを楽しむために必要とされるパスやシュートの技能を軽減し，空いた場所を見付けて動くことに焦点化することで，スリム化を図った。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として，創造性に関わる項目が低いことが分かった。特に，「より正しい考え方を追究する」という創造性に関わる項目が課題であった。また，仲間とともに場に働きかけたり，動き方を検討したりしながら運動の新たな楽しさを見いだすまでには至っていない現状がある。そこで，みんなが楽しむことができる場の使い方やゲームを楽しむための動き方を獲得する過程の中で創造性を発揮し，自分と運動との関わりを更新することができるようにする。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，ゲームの楽しさを味わわせるとともに，今後楽しさを更に広げていくための学習の見通しをもつことをねらいとした。そこで，３対３の少人数で行うゲームに出合わせ，もっとゲームをみんなで楽しむためには，何をがんばったらよいのかを話し合った。Ａ児は「空いている場所を見付けて，チームみんなが動くことができるようになれば，ゲームがもっと楽しくなりそうだ。」と発言し，学習の見通しをもった。また，学級全体においては，チームみんなが楽しむことができるようにするために，「全員が得点すること」，「チームで得点を増やすこと」をゴール像とするとともに，そのためにがんばることを共有した（資料１）。



【資料１　子供と共有したゴールと実現のための着眼】

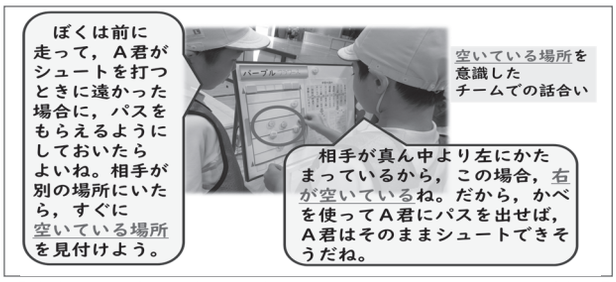
考察１

全員がゲームの判断場面に関わるゲームに出合わせ，繰り返しゲームを行わせた後に，ゲームを更に楽しむために何が必要かを話し合う場を設定したことは，ゲームの楽しさを味わいながら，「空いている場所」を見付けて動くという中心概念に気付く上で有効であった。その根拠は，資料１の学びの道標をつくっていく中での子供の発言である。空いた場所を使った動き方とチームの仲間との連係に着目し，自分の行動と友達との関わりを変容させることで，友達と競い合って得点するゲームが楽しめそうだという見通しをもつことができたと考える。

展開段階

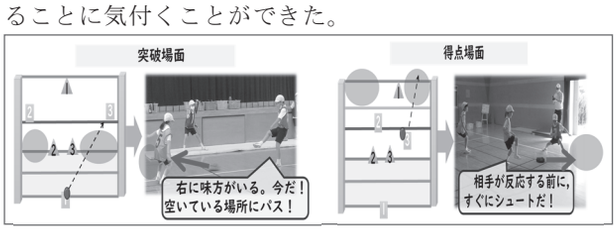
展開段階では，学びの道標を基に，競い合って楽しむゲームをするために，チームでできることを検討する中で，空いた場所の使い方を捉えながら，自ら動いたり連係したりする動き方を見いだすことをねらいとした。

まず，チームで得点する人が限られているという課題を解決するために，初めての得点は５点入るというルールを設定し，ゲームを行った。Ａ児は，自分が得点した後，全員が得点する場面をつくるために，チーム練習の際に，ボードを使ってチーム全体で動き方を確認しながら，実際の場で練習し，ゲームに生かそうとする姿が見られた（資料２）。



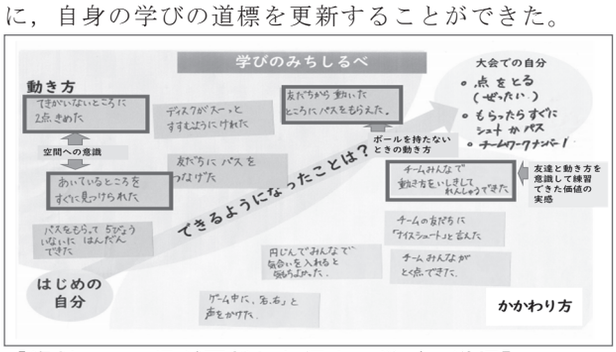
【資料２　全員が得点するために話し合っている様子】

次に，更に得点を重ねていくために，チームで突破場面と得点場面に分けて，一人一人が動き方を考え，練習して，ゲームに生かす活動を設定した。ここでは，相手を突破する場面において，ボールを持たないときの動きに着目する必要があることを捉えさせ，視覚資料を使って，動き方をイメージすることができるようにした（資料３）。すると，得点場面において，空いている場所を見付けてシュートする動きが多く表出したことを捉えた。子供たちは，チームの仲間がボールを持ったら，相手がいない場所に動くことで，シュートが打ちやすくなることに気付くことができた。



【資料３　視覚資料を基に，動きをイメージした姿】

B児は，ボールを持ったら空いている場所を探してパスをすることばかりを考えていた導入場面を振り返りながら，ボールを持たないときにいかに動くかによって攻めやすくなることに気付き，資料４のように，自身の学びの道標を更新することができた。



【資料４　B児が更新した個人の学びの道標】

このように，チームの仲間とともに動き方を考え，学びの道標を一人一人が更新していくことで，子供たちは，資料５のように，空いている場所を見付けて攻める動きが多く表出するようになった。

真正の課題	相手を突破し得点するには，空いた場所をどう使えばよいのだろう。【知のまとまり】			
	課題解決力	結果	知識・技能の発揮	結果
3 よい	チームで，突破場面，得点場面の両面において，空いた場所を使った攻め方を共有し，ゲームに生かそうとしている。	８２％	ゲームの中で，ボールを持たないときに，空いた場所に走り込んだり，ボールを持ったときに，空いている仲間にパスをしたり空いた場所にシュートしたりすることができる。	９１％
2 合格	チームで，突破場面，得点場面のいずれかの場面において，空いた場所を使った攻め方を共有し，ゲームに生かそうとしている。	１８％	ゲームの中で，ボールを持たないときに，空いた場所に走り込むことができる。	９％
1 もう少し	空いた場所を使った攻め方をチームで共有できていない。	０％	ゲームの中で，空いた場所を意識して動くことができていない。	０％

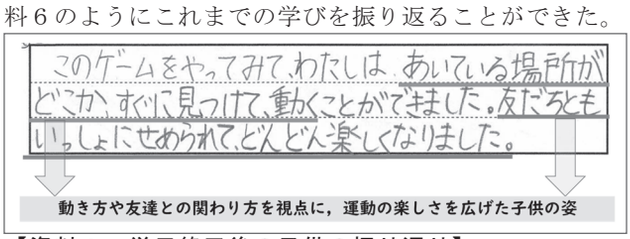
【資料５　本単元のルーブリックと結果】

考察２

ゲームの展開を俯瞰し，突破場面と得点場面に分けて，ボードを使って動き方をイメージさせたり，練習の際に判断場面を保障して練習を行ったりする活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料４のように，ゴール像に向かって，自分の学びの道標を更新する姿が見られたからである。さらに，資料５のように学級全体においても，空いている場所を見付けて動く子供の割合が高くなっていることから，多くの子供が中心概念を獲得することができたと考える。

終末段階

終末段階では，これまで更新してきた攻め方を使って，ゲームを楽しむ場を設定した。ゲーム後Ｂ児は，資料６のようにこれまでの学びを振り返ることができた。

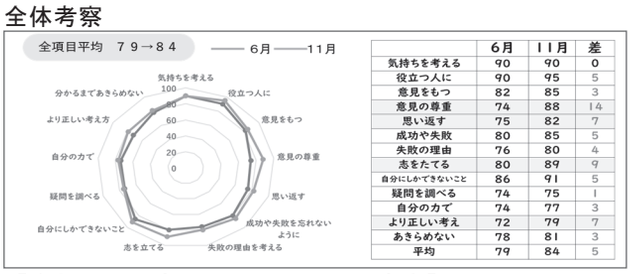


【資料６　単元終了後の子供の振り返り】

考察３

単元の学びを発揮しながら，ゲームを楽しむ場を設定したことは省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料６の学習ノートの記述からである。子供は，ゴール像に向かって自分の行動を変容させることで，楽しさが広がっていったことに気付いていることから，自分の運動への関わり方を更新することができたと考える。

全体考察



	6月	11月	差
気持ちを考える	90	90	0
役立つ人に	90	95	5
意見をもつ	82	85	3
意見の尊重	74	88	14
思い返す	75	82	7
成功や失敗	80	85	5
失敗の理由	76	80	4
志をたてる	80	89	9
自分にしかできないこと	86	91	5
疑問を調べる	74	75	1
自分のかて	74	77	3
より正しい考え	72	79	7
あきらめない	78	81	3
平均	79	84	5

【資料７　研究開発アンケートの変容】

資料７から，本単元後の質問紙調査において，課題であったより正しい考えを追究する項目，仲間の意見を尊重する項目が向上していることが分かる。本単元においては，空いている場所を見付けて動くことに焦点化して中心概念を設定したことが，資質・能力を育成する上で有効であったと考える。その根拠は，突破場面と得点場面という２つの判断場面において，「ボールを持ったとき」と「ボールを持たないとき」の２つの自身の立場から，動き方を変容させ，チームの仲間と連係した動きを築くことができたからである（資料５）。

このことから，フォーカス学習として，空いた場所を使ったゲームづくりをチームで行っていく中で，空いた場所と友達の動きを見ながらパスをしたりシュートしたりすることを一人一人が捉えることで，ゲームの楽しさを広げることができたと考える。

言葉科実践事例　第3学年　リレーション学習「福岡のステキが伝わる解説文を書こう」

指導者　扇　裕人

1　目標

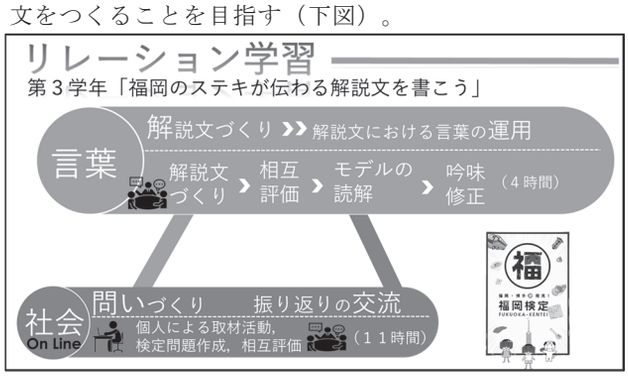
◎　子供福岡検定の解説づくりを通して，相手や目的を明確にして言葉や表現を工夫することのよさを捉えて言葉の特徴を理解できる。　（創造性）

○　言葉に関する疑問を解決するために，思いや考えを伝え合うことを通して，相手意識や目的意識をもち，言葉を選ぶことの価値に気付くことができる。　（協働性）

○　調べたことを子供福岡検定の解説に生かしたいという思いを明確にもち，考えの変容や高まりを価値付けたり自覚したりしようとする。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本リレーションでは，社会科で生まれた「子供福岡検定で調べたことを伝えるには，問題文と答えだけでは足りない」という子供の文脈を基に，相手に分かりやすく伝えるための方法を言葉科で考えようとするところを出発点としている。そのために，言葉科では，言葉の使い方に焦点を当てて，解説文の文章構成や事例の順序などを工夫したり，相手が何を求めているのか必要な情報は何かを考えたりすることで，調べたことが伝わる解説文をつくることを目指す（下図）。



【図　第３学年のリレーション学習の概要】

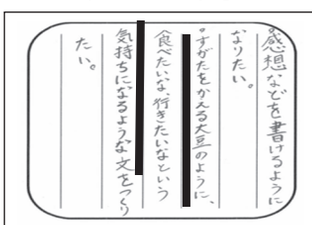
特に言葉科では，子供福岡検定の解説文づくりの活動を通して，言葉の特徴に着目して構成を考えたり表現を工夫したりしていくことは，自分の思いや願いを明確にしたり，言葉がもつ機能を運用して言葉の価値を捉えたりすることができる子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として創造性に関わる項目が低かった。特にA児は，「なぜ，どうしてと思ったことを最後までよく調べる」という創造性に関わる項目が課題であった。そこで，言葉科における創造性を発揮する場面では，より相手に分かりやすく伝える解説文を書くためには，どのような言葉を使って書けばよいのか，相手意識や目的意識をもって言葉を選ぶことのよさに気付き，主体的な言葉の使い手になることを目指す。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，子供福岡検定で伝えたいことを明確に伝えるために必要なことについての見通しをもつことをねらいとした。そこで，社会科で生まれた「調べたことを分かりやすく相手に伝えるには？」という問いから，言葉科の学習において明らかにすることは何か話し合う活動を行った。A児は「子供福岡検定の問題と答えだけでは福岡のよさが十分伝えられないから，もっとくわしく解説したい。」と発言し，学習計画を立てた。



単元のゴール像を子供たちと共有し，必要な学習は何かを話し合うことで，めあてをより具体化する。

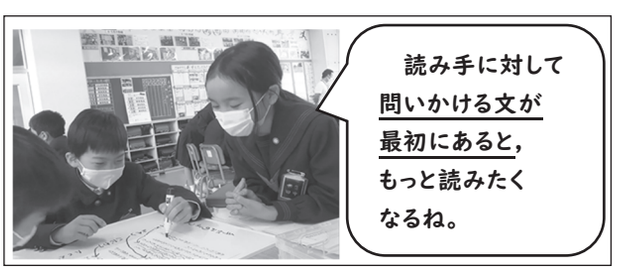
【資料１　学習のゴールで目指す姿を明確にする】

考察１

社会科の学習で生まれた問いから，言葉で学習したいことは何かを話し合う場を設定したことは，言葉科で学ぶことを明確にする上で有効であった。その根拠は，資料１のA児の学習計画の記述である。思いや願いを伝えるためには，言葉をどのように使うのか考える必要があることに気付いてゴール像をイメージできたといえる。

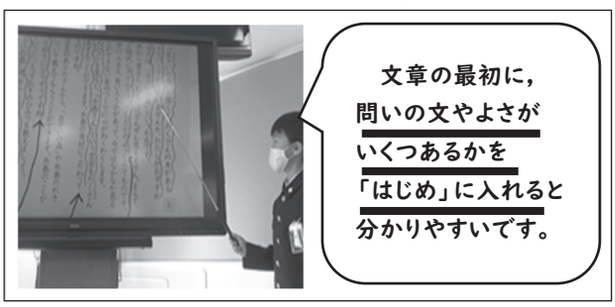
展開段階

導入段階で「解説文をつくる」という目標は全員で共有できたが，解説文を書くために，具体的に何を学べばよいのか見通しがもてない子供が多くいた。調べた情報はたくさんあり，詳しく知っているものの，情報をどのように使えばよいかA児を含めて分からなかったのである。そこで，展開段階では，解説文に必要な条件について話し合い，どのような言葉を選ぶと読み手に自分の思いを伝えることができるのか考えて解説文をつくることねらいとした。まず，解説文に使いたい言葉や文章構成を考えるために，モデルとなる解説文の読み取りを行った。A児は言葉の使われ方に着目し，「はじめ」の文章における問いの文の重要性に着目した（資料２）。



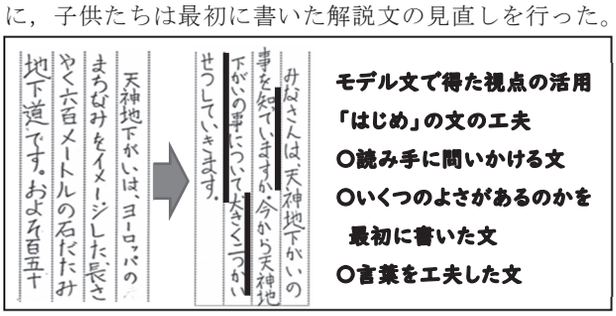
【資料２　グループ交流で読みの視点を獲得する姿】

次に，グループで見付けた解説文を書くときに大切な視点について全体で共有する場を設定した。そこでＡ児は，導入の文章で「○○について知っていますか。」と読み手に問う文を書くことのよさについて発表し，共感を得ることができた。さらに子供たちは「すがたをかえる食べ物のひみつを読み合おう」で獲得した事例の出し方を工夫することのよさを想起し，解説文を書く際に大切にしたい視点を共有していった（資料３）。



【資料３　モデル文の読み取りで獲得した視点の共有】

子供たちは，モデル文の読み取りを通して，①「はじめ」の文章で読み手に問う文を書くこと，②「中」の文章でつなぎ言葉を適切に選ぶこと，事例の出し方や説明したいことの順番を考えて書くこと，③「おわり」の文章で，その場を訪れたときに感じたことや，体験してみて思ったことを書くことで，解説文のスタイルをつくりあげた。モデル文の読み取りとそこで獲得した視点を基に，子供たちは最初に書いた解説文の見直しを行った。



【資料４　解説文の視点を得てＡ児が修正した文章】

本単元の学習を進めるにあたり，子供たちが自己の変容を自覚できるようにルーブリックによる自己評価を行った。資料５のルーブリックを使って振り返りを行うことで，子供たちは目指すゴールの姿に到達するために，解説文にどのような言葉を使うとよいかをつかむことができた。学習としての評価を一単位時間ごとに設定し，その目標を達成するための学習活動を考え，実践していくことを繰り返すことで，子供たちが自らの言葉の力の成長に気付き，言葉の価値を実感することにつながった。

	Ａよくできた	Ｂ　できた	Ｃ　もう少し
かい説文に使いたい言葉の力	読む人がなっとくできるように，「はじめ」の文で問いの文を使ったり，「おわり」の文で体験したことを書くことができる。	読む人がなっとくできるように，これまで学んだ書く力を生かしてかい説文を書くことができる。	これまでに学んだことを使ってかい説文を書くことができない。

【資料５　学習としての評価基準となるルーブリック】

考察２

展開段階で，モデル解説文から視点を得る活動と，視点を基に解説文を見直す活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料２でのＡ児の発言や，資料４のＡ児が修正した文である。Ａ児は，グループ交流によって解説文に必要な視点を捉え，それを基に解説文を見直すことで，伝えたいことが明確になり，相手や目的を意識した解説文が書けたと考える。

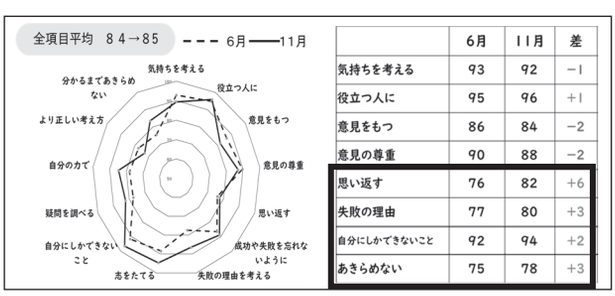
終末段階

終末段階では，読みの視点を基に解説文を読み合う活動を設定した。①最初の解説文と比べて，どのような言葉を使っているか②その言葉があることの効果は何か，読むための視点を子供たちと共有した。Ａ児の解説文を読んだ子供は，そのよさを資料６のように評価した。始めは調べたことを詳しく書くだけでよいと思っていたＡ児が，友達からの評価によって相手や目的を意識して言葉を使うことのよさを実感した瞬間であった。

【資料６　学びを相互評価し，言葉の価値に気付く姿】

全体考察

本単元は，自分の思いを伝えるために，言葉を選んで使うことができるという創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠はＡ児を含む子供の文章の変容からである。モデル解説文の読み取りで獲得した視点を自分の文章で使おうとした子供が 85%いたことから，相手意識や目的意識を明確にもって言葉を使おうとする資質・能力を養うことができたと考える。



	6月	11月	差
気持ちを考える	93	92	−1
役立つ人に	95	96	+1
意見をもつ	86	84	−2
意見の尊重	90	88	−2
思い返す	76	82	+6
失敗の理由	77	80	+3
自分にしかできないこと	92	94	+2
あきらめない	75	78	+3

【資料７　研究開発アンケートから見た子供の変容】

本実践で，学びを「思い返す」項目や「分かるまであきらめない」項目に伸長が見られた。これは，自分の課題を解決するために，それぞれの教科で何を学びたいのかを子供の中から表出することで，子供たちが教科の特性を生かした課題解決学習を展開することができたからである。教科を往還することで，それぞれの教科の特性を生かした学びを展開でき，言葉科としても言葉の価値に迫る学習ができたと考える。

人間科実践事例　第4学年　テーマ学習「みんなが笑顔でくらすために」

指導者　宇戸　勝則

1　目標

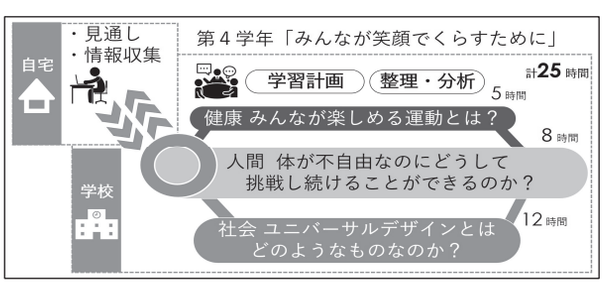
○　障害のある人のために配慮されていることを基に，共生社会の在り方を考えることができる。（創造性）

○　お互いを認め合う関係づくりが大切であることに気付くことができる。（協働性）

◎　障害のあるなしでその人の生き方を捉えるのではなく，ひとりの人としての自分を高めようとする願いを感じ取り，他者との関わりにおいて内面にある生き方に目を向けて生活しようと考えることができる。（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，共生社会を形づくるための考え方を取り入れながら自らの生き方を構築しようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，障害のある人やそれをサポートする人がどのような思いをもっているのかを追究していく過程で，社会科，健康科において，ユニバーサルデザインや，誰もが楽しめる運動を追究する子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第４学年のテーマ学習の概要】

特に，人間科の内容「D他者と世界」において，社会福祉の考え方から多様な人々が共に生きていくために自分自身の価値観を広げ，共生社会を実現していく意欲を高めるようにすることがねらいである【学校を超える価値】。相手を尊重し，共に歩むことについて考えることは，よりよい社会を形成する一員として自分の存在を自覚し，共生社会を実現しようとする子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として省察性に関わる項目が低かった。特にA児は，「失敗の原因を考える」や「毎日振り返りをする」などといった省察性に関わる項目が課題であった。そこで，人間科や社会科，健康科の学習を通して，「障害」というものの考え方や障害のある人との関わり方を学習の度に振り返らせる。このように，自分自身の考えの変容を捉えさせることで，課題を解決することができるようにしていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，障害のある人がどのように活躍しているのだろうかという気がかりをもち，障害があっても何かに前向きに取り組む姿から問いをもつことをねらいとした。そこで，実際に大濠ブラインドランナーズクラブ（以下ＯＢＲＣ）の方に取材を行った。A児は「視覚障害のある人は歩くのさえ，大変なはずなのにどうして笑顔でブラインドマラソンをしているのだろう」と発言し，学習計画を立てていった。

【資料１　インタビューするＡ児の様子】

考察１

ＯＢＲＣの方に取材する活動を設定したことは，障害があるのになぜ挑戦し続けることができるのかという問いをもつ上で有効であった。その根拠は，資料１のA児の発言である。A児は，視覚に障害のある人と実際に出会い，明るく楽しそうにブラインドランを続けていることに，これまでの「何もできない」などのイメージとのズレを感じ，問いをもつことができたと考える。

展開段階

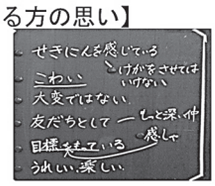
展開段階では，ＯＢＲＣの方と交流する中で，障害のある人が生きがいをもって明るく生活していることやサポートする人が障害のある人の生き方に刺激を受けながら生きていることに触れさせ，障害のある人への関わり方を自己更新させることをねらいとした。

まず，ＯＢＲＣの方を学校へ招き，アイマスク体験や伴走体験を行った。子供たちは，アイマスクをしている子供以上に補助をしている子供の方が緊張していた。また，伴走しながら自分が障害のある人の目の代わりになることが大切であることやお互いのことを信じ合うことが大切であると発言していた（資料２）。

【資料２　アイマスク体験を行うＡ児】

しかし，体験者をサポートすることが大変だったことから，ＯＢＲＣの方はどのような思いをもっているのだろうかという疑問をもった。そこで，ＯＢＲＣの方を教室へ招き，インタビューする活動を設定した（資料３）。

【障害のある人をサポートする方の思い】
- 怖いと感じる　・ 責任がある
- サポートできてうれしい
- ともに目標をもっている
- ひとりの友人として相手を大切にしている



【資料３　サポートする方の思い】

その中で「（相手のことを思って走るので）友達以上に思っているのではないか」という発言があった。そこで，子供たちに二人の関係性について整理しようと促すと，二人の関係についての発言が続いた（資料４）。

Ｃ：お互いに支えられたり，支えてもらったりして尊敬し合っている。
Ｃ：（障害のある）松永さんがサポートされているだけでなく，（障害のない）長野さんをサポートしていることもある。
Ｃ：（障害のあるなしに関係なく）お互いがお互いを尊敬していて，尊敬の形が違っている。
Ｃ：（障害のある）松永さんがいてくれるから，長野さんが楽しく走ることができる。
Ｃ：二人は（自分たちで言うと）親友のような関係で，パートナーとして接している。
Ｃ：（二人のようになるのは）難しいことだけど，お互いを尊敬し合っているから，家族のような関係になっている。

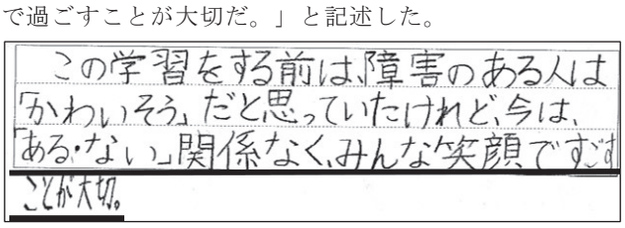
【資料４　二人の関係についての話合い】

考察２

体験活動を行い，障害のある人，サポートする人の思いや関係について話し合う場を設定したことは，省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料４の子供の発言からである。子供たちは，アイマスク体験や伴走体験から障害のある人を支えることの難しさを感じていた。しかし，サポートする方の思いを追究していくうちに，障害のある人が向きに頑張ろうとする姿をひとりの人として認めていることに気付き始めた。そして，障害のあるなしに関係なく，その人との関係をいかに築いていくかが大切であることを感じ取っていた。つまり，他者の表面的な姿ではなく，内面に目を向けることの大切さを感じることができたと考える。

終末段階

終末段階では，これまでの活動を振り返り，自分が学んだことを整理する場を設定した。すると，資料５のように「これまでは，障害のある人はかわいそうだと思っていたけれど，障害のあるなしに関係なく，みんな笑顔で過ごすことが大切だ。」と記述した。

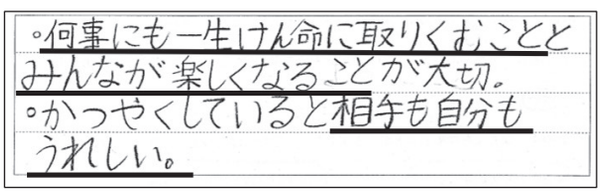

この学習をする前は，障害のある人は「かわいそう」だと思っていたけれど，今は，「ある・ない」関係なく，みんな笑顔ですごすことが大切。

【資料５　Ａ児の学習プリントの記述】

考察３

これまでの学びを整理する活動を設定したことは省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５のＡ児の学習プリントの記述からである。Ａ児はこれまでの障害のある人との関わり方を見つめ直し，ただ「かわいそう」だと思っていた自分が障害のあるなしに関係なく，みんなが笑顔で過ごす方途を考えることが大切であると結論付けている。これは，障害があるからその人に向けた特別な配慮をもって接するのではなく，ひとりの人として相手を捉え，全ての人が満足する在り方を求めていこうとする自己更新を行う姿があったからである。

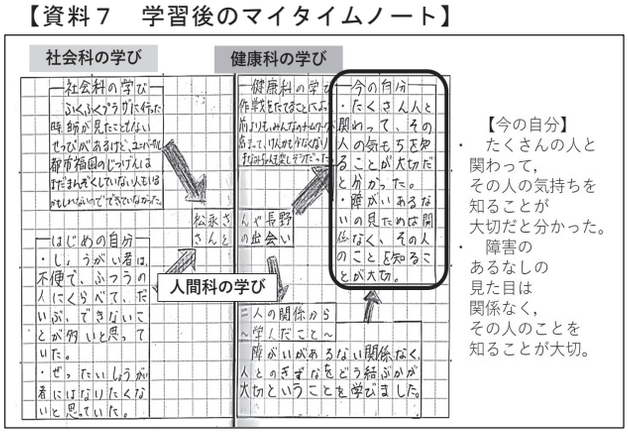
全体考察


・何事にも一生けん命に取りくむこととみんなが楽しくなることが大切。
・かっやくしていると相手も自分もうれしい。

【資料６　これからの自分についての記述】

本単元は，省察性の伸長に有効であったと考える。その根拠は，学習後のアンケート調査からである（資料６）。「何事にも一生懸命に取り組む」とは，本単元で出会った，障害のある人が語った言葉の一つである。相手の願いに共感し，自分の生き方として大切にしようとしていることが分かる。また，そのような生き方をすることで，誰もが満足することができる社会が実現できると価値付けることもできている。

【資料７　学習後のマイタイムノート】



さらに，学習後のマイタイムノートを分析すると，実証前には障害のある人に対して，「できないことが多い」と考えていた子供が「障害のあるなしといった見た目は関係ない」「その人のことを知ることが大切」であると結論付けている（資料７）。このような考え方の変容の背景に，社会科や健康科の学びが寄与していることが分かる。これらのことから，テーマ学習として他教科に横断しながら障害のある人の思いやサポートする人の思いについて探究を繰り返すことで，障害のあるなしでその人の生き方を捉えるのではなく，相手をひとりの人として見つめ，相手の願いを感じ取りながら共に生きていこうとすることの大切さを実感していると言える。

数学科実践事例　第4学年　リレーション学習「表やグラフで調べよう②」

指導者　　石橋　　大輔

1　目標

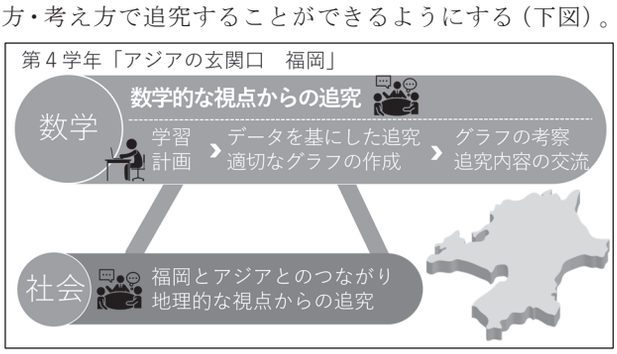
◎　問いの追究のために必要なデータを取捨選択し，グラフを選んで表しながら，問いに対する答えをつくり出すことができる。　　（創造性）

○　他者とのデータの見方の違いによってやグラフの見方が変わることに気付いたり，同じグラフでも違う見方があることを捉えたりする。　　（協働性）

○　自分の考えや探究のプロセスを振り返り，問いの解決につながる過程や主張に説得力をもたせるためのグラフのよさを捉えることができる。　　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本リレーションでは，「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いについて，地理的な視点やデータの視点から答えをつくり出そうとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本リレーションでは，中心の問いを社会科と数学科それぞれの見方・考え方で追究することができるようにする（下図）。



【図　リレーション学習の展開】

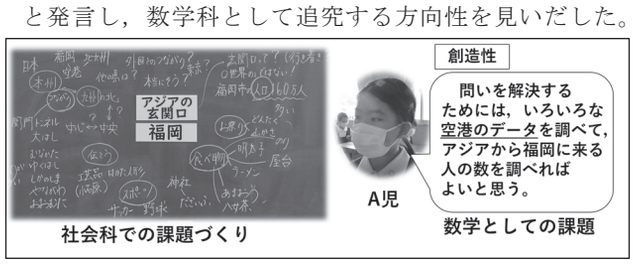
特に数学科では，「Cデータ・変化」の内容に関わり，「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いに対し，「説得力のある主張のためには，データを取捨選択し，棒グラフや折れ線グラフなどから適切なグラフを選んで表すことが大切である」という中心概念を捉え，そのよさを自覚していくことがねらいである【たくましい追究】。このように，問いの解決に必要なデータを選択し，グラフの特徴を捉えながら問いの解決に活用していくことは，目的に沿ってデータを活用していく見方・考え方を養う上で価値がある。

子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，創造性に課題があることが分かった。特にA児は，「疑問に思ったことを調べる」ことや「分かるまであきらめない」という創造性に関わる項目が課題であった。また，教科を関連させて学びの深まりを実感することができている子供は約４割に留まっている。そこで，社会科と関連させた学習を通して，最適解をつくり出していく創造性の育成を図っていくと同時に，教科を関連させて学ぶ数学のよさを実感できるようにしていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，社会科で生まれた「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いをデータの視点で追究していこうとする課題意識をもつことをねらいとした。そこで，問いの解決に向けて，どのような視点から解決をしていくか話し合う活動を行った。A児は「飛行機で日本に来る人たちのデータを調べてみたい」と発言し，数学科として追究する方向性を見いだした。



【資料１　社会科から生まれた数学科としての課題（A児）】

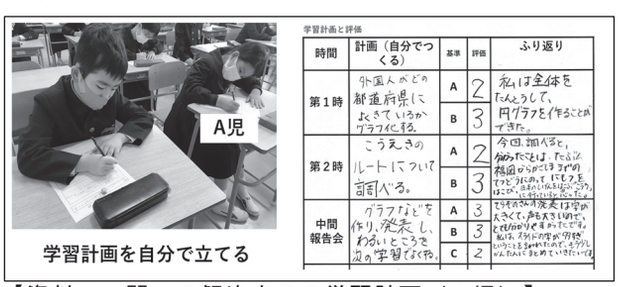
考察１

社会科の学習を基に数学科として追究していく課題を設定したことは，統計的な探究についての見通しをもたせる上で有効であった。その根拠は，資料１のA児の発言である。問いに対して統計的に追究していくための子供の課題意識をもたせることができたといえる。

展開段階

展開段階では，子供が自ら立てた学習計画に沿って活動を進め，問いに対する答えをつくり出そうとすることができることをねらいとした。

まず，問いを解決していくための学習計画を立てる活動を行った。A児は，空港の利用者数や海外別利用者などの与えられたデータを参考に，最終発表会までの５時間分の学習計画を立てた（資料２）。



【資料２　問いの解決までの学習計画（A児）】

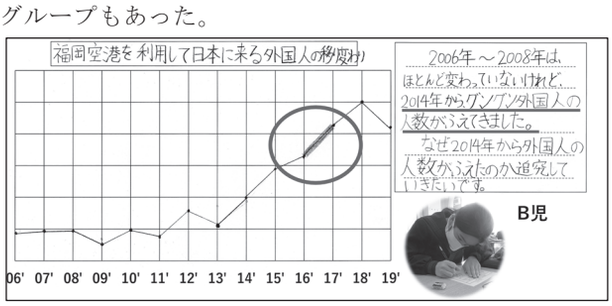
次に，それぞれの学習計画に沿って，福岡空港の利用者数推移などの資料を基に答えを見つける活動を設定した。ここでは，学習の始めから終わりまで子供を中心に学習を進めていくようにした。子供たちは与えられたデータを基にグラフに表したり，PC 端末を活用しながら発表内容をスライドに表したりして，「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いに対する

答えをつくり出していった。その際，毎時間の学習を振り返るためのルーブリックを提示し，自分の学びを振り返りながら学習計画の見直しをする活動を毎時間の終わりに設定した（資料３）。

学びのレベル	A　データの使い方	B　追究の進め方	C　友達の考えの聞き方
★★★	データを２つ以上使い，比べながら考えをつくっている	自分の計画を常に見直しながら進めている	友達の追究内容に対して自分なりのアドバイスをしている
☆★★	データを１つ使い，考えをつくっている	自分の立てた計画にそって進めている	友達の追究内容と自分の考えを比べながら聞いている
☆☆★	どのようなデータを使えばよいかわからない	計画を意識して進められていない	友達の追究内容をしずかに聞いている

【資料３　振り返りで活用するルーブリック】

子供たちはルーブリックを基にした振り返りによって毎時間追究の方向性を改善しながら，資料４のようなグラフやスライドを作成し，問いに対して統計的な視点で追究をしていった。中には自分たちで協力してオリジナルのデータを探し，それを基に追究活動を行っているグループもあった。



【資料４　折れ線グラフを基にした考察（B児）】

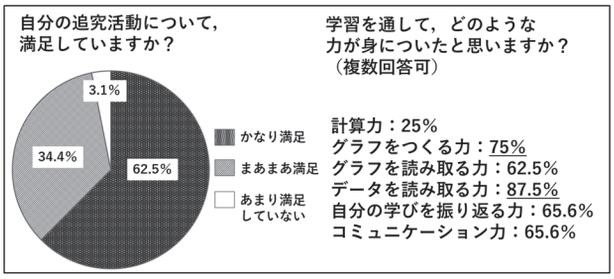
B 児は上の折れ線グラフから，2013 年以降の上昇の度合いに着目した。そこから，アジア各国から福岡空港に来る人の数が急激に増えていることを読み取り，アジアの玄関口とよばれている理由につないで考察を行っていた。

考察2

複数のデータを提示し，子供たちがその中から問いの解決につながりそうなものを選ぶことができるようにしたことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，子供たちが独創性を発揮してグラフを作成したり，データを読み取ったりする姿が見られたからである。「福岡はなぜアジアの玄関口とよばれているのか」という問いの解決に至るアプローチは子供によって違うため，データを複数用意することによって，子供は様々なデータから自分の追究に合うものを取捨選択することができ，子供の思いに沿った追究に生かすことができたと考えられる。

終末段階

終末段階では，追究の結果を報告する場を設定するとともに，アンケートアプリを活用し，計画の立て方や追究の仕方について振り返る場を設定した。すると 97% の児童が「自分の追究過程に満足している」と答え，さらにこの学習を通して身についた力として，「グラフをつくる力」，「データを読み取る力」の高まりを実感している子供が多かった（資料５）。

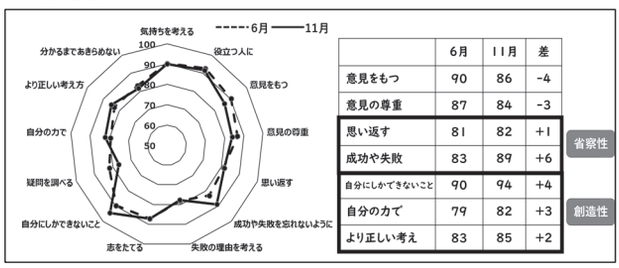


【資料５　子供たちによる自己評価】

考察3

自分の追究活動のプロセスについて振り返る場を設定したことは省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５のように，自分の追究を俯瞰して見つめ，この学習を通してどのような成長があったか捉えることができているからである。

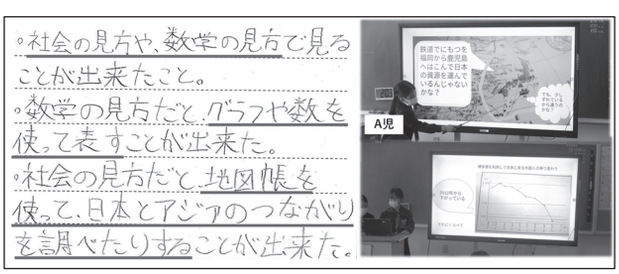
全体考察



	6月	11月	差	
意見をもつ	90	86	-4	
意見の尊重	87	84	-3	
思い返す	81	82	+1	省察性
成功や失敗	83	89	+6	省察性
自分にしかできないこと	90	94	+4	
自分の力で	79	82	+3	創造性
より正しい考え	83	85	+2	創造性

【資料６　研究開発アンケートの変容】

本単元は，特に創造性，省察性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は研究開発アンケートにおける結果からである（資料６）。自分で追究していく学習過程にした結果，自分の意見をもつことは難しくなったが，一方で自分の力で解決していくことや，自分にしかできないような解決の道筋を見いだすことなどができるようになってきたと考えられる。また，学習としての評価や自由進度学習を取り入れたことにより，成功や失敗を思い返し，よりよい学びにつないでいくという省察性に高まりが見られたといえる。



【資料７　リレーション学習ならではの姿】

さらに，資料７のように，リレーション学習の価値を子供自身も実感している記述が見られた。また，A 児は，調べた結果を発表する際に，折れ線グラフの傾きの度合いから変化の様子を読み取り，地理的な要素と関連させながら問いの答えを発表していた。これは教科で共通した問いを数学科，社会科それぞれの見方・考え方で追究することができるというリレーション学習ならではの姿であり，教科の枠を超えた追究のアプローチを行っていった結果，深い学びにつながったといえる。

人間科実践事例　第5学年　テーマ学習「わたしたちにできること」

指導者　　小島　　恵太

1　目標

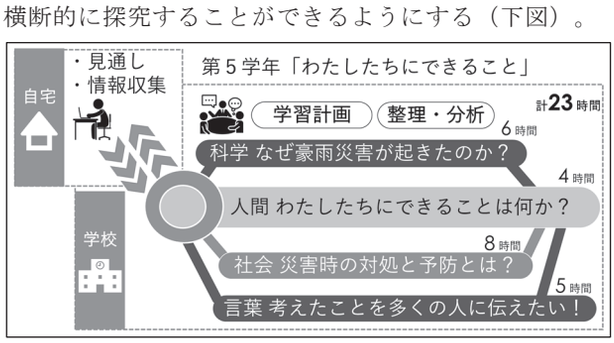
○　自分たちにできることは何かという問いを各教科の学びから追究する過程で，自分にできることの価値をつくり出すことができる。　（創造性）

○　被災された方々の思いに寄り添い，自分ができることを人や社会，自然のために力を合わせ働きかけようとする。　（協働性）

◎　学習したことや体験したことを振り返り，被災された方へ思いを寄せることの大切さに気付き，直接的，間接的，精神的に自分ができることを基に，これからの志を明らかにしようとする。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，被災された方へ思いを寄せることの大切さに気付き，自分ができることを行動しようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，自然災害と支援の在り方を追究していく過程で，社会科，科学科では，復興支援や自然災害の仕組みについて，言葉科では，言葉を通して思いを伝える方法を考えるという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第５学年のテーマ学習の概要】

特に人間科の内容「D他者と世界」に関わり，自然災害と支援の在り方を追究することで，人や社会，自然とのよりよい関わりについての自己の生き方をつくることがねらいである【学校を超える価値】。「自分たちができること」について考え，その実現に向けて取り組むことは，省察性を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，6月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として，省察性に関わる項目が低かった。特にA児は，「学習を振り返る」ことや「失敗してもあきらめないで失敗した原因を考える」という省察性に関わる項目が課題であった。そこで，人間科の学習において，「わたしたちにできることは何か」という粘り強く追究する価値のある問いを追究したり，その問いの解決に至るまでに，本テーマ学習に関連する社会科，科学科，言葉科での学習がどのように生かされたのかについて気付かせながら解決させたりする。

3　授業の実際と考察

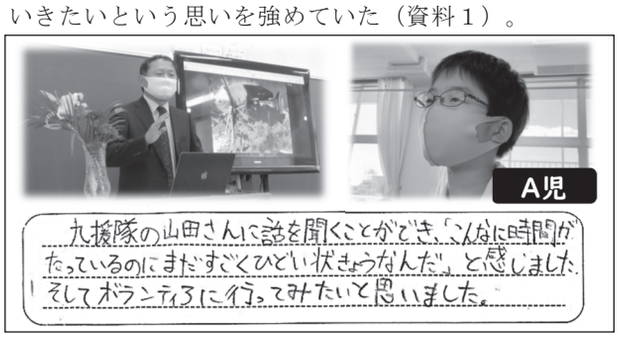
導入段階

導入段階では，人間科で，これから追究していく問いをもつことをねらいとした。そこで，7月に起きた九州豪雨の映像を提示すると，「わたしたちに何かできることはないのか？」という問いが生まれた。また，その解決のために，追究したいことは何かについて話し合った。A児は「被災地の状況や復興支援に携わる方々のお話を聞いてみたい。」と発言した。

展開段階

展開段階では，科学科，社会科での学習や災害ボランティアでの体験を基に追究した「わたしたちにできること」を話し合い，互助や互恵関係を捉えることをねらいとした。

まず，子供の願いを基に，日本九援隊の肥後さんと山田さんから，被災地の状況や災害ボランティアの活動内容について話を聞く活動を行った。A児は，大牟田市の災害状況に驚くとともに，自分にできることを何かしていきたいという思いを強めていた（資料１）。

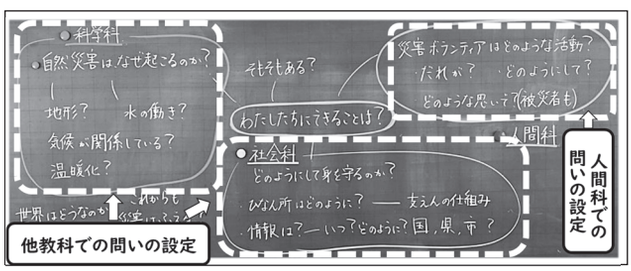


【資料１　肥後さんや山田さんから話を聞く様子】

実際にA児は，日本九援隊の方とともに，大牟田市の災害ボランティアに参加した。みかん畑に流れ込んだ土砂をかき出す作業を行い，困っている人のために働く喜びを実感するとともに，「本当に力になれたのか」という問いを見いだしていった（資料２）。

【資料２　災害ボランティアに参加したA児の感想】

災害ボランティアに参加したことで，A児は災害への追究意識を高めていた。他の子供たちも同じように考え始めたため，学級みんなで追究していきたいことを話し合った。A児は，「科学科で，豪雨災害が起こる仕組みについて，社会科で，災害時の支援の仕組みについて，それぞれ調べていきたい。」と発言していた（資料３）。



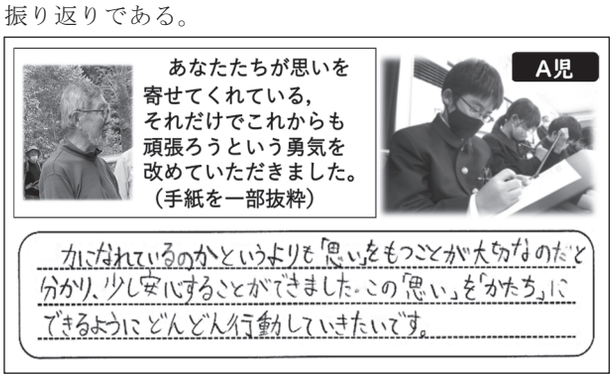
【資料３　追究したい内容をまとめた板書】

次に，科学科，社会科での学習や災害ボランティアでの体験を基に追究した「わたしたちにできること」を話し合う活動を行った。「本当に力になれているのか」という不安を出し合い，「わたしたちだからこそできること」について資料４のように話し合った。

Ｔ：わたしたちだからこそできることはありますか。
Ｃ：「体験を伝える」ということができると思います。実際に，被災地に行ったわたしたちだからこそ伝えられることがあると思うからです。
Ｃ：どのような体験を伝えるのですか。
Ｃ：被災された方が話していたような災害の詳しい状況についてです。それを知ったから自分も意識が変わったし，直接被災地に行った自分だからこそできることだと思うから色々な人に伝えていきたいです。
Ｃ：ぼくは，被災地に行くことはできなかったけれど，「ゴミを減らす」ということができると思います。小さなことかもしれませんが，わたしたちのみんなでやれば，大きな力になると思うからです。
ＧＴ：確かに子供にできることは，限られているかもしれません。しかし，これから「できること」はだんだんと増えていきます。なので，「やりたい」と思うことと，「今できること」を考えて行動することが大切ですね。
Ｃ：確かに，今の自分にできることは限られているけれど，「ゴミを減らす」ということは，今の自分にもできることかもしれないな。
Ｃ：わたしは，少し違って，「はげます」ということができると思います。子供のわたしたちだからこそできることだと思ったからです。
Ｃ：なぜ，子供のわたしたちだからこそできることになるのですか。
Ｃ：災害ボランティアに行ったときに，立花さんが「来てくれて嬉しい」と言っていました。子供のわたしたちが頑張る姿を見て元気が出たのだと思います。

【資料４　力になれているのかという問いについての話合い】

直接的，間接的な支援だけではなく，精神的な支援があることに気付き始めた子供たちに対して，被災された立花さんからの手紙を紹介すると，子供たちは嬉しそうな表情で見ていた。資料５は，その後の記述した学習の振り返りである。



【資料５　学習の様子とＡ児の振り返りの記述】

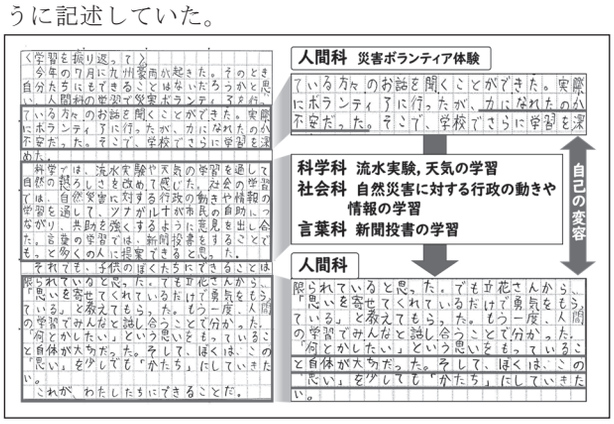
学習後，子供たちは，自分たちの思いをより多くの人たちに伝えるために，言葉科の学習で新聞投書を行う学習を始めた。

考察１

「わたしたちだからこそできることはあるのか」という問いについて，社会科や科学科で追究してきたことを基に話し合うことができるように，学びの足跡を提示したり，価値を見いだしつつあった子供たちに被災された方からの手紙を提示したりしたことは，省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の発言からである。

終末段階

終末段階では，「わたしたちにできることは何か」という問いについて追究してきた人間科，科学科，社会科，言葉科での学習を振り返る場を設定した。A児は，テーマ学習全体を通しての自己の変容について，資料６のように記述していた。



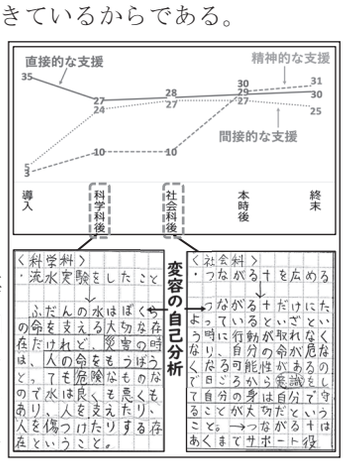
【資料６　Ａ児のテーマ学習の振り返り（ﾏｲﾀｲﾑﾉｰﾄ）】

考察２

科学科，社会科，言葉科での学習を行い，人間科の中心の問いである「わたしたちにできることは何か」を追究したことは省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料６の子供のマイタイムノートの記述のように，人間科の学習のみでは捉えることができなかった自己の変容に気付くことができているからである。

全体考察

本単元は，「わたしたちにできることは何か」という問いに対しての答えを記述し蓄積してきた（資料７）。その記述内容を分析（直接的：募金，ボランティアなど，間接的：環境を守る取組など，精神的：メッセージを送るなど）し，変容を示したものである。単元が進むにつれて精神的な支援に関する記述が増えている。



【資料７　問いへの記述内容の変容】

このことから，思いを寄せることの大切さについて理解することができていると判断できる。また，それぞれの支援が増加していることから，見つけた価値を基に志を明らかにしていると判断できる。以上のことから，教科横断的な学習を通して，問いを追究したことは，省察性の伸長に有効であったと判断できる。

社会科実践事例　第5学年　テーマ学習「広げよう！ツナガル＋高めよう！防災の意識」

指導者　　井手　　司

1　目標

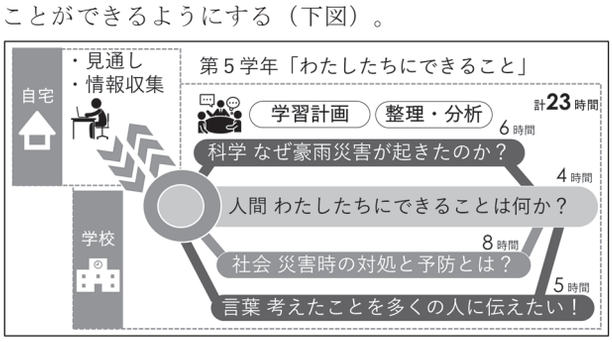
○　防災について問いを設定し自助，共助，公助の役割について理解するとともに，その視点から解決する方法を考えることができる。　（創造性）

◎　防災にかかわる一員であると自覚し，市役所の方々や周りの人々に対して，自分たちが考えたことを提案し，働きかけることができる。　（協働性）

○　市民の一人としてどのような役割や義務があるのか考え，考えたことを周りに伝えたり，行動に移したりしようとすることができる。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，社会のために自分たちにできることをしようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，被災された方々のために自分にできることを追究していく過程で，社会科，科学科において，防災や自然災害の仕組みについて，言葉科において，言葉を通して支援する方法を考えるという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第５学年のテーマ学習の概要】

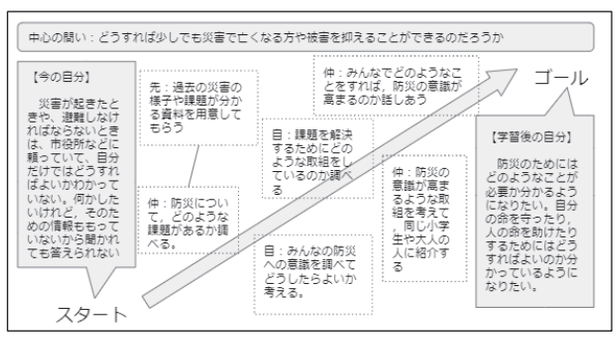
特に社会科では，内容「B 経済エ，C 政治カ」に関わり，福岡市が開発した防災アプリ「ツナガル＋」の普及させるプロジェクトを通して，防災を始め豊かで幸せな生活を送るためには，自助，共助，公助がバランスよく整うことが大切であることを捉え，その中で自分にできることは何か考えることがねらいである【学校を超える価値】。このことは，豊かで幸せな生活を送るためには，市民の一人として自身の生活を変えていこうとする協働性の発揮を促す上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，6月に行った研究開発アンケートの結果，人の役に立ちたいという思いをもつ一方で，考えもって互いに尊重することに課題を感じていることが分かった。特にA児は，「自分の考えをもつ」という協働性に関わる項目が課題であった。そこで，本単元では，福岡市に直接働きかけるというプロジェクト型学習にすることによって，学習の成果が社会を変化させる可能性を実感させ，協働性の発揮をめざす。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，災害による被害を減らすためにどうすればよいかという問いをもつことをねらいとした。そこで，社会科で追究していきたいことを具体的にしていく「学びの道標」をつくった。A児はプレゼンテーションアプリを活用し，学習の計画を立てていった。



【資料１　A児が作成した学びの道標】

考察１

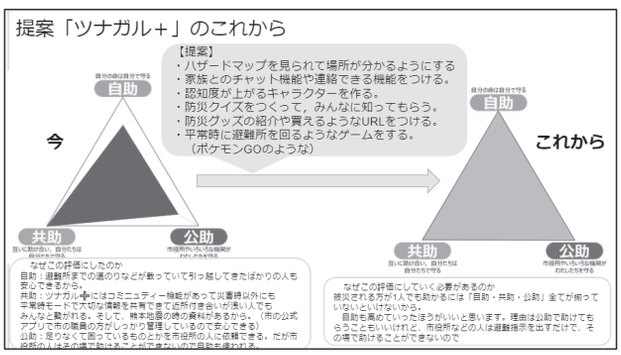
学びの道標を作成する活動を設定したことは，子供自身の学習のゴールを明確にし，学習の見通しをもたせる上で有効であった。その根拠は，資料１のA児の記述である。特に，ゴールに向かって必要なことを内容と活動で記述させたこと，プレゼンテーションアプリの共同編集，コメント機能を使って随時友達と交流しながら活動したことで，学習の見通しを明確に立て，学習をコントロールしている実感を得ることができたといえる。

展開段階

展開段階では，防災を始め豊かで幸せな生活を送るためには，自助，共助，公助をバランスよく整えること，市民として何をすべきか考え判断することが大切であることを捉え，防災意識を高めるためにできることを考えることをねらいとした。

まず，１年生から５年生までに起きた大きな災害を調べ，被害の状況やそのときに明らかになった課題を調べていった。子供たちが注目したのは３年生のときに西日本豪雨と１年生のときの熊本地震である。西日本豪雨ではハザードマップで危険箇所が明確に示されていたにも関わらず，逃げ遅れた方が出た。熊本地震ではSNSを通してデマが流れたり，新旧の情報が混ざったりして避難に支障が出た。これらの事実から，国や自治体が出す情報や支援（公助）を市民が生かせないと（自助や共助）命は守れないのではないかと考えた。その中で福岡市が作成した防災アプリ「ツナガル+（プラス）」に出合った。平常時モードでは地域コミュニティを繋ぐアプリであり，災害時モードでは，避難所の情報が提供される。

ただ，福岡市民は約 160 万人いるが利用者は３万人もおらず，子供たちはもっと広げたいと考えた。そこで，ツナガル+を分析し，それを基に提案書（資料２）をつくることした。考えの似ているメンバーで提案書を作成し交流した。初めは自助，共助，公助を別々に捉えて話し合っていたが，次第にその関係性に目が向き，A児は「共助は自助からつながってくる。自分の命は自分で守ることが前提で，共助ができる。でも，平常時モードで信頼関係をつくっていないと共助はできず，自助にもつながらず３つ（自助・共助・公助）のバランスが崩れてしまう。」と発言した（資料３）。

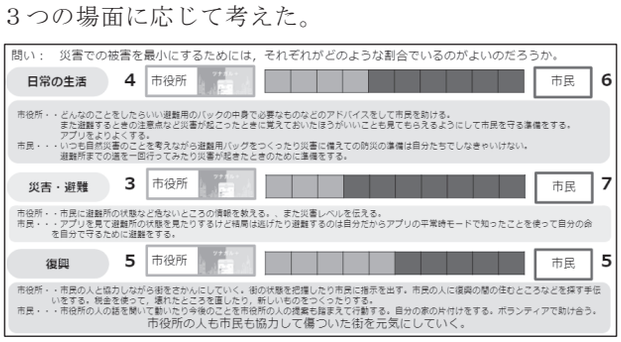


【資料２　市役所へのツナガル+に関する提案書】

Ｔ　：ツナガル+に平常時モードはいらないのではないかな？
Ｃ１：必要です。いきなり災害時モードは使えないから慣れないと。
Ｃ２：それに災害時モードしかなかったら，防災の意識は高まらない。平常時モードのときにいろいろ防災の意識を高める取組をしないと。
Ｃ３：必要です。だって，平常時モードには地域の人をつなげる機能があるから，それを使って仲良くなっていないといけない。
Ｃ４：自助は自分のことを助けるということだけど，自分だけでは助かることはできないから平常時モードを使って仲よくなっておかないと。
Ａ児：共助は自助からつながってくる。自分の命は自分で守ることが前提で，共助ができる。でも，平常時モードで信頼関係をつくっていないと共助はできず，自助にもつながらずのバランスが崩れてしまう。
Ｃ５：もし災害がおきて，一緒に逃げようってなっても知らない人のこと信頼できない。逃げて下さいって知らない人に言われても，本当かなと考えてしまう。だから普段からの関わりが大切だよね。

【資料３　自助・共助・公助についての話合い】

次に，防災意識を広げるための取組を考える活動を設定した。ここでは，まず提案書への市役所の方からの返事を基に何を伝えるべきか考えることから始めた。市役所の方からは，子供たちのアイデアに感謝する言葉とともに「ツナガル+だけでは十分でないのも事実」というコメントがあった。そこから子供たちは，防災アプリで補えないものは何か話し合った。そうするとアプリは補助してくれるものであり，本当は市民と市役所の役割が大切であると気付いた。そこで，A児は資料４のように市民としての役割と市役所の役割のバランスについて３つの場面に応じて考えた。



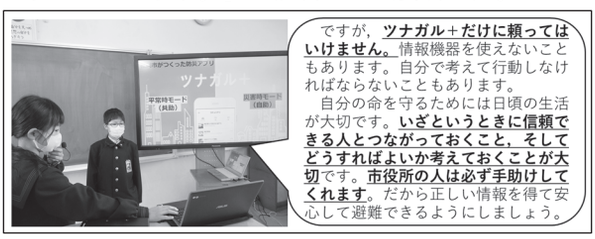
【資料４　市役所と市民の役割】

考察2

防災における自助・共助・公助の関係性やバランスと市民と市役所の役割を捉えさせるために，ツナガル+をよりよくする提案を市役所にするという活動を設定したことは，創造性と協働性の伸長に有効であった。その根拠は，自助・共助・公助というそれぞれの視点と，市民と行政の立場という多面的・多角的に考えることができていることから分かる。具体的には，資料２や資料３の姿であり，A児の発言からである。

終末段階

終末段階では，防災への意識を高めるポスターや動画を作成する活動を設定した。A児は，これまでの学習を生かして，動画の中で「自分の命を守るためには実は日頃の生活が大切なのです。それは，いざというときに信頼できる人とつながっておくこと，そしてどうすればよいか考えておくことです。市役所の人は必ず手助けしてくれます。だから安心して正しい情報を得て避難できるようにしましょう。」と説明した（資料５）。



ですが，**ツナガル＋だけに頼ってはいけません。**情報機器を使えないこともあります。自分で考えて行動しなければならないこともあります。
自分の命を守るためには日頃の生活が大切です。**いざというときに信頼できる人とつながっておくこと，そしてどうすればよいか考えておくことが大切**です。**市役所の人は必ず手助けしてくれます**。だから正しい情報を得て安心して避難できるようにしましょう。

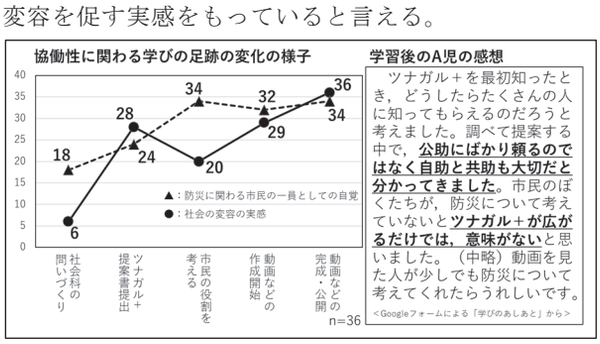
【資料５　A児のグループの撮影の様子】

考察3

学習したことを生かして，動画やポスター，プリントなどを作成し，公開したことは協働性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の子供の発言からである。

全体考察

本単元は，協働性の伸長に有効であったと考える。それは資料６の協働性の変容を示したグラフから分かる。また，子供達の自由記述の中からも自分達の行動が社会へ影響を与えるのではないかという期待感をもっていることが分かる。これはプロジェクト型の学習を設定したからである。具体的にはツナガル+をよりよくするための提案を市役所に行い，防災の意識を高める動画やポスターなどの表現物を作成し，公開（動画は本校の動画投稿サイト，ポスターは全学級に配付）した。防災に関わる市民の一人として自覚し，社会へ働きかけることで変容を促す実感をもっていると言える。



【資料６　学びのあしあとの変容とＡ児の記述】

実践事例　第6学年　フォーカス学習「ヘルスアッププロジェクト」

指導者　永松　聖子

1　目標

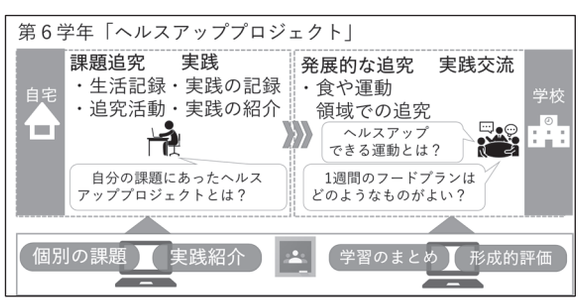
◎　自分の生活から課題を見いだし，運動や睡眠，食事などの日頃の生活習慣が身体に及ぼす影響を捉え，課題解決の過程の中で健康の保持増進のための自分の考えをもつことができる。　（創造性）

○　友達の考えを聞いたり，自分の考えを伝えたりしながら共に課題を解決することができる。　（協働性）

○　将来の自分の健康をつくり出すために生活習慣について捉え直し，学んだことをこれからの生活に生かしていこうとすることができる。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本単元では，日頃の生活習慣が及ぼす身体への影響を追究することで，健康の保持増進のための自分の考えをもつことをねらいとしている【たくましい追究】。そのために本単元では，将来の自分の健康をつくり出すために今の自分にできることについて追究していく過程で，子供の文脈に応じて身体，食，運動の３つの領域を横断的に追究できるようにし，学校と家庭でのブレンディッドラーニングを行っていく（下図）。



【図　フォーカス学習の概要】

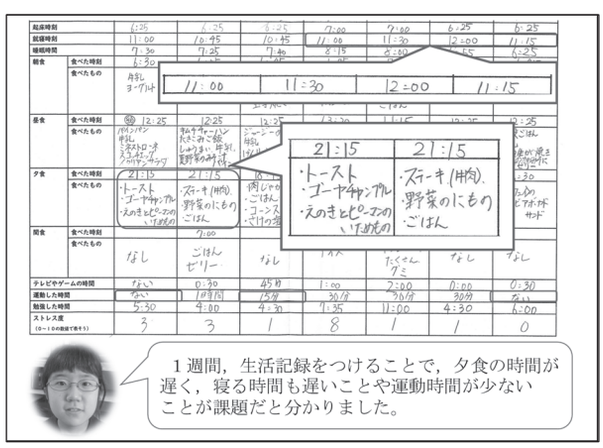
A 身体イ，B 食エ，C 運動サに係る内容として，身体領域の学習を中心として，日頃の生活習慣が身体に徐々に及ぼす影響やどのようにすれば予防できるのか追究活動を行っていく。「健康的な生活を維持するために今できることは何か」という課題を解決するために追究を行い，自分や家族，身の周りの人たちのためのよりよい生活習慣のあり方について自分の考えをもち，生活に生かそうとする子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として，創造性に関わる項目が低かった。特にA児は，「分からないことを分かるまであきらめない」ことや「疑問に思ったことを最後まで調べる」という創造性に関わる項目が課題であった。そこで，この学習を通して，「将来の自分の健康のために今の自分にできることは何なのか」という課題を解決させていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，自分の睡眠や運動の時間，食事の内容や勉強時間など，日頃の生活を振り返り，これからの自分の健康のために課題を見いだすことをねらいとした。そこで，まず健康科の身体領域において，生活習慣病について話し合い，１週間の生活記録をつけ，自分の生活を振り返る活動を行った（資料１）。A児は「夜ご飯の時間が遅く，寝る時間も遅い。外食でカロリーが高く，肉を多く食べている。また運動をしない日がある。」と記述し，自分の生活習慣から改善が必要な生活行動を見いだした。



【資料１　見いだした課題を発表するＡ児】

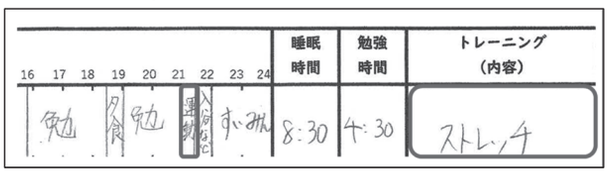
考察１

１週間の生活記録をつけて自己の健康課題を見いだす活動を設定したことは，今後の健康の保持増進のための課題をもつ上で有効であった。A 児は，今習慣化できているよい点，そして，食事の時間が遅いときがあることや運動の習慣がついていないことなど，自分で自己の健康課題を見いだすことができていた。

展開段階

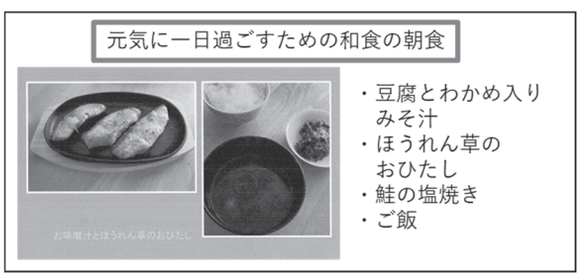
展開段階では，生活習慣病を予防するための方法を調べ，健康の保持増進のために「ヘルスアッププロジェクト」を作り，実践することを通して，よりよい生活のあり方を考えることをねらいとした。まず，生活習慣病を予防するための方法について，身体領域において追究活動を行った。その中で生まれた，「生活習慣病を予防するための食事や運動にはどのようなものがあるのか」という問いを解決するために，食領域や運動領域でも追究活動を設定した。食領域では，栄養バランスのよい食事を継続的に取ることができるように，まず自分で献立を１食分考え，友達の考えた献立を組合せて１週間のフードプランを作成した。また，運動領域では，家でできる運動を中心に調べ，試しの活動を行った。

次に，それぞれの領域で調べてきたことを基に，「ヘルスアッププロジェクト」を作成し，１週間家庭で実践する活動を設定した。A 児は自己の健康課題の中で見いだした運動習慣ができるようにプロジェクトをつくった（資料２）。

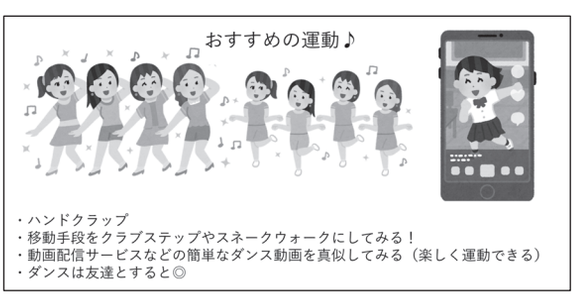


【資料２　A 児のヘルスアッププロジェクトの一部】

プロジェクトが完成すると，その日から１週間家庭での実践を設定した。実践中はクラウド上のプラットホームを活用して，おすすめの食事や運動をアップできるようにし，情報を共有できるようにした。自分の考えた献立を家で調理し，料理の写真や作り方をスライドにまとめたり（資料３），おすすめの運動の URL や画像をスライドに貼り付けて紹介したりした（資料４）。A 児は母親に協力してもらって，自分の考えたメニューを作ってもらったり，クラウド上のプラットホームにあがった実践を参考にしたりしながら，実践を重ねていった。



【資料３　児童が作った食事（クラウド上のプラットホーム）】



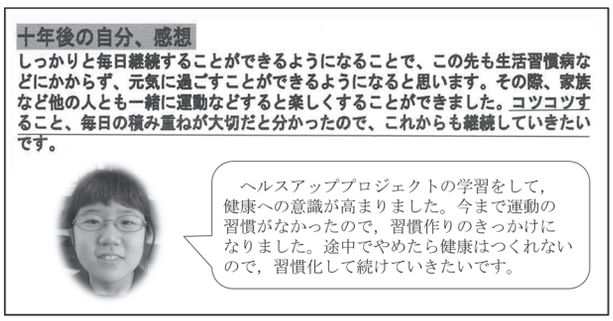
【資料４　おすすめの運動】

考察2

追究活動の過程で，自ずと食と運動領域に関わる課題が見いだされ，それぞれの領域での追究が始まった。ヘルスプロジェクトを作成し，実践する活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，実践後のアンケートで，「ヘルスアッププロジェクトを作成したり，実践したりする中で困ったことがあっても最後まで頑張ることができた。」と答えた児童の割合が 78％であったことからである。

終末段階

終末段階では，実践した結果を考察し，学んだことを振り返る活動を設定した。するとA児は，「しっかり毎日継続することができるようになることで，この先も生活習慣病などにかからず，元気に過ごすことができるようになると思います。その際家族など他の人とも一緒に運動すると楽しくできました。コツコツすること，毎日の積み重ねが大切だと分かったので，これからも継続していきたいです。」と記述した（資料５）。また，授業後の振り返りで，今も運動を毎日 10 分間継続していると発表した。

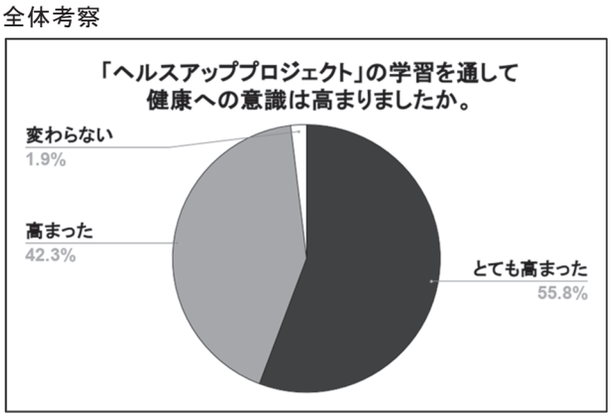


【資料５　A 児の学習後の感想】

考察3

ヘルスアッププロジェクトの実践結果を考察し，学んだことをまとめる活動を設定したことは創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の A 児の記述と，自己の健康課題を解決するために，学習前は運動をしない日もあったが，学習後の現在も毎日 10 分程度の運動を続けているという発表からである。

全体考察



【資料６　フォームでの学習の振り返り結果】

本単元は，特に将来の自分の健康のために今の自分にできることを見いだすという創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は，振り返りの結果（資料６）からである。ヘルスアッププロジェクトを作成，実践することにより，健康への意識が高まったと回答した割合は，97.4％であった。また，今後もプロジェクトを続けていきたいと回答した割合は 98％であった。一人一人が自分の生活スタイルにあったプロジェクトを考え実践したことにより，生活のあり方について考えをもつことができたからと考える。また，健康科では領域の垣根を越えて食や運動，生活習慣についても，健康という視点で一緒に学ぶことができる。領域は異なっても同じ教科の内容が結びつき，子供の文脈に沿って学習を展開することができたことも，健康的な見方・考え方を養う上で非常に有効であったと考える。

数学科実践事例　第6学年　テーマ学習「データでせまる歴史の変化」

指導者　　西島　　大祐

1　目標

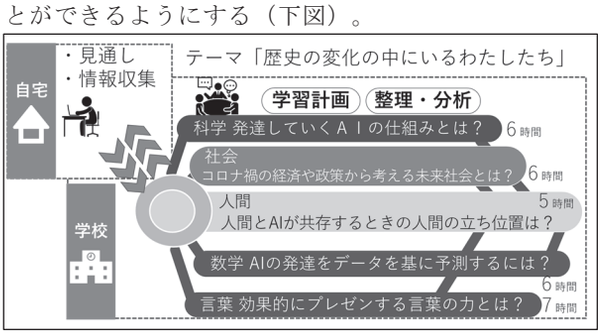
◎　AI の発達や社会にどのような変化があったのかを目的に応じてデータを収集し，データの特徴や傾向に着目して分析することができる。　　（創造性）

○　他者と課題を共有して，より説得力のあるデータを基に問題を解決することができる。　　（協働性）

○　自分の思考過程を振り返り，目的に応じたデータの選択や解決方法のよさを実感できる。　　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，科学技術の発展に伴い，人間として大切にすべき生き方を構築しようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，歴史の変化の中で，人間としての倫理観をどのように構築していくのかを追究していく過程で，社会科，数学科，科学科，言葉科において，社会の変化や，それを根拠付けるデータ，人工知能の仕組みについて考えるという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第６学年のテーマ学習の概要】

特に数学科では，内容「C　データ・変化キ」に関わり，AI の発達によりどう社会が変化したのか，また今後どのような変化が予測されるのか目的に応じてデータを収集し，その特徴や傾向に着目して分析することがねらいである【学校を超える価値】。社会生活の場面においても，必要なデータを収集して分析し，その傾向を踏まえて課題を解決していくことは，１つの事象について，分析的に思考する子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として，創造性に関わる項目が低かった。特にＡ児は，「問いをもって最後まで調べる」ことや「より正しい考え方はないか追究する」という創造性に関わる項目が課題であった。また，数学で学んだことを実生活に生かすことができると実感できている子供は約６割に留まっている。そこで，人間科や社会科の学習を通して，AI の発達で社会がどう変化しているのかという事象に出合わせることで，目的に応じて必要なデータを収集して課題を解決させていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，人間科の学習で生まれた問いを焦点化して，統計的探究についての見通しをもつことをねらいとした。そこで，人間科で生まれた「人間と AI が共存するときの人間の立ち位置は？」という問いから，数学の役割は何か話し合う活動を行った。Ａ児は友達と話し合う中で「AI と共存していく未来社会がどのようになるのかを考える上で，数学ではその根拠となるデータを収集したりそれを整理したりすることが必要だと思う。」と発言し，学習計画を立てていった（資料１）。

【資料１　数学科の学習計画を話し合うＡ児】

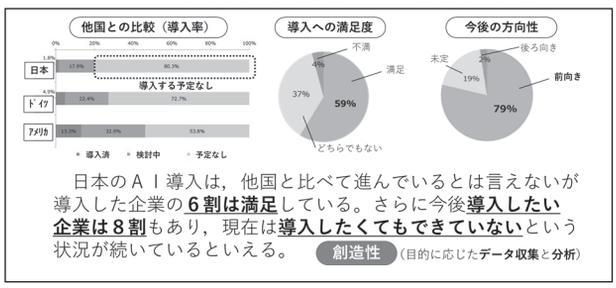
考察１

人間科で生まれた問いを基に，数学の学習において明らかにすることは何か話し合う場を設定したことは，統計的な探究についての見通しをもつ上で有効であった。その根拠は，資料１のＡ児の発言である。データを収集し，整理・分析していくという統計的探究プロセスに沿った学習計画を立てることができたといえる。

展開段階

展開段階では，AI の発達によって社会にどのような変化が予測されるのか目的に応じたデータを選択し，その特徴に着目しながら，事象の傾向を多面的に捉えて考察することができることをねらいとした。

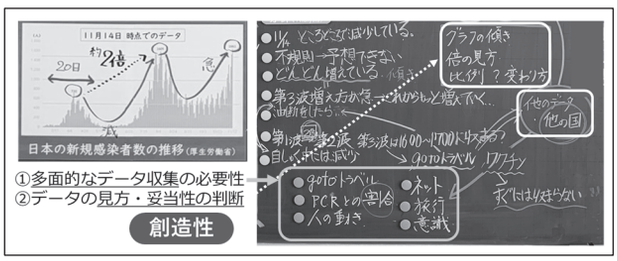
まず，AI の発達について，データを収集して分析する活動を行った。Ａ児は，AI が近年どのくらい普及してきているかを他国との比較や満足度，今後の方向性についてのデータを収集し，分析した（資料２）。



【資料２　AI の発達についてＡ児が収集したデータ】

しかし，どのようなデータをどのくらい収集するとよいのか，またその観点は何かがつかめていない様子も見られたため，探究を一度立ち止まらせ，教科の見方・考

え方を見いだす「看破するアプローチ１」として，社会科で生まれた問いであるコロナ禍における経済の変化を予測するためにはどのようなデータで分析するかを話し合ったり，人間科や科学科の問いに関連して AI の発達について，AI スピーカーの普及台数の変化や所有割合のグラフを比較したりする場を設定した（資料３）。



【資料３　データ分析の観点をまとめた子供の板書】

コロナ禍における経済の変化を予測することで子供は，①多面的にデータを収集すること，②データを倍や差，比などから見て予測し妥当性を考察することの大切さを見いだし，それを基に資料４に示すようなルーブリックを作成していった。

	多面的なデータ収集	分析の妥当性
Ⅲ よい	１つの問いに対して，**複数のデータを収集**したり，**異なる観点**からデータを収集したりできた。	**倍や差，比などの複数の見方**を基に特徴や傾向を捉えて，データを分析できた。
Ⅱ 合格	１つの問いに対して，**複数のデータを収集**することで多面的に分析しようとできた。	**倍や差，比などから一つの見方**を基に特徴や傾向を捉えてデータを分析できた。
Ⅰ もう少し	問いに対して，**適したデータ**が収集できなかった。	倍や差，比などの見方から特徴や傾向が捉えられなかった。

【資料４　子供と共有して作成した単元ルーブリック】

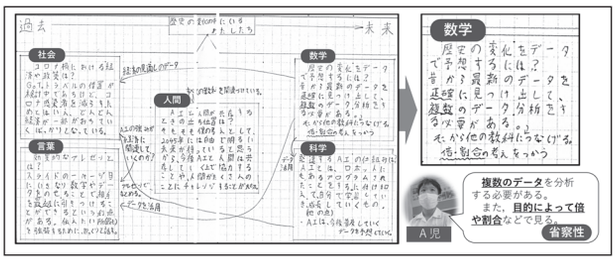
このルーブリックを基に，AI スピーカーの普及台数の変化や所有割合のグラフを比較し，AI の発達によってどのような社会が変化するか予測していった。すると子供は「割合でみると AI スピーカーの普及率はまだ低いけれど，普及台数のグラフからは比例のように伸びていることから今後さらに普及が進むことが予測されるね。」という多面的なデータから考察していった。

考察2

探究を一度立ち止まらせ，AI の発達や社会の変化についてデータの特徴に着目しながら，多面的に考察する活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料３における２つの観点からデータを分析する視点に気付いた発言からである。さらに，その観点を基にルーブリックを子供と共に作成したことで，人間科や科学科の問いに関連して AI の発達を予測する追究に生かすことができたと考える。

終末段階

終末段階では，これまでに収集し，分析したデータを活用しながら，言葉科の学習においてプレゼンを作成する活動や，これまでの学びを基にデータを活用する上での留意点を振り返る場を設定した。するとＡ児は，各教科の学びをつなげ，「複数のデータから，倍や割合の見方で分析することが大切だ。」と記述した（資料５）。



【資料５　テーマ学習を振り返ったマイタイムノート】

考察3

収集し，分析したデータを言葉科の学習に活用したり，統計的探究を振り返らせたりする場を設定したことは省察性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の子供の学習ノートの記述からである。

全体考察

【多面的なデータ収集：追究１，２の結果】

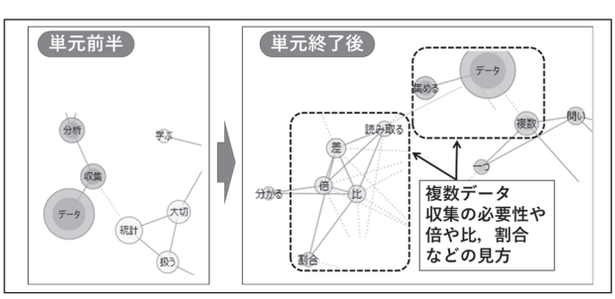
評価基準		追究2 Ⅲ	追究2 Ⅱ	追究2 Ⅰ	計
追究1	Ⅲ	6	1	0	8
	Ⅱ	**14**	8	0	22
	Ⅰ	0	5	0	3
計		20	14	0	34

【妥当性の批判的考察：追究１，２の結果】

評価基準		追究2 Ⅲ	追究2 Ⅱ	追究2 Ⅰ	計
追究1	Ⅲ	7	0	0	7
	Ⅱ	**16**	8	0	24
	Ⅰ	0	3	0	3
計		**23**	11	0	34

【資料６　ルーブリックを基にした追究の変容】

本単元は，特にデータの特徴や傾向に着目して分析するという創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は「多面的なデータ収集」と「妥当性の批判的考察」という２つの軸からの追究の変容からである（資料６）。コロナ禍における経済の変化を予測した追究１から AI の発達を予測した追究２では，どちらの軸においても評価基準ⅡからⅢへの変容が最も多い。また，「妥当性の批判的考察」に目を向けると，追究２で評価基準Ⅲに達した子供が 23 名に上っていることから，倍や差，比例などの複数の見方からデータの特徴や傾向を捉えることができているといえる。



【資料７　テキストマイニングによる語彙分析結果】

さらに，単元前半の問いと単元後半の学びの振り返りをテキストマイニングによって語彙分析をすると資料７のような結果になった。抽出語で多く出ている「データ」や「グラフ」の関連語として「複数」や「倍」「比例」「割合」などが実証後に付加されていることが分かる。このことから，テーマ学習として他教科と横断しながら統計的探究を繰り返すことで，データの特徴や傾向に着目して，発展的に考えるという見方・考え方を養うことができたと考える。

言葉科実践事例　第6学年　テーマ学習「心を動かすプレゼンテーション」

指導者　大村　拓也

1　目標

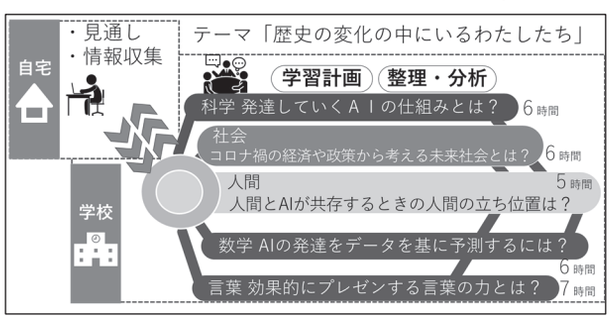
◎　2045 年の未来社会の予測について自分の考えの説得力を高めるためにデータや反証事例を配列し，効果的な話し方を捉えることができる。　（創造性）

○　相手の理解度やニーズに応じて，話す順序や話し方を変えることができる。　（協働性）

○　プレゼンによって人の心を動かす言葉の力について自分の考えの変容を自覚できる。　（省察性）

2　本単元における子供の文脈

本テーマでは，科学技術の発展に伴い，人間として大切にすべき生き方を構築しようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのために本テーマでは，人間科を中心に，歴史の変化の中で，人間としての倫理観をどのように構築していくのかを追究していく過程で，社会科，数学科，科学科，言葉科において，社会の変化や，それを根拠付けるデータ，人工知能の仕組みについて考えるという子供の文脈で教科横断的に探究することができるようにする（下図）。



【図　第６学年のテーマ学習の構造】

特に言葉科では，内容「B 言語論理エ」に関わり 2045 年の未来社会の予測について，自分の考えの説得力を高めてプレゼンすることがねらいである【学校を超える価値】。「心を動かすプレゼンとは何か。」という言葉の課題から，反証事例やデータの効果を駆使したり，間の取り方やユーモアなど話し方に着眼したりしながら，教科横断的に課題を解決していくことは，言葉の機能から言葉を運用し，言葉の効果を捉える子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，学級全体として，創造性に関わる項目が低かった。特にＡ児は，「より正しい考え方はないか追究する」という創造性に関わる項目が課題であった。また，言葉科の学びを他教科で生かすことができると実感している子供は約５割に留まっている。そこで，人間科や社会科における歴史の変化の中にいる自分という事象に出合わせることで聞き手の心を動かすプレゼンとは何かという課題を解決させていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，2045 年の未来社会の予測を提案するための効果的なプレゼンとは何かという問いに対して，プレゼンのゴール像を見通すことをねらいとした。そこで，モデルとして TED スピーチを視聴させた。するとＡ児は「なぜ TED スピーチは人の心を動かすのかを話し合いたい。」と発言した。また，Web 上で互いのおすすめの TED スピーチを共有し，構成や話し方の具体について追究を行った（資料１）。

【資料１　TED スピーチをモデルとして活用】

考察１

プレゼンのモデルとして TED スピーチを視聴する場を設定したことは，プレゼンを使った発信への意欲喚起や人の心を動かすプレゼンの構成や話し方についての見通しをもつ上で有効であった。その根拠は，資料１のＡ児の発言である。ここから，構成と話し方に特化した課題意識をつくることができたといえる。

展開段階

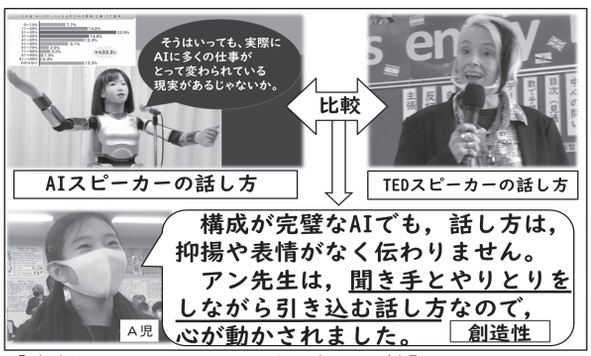
展開段階では，プレゼンの説得力を高めるために，データや反証事例による構成の効果と話し方を捉えることができることをねらいとした。

まず，数学科のデータの解釈や科学科の AI の仕組みなど各教科の学びをプレゼンの構成について話し合った。Ａ児は，TED スピーカーの構成を分析したり，実際に自分のプレゼンで話をしたりしながら，友達と相互評価し，少しずつ自分のプレゼンの構成と話し方についてのルーブリックをつくりあげた（資料２）。

	発表構成	話し方
３よい	・数を示して，聞き手を引き付け，自分の主張につなげる	・聞き手との即興のやりとりを通して，興味・関心を引く
２合格	・複数のデータを比較して示す ・反証事例を活用して，様々な立場の想定をする	・強調点で間を取る ・視線で聞き手の理解度を把握して話す
１もう少し	・主張に合った事例を選ぶ	・声の大きさや速さの工夫

【資料２　Ａ児の個人ルーブリック】

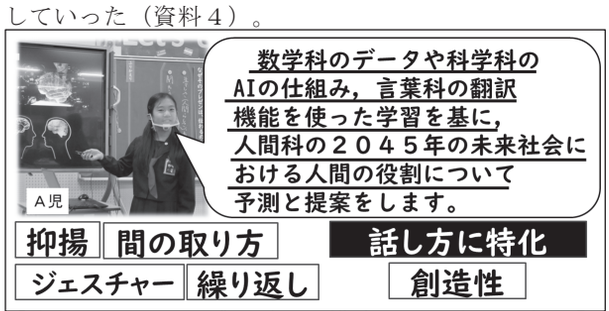
次に，資料２のルーブリックを基にＡ児は，友達やGT に向けてプレゼンを行った。しかし，Ａ児は，スライド画面ばかりを見てしまったり，一本調子の話し方になったりしてしまう課題が見られた。そこで，教師は，AI スピーカーの話し方と TED スピーカーの GT の話し方を比較提示し，言葉への気付きを話し合わせた（資料３）。するとＡ児は，「構成だけでは，伝わらない。聞き手とのやりとりなど引き込む話し方を大切にしたい。」と述べ，構成を生かす話し方を基に，プレゼン発表に取り組む姿が見られた。



【資料３　AI と人間の話し方の比較】

Ａ児のような話し方についての気付きが生まれ始めたところで全体交流を組織し「心を動かすプレゼンとは何か」について話し合わせた。すると，Ａ児は，①説得力を高めるデータや反証を生かす話し方や，②相手の理解度やニーズに応じて話し方を変えることなどを視点に，構成と話し方をつなぐことの大切さを見いだし，全体に共有した。

このようにＡ児は，構成と話し方を関連付けながら，自分のプレゼンを完成させ，最終的に各教科の学びをつないだ構成による未来社会の予測について発表し，心を動かすためプレゼンの構成や話し方について考察していった（資料４）。



【資料４　Ａ児のプレゼンの構成と話し方（一部）】

考察２

探究を一度立ち止まらせ，AI スピーカーの話し方とTED スピーカーの GT の話し方を比較提示し，「心を魚かすプレゼントは何か」について話し合う場を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料３における構成と話し方のつながりの必要性について述べたＡ児の発言からである。さらに，その観点を基に，プレゼンを実演し，相互評価することで人間科における未来社会の予測についての自分の考えの追究に言葉科の学びを生かすことができたと考える。

終末段階

終末段階では，心を動かすプレゼンをする上で大切な言葉の力についての振り返りを書きまとめさせた。するとＡ児は，自分の考えの変容に気付き，「心を動かすためには，データを使ってその場で聞き手に考えさせたり，反証事例を使って，様々な聞き手の立場を想定して話したりすることが大切だと気付くことができた」と記述した（資料５）。

３の達成	①データを使って聞き手に問いかけて、考えさせる構成 ②笑いをいかに多く取るか→冒頭部分がつまらないと聞かない ③伝えたいところに多く時間を割く ④反証事例を使って聞き手の立場に立って話す (自分のプレゼンについて全く知らない人に向かって話すと思って)

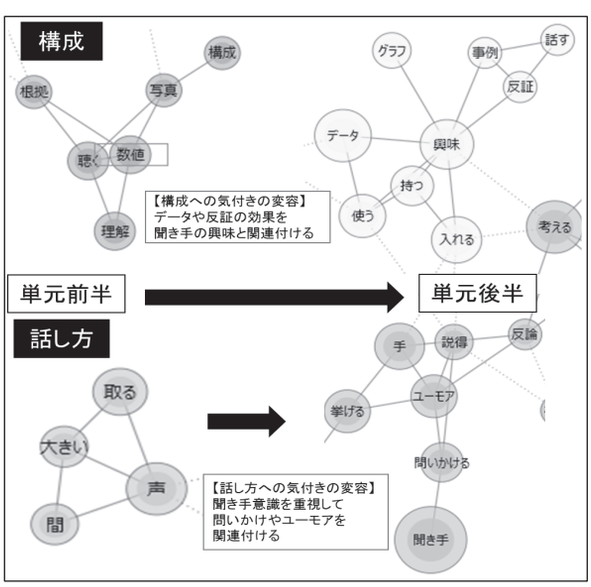
【資料５　３段階を意識したＡ児の振り返りの記述】

考察３

言葉への気付きについて振り返りの記述をさせたことは創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の構成と話し方についての記述からである。

全体考察

本単元は，特に構成と話し方の関連への気付きという創造性の伸長に有効であったと判断できる。その根拠は「説得力を高める発表構成」と「心を動かす話し方」という２つの軸からのテキストマイニングによる分析結果からである。数学科で学んだデータを，聞き手の興味と関連付ける構成や，聞き手意識を高めるための問いかけやユーモアを入れる話し方への気付きを学級全体が自覚していることが見て取れる（資料６）。また，評価基準３に達した子供が 28 名に上っていることから，構成と話し方を基に，プレゼンの論理を捉えることができているといえ，学級全体としての創造性の伸長についても有効であった。



【資料６　テキストマイニングによる語彙分析結果】

さらに本単元に続いて英語による発表を位置付けた。そうすることで言語として共通した相手に伝わる構成や話し方について汎用的に考えるという言葉による見方・考え方を養うことができたと考える。

科学科実践事例　第6学年　テーマ学習「AI の強みとは」

指導者　関　　尚幸

1　目標

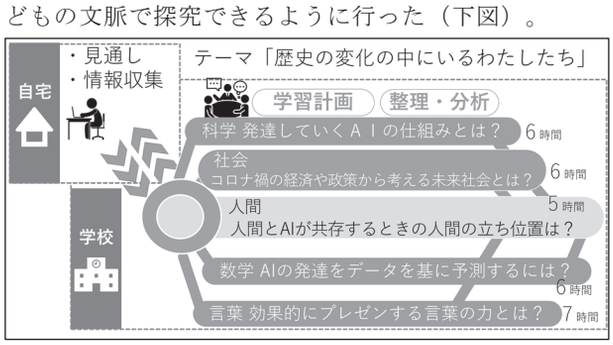
◎　AI が，どのように画像認識をしているのか検証することを通して，AI の仕組みや強み，その活用について新しい考えを創ることができる。　（創造性）

○　AIの画像認識についての客観的なデータを得ることを目的とし，友達と解決の見通しを話し合ったり，結果を吟味したりすることができる。　（協働性）

○　AI の仕組みや強み，その活用についての自分の考えの変容を自覚することができる。　（省察性）

2　本単元の考え方

本テーマでは，AI や最新技術の発展に伴う，便利・効率化していく社会の中において，人間として大切にすべき生き方を構築しようとする資質・能力を養うことをねらいとしている。そのため，人間科を中心に，社会科，科学科，数学科，言葉科を横断的に扱い，子どもの文脈で探究できるように行った（下図）。



【図　テーマ学習の概要と科学科の位置付け】

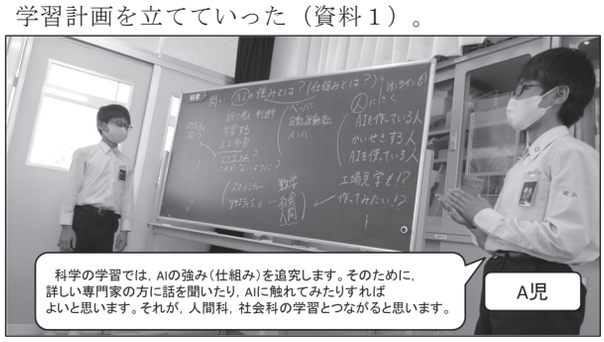
特に科学科では，内容「C テクノロジー・エンジニアリングに学ぶ」に関わり，生活や社会の中で AI が利用されているカメラやアプリなどについて追究したり，実際に自分たちで画像認識を体験したりすることを通して，AI の仕組み，その強みを捉えることがねらいである【学校を超える価値】。すでに様々な AI と関わり，これから生きていく未来社会の中で必ず扱う子供たちにとって AI の仕組みについて科学的に追究する子供を育成する上で価値がある。

本学級の子供たちに対して，６月に行った研究開発アンケートの結果，志をたて，自分にしかできないことに挑戦する項目は高かったが，特にＡ児は，「疑問を調べる」ことや「自分の力で」という創造性に関わる項目が課題であった。また，自分の学びを生活と関連付けて考えることができると実感できている子供は約６割に留まっている。そこで，人間科や社会科の学習を通して，実生活や実社会，そしてこれからの社会における課題を解決させていく。そうすることで，自分たちの学びに意味を見いだし，より深い学びになるようにしていく。

3　授業の実際と考察

導入段階

導入段階では，人間科の学習で生まれた問いを焦点化し，学習計画をつくり，追究の見通しをもつことをねらいとした。そこで，人間科で生まれた「人間と AI が共存するときの人間の立ち位置は？」という問いから，科学の学習において明らかにすることは何か話し合う活動をおこなった。Ａ児は「AI の強みとは何だろうか。逆に弱みもあるのだろうか。」と問いを設定し，学習計画を立てていった（資料１）。



【資料１　科学科の問いについて話し合うＡ児】

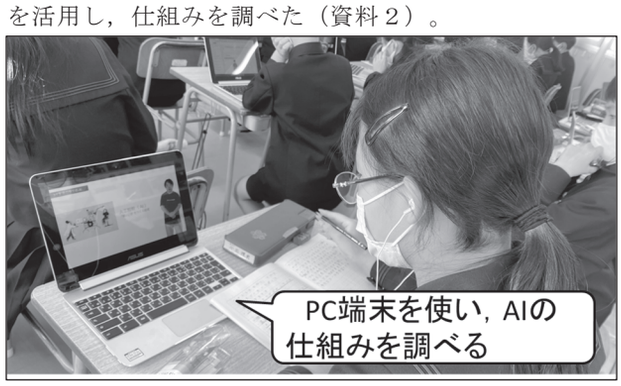
考察１

人間科の学習を基に，科学科で追究できることや追究の学習計画を話し合う活動を設定したことは，AI の仕組みや強みの探究についての見通しをもつ上で有効であった。その根拠は，資料１のＡ児の発言である。Ａ児は，追究の目的とその順序をたて，科学科における学習の見通しをもつことができたといえる。

展開段階

展開段階では ICT を活用しながら，AI の仕組みを調べたり，実際に AI ソフトを体験したりしながら，AI の仕組みや強みだけでなく，弱みを捉えることができることをねらいとした。

まずは，AI の強みについての追究を行ったが，AI の仕組みを捉えさせるには，難しいこともあり，ICT を活用し，仕組みを調べた（資料２）。



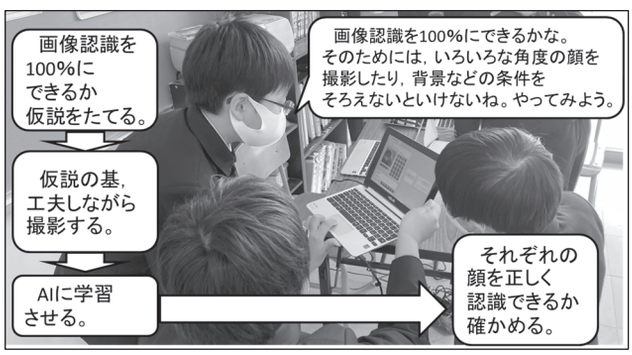
【資料２　PC 端末を使い，調べる児童】

個人での追究が終わると，個人が調べたことを黒板

上で整理し，AI の強みをまとめる活動を設定した。その中で，「実際に AI を触ってみたい」という子供の言葉があり，無料 AI ソフトである「TeachableMachine」を提示した（資料３）。

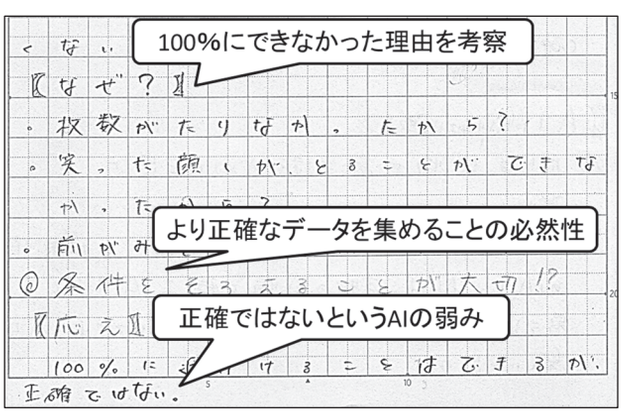
【資料３　TeachableMachine】

体験的に使う中で，「画像，音声，ポーズの何を認識しているのだろうか。」「画像認識を 100%にすることはできるのだろうか。」という問いが生まれ，それぞれについて追究することになった（資料４）。



【資料４　仮説の基，AI の画像認識を検証する児童】

AI の画像認識を 100%にできるのかという問いに対して，仮説をたて，各自で写真の撮り方を工夫し，その認識の数値を記録していった。結果や考察を話し合う中で，100%に近付けることはできるが，100%にすることはできないという結論に至った（資料５）。



【資料５　AI の仕組みを捉えている児童のノート】

考察２

ICT を活用して調べたり，AI の画像認識を体験したりする活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は，資料５の児童のノートである。この児童は，考察の中で AI の仕組みを捉えるとともに，データの条件を揃えることの必然性や決して正確ではないという AI の弱みまでも捉えることができたといえる。このように AI の画像認識についての仮説をたて，検証を行ったことで，AI の仕組みについて理解を深めることができた。

終末段階

終末段階では，これまでの学びを基に，科学科の問いに対する応えを創り出すことをねらいとした。

まず，これまでの学びから，問いに対する応えについて話し合う活動を設定した。その中で，これまでの学びから，強みを捉えるとともに，AI に感情を与えることについての話し合いへと発展した（資料６）。

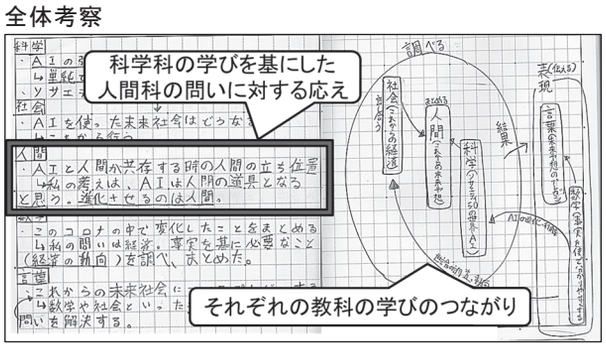
AI に感情を与えるのかという話し合いにおいて，AI は人間が使う物だから，感情はいらないという意見や状況によって与えてもよいという意見があり，AI の使い方についての考えを深めることができた。

【資料６　学びを整理した板書】

考察３

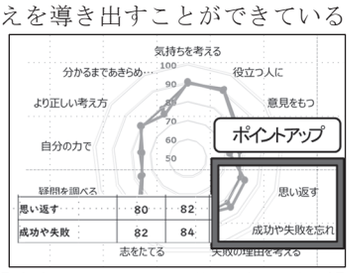
これまでの学びを基に，問いに対する応えを話し合う活動を設定したことは，創造性の伸長に有効であった。その根拠は資料６にあるように，話し合いの中で，A 児は，「AI は人間より優れている部分もあるが，それを人間が使いこなしていくことが大切である」とは発言しており，応えを導き出すことができたといえる。

全体考察



【資料７　テーマ学習の学びのノート（A 児）】

資料７は，テーマ学習の学びをまとめた A 児のノートである。この中で A 児は，科学科の学びである，AI の強みと弱みを基に，人間科の問いに対する応えとして，「AI は人間の道具となると思う。進化させるのは人間」と A 児なりの応えを導き出すことができているといえる。資料８を見ると，創造性の大きな伸長を見られないが，省察性の高まりが分かる。これは，テーマ学習により様々な学びを関連させ，その価値を自覚させたことが有効であったと考える。



思い返す	80	82
成功や失敗	82	84

【資料８　テーマ学習後の伸び】

特別支援教育部

生活への関わりを広げる子供の育成(2 年次)
～子供のよさをいかした関連性のあるカリキュラム～

1　これまでの歩みから

(1) 社会情勢から

新型コロナウィルスの影響により，特に特別支援教育を必要とする子供たちを取り巻く環境は著しく変化している。このことで子供たちの生活も変化せざるを得ない状況におかれた。実際に，これまで感情表現の一種としてハイタッチやペアストレッチなど言語表現の代替として，フィジカルコンタクトを他者とのコミュニケーションを図る方法として指導してきたが，現在では行えないなど，身に付けた知識や技能が使用できなくなった例もたくさんある。一方で，ＧＩＧＡスクール構想により，ＰＣ端末がこれまで以上に生活に密着したアイテムへと変化している時代でもある。文部科学省は「これまでの実践とＩＣＴのベストミックスを図っていくことにより，多様な実態の子供たちに公正に個別最適化された学びや創造性に富む学びを産み出す可能性を秘めており，特別な支援が必要な子供たちの可能性も大きく広げるものになる。」としている。そこで，子供たちにおける生活を現在，そして今後という視点で検討し，子供たちの可能性を引き出すためのカリキュラムの編成を行いながら，これからの授業像を新たに追究していく必要があると考える。

(2) 特別支援教育の情勢から

特別支援学校学習指導要領の改訂では，その総則において，「単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通しながら，児童又は生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」が新たに規定されている。これは，丹野(2019)が指摘する「子供の障害の状態や発達の段階，及び学習状況は様々であり，学習活動を成立させることが目標となりがちである。」としている課題に対するアプローチになるものだと考える。ここで述べられていることは，主体的・対話的で深い学びとは，１単位時間の授業の中で全て実現されるものではなく，学習内容の有機的なまとまりの中で実現していくものだということである。そこで，意味のある学習のまとまりを発達段階や内容の系統性を視点に組織化していくことが必要である。そのためには，子供の発達の状況を誰もが理解できる状況を整えていくことや明確な基準に基づいて個の実態を捉え，効果的だった支援の記録を積み重ねていくなどの手立てが必要である。これは，福岡県の特別支援教育の課題にも挙げられている，「学びの連続性」を子供に保障していく上でも，確固たる基準を示さなければならない。

その際留意しておかなければならないことは，各教科の本質である「見方・考え方」を働かせることである。「見方・考え方」とは，各教科等の本質に応じた物事を捉える視点や考え方であり，学習内容と子供の生活や身の回りの社会とをつなげる重要な役割を担うものである。そこで，各教科等の本質に応じた見方・考え方を働かせることのできる学習場面を計画的に位置付けながら，得られた知識を関連付けたり，問題を見いだして解決策を考えたりする学習活動の構成の仕方について追究していく必要がある。

(3) 本校の実態から

本学級では，これまでに子供たちにとって必要な資質・能力を設定し，未来社会における生活に視点をあてた授業づくりを追究してきた。その中で，子供が学習対象と積極的に関わり合うための教材化や題材開発を実施してきてきた。年度末に実施した保護者アンケートにおいては，子供たちは学校が大好きであり，学習への意欲も概ね高い状況にある。これは，子供の実態把握から学習材を選定し教材化を図ってきたことや，個別の指導計画から子供の学習内容を設定してきた成果であると考える。一方で，学校での学びを学校外で活かしているという報告を受けるのは一部であり，未だに学びを十分に他の生活場面に転用したり般化したりしているとは言い難い一面がある。また，同じ障害種であっても異なる特性が見られる場面もあり，個の実態として把握していく必要があるが，担当の教師の見取りに依存する部分が大きいため，実態と支援が適切に対応しているのか判別する材料が不足しているといった指導面に関する課題も見られた。このようなことから，以下に示す３つの方法で学びと生活を関連づけていくように考えた。１つは，子供が学習で得られた知識を活用したり，関連付けたりする生活場面を具体的に設定すること。２つは，子供自身が何を学んだのかという学習としての評価を自覚させていくこと。３つは，個別の教育支援計画や個別の指導計画の内容を再検討していくこと(学習のための評価)である。このことは，これまでの生活から大きく変化する今において，子供たちに必要な資質・能力を明確にし，具体的な生活場面でどのように関わっていくものなのか教師と子供で共有することができるものである。以上のことから，子供たちにおける評価活動を充実させることで，子供たちの実態の捉え方を定義し，どのように学習活動に結び付けていくことができるのかを追究していくことが本年度の重点としていく。

2　研究構想について

(1) 研究構想図

【図１　研究構想図】

(2) 研究構想の概要

○　目的

自分のできることを活かしながら，生活の質的改善を図っていくために，自発性，自己発揮性，成就性の資質・能力を育成する方法をアセスメント・カリキュラム・授業の視点から追究していくこと

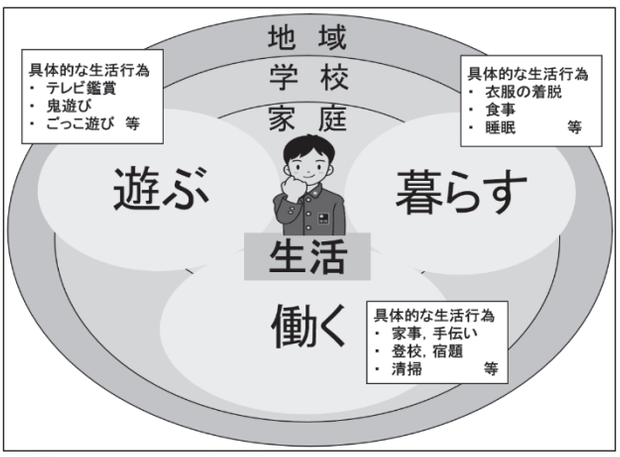
○　方法

子供の生活経験や発達段階，認知特性をアセスメントに基づいて，個別の指導計画や授業を構成したり，般化を目指す場面を具体的なパフォーマンス場面を設定することができるカリキュラムを編成した上で，子供に応じたスモールステップのある授業づくりを行ったりすることで，子供が資質・能力を発揮していくことができるようにすること

3　主題について

(1) 生活への関わりを広げる子供

生活とは，１人１人の子供にとって意味のある生活行為の集合体のことである。生活行為は，「遊ぶ」「暮らす」「働く」と３つに類別することができる具体的な活動のことである。具体的には，「遊ぶ」においては，遊具遊びや鬼遊び，または読書やゲーム，行楽施設での活動などが該当する。これらは将来的に子供達の余暇活動の充実させることに繋がっていくものである。「暮らす」においては，衣服の着脱や食事の準備・後片付け，物の整理整頓等が該当する。これらは身辺の自立に繋がっていくものである。「働く」においては，所属する集団における役割の遂行や登校，清掃活動等が該当する。これらは就労に繋がっていくものである。このように，生活行為は，主に家庭，学校，地域の３つの場面で構成されているものである（図２）。生活への関わりを広げる子供とは，生活行為を実行する場面や対象を増やしていく子供のことである。新たな人や未知なもの，経験したことのない出来事，または既知ではあるが関わり方が把握できていない事柄等に対して，自分のできることを発揮して自ら働きかけたり，働きかけられても適切に対応したりし，多様な関わり方を構築していくことができることを目指すものである。



【図２　生活の定義】

人間は本来好奇心にあふれた生物であるが，闇雲に挑戦した結果，失敗の経験が積み重なり，自らの好奇心に自制をかけることもある。しかし、適切なステップを踏むこと，または，今できることを活かしていくことにより，挑戦したことに対する成功体験を積み重ねていくことが容易になり，このような経験が生活の質的向上に繋がるものと考える。そのために，子供たちには，初めて出合う対象に興味をもつことや自分のできることを活かそうとすること，また，それらの行為に取り組んだ自分自身のことを大切に思うことができる資質・能力が生活の質的改善に繋がっていくものと考える。そこで，私たち指導者は，特別な支援が必要な子供たちが学校という環境において，新たな対象との関わりを広げていくことができるきっかけを，子供たちに提供していく方法を模索していかなければならないものと考える。

(2) 育成すべき資質・能力

①　自発性

自分から身の回りの対象に働きかけようとする意欲や，粘り強く関わっていこうとする意思など心の統制に関わる資質・能力である。

②　自己発揮性

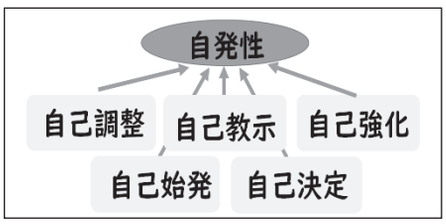
経験や情報を統合し，知識化を図るものや獲得している知識を対象や場所を変えたりする中で活用しようとすることなど，対象への働きかけ方に関する資質・能力である。

③　成就性

自分の行動に対する充実感や達成感，自己肯定感を味わうなど感受性に関わる資質・能力である。

生活への関わりを広げる子供の姿から育成すべき３つの資質・能力を以下のように設定する。

自発性とは，「ひと・もの・こと」からなる学習対象への関わり方そのものに着目した資質・能力である。伸長を図るためには，子供の内発的動機付けに着目し，アセスメントしていくことが必要不可欠である。さらに，子供の中で自己内対話が成立するよう，発達段階や生活経験に基づいて関わる対象を精選していく必要がある。また，子供自身の学習対象への関わり方の履歴や目標を確認することができる環境の整備も必要である。そして，図５に示すように，子供が対象に働きかける経験を積み重ねることに相関して，自身への働きかけ方に変化をもたらすものだと考える。

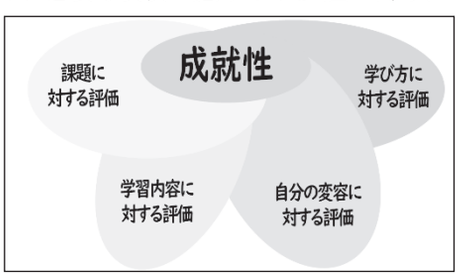


【図５　自発性を高める経験】

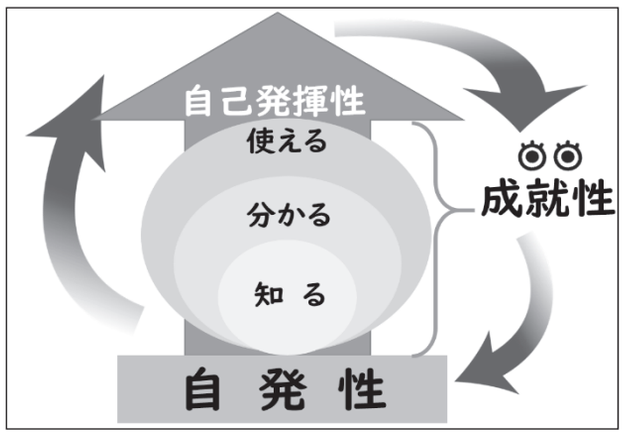
次に自己発揮性とは，学習の基盤となる①言語能力，②情報活用能力，③問題発見・解決能力という３つの資質・能力で構成されている。これらは，獲得した知識の意味理解を深めたり，生活の場面やその他の学びの場面で活用させたりするなど認知の段階により育成を図っていくものである（図６）。①に関して，言葉は子供の学習活動を支える重要な役割を果たし，全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる。②は世の中の様々な事象を情報とその結びつきとして捉え，情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を発見したり解決したりする過程を経て，自分の考えを形成していくための資質・能力である。③は各教科等において問題の発見・解決に必要な力を身に付けていくことが必要である。

【図６　自己発揮性の段階】

最後に成就性とは，課題を達成するための自分の能力に対する期待感や自らのパフォーマンスに対する評価への実感するために必要な資質・能力である（図７）。具体的には，自分の学習行動を観察することで，自分自身に対する情報を得たり，次なる目標を見出したりすることである。これは教師から与えられた課題を漠然とこなすのではなく，自分自身が積み重ねてきた経験からできそうな課題や目標を選択することによって，物事に対する主体的な態度を育んだり，自己調整するための基礎を形成したりすることへとつながるものである。



【図７　成就性に必要な経験】



【図８　資質・能力の関係性】

これらの資質・能力は，往還する関係を有すると考える（図８）。そのためこれらの資質・能力の伸長を図っていくためには，自ら課題に取り組み，課題解決に向けた工夫を図り，達成感を味わう課題解決していく経験が必要となる。特に，特別支援教育では課題解決に至る過程において，詳細に実態を把握し，子供の実態に応じた課題をそれぞれに設定し，子供が自ら課題に取り組むことを実感させたり，課題解決に関する支援を発達の段階や子供の特性を考慮して実施したりすることで，改題解決の取組に対する達成感を味わう経験を積み重ねさせるようにする。このような考えのもとで，学習活動を構成していく上で重要なことが学習のゴールである。子供たちの生活と関連させ，活動に向かう必然性をもたせられる学習でなければならない。そのための教師の役割として，子供がゴールに向かうための活動の構造化を図り，それぞれが活躍できる場を保障していくことが必要だと考える。

４　副主題について

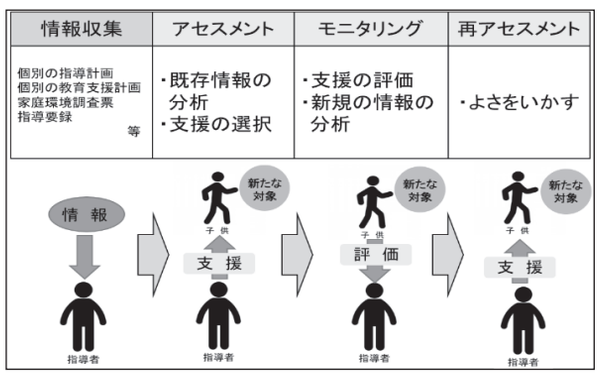
(1) 子供のよさをいかすとは

子供のよさとは，子供が現時点において自分１人の力でできることや既に有している資質・能力のことである。子供のよさをいかすとは，子供が今できることを基にしながら，新たに関わり合う対象に対するアセスメントとモニタリングを実施し，その個に応じた学習環境を整えることや，学習内容を設定していくことである。

子供の実態を捉えていくことは，特別支援教育においては基盤ともいえる重要な位置づけである。しかし，その実態の捉え方も観察する側の視点が同じであっても同じ結果となるケースは稀である。これは，実態把握をする側もされる側も人間であるため，そこには必ず人間関係が存在する。そのため，同じ単語で表記された実態

に関する情報も，その解釈までもが全く同じという訳ではない。このことから，子供のよさとは，関わり合う対象によって異なるものであり，普遍的なものではない。

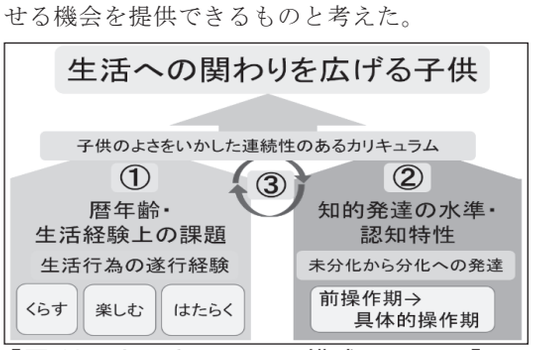
関わり合う対象や環境によってよさとは変化していくものだと考える。既存の情報に依存するのではなく，アセスメントすることで活動を支援していく。そして，その様子をモニタリングし，そこで得た新たな情報を基に再度アセスメントを実施した上で支援を行うことで，学習対象と関わり合う際に，子供のよさをいかしながら関わることができるものだと考える（図９）。



【図９　よさをいかすアセスメントの過程】

(2) 関連性のあるカリキュラムとは

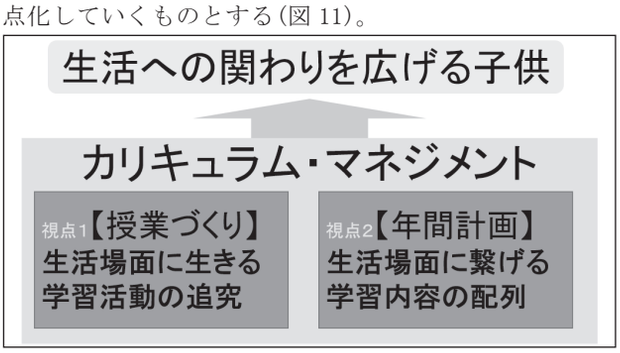
関連性のあるとは，育成を図る資質・能力が異なる状況下においても発揮される場面を意図的に設定し，子供が学びを体験として感じ取ることができるようにすることである。本学級のカリキュラムでは，学習活動のねらいを２種類に大別することができる（図 10）。１つは未分化から分化への知的発達をねらう学習活動，もう１つは生活行為の遂行経験を積み上げていくことねらう学習活動である。本学級においては，主に前者を各教科等の学習形態が担い，後者を合わせた指導（主に生活単元学習）が担っており，子供の実態に応じてバランスよく配時していくことが，多様なニーズに応じていくためには必要だと考える。各教科等の指導では，生活場面を想定しながらも，内容の系統に沿って指導している。これらの学習形態では，類似する指導内容の場面がありながらも，子供が学びを発揮する場というのは限定的だという課題があった。そこで，具体的なパフォーマンス場面を学習の発展的な場面に位置付けることにより，これらの各教科等の指導と合わせた指導での学びを関連させる機会を提供できるものと考えた。



【図 10　カリキュラムの構成について】

５　具体的方途

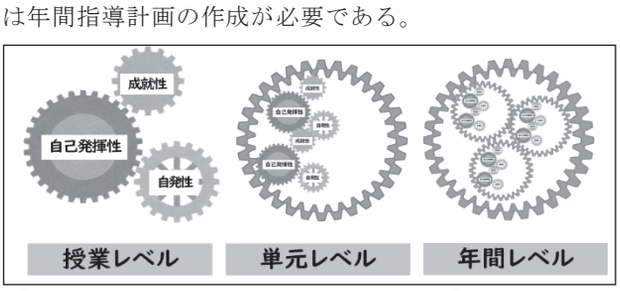
本研究では，図１の研究構想図にも示すように，子供のアセスメントからカリキュラム作りや学習活動の構成について追究していくものである。そこで，今年度お研究で追究していく対象を授業づくりと年間計画に焦点化していくものとする（図 11）。



【図 11　追究の視点】

(1) 生活場面に生きる学習活動の追究

子供は学習内容について，学習活動を通して子供の学びが深まるように展開されることで，資質・能力が伸長されていくものである。そして，新たな資質・能力が身につくことで学習活動が展開されることにより，学習内容が発展していくものだと捉える（図 12）。資質・能力の育成には，単元や題材など時間のまとまりとして捉え，単元の全体像を俯瞰した視点で捉えていくようにする。そのため，各単元や題材の中で資質・能力を連動させながら，最終的にどのような資質・能力の育成をめざすのか明確に意識した活動づくりが必要であり，ひいては年間指導計画の作成が必要である。



【図 12　資質・能力の伸長について】

よさをいかした学習活動では，目標となる資質・能力を明らかにした上で，３つの視点を包含するものを学習材として教材化を図っていくことが重要である。

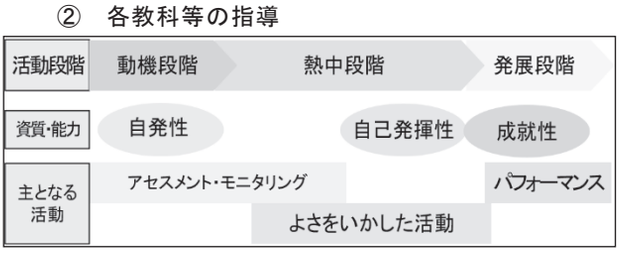
①　活動構成

- パフォーマンスとしていかす場が保障されていること
- 子供の興味・関心があり，意欲的に取り組むことができる課題が内包されていること
- 子供の思考を推測する意図的・計画的な仕掛けを組み込むことができること

本研究において，学習とは３つの段階で構成していくものである。まず，新たな学習対象と出合う動機段階である。この段階では主に自発性に比重を置くものであ

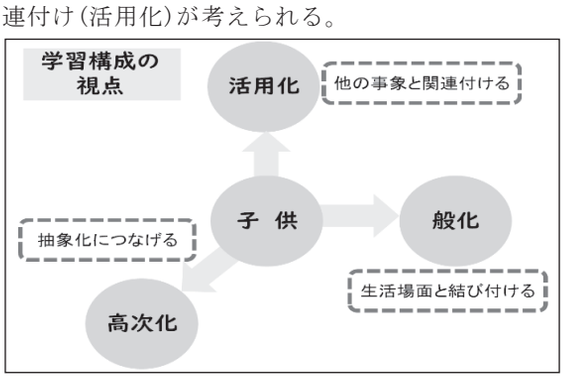
り，既存の情報からアセスメントを行い，個に応じた支援を実施しながらモニタリングを行っていく。その中で，子供の実態に応じて環境や課題設定など子供のよさをいかせるように改善を図っていく段階である。次に，熱中段階である。この段階では，子供のよさをいかして，自己発揮性に比重を置く段階である。特に学習内容については，個に応じてスモールステップを作成したり，パフォーマンス場面を想定し逆算的に活動を設定したりすることも想定される。最後に発展段階では，これまでの学習過程で身に付けた内容を，場面や対象など状況を変えた中で発揮することができるような場面を設定する段階である。ここで最も大切にしたいことが成就性であり，すなわち成功体験である。本研究においては，パフォーマンスによる成功体験と子供の実態からアセスメントによって効果的に学習活動を設定していくことが必要であると考える（図 13）。

② 各教科等の指導



【図 13 活動の構成】

活動構成においてパフォーマンス場面を設定するだけでは，子供の資質･能力の育成は不十分であると考える。武富は，「特別支援教育では，学びの幅や奥行き，深さ等を想定しておくことが，多様性への対応として必要」と述べ，学習の構成として３方向で発展していくモデルを提示している(図 14)。これを，子供の学びへの欲求に対応するための指針として捉え，学習の仕組み作りを行う。具体的には，子供達の実態に応じて，学んだ先に生活場面へ発展(般化)することや，学習内容が高まったものへと発展(高次化)，または，他教科の学びを関連付け(活用化)が考えられる。



【図 14 学習活動を構成する３つの視点】

③ 学習としての評価の充実

・ 発展段階における評価場面の設定

これまでの評価活動では，活動そのものにおける評価はできても，学習過程や自身の高まりについて実感を深めるまでには至らない状況が見られた。そこで，教師にとっても子供にとっても明確な評価基準を提示し，自分自身によって評価できる場面の設定が必要である。そこで，学習の発展段階において，それまでに身に付けた知識やスキルを使いこなすことができる場面や課題を提示し，評価の中心として位置付けていくようにする。そのために，各教科等の題材については，生活単元学習と関連させて，子供にとって必要性のある課題であることが求められる。

・ 学習過程を評価する仕組みづくり

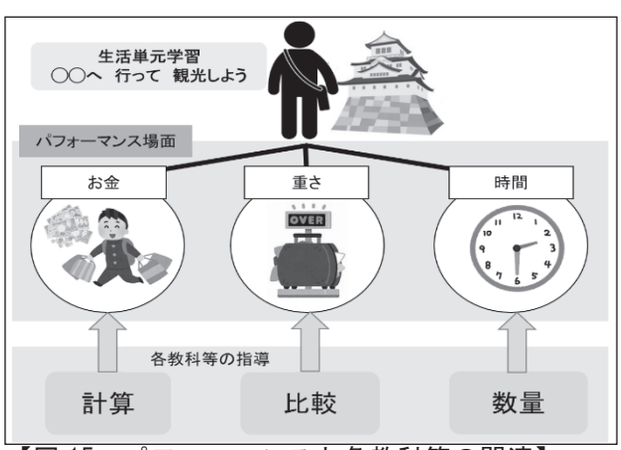
子供自身が自分の成長を実感していくためには，子供の作品や自己評価の記録，教師の指導と評価の記録などを系統的に蓄積していくポートフォリオ評価を活用していく必要がある。そこで，クリアファイルを用意し，学習の中で使用した学習プリントや作品を積み重ねていくようにする。子供がいつ見ても学習の過程が分かるように配慮していく必要がある。そこで，学習プリントは，学習段階と対応するように構成され，段階によって使用する枠組みを内容と対応させていかなければならない。また，各段階においては，以下のような機能を持たせることが必要である。

動機段階・・・単元(題材)のゴール像
・・・そのためにがんばること
熱中段階・・・「自発性」に関する自己評価
・・・「自己発揮性」に関わる自己評価
発展段階・・・「自己発揮性」に関する自己評価
・・・「成就性」に関する自己評価
・・・ゴール像に対する自己評価

(2) 生活場面に繋げる学習内容の配列

① パフォーマンス場面の設定

育成を図った資質･能力は一定の条件の時のみ発揮されても生活への般化とは言い難い。多様な場面で活用する場面を設定したり，状況が変化した中でも対応していく経験を積み重ねられる機会を設定したりすることで，子供たちの学びの定着へと繋げたい。そこで，具体的なパフォーマンス場面を設定することで子供が発揮する資質・能力の定着に向けた必要な経験になると考える。例を挙げると，生活単元学習における複合化された活動

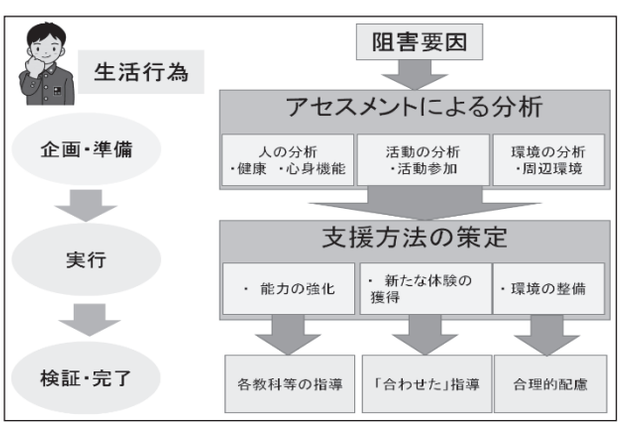


【図 15 パフォーマンスと各教科等の関連】

を構造化し，具体的な場面設定を行う。また，その中で，具体的なパフォーマンスを設定する。そして，そのパフォーマンスに必要な要素（活動や学習内容）を関連させながら，子供の実態に応じた系統的な学習課題を算数科において設定する。図 15 を例にすると，計算スキルを，生活単元学習の観光地で土産を買う場面の中で活用するということである。このように，ゴール像となるパフォーマンスが具体化することで，各教科等におけるねらいも子供の実態に応じたものにすることができる。

② 学習内容と指導形態

生活への関わりを広げる子供を育成する視点に立った場合，子供の生活行為に着目し，子供が今現在どのような生活を送っているのかを把握する必要がある。生活を構成する生活行為は，「企画・準備」「実行」「検証・完了」の３段階で構成されるものである。そこで，実態把握においては，子供が困り感をもっている場面に着目していくことが重要であると考える。そして子供がどのような困り感をもっているのか分析的に把握していく。具体的には，困り感をもたらす要因を「人」「活動」「環境」の３つの観点から分析しどこに要因があるのか仮説を立てていく（図 16）。そしてその支援方法について検討し，能力の強化であれば，各教科等の指導を，新たな体験の獲得であれば合わせた指導を，環境の整備であれば，合理的配慮もしくは自立活動において指導を行っていくものとする。



【図 16　子供のアセスメントによる分析】

５　研究の方向性

１年次

子供のよさを捉えながら，よさを引き出すために自立活動による個性の伸長を図りながら，教科等の指導や合わせた指導と関連させた教育実践を図ることを通して，子供が主体的に学ぶことを追究した。自立活動の目線で実態把握を行うことにより，障害特性及び個がもつ特性について分析し，必要な支援を行うことで子供が自発的に活動取り組む様子が見られた。しかし，実態の分析が観察によって得られることが多く，般化性に乏しいとの課題がみられた。

２年次

学習のための評価や学習としての評価という評価活動の充実を図りながら，子供が学びを楽しみ，成長を自覚する姿を学習活動では求めていく。また，年間指導計画の中に，各教科等の学習内容と密接な関係性を有する「合わせた指導」の単元を位置付け，生活場面と関連づけていくことで生活への関わりを広げる姿を目指していく。

・実態把握の方途について
・生活に関わる題材開発について
・学びを自覚させる評価について

３年次

１・２年次に行ってきた題材を中心に据えて，年間指導計画について再編成を行う。カリキュラムとして，効果的に働いた場面とそうでないものを精選し，必要なものは継続しながら，不必要なものについては新規の題材開発を行っていく。特に，学びが深まらなかったという課題に対しては，積極的に外部ソースや地域資源の活用を図るような視点で改善を図っていくようにする。また評価についても，保護者と評価の共有を図るための個別の指導計画の在り方についても追究していく。

参考文献 ----------

授業づくりの深め方　石井　英真　2020　ミネルヴァ書房
深い学びへのアプローチ　丹野哲也他　2019　東洋館出版
育成をめざす資質・能力を踏まえた教育課程の編成
発達障害の心理学　北　洋輔　2019　福村出版
クリエイティブ　スクールス　ケン・ロビンソン　2019　東洋館出版
教師の勝算　ダニエルウェリンガム　2019　東洋館出版
ＬＤの定義を再考する　小貫 悟　2019　一般社団法人日本ＬＤ学会
応用行動分析で特別支援教育が変わる　山本惇一　2019　図書文化
「深い学び」を実現するカリキュラムマネジメント　田村　学　文溪堂　2019
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　2018　ジアース教育新社
特別支援教育～共生社会の実現に向けて～　米田宏樹他
ミネルヴァ書房　2018
メタ認知で学ぶ力を高める　三宮真智子　2018　北大路書房
授業改善８つのアクション　石井英真　2018　東洋館出版
自分の強みを見つけよう　有賀　三夏　ヤマハミュージック　2018
知的障害教育におけるアクティブラーニング　武富博文他　2017　東洋館出版
新しい教育評価入門　西岡加名恵他　2015　有斐閣
知的障害教育における学習評価の方法と実際
全国特別支援学校知的障害教育校長会　2012　ジアース教育新社
認知的個性　村松暢隆　2010　新曜社
状況に埋め込まれた学習　ジーンレイブ　エディエンヌ　ウェンガー　1993　産業図書

特別支援教育部生活単元学習

自らの思いを実現する生活単元学習

1　主題の説明

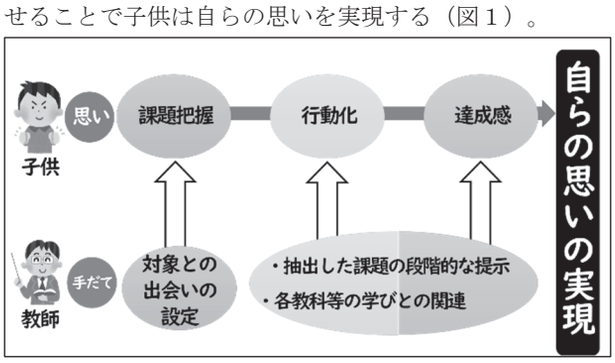
○　主題設定の理由

生活単元学習は，子供の生活場面を学習として教材化を図っていく。これは，子供たちに普段の生活場面を意識させ，生活上の課題を明確にし，解決させていくことである。子供たちが身の回りの「ひと・もの・こと」と関わり，自分にできることを発揮して課題解決をしていくことは，自らの思いを実現することにつながる。知的障害のある子供たちは各教科等で学んだことが断片的になりやすく，生活場面に生かすことや，単元を通しての課題意識（思い）を持続させることは難しい。また，本校の特別支援教育においては，子供たちが学んだことをパフォーマンスとして生かす場を増やしていくことを目指している。そこで，生活場面を切り取って課題とする生活単元学習を各教科等での学びと関連付けてパフォーマンス場面として位置付ける。それにより，学んだことを場面や状況を変えても自分ができることを発揮する経験を子供たちにさせることができると考えた。これは，自分の思いを行動にうつし，成就感を味わわせることができると考える。

○　主題の意味

自らの思いとは，子供が「ひと・もの・こと」と出合うことで抱く「～したい」という対象との関わりを求める意思や欲求のことである。

自らの思いを実現するとは，意思や欲求を満たすために行動化し，満足感や達成感を味わうことである。思いを実現するには，子供が課題を把握すること，行動化すること，そして行動化したことに達成感を味わうことである。子供が課題を把握するには，対象との出合いが必要である。課題は，子供の実態に沿って構造化することで抽出して設定することができる。そして教師は子供に課題を把握させるために，対象と意図的に出合わせる。行動化を促す際は，抽出した課題を段階的に再構成し，スモールステップで課題を解決させていく。また，各教科等での学びを生かすことができるように関連を図る。抽出した課題を全て解決させることで子供は自らの思いを実現する（図１）。



【図１　思いの実現までの過程と教師の手だて】

2　めざす子供の姿

【図２　研究構想図】

○　自分の課題を捉え，できることを生かしながら進んで活動に取り組もうとする子供　　（自発性）
○　活動する場面や関わる対象を変えても身に付けたことを実践することができる子供（自己発揮性）
○　できるようになったことが増えたことを実感して自分に自信をもつ子供　　（成就性）

3　教材化の条件

次の３点を教材化する条件とする。

①　教科等の学びと関連した学習を設定できるもの
②　無意識なものを意識化できるもの
③　思いを子供の実態から構造化して，段階的に再構成することができるもの

本研究では，子供たちが生活場面において自分のできることを生かし，学んだことを生活の中で生かしていくことをねらうものである。そのために①では，各教科等の学びを関連させて生活単元学習の中でパフォーマンス場面として位置付けるようにしていく。②では，子供にとって身近な存在ではあるが，普段は意識していないひと・もの・ことを取り上げ，教師が意図的に出合わせるようにする。それにより，子供は思いや課題意識をもつことができる。③では，子供が抱いた思いを子供の実態に沿って構造化し，子供にとって明確な課題として再構成する。それらの課題を段階的に単元の中で構成して，子供が解決していくように仕組む。子供が自らの思いを実現していくように教師は支援をしていく。

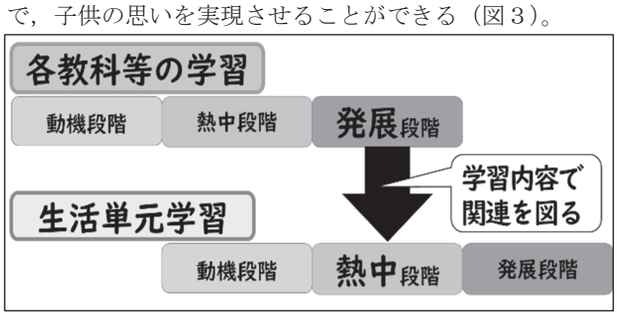
4　具体的方法

(1) 各教科等の学びを関連させるカリキュラム編成

子供の思いは生活単元学習や各教科等での単元や題材というまとまりの中において生じるが，これらを関連付けることで，一体的なカリキュラムを編成することができる。その様にすることで，子供は思いを持続させたり，発展させたりしながらパフォーマンス場面のある学習に臨んだり，パフォーマンスから見いだした課題を各教科等の中で解決したりできるようにする。そのために単元や題材の配列を工夫していく必要があると考える。

①　各教科等の学びを生活単元学習と関連させる場合

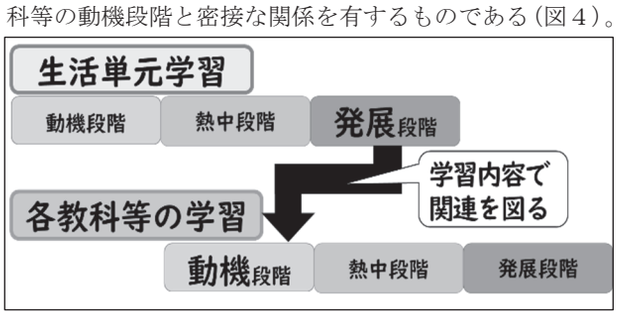
各教科等で身に付けた資質・能力を，生活単元学習という子供の生活に寄り添った場面においてパフォーマンスとして発揮させていく場合である。教科の学習内容として設定した事項を，実際の生活場面において発揮することで，子供の思いを実現させることができる（図３）。



【図３　各教科等の学びを関連付けた生活単元学習】

②　生活単元学習を各教科等と関連させる場合

生活単元学習という指導形態の中で，学んだ学習内容を題材化していくことで，各教科等の系統的な学びを意欲的に実践することができる場合である。子供が課題解決の過程で学んだ学習内容で新たな題材化を図っていくことは，学習内容への興味・関心を高めることができるため，各教科等の動機段階と密接な関係を有するものである（図４）。

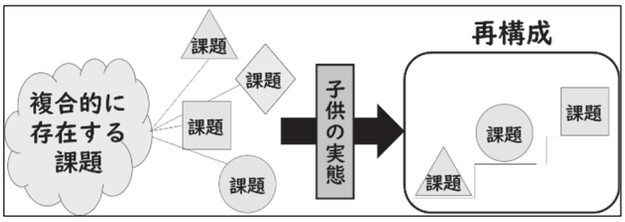


【図４　生活単元学習を題材化した各教科等の学習】

(2) 単元構成の工夫

①　単元を構成する課題配列の工夫

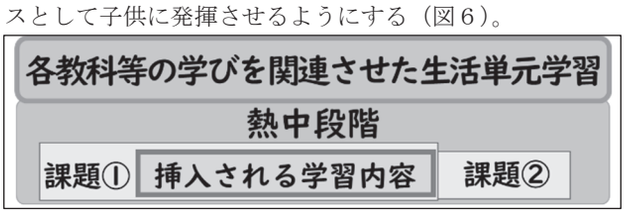
本単元における課題は，教師が子供の思いから設定する。具体的には，子供の思いの実現に必要なことを分解する。そして，子供の実態に応じて，学習内容として設定できるものを子供が解決する課題として取り組みやすい課題から段階的に再構成する。その際，各教科等で学んだことを生かすことができるものを課題とする。それにより，複合的に存在する課題を子供たちは明確に捉えることができる（図５）。



【図５　子供の実態から抽出した課題の再構成】

②　各教科等の学びを関連させる単元構成

各教科等の学びを生活単元学習と関連させる場合，課題の中に各教科等の学習内容を付加する。その課題を解決する際に，各教科等で身に付けた資質・能力をパフォーマンスとして子供に発揮させるようにする（図６）。



【図６　各教科等の学びを関連させた生活単元学習の構図】

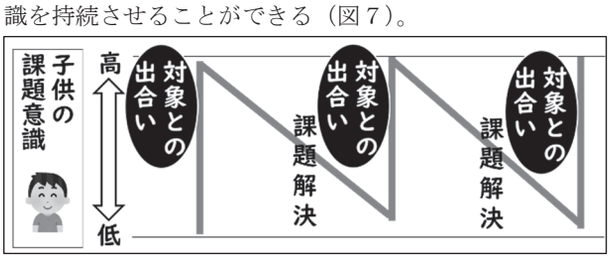
例えば，算数科の学びを関連付けて生活単元学習を行う場合には買い物をするという学習内容を付加することができる。そこで，課題の中に算数科の学習内容をパフォーマンスとして発揮できる場面を設定し，単元を構成する。

(3) 思いを実現する活動構成の工夫

子供たちが思いを実現するためには，課題を明確にし，課題意識を持続させる必要がある。また，課題を解決させるために行動化を促す必要がある。

①　課題意識を持続させる活動の工夫

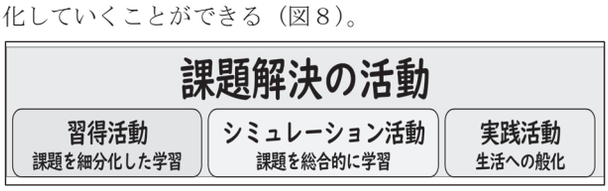
子供の課題意識を持続させるために，対象との出合いを意図的に設定する。具体的には，課題解決の終末部分で，次に解決をする課題に関わる対象と出合う場面を設定する。このことにより，子供は単元を通して効果的に課題意識を持続させることができる（図７）。



【図７　対象との出合いにより課題意識を持続させる子供】

②　行動化を促す活動の工夫

行動化を促すには，課題解決の活動を３つの活動に分けて構成する。具体的には，解決する課題を細分化して学習する習得活動，総合的に学習するシミュレーション活動，生活への般化する実践活動の３つで構成する。それにより，子供たちは習得したことを実践場面へとスムーズに般化していくことができる（図８）。



【図８　行動化を促す活動構成】

特別支援教育部算数科

数の有用性を実感する算数科学習

1　主題の説明

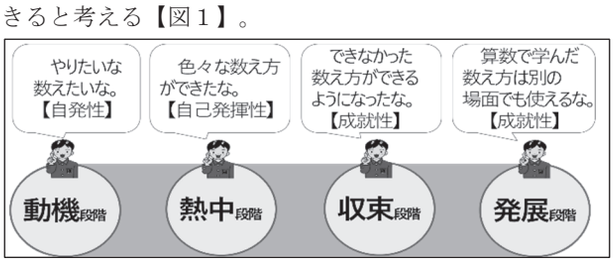
○　主題設定の理由

未来社会において，子供たちが将来の自立を果たすためには，学んだことを生かして周りの対象に自ら関わっていくことが必要である。算数科においては，数と生活の関わりを認識し，学んだ数理を対象や場所が変わっても活用しようとする資質能力が求められる。これまでの本校算数科では，数と関わりの深い生活場面から題材化を図ったり，基礎的な学習内容の定着を図るための縦割り・少人数編成での算数グループをカリキュラム上に位置付けたりしてきた。しかし，学びを生かす学習場面が明確に設定されていなかったために，学んだ数理を生かして周りの対象と関わろうとするまでには至っておらず，３つの資質能力の中の成就性に最も課題が見られた。そこで，様々な数操作を繰り返すことで学んだ数理を，パフォーマンスとして発揮できる学習場面を意図的に設定することで，「算数で学んだことは，別の場面でも使えるな。」という数の有用性を味わわせることが，数を通して周りの対象に自ら関わろうとする子供の育成につながると考え，本主題を設定した。

○　主題の意味

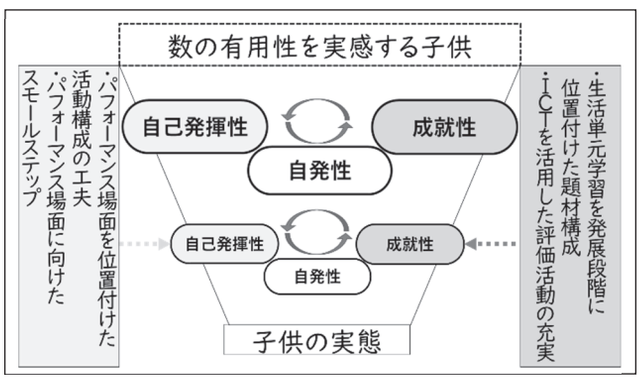
数の有用性とは，数理によって課題を解決したり，学んだ数理を他の場面でも生かすことができたりすることである。知的障害の特性として，事物や現象を抽象化することに困難を示す場合が多く，算数の学びを生活の中の数と関連付けて捉えることが難しい。そこで，社会や生活場面に溢れている数量的情報と学んだ数理をつなげることが，生活への関わりを広げていくことにつながると考える。

数の有用性を実感するとは，繰り返しの数操作を通して課題が解決できたことや，学んだ数理を他の学習場面で生かすことで，算数科での学びは対象や場所が変わっても使えるというよさを子供自身が感じられることである。松浦（2002）は，「学習したことを思い浮かべながら，関連させながら身の回りの事象を見た時，子供たちは改めて学ぶことのよさやその教科のよさを感じる」と述べている。算数科では，学んだ数理を対象としながら，他の場所や対象と関わることができた際に，数を学ぶことのよさを実感できると考える【図１】。



【図1　数の有用性を実感する子供】

2　めざす子供の姿



【図２　研究構想図】

○　数理的な課題への見通しをもち，自ら数に関わっていこうとする子供　（自発性）
○　数操作を繰り返したり，対象や場所が変わっても，学んだ数理を活用したりしようとする子供　（自己発揮性）
○　数理を生活や学習場面で生かすことができたという数の有用性を実感する子供　（成就性）

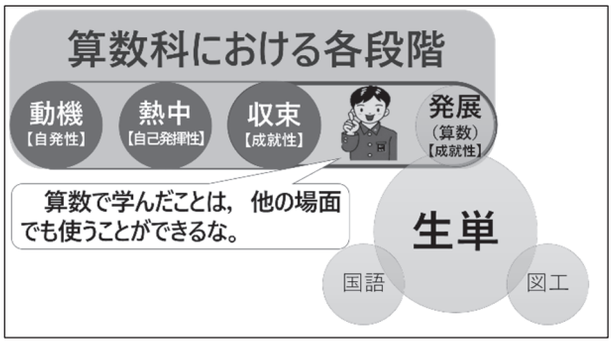
3　教材化の条件

次の３点を教材化する条件とする。

①　数操作や数理を生かすことで，課題が達成される見通しをもてること　（自発性）
②　生活に身近な場面設定から，数操作を繰り返したくなる必然性があること　（自己発揮性）
③　発展段階で，算数科で学んだことをパフォーマンスとして発揮できること　（成就性）

本研究では，子供たちが「算数で学んだことは別の場面でも生かせるな」と実感できることが必要である。そのために①では，算数科における題材の目的を達成するためには，数操作や数理を生かすことで，課題を解決することができるという見通しをもつことができるようにしていく。②では，生活の中で見かけたり，扱ったりしたことのある身近な物を数対象として扱うだけでなく，数操作を繰り返し行いたくなるような生活に即した場面設定を題材の中に取り入れていく。そうすることで，繰り返しの数操作に必然性が生まれ，生活に即している場面や対象で数理を活用できる経験が増え，数の有用性を実感できると考える。③は，生活単元学習の中で，学んだ数理をパフォーマンスとして発揮できる活動を設定することで，数を学ぶ有用性を実感することができるようにする。その際は，発達段階に応じたパフォーマンス場面を設定していく。

4　具体的方法



【図３　題材構成の工夫】

(1) 生活単元学習を発展段階に位置付けた題材構成

これまでの算数科では，数操作に繰り返し取り組んでいるものの，学んだ内容を生かす活動を明確に位置付けていなかったため，数理を生かすことができたという成就感に課題があった。そこで，本研究では，算数科で学んだ内容をパフォーマンスとして生かすことのできる場面を指導の形態の一つである生活単元学習に位置付けることで，成就性や数の有用性を実感することができるようにする【図３】。数の有用性を実感するためのパフォーマンス場面の条件は以下の２点であると考える。

① パフォーマンス場面は，発達段階に応じて類似生を調整できるようにすること
② パフォーマンス場面は，算数科で学んだ内容を発展できるものであること

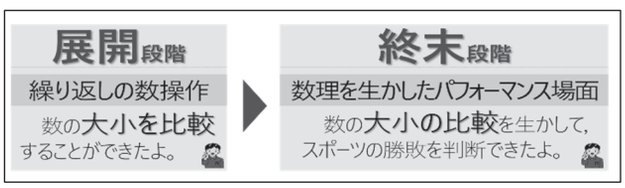
①では，生単のパフォーマンス場面を発達段階に応じて設定することができるようにする。発達段階が低い場合には，算数科と生単の学習を「買い物」などの類似性が高い場面でつなぐようにする。数理を類似性の高い生活場面と結び付けることによって，学んだことの般化が図られるようにする。発達段階が高い場合には，算数科では得点計算，生単のパフォーマンス場面では買い物など，二つの場面を相違させ，学習内容でつなぐようにする。学んだ数理を生かして，別の対象に働きかける活動を設定することで，他の事象と関連付けていくことができるようにする【図４】。

【図４　発達段階に応じたパフォーマンス場面の設定】

②の内容の発展は，大きく２つに分けられる。１つは，数理そのものの発展である。例えば，算数科の学習で，二桁の位取りを学び，その数理を生かして生単の中の買い物学習で，三桁の数について学ぶことで，「位取りで数える」「まとめて数える」という数理を，教科の系統と日常生活の文脈をつなげて発展させることができる。２つは，生活への発展である。生活場面では，算数科のように整理された問題提示ではなく，数量的情報が未分化のまま提示される。知識が断片的になりやすい知的障害のある子供にとって，その状況自体が内容の発展になっていく。例えば，算数科の買い物学習で，個の実態に応じた値段を教師が選択し，焦点化して提示する。その後の生単の買い物で，数量的情報が未分化な商店に舞台を移し，数理を生かして買い物をすることで，内容を発展させていくことができる。

(2) パフォーマンス場面を位置付けた活動構成の工夫

数の有用性を実感するには，生単のみならず，算数科の１単位時間の中で学んだことを即時的にパフォーマンスとして発揮できる場面が必要である。そのために，展開終末では，学んだ数理を生かして課題解決を図る事象を追加提示することで，場面や対象を変えても数理を発揮することができたという成就感を味わわせるようにする【図５】。



【図５　１単位時間の活動構成の工夫】

(3) パフォーマンス場面に向けたスモールステップ

数の有用性を実感するためには，発展段階の生活単元学習で学んだ数理をパフォーマンスとして発揮する場面から逆算した，スモールステップでの数操作を設定することが必要である。スモールステップは，具体から抽象に向かう「数理の高まり」と，教科から生活場面に向かう「支援の軽減」の２つの視点から設定することで，学びを生活で生かすことができるようにする【図６】。また，子供がスモールステップのどの段階か，という視点で実態把握を行った上で，パフォーマンス課題を設定する。パフォーマンス課題の評価は，スモールステップに即して，生単の場面で学んだ数理を生かすことできているかという観点から行う。

【図６　パフォーマンス場面へのスモールステップ】

(4) ＩＣＴを活用した評価活動の充実

試行に対する自己評価や，学びの変容に対する学習としての評価の充実のために，ＩＣＴを活用する。試行に対する評価は，買い物のレシートなど，算数科の学びの文脈の中に位置付けることができるＱＲコードを用いていく。学習としての評価には，一人一台のタブレットに感想や写真を残すことによって，数理の高まりを実感させていく。

特別支援教育部国語科

伝え合う楽しさを実感する国語科学習

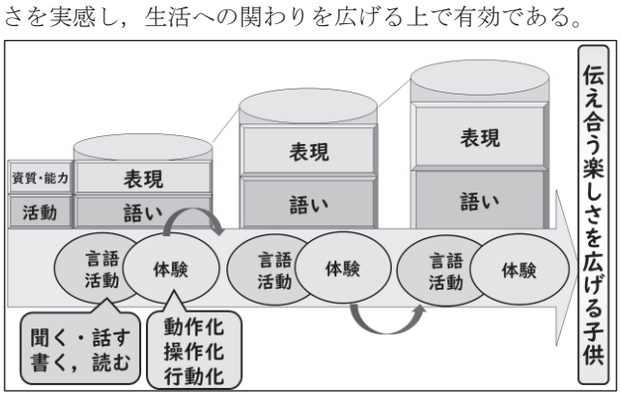
1　主題の説明

○　主題設定の理由

国語科学習における「生活への関わりを広げる」とは，人や出来事，事柄に対して自ら言葉で働きかけたり，働きかけられた言葉に対して反応したりすることであると考える。そのためには，伝え合う楽しさを実感しながら，対象への働きかけ方に関わる自己発揮性の資質・能力を高めていく必要がある。大野廉太郎（1984）は，「低学年の合科的な指導における体験学習」で，直接手を使って製作する体験的活動の必要性を述べた後で，低学年の子供の思考は，言葉，文字として，自分の内なるものを表現するだけでなく，身体的な表現活動と結び付いて展開される方が発達段階に合致していると主張している。本研究では，子供が体験を通した活動により，生活への関わりを広げながら伝え合う楽しさを実感することを目指していく。

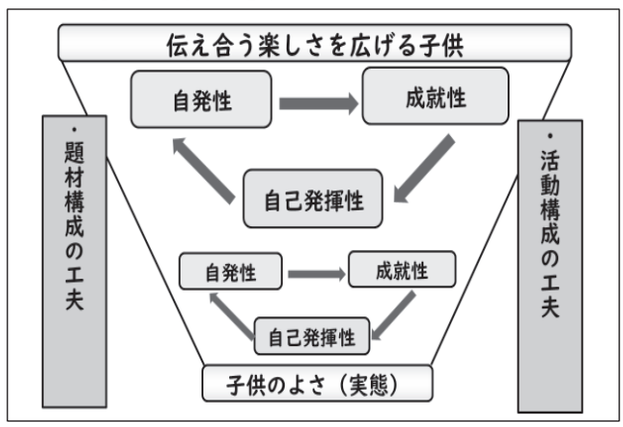
○　主題の意味

言葉を表現するとは，文字や文，図などを見て，その意味・内容をアウトプットすることである。また，アウトプットで表現される前の段階に，読んだことや聞いたことを理解するインプットの段階がある。子供の理解は，客観的に見取ることが難しいため，体験させることで見取りを可能にしていく必要がある。また，発達段階を考慮し，実際に言語を通して行った身体的な経験から，伝え合うことの楽しさを実感することが重要となってくる。言語活動を基に体験に移し，その内容を理解することで，語いや表現の定着を図っていくものである。そのために，言葉と意味とを関連付け，各領域の言語活動と体験を反復し位置付けて構成する。体験は，動作化，操作化，行動化のいずれかにおいてなされる。その際に，内容に段階的な変化を加え，各領域における必然性を生むことで，自分の体験と語句や文の言葉の意味とを結び付けることができると考える【図１】。また，学習した言葉を伝え合うパフォーマンスの場を生活単元の年間計画に位置付けて設定することは，楽しさを実感し，生活への関わりを広げる上で有効である。



【図１　主題構想図】

2　めざす子供の姿



【図２　研究構想図】

○　身の回りの言葉に関心をもち，言葉のやりとりに粘り強く取り組もうとする子供　（自発性）
○　語句や文を読んで理解し，意味に応じて行動することができる子供　（自己発揮性）
○　自分の学習の姿を観察して，できたを実感し，自信をもつ子供　（成就性）

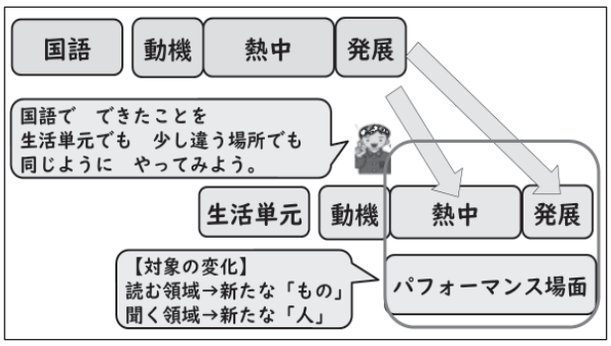
3　教材化の条件

次の３点を教材化する条件とする。

①　インプットとアウトプットが反復して実施できるものであること
②　言葉を通した身体的な体験ができること
③　学んだことを生かして別の場面で般化することのできるパフォーマンスの場面があること

本研究では，子供たちが，文字や文を聞く・話す，書く，読むことで「体験を通して実際にできた」と体感したり，「伝え合うことの楽しさ」を実感したりする必要がある。また，説明的文章を教材化する際は，事物を正確に理解することを目的としているため，語句や文を正しく読んで理解することや，話の順序を捉えさせていく必要がある。そのために，①では，読んで分かったことを書いたり，聞いたことを話したりして繰り返す必要がある。②では，子供たちが自身で説明書を読んでものをつくったり，台本を読んで劇ができたり，運動を通して感想を発表したりするなど，体験することで言語活動を具体化させることができるようにする。③では，パフォーマンス場面において，読む領域では，新たな「もの」を，話す領域では，新たな「人」を設定することで，新たな対象に働きかけながら学びを発揮させ，伝える楽しさを実感することができると考える。

4　具体的方法



【図３　題材構成の工夫】

(1) パフォーマンス場面を設定した題材構成

①　パフォーマンスと生活単元学習の位置付け

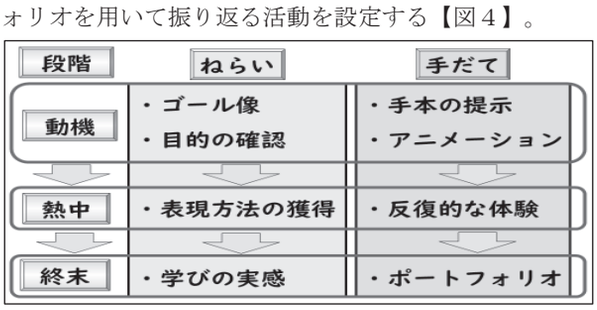
子供の学習上の特性を踏まえると国語科で身に付けたことが断片的であったり，生活に生かされなかったりすることが考えられる。そこで，本研究では，国語科で学んだ内容を生かすことのできるパフォーマンスの場面を生活単元学習に位置付けることで，伝え合う楽しさを実感することができるようにする【図３】。伝え合う楽しさを実感するための題材構成の条件は以下の２点であると考える。

> ①　国語科の学習内容を発展したものが生活単元学習に位置付けられること
> ②　年間指導計画における実践時期が近接していること

①では，子供の実態に応じて学習内容における変数を最小に絞って設定することが重要となる。表現の対象である学んだ人・もの・こと・場所を変えることで，国語科で身に付けた力を生活単元で生かすことができるようにする。②では，年間指導計画に即して関連を図っていく。年間指導計画は，季節感や時期に応じたものであるため，大幅な変更はしないものとする。このようなパフォーマンス場面から逆算して国語科では次のような段階を設定する。

②　国語科における題材構成の内容

各段階のねらいに応じて手だてを設定し，語いや表現を身に付けながら伝え合う楽しさを実感できるようにする。動機段階では，手本となる教材を提示して学習の見通しをもたせることで，目的やゴール像をもって学習に臨むことができるようにする。熱中段階では，順序を表す話し方の表現を身に付けることができる体験を反復的に設定する。終末段階では，学びを視覚的に実感するために，ポートフォリオを用いて振り返る活動を設定する【図４】。



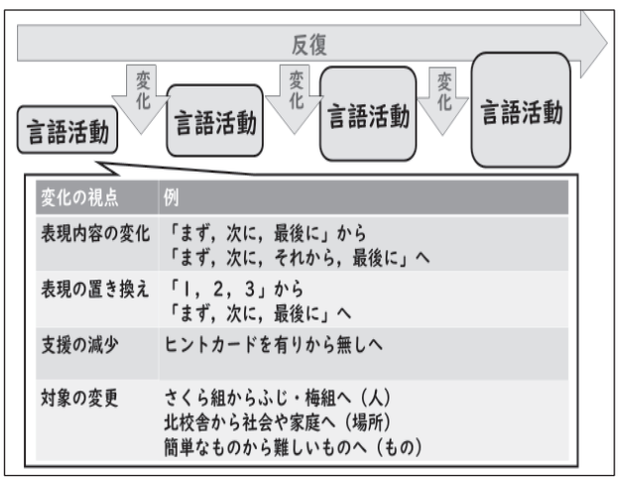
【図４　題材構成の内容】

(2) 活動構成の工夫

本研究では，語いや表現を獲得して自分の言葉で伝え合うことを目指すために，以下の２つの活動を構成する。

①　反復的な言語活動の位置付け

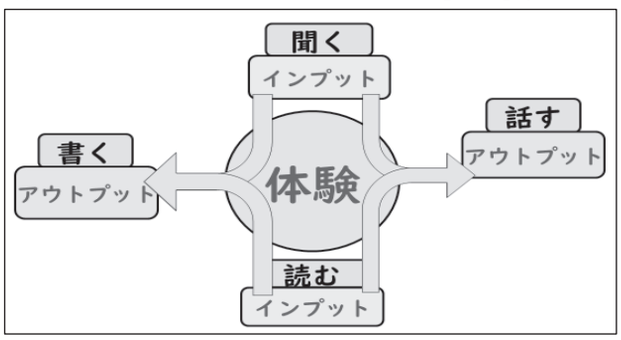
熱中段階において言語活動と次の言語活動をつなぐために，支援と内容に変化を位置付ける。まず，支援の変化では教具である支援具の使用を無くしたり，声掛けを減らしたりして，自分でできるように促す。次に，内容の変化では表現方法を変えたり，表現方法のステップを増やしたりして，内容を高めていく。実態に応じて変化をさせるが，その際には変数を制限する必要がある。２つ以上が変化すると状況の変化に子供が対応できなくなるため，変数は１つとし，繰り返しを基に自己発揮性を促していく【図５】。



【図５　反復と変化の関係】

②　言語活動と体験を位置付けた活動構成

各領域である聞く・話す，書く，読むと体験を一体的に位置付けることで，伝え合う楽しさを実感できるようにしていく。言語活動では，各領域におけるインプットとアウトプットを一体として捉えることが生活場面への般化を考える上で重要である。そこに体験を位置付けることで，インプットしたことを体現することで視覚的に示すことができる。また，アウトプットの際には体験があることで話題の想起が容易になり，子供にとって有効な支援となる。また，体験は領域の思考に即して「聞くから話す」「読むから書く」をセットにして位置付ける。具体的には，指示を聞いて，聞いたことを基に買い物をする体験活動を位置付ける。そのような活動から，言語活動と体験を結び付け，伝え合う楽しさの実感を高めていく【図６】。



【図６　領域間を結ぶ体験の関係】

実践事例　第1・2学年　生活単元学習　単元名　「あんしん　あらつの　まち」

指導者　　岩田　　健吾

1　目標

○　通学路の周辺にあるお店や住んでいる地域の人と関わる活動に取り組むことができる。　　（自発性）

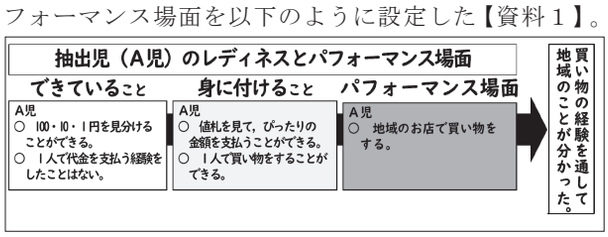
◎　自分ができることを生かしながら，地域の人にあいさつやお店の利用をすることで地域との関わりを広げることができる。　　（自己発揮性）

○　自分ができる関わり方を通して，地域の人と関わることができたという自信や地域への安心感をもつことができる。　　（成就性）

2　本単元の考え方

本単元は，登下校で通っている通学路にあるお店や地域の人に子供たちの意識を向けさせ，地域の人と共に生活していることに気付かせることで子供が地域に対して安心感をもつことをねらう。具体的には①通学路にあるお店や地域の人に対して関わりをもとうとすること，②初めて出会った人へのあいさつの仕方やお店の利用の仕方を身に付けること，③関わりを通して地域に対する安心感をもったり，自らの関わり方に対して自信をもったりすることである。そのために，子供たちに「子ども 110 番のある場所や地域の人について知りたい。」という思いをもたせ，そこから「お店を利用したい。」という思いに発展させていくことで，あいさつの仕方やお店の利用の仕方を身に付けながらも，地域のことを知る経験をさせる。

子供たちのできることと支援の必要なことをアセスメントにより整理し，学習内容や身に付けたことのパフォーマンス場面を以下のように設定した【資料１】。



【資料１　抽出児のレディネスと設定するパフォーマンス場面】

A児は昨年度に実施した校外学習で買い物をする経験をした際に，代金を支払う場面では教師に金額を準備してもらい，お金を渡す経験をしている。算数科の学習では金銭処理について学習しており，硬貨を見分けることや 10 の位までの数について学習をしている。そこで，本単元では，自分で値札を見て代金を準備して買い物をする経験をさせる。それにより，自分１人でも買い物ができるという自信をもたせ，生活の中でも家のおつかいをすることができるようになることをねらいとした。算数科の学びと関連させ，買い物をする学習内容を設定し，本単元を通してできることを増やすようにした。

3　授業の実際と考察

動機段階

動機段階では，毎日通う通学路は安全なのかという疑問をもたせ，子供たちが生活する地域に対して関心をもつことをねらった。そこで，子供たちが普段意識していない表示札に着目させるために，具体的な出来事に出合わせて，話し合う活動を設定した。直前に起きた不審者情報の話を取り上げて自分たちならどうするのかということについて話し合わせた。すると子供たちは，「家に帰る」や「学校に戻る」という意見ばかりで，地域という着眼が見られなかった。そこで，登下校中に存在する「子供 110 番」のステッカーを提示した。札の意味について知らせた後に，地域の人に助けを求められるか訪ねた所，「知らない人だから言えない」という反応が見られ「札がどこにあるのか探したい」や「助けてもらえるようにお願いしたい」という発言があった（資料２）。

【資料２　思いをもつ出合いと話し合い活動】

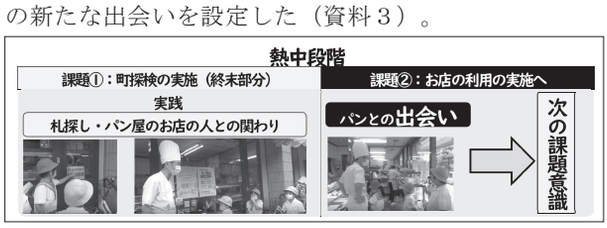
考察１

地域で起こった出来事と出合わせ，話し合わせる活動を設定したことは子供に思いをもたせ，自発性を促す上で有効であった。子供たちは札の意味や学校周辺にもたくさん貼ってあることを知り，町探検に行きたいという発言をしたことから，子供たちが地域への関心を高め，思いをもった姿であると考える。

熱中段階

熱中段階では，表示札を探したり地域の人と関わったりする活動から思いを発展させ，お店を利用して生活に必要なスキルを身に付け，自信をもって買い物できることをねらった。そこで，関わる対象との出合わせ方を工夫したり，活動構成の工夫をしたりした。

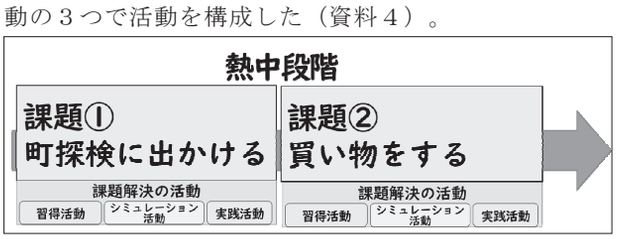
子供が町探検で札を探したり地域の人と関わったりした後にお店を利用したいという思いを引き出すための新たな出会いを設定した（資料３）。



【資料３　新たな課題意識をもつパンとの出合い】

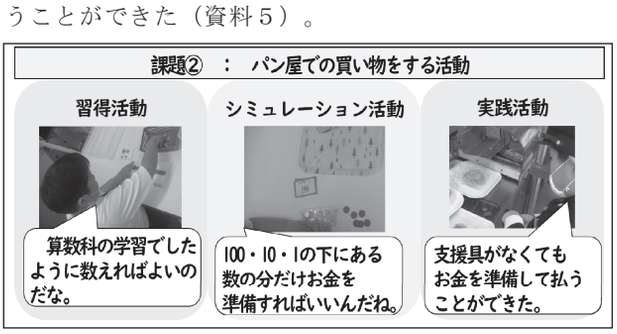
Ａ児は，熱中段階の最初は「子ども 110 番の家の札を探し，その札のある人にお願いをする」という思いをもって町探検に出かけた。町探検の中でパン屋のお店の人と出会い，あいさつや町探検の目的などを伝えた。活動の終末部分でお店の中を見せてもらう機会を設定した。Ａ児はお店に並ぶ様々なパンを見て（パンとの出合い），「おじさんが作った美味しそうなパンを買って食べたい」という発言をした。そして，買い物の練習をすることを子供たちが決めた。

子供たちが自信をもって地域の人やお店の利用をすることができるようにするために，それぞれの課題解決に向けて習得活動・シミュレーション活動・実践活動の３つで活動を構成した（資料４）。



【資料４　学習内容を身に付け，自信をもたせる活動構成】

課題を把握させるためにパン屋での買い物で必要なことを話し合う活動を設定した。昨年度の校外学習で買い物をしたときの写真を見ながら，どのようなことができなければならないのか話し合わせた。子供たちからはお店での約束事を守ったことや商品を選んで代金を支払った経験を思い出して発言していた。代金の支払いについて，算数科で行った学習を思い出す子供もいた。そこで，算数科での学習でお金の計算をしているため，次の時間には買い物でお金を支払うことができるか尋ねた。すると，Ａ児は「まだできないから練習したい」と発言をした。そこで，習得活動では，値札を見て金額を準備する練習を行った。そして，シミュレーション活動では，店内を再現した場で，買い物場面で行うことを総合的に練習した。Ａ児は，算数科のパフォーマンスとして 10 の位までの数で示された値札を見て代金を準備することができた。そこで，実際のパンの値段である 100 の位までの数で示された値札にも取り組ませた。Ａ児は位取りが分かる支援具を用いて自分１人で 156 円など３桁の金額も準備することができるようになった。そして実践活動では，支援具を用いることなく３桁の金額を準備してパンを買うことができた（資料５）。



【資料５　できることが増えたＡ児】

考察2

課題①の町探検の終末部分でパンと出合わせたことは，「正しくお金を払う」という新たな課題意識をもたせる上で有効であったと考える。また，算数科の学びと関連させたり，学習活動を３つの活動で構成したりしたことは，子供にできることを増やす上で有効であったと考える。Ａ児は算数科で学んだことをもとにして，熱中段階の３つの活動を行ったことで，100 の位までの数の位取りの仕方を身に付け，値札を見ただけで金額を準備できるようになったと考える。そして，パン屋でも自信をもって買い物をすることができた。

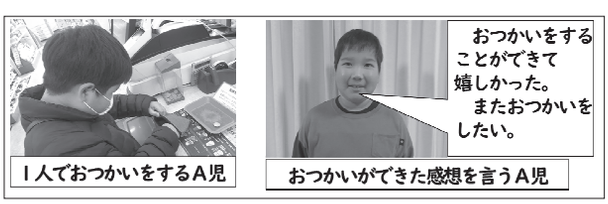
発展段階

発展段階では，熱中段階でできるようになった関わり方を生かして，1 人で買い物をすることができたという自信をもたせることをねらった。そこで，母親からおつかいを頼まれるという場面を設定した。

Ａ児の家の近くにあり，馴染みのあるコンビニエンスストアでおにぎりを買ってくるように母親から頼まれたＡ児は，1 人で買い物に出かけた。代金の支払いも， 100 の位までの数で示された値札を見て，自分でお金を準備して支払うことができた。Ａ児は「算数や生活単元学習で勉強したからお金を払うことができた。」と発言していた。買ってきたおにぎりを母親に渡すと，初めておつかいができたことを母親から称賛され，Ａ児は笑顔になっていた。

考察3

代金を自分で支払うことができた様子から，熱中段階で身に付けたことを生かしている姿であると考える。母親に褒められた際の笑顔は買い物ができたことへの成就感を味わった瞬間であると考える（資料６）。



【資料6　おつかいをした感想を述べるA児】

全体考察

本単元では，子供たちの自己発揮性を高める上で有効であったと考える。特にＡ児は１人でおつかいをしたことがないという単元前の姿から，おつかいができるようになった姿が見られた。

このＡ児の姿から，本単元で身に付けることができたことは，今後の自立した生活につながると考える。Ａ児の「これからも，おつかいをしたい。」という振り返りからも成就性の高まりが見られた。

以上のことから各教科等の学びと関連付けて学習を行うことや，関わる対象との出合いの工夫することは，子供の自己発揮性を高め，生活への関わりを広げることに有効であったと考える。

実践事例　第1・2学年　算数科「かぞえて　かおう　みんなの　らんち」

指導者　　坂牧　　淳

1　目標

○　ランチの材料を買うために，金銭を介した計数や計算に進んで取り組むことができる。　（自発性）

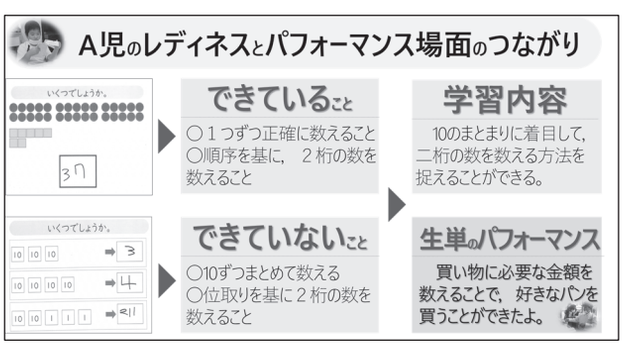
◎　金銭を介して，数を数えたり，計算したりする方法を捉えることができる。　（自己発揮性）

○　学んだ数理を校外学習の買い物場面で生かすことで，達成感を味わうことができる。　（成就性）

2　本題材の考え方

本題材は，困っている人のランチの材料を買うために，金銭を介した計数や計算ができるようになることをねらいとしている。具体的には，①困っている人のランチをつくる活動に進んで取り組むこと，②物を分けて数えたり，金銭を介して計算をしたりする方法について捉えること，③学んだ数理を生かして，校外学習でパンを買い，達成感を味わうことである。

題材実施前に，対象児であるA児の数の数え方について検証し，その実態から，生活単元学習のパフォーマンス場面を以下のように設定した（資料１）。



【資料１　レディネスとパフォーマンスのつながり】

A児は，ドット図を見て「１，２，…35」と順序を基に一つずつ数えることができた。次に「10」というカードが３つ並んでいる図を見せると，「３」と記入した。また，「10」が２つ，「１」が３つ並んでいるカードを見せると，「211」と記入した。ここから，A児の得意な数え方として，１つずつ順序を基に数えること，習得が十分でない数え方として「まとめて」「位を基に」数えることであることが分かる。そこで，A児の算数科の学習内容を「10 のまとまりに着目して，二桁の数え方を捉えること」とし，数の有用性を実感することができるようにするための，生単のパフォーマンス場面として，買い物学習を設定した。買い物学習は，硬貨を用いて，位を基にした数え方を数理として発揮することが必要である。算数科で学んだ数理を生かすパフォーマンス場面や，パフォーマンス場面に向けたスモールステップの数操作を設定することで，成就性や自己発揮性を高めることをねらいとした。

3　授業の実際と考察

動機段階

動機段階では，ランチを準備するために，金銭を介した計数や計算をする必要があるという題材の見通しや数操作の必然性をもたせることをねらいとした。そこで，教師と一緒にお金の枚数を数えながら買い物をするという試しの活動を行った。A児は，「ランチを買うには，お金を数えなきゃいけいない。」と発言し，題材の活動や学習内容の見通しを立てていった。

考察１

身近な生活場面と数との関わりを感じられる場面から題材化を図ったことは，自発性の伸張に有効であったと考える。その根拠は，A児が「買うためには，お金が必要だね。」と発言し，展開段階で金銭を介した計算に粘り強く取り組むことができたからである。このことから，数との関わりの深い生活場面から題材化を図ることは，自発性の伸長につながると考える。

熱中段階

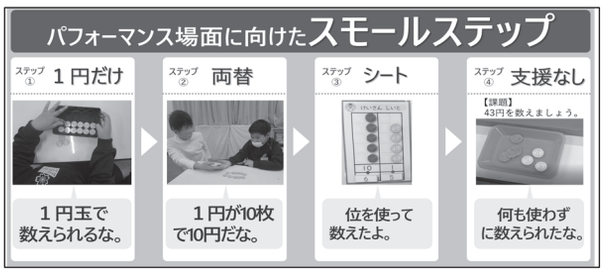
熱中段階では，ランチの材料を買うために，金銭を介して，数を数えたり，計算したりする方法を捉えることをねらいとした。そこで，学習内容ごとに３つのグループに分かれて，ランチの材料を買う活動を設定した。Aグループ（サラダ担当）は，10 円玉や 100 円玉を分類して数える方法を捉えること，Bグループ（スープ担当）は，１円玉や 10 円玉を用いて，位取りで数える方法を捉えること，Cグループ（おかず担当）は，たし算，ひき算，かけ算を用いて代金を計算する方法を捉えることをねらいとした。

対象児であるA児は題材を通して以下のような数操作に取り組むことができるようにした（資料２）。

【資料２　A児の題材を通した数操作】

熱中段階で，A児が自己発揮性を高め，数の有用性を実感できるようにするために２つの手だてをとった。

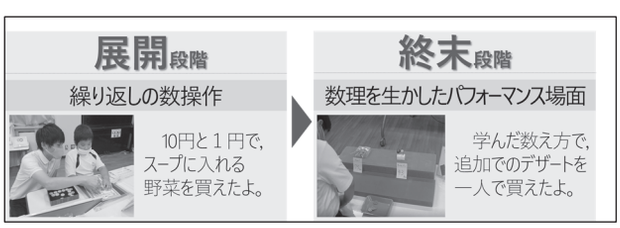
１つは，生単のパフォーマンス場面に向けたスモールステップでの数操作である。生単の買い物学習で「金額を見てお金を取り出して自分でパンを買う。」というパフォーマンス場面でのA児の姿から，バックキャスティングで考えると，次のようなスモールステップでの数操作を設定することが必要であると考えた（資料３）。



【資料３　パフォーマンス場面に向けたスモールステップ】

ステップ①では，１円玉のみを使って，二桁の金額を数えさせ，A児の得意な一つずつ数える数操作から取り組むことができるようにした。ステップ②では，二桁の数を数える際に，10 円玉が足りない状況から両替をすることで，位取りの概念を学ぶことができる活動を設定した。40 円を数える際に 10 円玉が３枚しかないことに気付くと，「10 円をください。」と発言した。そこで，教師から「１円玉と交換です。」と伝えると，A児は１円玉を 10 枚数えて「合体したら 10 円になる。」と発言し，両替をすることができた。ステップ３では，数えシートを活用して，指定された２桁の金額を数えるという活動を設定した。63 円という金額を見て，10 円玉が５枚しかないことに気付くと「１円玉 10 枚と 10 円玉を交換してください。」と教師に伝え，位取りをしながら，二桁の数を数える姿が見られた。最後にステップ４では，支援がない状態で二桁の数を数えることができた。

２つは，１単位時間の中でも数の有用性を実感できるよう，学んだ数理を生かすパフォーマンス場面を位置付けた活動構成の工夫である。熱中段階後半では，１単位時間の終末段階で，本時の学習で学んだ数理を生かすパフォーマンス場面を設定した（資料４）。

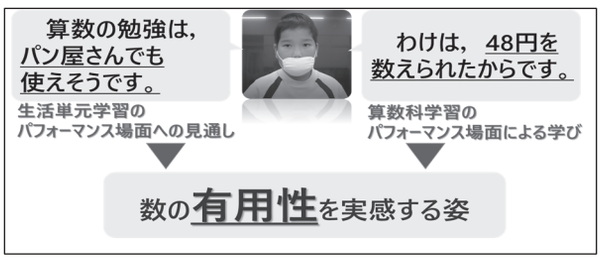


【資料４　活動構成の工夫】

ランチ（おかず，サラダ，スープ）が完成した後に，デザートが必要であるという追加事象を提示し，学んだことを生かす活動を設定した。キャンディの「43 円」という数字から，１円玉を３枚，10 円玉４枚を財布の中から取り出し，正しく支払うことができ，「（授業で）たくさん数えたからできた。」と振り返りで発言した。

考察2

生単のパフォーマンス場面に向けたスモールステップや，終末段階で数理を生かすパフォーマンス場面を設定したことは，自己発揮性と成就性の伸長に有効であったと考える。その根拠は，１単位時間のパフォーマンスの様子と，資料４のA児の振り返りの発言からである。スモールステップでの数操作を設定したことで，２桁の数え方を捉えることができ，パフォーマンス場面の中で，正しく数操作をする姿が見られた。振り返りでは，算数科の学びを生単の買い物で生かす見通しを発言し，数理の高まりを実感する姿から，成就性を高めることができたと考える（資料５）。



【資料５　数の有用性を実感する熱中段階の振り返り】

発展段階

発展段階では，算数科で学んだ数理を別の場面で生かすことで，数の有用性を実感することをねらいとした。そのために，生単での買い物学習を発展段階に位置付け，数理を発揮するパフォーマンス場面を設定した。A児は，買い物をするパン屋さんで，「131 円」という数金額を自分で支払い，パンを買うことができた。

考察3

算数科で学んだ数理を生かすパフォーマンス場面を生単に位置付けたことは，成就性の伸長に有効であったと考える。その根拠はA児の振り返りからである。題材の振り返りで，パンを買えた理由を「算数で勉強したからです。」と発言していた。算数で学んだ内容を子供が関連できるよう，数理を生かす場面を設定したことは，数の有用性や，成就性の高まりにつながると考える。

全体考察

【資料６　A児の変容】

本題材は，自己発揮性と成就性の伸長に有効であったと考える。自己発揮性の伸長につながった根拠は，学習プリントから見えるA児の変容からである（資料６）。２桁の数え方を捉えられた要因として，スモールステップの操作活動やパフォーマンス場面を位置付けた活動構成の中で，繰り返しの活動に必然性が生まれ，多様な数操作を経験できたからであると考える。

また，成就性の伸長につながった根拠は，A児の振り返りからである。生単での買い物学習後の振り返りで，「算数で勉強したから買い物できました。」と発言した。このことから，生単を発展段階に位置付けた題材構成は，算数で学んだことは別の場面でも生かすことができるという数の有用性の実感につながり，学びを発揮できたという成就性を高めることができたと考える。

実践事例　第3･4学年　国語科　題材名　「きいて　つくろう　さくら　パーティー」

指導者　　土橋　　和恵

1　目標

○　パーティーをするために，進んで聞いたことの順序性を意識して，買い物の聞き取りや買った物の説明に繰り返し取り組むことができる。　（自発性）

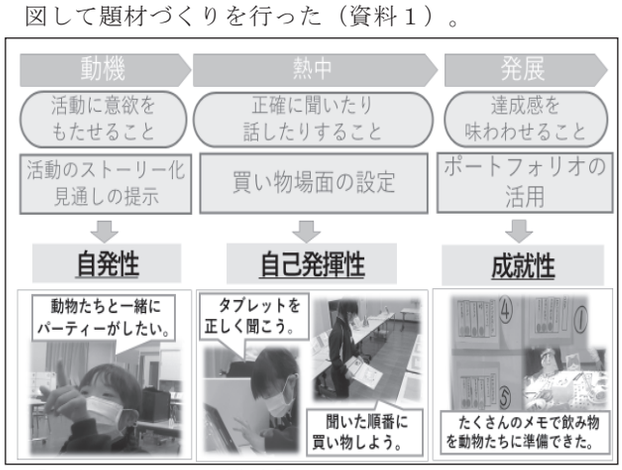
◎ 複数の名詞を正しく聞いて伝える際の順序性や，動詞の意味を捉えることができる。　（自己発揮性）

○ 正しく聞くことで買い物をすることができたという達成感を味わうことができる。　（成就性）

2　本題材の考え方

本題材は，動物たちとパーティーをするために，買い物する内容の聞き取りや買った物の説明ができるようになることをねらう。具体的には，①聞いたり話したりしながら買い物の活動に進んで取り組むこと②複数の名詞を聞いたり，順序を表す言葉を説明する話し方を捉えたりすること③正確に聞いたり伝えたりすることで依頼通りにパーティーの準備をすることができたという達成感を味わうことである。

そこで，次のような体験場面を充実させることを意図して題材づくりを行った（資料１）。



【資料１　題材の構成】

動機段階では，意欲をもって学習に入るために，動物におつかいを依頼されるストーリーを設定し，自身の活動や個人のめあてを確認させた。熱中段階では，模擬の買い物の場を設定し，タブレットから注文を聞く活動において，正しく聞いたり話したりしなければならない状況を設定した。発展段階では，ポートフォリオを用いて，自身のがんばりを視覚的に提示し，振り返り自己評価することで，説明する達成感を味わわせた。この構成を基に，正確に聞いたり話したりする力を身に付けることは，他者とのコミュニケーションを円滑にするため，生活への関わりを広げていくことにつながっている。そのために，ストーリー性をもたせた活動を基に，得意とする動作を伴わせながら，直接的な体験場面を設定して，自己発揮性を高めていく。

3　授業の実際と考察

動機段階

ねらいは依頼通りにパーティーの準備をするために，担当するものを間違えずに聞いて買い物をするという活動の見通しや個別のめあてをもつこととした。

動機段階では，①活動の見通し②場の構造化③学習内容の理解の３つにおいてストーリーを組み込んだ。①活動の見通しにおいて，アニメーションを付けて世界観に入り込ませたことで動物のために買い物に行くという場面の理解をねらった。②体験を伴う買い物の活動を設定して場の構造化をすることで，正しく買うためには，メモを用いて繰り返し聞いたり，説明したりする必要があるという必要性を捉えさせた。③学習内容の理解において，「聞く」「体験する」「話す」で活動を構造化することで個人のめあてをもたせた。

【資料２　動機段階での活動の流れ】

考察１

アニメーションで動物が怪我をした場面に対して，A 児は「わたしが買い物に行くよ。」と意欲的な姿が見られた。また，飲み物を担当する際に「まず，次に，の順番に気を付けて聞く。」と発言し，個別のめあてを掴むことができた（資料２）。このことから，動機段階で物語に浸って個別のめあてや活動の見通しをもたせることは，自発性を促す上で有効であった。

熱中段階

ねらいは，動物からの依頼をタブレットから正しく聞くことで，複数の名詞の順序性を捉えて伝える際の話し方や，動詞の意味を捉えることができるとした。

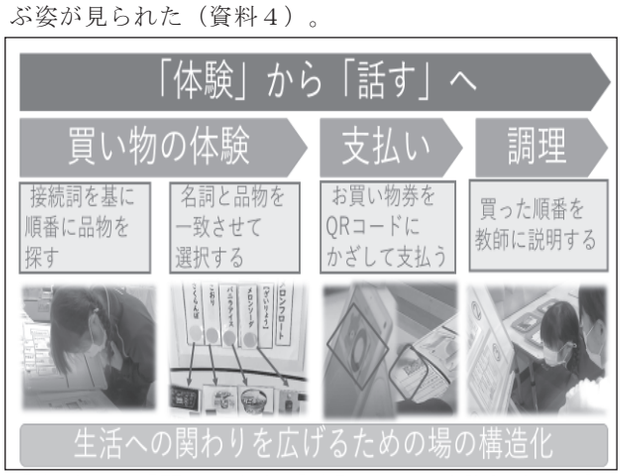
熱中段階では，「聞く」「体験」「話す」という活動に反復的に取り組む活動を設定した。タブレットから聞いた内容を実際に買い物場面で体験し，体験したことを説明することを繰り返させた。その際，音声を聞いて言葉カードを選ばせる教具を用いることで，順序性を表す接続詞の意味理解を促した。A 児は，飲み物の調理に必要な材料を買うために３つから４つの名

詞を正しく聞く活動に取り組んだ。子供のよさを生かすために買い物場面を２つに構造化して編成した。

１つは，「聞く」から「体験」に向かう活動である。飲み物を作る際に必要な材料を買うために，聞き取り用のタブレット，接続詞のヒントカード，聞き取った名詞をメモする買い物メモの教具を提示した。A 児は買い物メモに接続詞のカードを当てると，「まず，メロンソーダ。次に，バニラアイス…」とカードをヒントにしてメロンフロートの材料を発言し，買い物の手順を確認することができていた（資料３）。

【資料３　「聞く」から「体験」への活動と手立て】

２つは，「体験」から「話す」に向かう活動である。「聞く」において活動していた教室前方から「体験」では後方のさくらスーパーに場所を移動し，場の構造化を図った。また，買い物の体験を実生活の状況に寄せるために，スーパーに並ぶ材料のカードを実際に手に取り，レジで支払いをすることのできる場を再現した。再現された場で熱中してメモの順番を見ながら，落とさず品物を選択する体験から，言葉の順序性を体感しながら獲得してくことができるようにした。こうしたことで，メモの順番を手掛かりに丸い色シールのコーナーを見て自力で探そうとする姿や「まず，メロンソーダ。次に…」とつぶやきながら順序を捉えて選ぶ姿が見られた（資料４）。



【資料４　「聞く」から「体験」への活動と手立て】

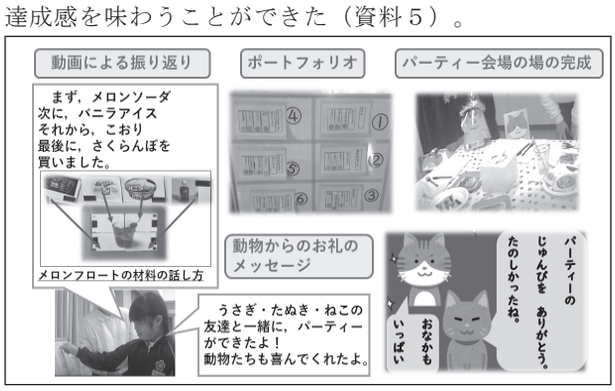
考察2

熱中段階で，聞く・話す活動を繰り返し位置付けたことは，順序性のある話し方や複数の名詞を正しく話し，自己発揮性を高める上で有効であった繰り返し聞くことができたり，話の速度を変えたりすることができるような姿が見られたからである。熱中段階の後半では，前半で用いたヒントカードの使用頻度を減らし，支援を無くしたり少なくしたりするよう促した。また，買う物の数を増やすことで，意図的に新しい接続語に触れさせて内容の難易度をあげた。そうしたことで，A 児は買う物が３つまでの際はスムーズに話すことができ，４つ５つと増える際には，困り感に応じて自ら判断して，必要であれば接続詞のカードを活用しようとする姿や，「先生早く来てください。」と自ら教師を何度も呼んで説明し，自己を発揮する姿が見られた。

発展段階

ねらいは，メモ作りや買い物での体験活動，体験の説明の活動を通して，パーティーの準備が成功したことの達成感を味わうこととした。

発展段階では，飲み物が完成した場面や聞き方・話し方を，ポートフォリオや動画を基に振り返ることで，達成感を味わうことができた（資料５）。



【資料５　視覚的な自己評価の内容】

考察3

A児が飲み物を作り上げた際に，「やった。できた。」と喜びを表現したり，振り返りで「まず，次に，最後にが言えました。」と発言したりする姿から，「聞く」「体験」「話す」の活動を振り返り自己評価させることは，成就性を高める上で有効であった。

全体考察

本題材は，学んだ話し方が日常生活に般化されており，自己発揮性の伸長に有効であった。その根拠は，実践後にA児が題材で用いた接続詞のカードの型に当てはめてスピーチをし，学びを生かす姿からである。実践前は，時系列で活動を述べることはなかったが，本題材において，体験を繰り返したことで，順序性を意識した伝え方を捉えていった。このことから，本題材で獲得した話し方は，生活への関わりを広げることにつながったと考える。また，手立ての成果として，ストーリーが落ちやすかった点や，ねらいを焦点化できたことで，反復して飽きずに学習内容を変化させながら高めることができた点があげられる。しかし，抽象が難しいため，出来事の想起や文の構成には体験に加え，具体である視覚的な支援等が必要である。

お　わ　り　に

副校長　　平　川　洋　一

研究開発学校指定の延長２年次の教育研究発表会に向けて，これまで５年間にわたる研究開発指定の成果と課題を踏まえ，研究を推進して参りました。

本年度は，テーマ学習、リレーション学習、フォーカス学習の３つの学びで創るカリキュラム・デザインを重点に研究してきました。特に，教科の本質である見方・考え方に基づき，省察性，協働性，創造性の３つの資質・能力の育成を図っていきました。その中でも特に着目したことは，ウィギンズの提唱した「網羅」ではなく「看破」するという考え方にしたがって，内容をスリム化するということです。そうすることで，７教科における子供の文脈を中心とした探究の中で豊かに学びつつ，授業時数の削減を行うようにしていきました。その結果，本年度は，６ヵ年で 733 時間の授業時数削減を行うことで，コロナ禍で休校期間中があった本年度においても余裕をもってカリキュラムを実施することができました。

さて，先日の新聞の記事にはわたしたち教師にとっては残念なニュースが紹介されていました。『コロナで教員の負担増　精神科医「チームとして対応を」』（2020 年 12 月 23 日（水）朝日新聞）では，精神疾患で休職した小・中・高校の教員数が大幅に増加していることとしています。さらに，記事の中では「教室の消毒など感染防止策に気配りせねばならず，平時より確実に教員の負担になっている。いつ倒れる先生が出てもおかしくない。」という公立小学校の校長先生の声も紹介されています。私たち教師にとって，今は「受難の時代」であることは間違いないようです。このような中，次々と先生方が倒れ，結果，子供たちの教育に支障をきたすことがあってはならないはずです。そのためにも教育の質を高めつつも量を減らすこと，すなわち，教育における大切な資源である「時間」を減らす取組は必要不可欠であると考えています。私たちは，学年，教科，それらをつなぐ４チームが協働的に子供たちのためのカリキュラム・デザインをすることを大切にしてきました。しかし，それによって教員の負担が増えてしまっては，元も子もありません。ですから，大幅な授業時数を削減しつつ，学級担任・教科担当併用制による空きコマの創出などのマネジメントの部分も充実させようとしています。本年度はこのようなマネジメントの部分は大きく紹介してはおりませんが，今後の学校組織を考える上でも重要な要素であると考えております。

最後になりますが，本校の研究開発に関わる研究推進に当たり，昨年度より校内での教育研究発表会の２日間を見守り，ご指導いただきました上智大学　総合人間科学部教育学科　教授　奈須　正裕先生，文部科学省在職時からご指導いただいております，國學院大學人間開発学部初等教育学科　教授　田村　学先生，京都大学大学院教育学研究科　准教授　石井　英真先生，国立教育政策研究所　総括研究官　福本　徹　先生，上越教育大学　准教授　河野麻沙美先生，共同研究者としてご指導いただきました，福岡教育大学の先生方，各教科の実践への助言を賜りました，本校ＯＢ，深交会を中心とした研究協力者の先生方，研究全体の運営を含めてご指導いただきました運営指導委員の皆様に衷心より感謝申し上げます。

□運営指導委員

上智大学　総合人間科学部　教育学科	教　　授	奈須正裕　様
國學院大學　人間開発学部　初等教育学科	教　　授	田村　学　様
京都大学　大学院　教育学研究科	准　教　授	石井英真　様
上越教育大学	准　教　授	河野麻沙美　様
国立教育政策研究所	総括研究官	福本　徹　様
福岡県教育庁　福岡教育事務所	所　　長	伊藤啓二　様
福岡県教育庁　福岡教育事務所	主幹指導主事	髙野誠一　様
福岡市立東福岡特別支援学校	校　　長	野口信介　様
筑紫野市教育委員会　学校教育課	主任指導主事	礒部年晃　様
福岡市教育委員会　学校指導課	主任指導主事	三浦研一　様
福岡教育大学　教育心理ユニット	教　　授	生田淳一　様
福岡教育大学　社会科教育ユニット	教　　授	豊嶌啓司　様
福岡教育大学　学校教育ユニット	准　教　授	樋口裕介　様
国立大学法人　福岡教育大学　教職実践講座	特任教授	芋生修一　様

□共同研究者・研究協力者

教科等	本学共同研究者	研究協力者
人　間	教育心理ユニット 教　授　生田淳一　先生 学校教育ユニット 准教授　樋口裕介　先生	糸島市立東風小学校 校　長　石硯昭雄　先生 大野城市立下大利小学校 校　長　黒澤真二　先生 福岡市教育委員会学校指導課 主任指導主事　三浦研一　先生
社　会	社会科教育ユニット 教　授　豊嶌啓司　先生 教職実践ユニット 准教授　坂井清隆　先生 教職実践ユニット 特任教授　芋生修一　先生	春日市立大谷小学校 校　長　髙瀬雄大　先生 志免町立志免中央小学校 教　頭　髙良祐治　先生 福津市教育委員会 指導主事　藤岡太郎　先生 福岡県教育庁　北筑後教育事務所 指導主事　鐘江貴子　先生
言　葉	国語教育ユニット 教　授　河野智文　先生 英語教育ユニット 教　授　後藤美映　先生	教職実践ユニット 教　授　田渕　聡　先生 那珂川市立安徳北小学校 校　長　平島健二　先生 福岡市立七隈小学校 教　頭　菊竹一平　先生 福岡県教育センター 指導主事　棚町尚子　先生
数　学	数学教育ユニット 教　授　清水紀宏　先生 教職実践ユニット 教　授　森　保之　先生	糸島市教育委員会学校教育課 課　長　田中健悟　先生 福岡県教育センター 指導主事　二串英一　先生
科　学	教職実践ユニット 講　師　谷　友雄　先生	東福岡特別支援学校 校　長　野口信介　先生 福岡市立笹丘小学校 教　頭　今村光宏　先生
芸　術	美術教育ユニット 准教授　笹原浩仁　先生 音楽教育ユニット 准教授　山中和佳子　先生	福岡県教育庁福岡教育事務所 主任指導主事　原　クミ　先生 飯塚市立上穂波小学校 校　長　合田賢治　先生
健　康	保健体育ユニット 教　授　本多壮太郎　先生 准教授　樋口善之　先生 家政教育ユニット 教　授　貴志倫子　先生	篠栗町立勢門小学校 校　長　稲津一徳　先生 福岡県教育庁　福岡教育事務所 指導主事　平井源樹　先生 福岡市教育センター研修・研究課 主任指導主事　鞭馬あゆみ　先生
特別支援教育	特別支援教育ユニット 教　授　中山　健　先生 教職実践ユニット 教　授　納富恵子　先生 教育心理ユニット 助　教　熊木悠人　先生	宇美町立井野小学校 校　長　落合純哉　先生 大川市立大川小学校 校　長　下川勝彦　先生 久留米市教育委員会 指導主事　中島卓哉　先生 福岡県教育センター 指導主事　相浦愛子　先生

□本校教員　（○印は本年度研究部員）

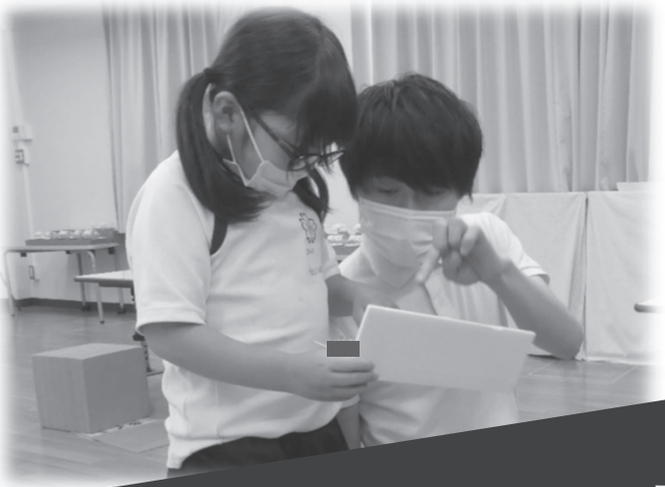
校　長	坂本憲明	副校長	平川洋一	教　頭	杉本克如
教務主任	永田裕二○	研究部長	齋藤淳○	総括主任	中村剛○
	井手司○		倉橋慎二		田中智史
	池田裕美		烏田聖良		扇　裕人
	新田聖		石橋大輔○		宇戸勝則
	鍋田綾美		小島恵太		関尚幸
	西島大祐○		永松聖子		大村拓也
	藤　康宏○		岩田健吾		坂牧淳
	土橋和恵		西田淑恵		山中裕希
	坂本香織		藤田興		大橋翔一朗
	古賀晃		岡﨑英		阿久津奈美恵
	ラヴィ　チャンドラン		清水知子		

来校による参加の皆様

カメラ及びビデオ等による撮影に関するお願い

個人情報の保護法の趣旨に基づき，本校の教育研究発表会における授業等において撮影した本校児童・職員の映像，写真，音声及び個人情報等については，研究・研修を目的とした個人的使用以外に利用することをご遠慮いただいています。また，本校職員・児童・保護者の承諾を得ずに，公表・発表等を行わないようにお願いいたします。ご理解とご協力のほど，よろしくお願いいたします。

授業づくりセミナー2021 のお知らせ



子供が学習の主体となる
個別と協働のハイブリッドな授業づくり

来校型 令和3年 6月2日（水） 3日（木） 4日（金）

会場　福岡教育大学附属福岡小学校
〒811-0061 福岡県福岡市中央区西公園12-1（092-741-4731）

日程　受付13:15～ 公開授業14:15～ 授業づくり相談会15:15～

◆ **来校者数制限**のため，**3日間**を予定しております。

On-line型 令和3年 7月26日（月）

◆ 申し込みいただいた方には，**1ヶ月前からYouTubeにて公開授業の限定公開**を予定しております。

参加費　無料

詳細につきましては，**本校ホームページにて令和3年5月上旬に公開**します。

令和３年２月　印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研　究　紀　要　№51

発行者　福岡教育大学附属福岡小学校
〒810－0061
福岡市中央区西公園 12- 1
TEL092－741－4731（代）

印刷　よしみ工産株式会社
〒804－0094
北九州市戸畑区天神 1 丁目 13 番 5 号
TEL093－882－1661